
東方望蛾楼 ~ Fascinated Pessimistic Fliers.

空路 慧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方望蛾楼 ～ Fascinated Pessimistic
c Fliers .

【Nコード】

N9409P

【作者名】

空路 慧

【あらすじ】

北の空を割断するように突然現れた巨大な岩の塊が、幻想郷から美しき三日月を覆い隠した。

そして、岩塊から発される奇妙な力は、力を持たぬ者たちを次々と呑み込んでいく。

——それは紛うことなく“異変”だった。

この異変に巻き込まれ、多くの者たちがそれぞれの思いを胸に活動を始め。

これは、とある少女たちの活躍を綴った、歴史の端にも残らぬ小さな物語である。

CAUTION!

この作品は、『東方Project』の二次創作作品となります。
まずはこちらの注意事項(<http://mypage.syo-sei.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/123159/> 携帯からは「mypage」↓「mypagek」)をお読みください。

S t a g g e . : - ? < ? ? ? . . . 0 > (前書き)

汝、蝶へ姿を変えんと望むか。

S t a g e . ? - ? < ? ? ? : 0 >

細長い影がひとつ、冷えた星空を静かに割った。

影の中央は膨らみ、上下の先端は細くなっている。また、別の方向から見れば、猫背のようにやや孤を描いていた。

それはダイヤモンドと呼べるほど整った形ではなく、影により隠された三日月のように美しい曲線を晒してもいない。

ただただ歪^{こわ}。およそ芸術的でない造形が、澄んだ夜を悪意の如く切り裂いていた。

しかし世界は、影の出現に大して騒ぎ立てもしない。気づいていないのだろうか。いや、ただ受け入れているだけなのだろうか。

「幻想郷は、滅びねばならないのです」

そんな少女の声が、影の頂から小さく響いては消えた。

「いや、正確にはこう表現するべきでしょうか——」

応えない宵闇に、少女は静かな決意をその瞳に煌めかせ。

どこにもいない“敵”へ向け、宣告した。

「——幻想郷は、本来の姿を取り戻さねばならないのです」

刻はもう、日暮れよりも明けに近い。既にこの世界へ至った巨大な影の存在に気づいている者もいるだろう。彼らは現れた謎に対し、何を想っているのだろうか。正体を暴くべく、早速行動を起こす者もいるだろう。あるいは、今は待ち、暇^{いとま}の潰^たしに影の形を何かに喩えようとして、様々なものを思い浮かべている最中なのか。そしてその中には、期待を込めてこう呟いた者もいるかもしれない。

あの影は、まるで、輝かしき目覚めを待つ蝶^かの蛹^{まゆ}のようだ——と。

S t a g e : 1 - 1 <博麗霊夢: 1> (前書き)

見上げれば、空には夜を超える暗闇が佇んでいた。

博麗神社。
はくれい

ここは、祀られるべき神の存在しない神社である。と言うのは、いささか以上の語弊があるだろう。本当は、この神社でどんな神が祀られているのか誰も知らない、というのが実態である。誰も知らないということとは、誰からの信仰も受けていないということ。それはつまり、神が神として存在していないに等しいと言える。

とはいえ、この神社は寂れ廃れているわけではない。きちんと巫女が住まい、神社としての体裁を保っている。問題は、参拝客がほとんどいないことと――そして、妖怪たちの溜まり場になっていることだが。

今は丑三つ時をやや過ぎた頃、人々は眠りに深く妖怪たちが活発に動き始める頃だ。しかし、今夜だけは少しばかり様子が違った。確かに草木も眠る時間ではあるが、それ以上に妖怪たちが静かだ。これはある種の異変だったが、だからこそ、博麗神社の巫女は何も感じず、すやすやと眠りについていた。

「――いむ、靈夢^{れいむ}」

月の光も届かぬ暗闇から、妖艶な声が響く。応えるように、もごもごと動く塊が、小さな衣擦れの音を出した。

「う、うーん……。紫^{ゆかり}? 何よ……。まだ夜中じゃない」

「良いから早く起きなさい。異変よ、い・へ・ん」

言葉に、塊ががばりと撥^はね上がった。現れた細いシルエットから発される鋭い眼光が、声の源を恨むように睨みつける。

「あらあら、今日はいつも以上に元氣じゃない。重畳^{じゅうたう}ですわ」

「元氣とかそういう問題じゃないわよ! 一体何が起きてんのよコレ!?」

普段なら適当に流して二度寝するような彼女だが、今回ばかりは
そうもいかなかったようである。というのも、

「やはり、貴方にも感じ取れるのですね……この昏い昏い、負の
力を」

ふっと、何も無い暗闇の中に裂け目が生じた。そこから生えるよ
うにして、声の主、もう一人の少女が姿を現す。彼女に下半身はな
い——いや、裂け目を通じた別の場所に繋がっているはずだ。

「ああもう、何でもつと早くに起こしてくれなかったのよ!？」

先程まで眠っていた少女の影は、上半身だけの少女の横を通り過
ぎ、寢室の襖ふすまを開けた。月の光は届かない。室内を照らすのは淡い
星明りだけだ。それでも十分な明るさを得て、二つの影に彼女たち
の正体を映す。

「仕方のないことです。だって、異変が起こったのはついさっきの
こと」

だから早く着替えなさいな、紫と呼ばれた金髪の少女は言う。

「『ついさっき』……コレで? ——まあいいわ、ちょっと待って
て」

霊夢なる少女はそう言つて、押し入れの中をこそごとと漁った。

この幻想郷を生んだ大妖怪に向かってあの態度、無礼極まりないよ
うに思われるが、紫は微笑んで霊夢の動作を眺めていた。

人、魔法使い、妖精、妖怪、神——何者に対しても同様の態度を
貫き続ける。そんな彼女の性格を好む者達は大勢いて、八雲紫やくももそ
の一人だった。

「……何よ、人の着替えなんかジロジロ見たって、何も出ないわよ」
「むしろ何か出せ、とでも言いたそうな顔ね」

「よく分かっているじゃない。ヒトの安眠を妨げたんだから当然よ」
ぶつくさ言う内に、霊夢は着替えを終えた。紅と白の巫女装束だ。

博麗の巫女の仕事はいくつかある。境内の清掃をし、茶を啜り、
宴会を開き、遊びに来た有象無象の相手をし——そして、起こった
異変を解決し幻想郷の平穏を保つのだ。

「——とはいえ、いつまでも軽口を叩いていられるような状況じゃないみたいね」

ふう、という溜息が、後頭部に大きなリボンを結ぶ霊夢の口から漏れた。彼女は今、紫と共に、開かれた襖から遠く先を見つめている。今日はこの時間、やや低い位置に綺麗な三日月が輝いている――はずだった。

しかし、今見えるのは、夜を割るように聳^{そび}える、巨大な漆黒の影だった。

Stage.1-1 <博麗霊夢:1> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/123500/

Stage・1-2 <レミリア・スカーレット：1>

紅魔館。

近年幻想郷に越してきた、吸血鬼レミリア・スカーレットを主とする洋館である。博麗の巫女の提唱により幻想郷に初めて『スペルカードルール』が制定されてから、最も早く発生した異変の中心地でもある。

「――咲夜^{さくや}。起きているんだろう？」

ある一室。その窓から中庭の花畑を見下ろしているのは、紅き月と呼ばれるレミリアだ。彼女のすぐ傍には、先程まで何もなかったはずの空間には、いつの間にかメイド服を着た少女が深々と頭を下げていた。

「何でございましょう、お嬢様」

「今宵は蝶がたくさん舞っていて綺麗ね。多少季節外れだけれど」

「そうですねえ……しかしお嬢様、あれは蝶ではなく、蛾、ですよ」

答えるのは、ここ紅魔館で妖精メイドたちを取り仕切る長、十六夜咲夜^{よい}だ。またいつの間にか、彼女の手の平の上には一匹の蝶——ではなく「蛾」が止まっており、ひらりと蒼い翅^{はね}を上下させた。

レミリアはそれを一瞥^{いちべつ}し、吸血鬼の黒い羽を一度はためかせ、ただ「ふうん」とだけ言った。

「私には蝶と蛾の区別なんて分からないけどね。どう違うのかしら」「正確なものではありませんが——どこかしらに止まった時、翅を立てているのが蝶、そうでないのが蛾であるとされます。それから日本において蛾は基本的に忌み嫌われていますね。中国では褒め言葉として使われたりもするようですが」

「そう。なら私は中国人に賛同するわ。あの蛾はとても美しい」
フランにも見せてあげたいわ、とレミリアは言う。

フランドール・スカーレット。情緒不安定が故に紅魔館の地下へ幽閉されている、異形の羽（蓬莱の玉の枝のよう）を持ったレミリアの実の妹。ごく最近、妖怪退治屋の巫女や図書館でよく盗みを働く魔法使いが遊び相手になるなどして、それからは扱いに多少緩みが生じている……とはいうものの、やはり館外に出ることはほぼ無い。

レミリアの言葉に彼女たち姉妹の間にある淀みを感じ取ったのか、咲夜はフランドールについて何も言い返さなかった。代わりに、「恐らく日本では、日常生活で見られる種があまり好ましいものではないのだと思われます。かく言う私も、美しくない蛾は好きではありません」

「そりゃあ普通、醜いものをわざわざ愛でたりはしないでしょうよ」「それもそうですわね……ところで」

咲夜は一つ微笑んだ。その手には既に蛾の姿は無い。代わりに銀盆に載せられた紅茶が、その熱を湯気として辺りに霧散させていた。「珍しいですね、いつもなら用事をストレートに仰るお嬢様が」

紅茶がテーブルに置かれる。煩わしい接触の音はしない。夜の美しい静寂を損なわせない動作。相変わらずの瀟洒振りだ。

「本人も分かっていることをいちいち口に出す必要はない。それだけよ」

「確かに……では、手始めに何を致しましょうか」

レミリアは窓に背を向け、豪勢な椅子に腰を下ろした。咲夜の淹れた紅茶を一口飲むと、一息吐いてからこう切り出した。

「異変が起こっている。不穏な空気すら流れない、これは異変の中でも特異なものだ。咲夜、お前はこの異変について探ってきなさい。簡単な様子見で構わないわ」

承知、という返事がレミリアの耳に届く頃には、咲夜の姿は消えて無くなっていた。紅茶の温かみを胃の中でゆっくり感じると、カップを置いて、紅い瞳は再び窓の外へと向けられた。

こんこん、と部屋の扉が叩かれる。「レミイ、入るわよ」という友人の声がしたので、レミリアは二つ返事で来訪者を招き入れた。「どうしたのよ、パチエ。私の部屋に足を運ぶなんて珍しいわね」友人というのは、紅魔館内に設置された図書館を管理している知識と日陰の魔法使い、パチュリー・ノーレッジのことだ。喘息^{ぜんそく}持ちで、普段は引き籠もって読書をしていることが多いものの、最近では異変に乗じて外出することも珍しくないほど活動的になっている。それでもレミリアが「珍しい」と称したのは、パチュリーの表情がやや冷静さを欠いているのを認めたからだ。

「咲夜がいないから、と門番から私に報告がありました。レミイも当然気づいているんでしょうけど、これは異変よ」

紫と月——気高さと陰りを暗喩する二つを象徴として身に着ける者が、こうまで慌てている。くす、と幼い吸血鬼は屈託なく笑った。「まあそうね。それにしても、パチエったら随分慌ててるじゃない」

「余裕あるわね。今回の異変は、危険度が段違いだというのに……」

「いやあ、確かにそうだけど、多分大丈夫なんじゃない？」

とぼける館の主に、あのねえ、とパチュリーは呆れ顔をする。

「まさかとは思うけど、能力を使ったわけではないでしょうね？」

「そんなことはしないわよ。何度も言ってるけど、それだと楽しくないじゃない。結末を見たわけでもないし。大丈夫だって言ったのは、幻想郷にいるヤツらはそこまで日和っていないでしょ、ってことよ」

「まあ、化物揃いだものね、この幻想郷は……貴方も含め、だけど」

「言うじゃない。でも、その点では私は幻想郷に来て良かったと思っているわ。何と言っても、退屈しないのだし。貴方もそうでしょう？」

「けどねえ、と吸血鬼はまた笑った。

「だからこそ、本当にこの地が危うくなった時は、この力も遠慮な

く使わせてもらうわ。折角得た安息の場所を、どこの馬の骨とも知れぬ者に奪われてたまるものか」

今度の笑みは、ただただ威圧だった。格の差も知らず刃向う人間共を、見境なく物言わぬ血肉へと還していたあの時代。その頃のレミリアを彷彿とさせる恐怖が、彼女の周囲に纏われている。

パチュリーはしかし、それを前にしても詰まらなそうな表情を浮かべるだけだった。

「――で、忘れかけてたけど、門番からの報告つてのを聞きましたよ
うか」

ふっと強い力が消える。矛が収められたのを確認したパチュリーは、テーブルに置かれた紅茶入りのカップを見やり、「そうね」と言って、

「伝聞だと情報の質が落ちるから、そのままの声を伝えることにします」

紫色の魔法使いは右手を差し出し、人差し指をくると回した。緑色の魔法陣がテーブル上に描かれ、そこから別の少女の声が発せられる。

『大変ですよ大変ですよ！ 北の方に大きな岩の塊が突然現れて……！』

S t a g e . 1 - 2 <レミリア・スカーレット：1>（後書き）

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 2 3 8 2 2 /

白玉楼。

幻想郷内にあつて幻想郷内に無いこの場所は、「冥界」と呼ばれている。閻魔えんまに裁かれた死者の魂が成仏や転生を待つ場所である。この場所に立つ白玉楼にはそうした幽霊たちが住んでおり、主である三角巾付きの帽子を被った亡霊、西行寺幽々子さいぎょうじゆうけいこと、半人半霊の庭師、魂魄妖夢こんぱくようむが彼らの世話をしている。世話と言つても、幽霊である者には、冥界から許可なく彷徨い出ないよう見張るくらいで、特に何をせずとも良いのだが。

「まだ雪が積もつてますねえ。顕界はもう春の準備が進んでいるのに」

白玉楼の周りには桜の木が多く生えている。春になればこれらが咲き乱れ、宴会には持つてこいの場所となる。静かであるべき冥界で宴会とはこれ如何に、という批判もあるだろうが、元来彼女たちは宴会好きなのだから致し方無い。幽霊たちもずっとしんみりしているより、たまには賑やかな空気に触れる方が良いだろう。

何となしに零れ出た妖夢の言葉に、幽々子はうんうんと二度頷く。「そうねえ。ここも早く暖かくなつてくれないかしら」

「冬になつてから、食事の品が単調な物になつていますからね……」
「そうよそうよ。というわけで、下に降りたらフキノトウでも採つてきなさいな。少し時期は過ぎているけれど、まだ良いのがあるでしょう。ふふ、久し振りにあれの天ぷらが食べたくなってきたわあ——あ、ちよつと何か摘まめる物を作つてもらえるかしら？」

幽々子に頼まれ、数体の幽霊達が軽い食事を作り始めた。

依頼の承諾の返事をする気にもなれず、妖夢は溜息を吐く。傍にふわりと浮かぶ半霊に触れたのは、気分を紛らわすための戯れか。

「ところで幽々子さま。こんな時間に外出の準備をしるとは、顕界の方で何か異変でもあったのでしょうか？」

聞くが、返事はない。先程の意趣返しだろうか。しかし見れば、幽々子は卓について山頂の神社から贈られた煎餅を頬張っていた。

「幽々子さま！ その煎餅が美味しいのは分かりましたから、ちゃんと人の話聞いてください！」

あらごめんなさいと謝る幽々子だったが、その大体が八行になっていて、ほとんど聞き取れなかった。軽食を頼んでおきながら菓子を摘まむ、それがこの亡霊姫だ。彼女は口内の物を呑み込むと、

「ええ、異変が起きたことに間違いないわね」

「しかし、それはいつも通り博麗神社の巫女が解決に乗り出すのでは？」

参拝客の来ない神社には、貴重な収入源である賽銭がほとんど入らない。そのため、巫女である博麗霊夢は幻想郷内で起こる異変の解決を生業としている（大した収入にはならないそうだが）。そうでなくとも、博麗の巫女は幻想郷を外界から独立させるための『博麗大結界』の管理を任されているのだから、異変が幻想郷を脅かすものへと変貌しないよう見張っている義務があるはずだった。とはいえ、あまり信頼できるような仕事振りではないが。

「そうね。恐らくは紫辺りが叩き起こして、もう異変解決に向かわせていることでしょう。そっちはあの子たちに任せておけばいいわ」「はあ……それで、今回はどういった異変なのでしょう」

これといった違和感を感じ取れないのですが、と恥ずかしげに妖夢は言う。半人前、と評されることに若干のコンプレックスがあるのだ。

自身が人間と幽霊のハーフ、半人半霊であることもそうだが、実際に未熟者であることは重々自認している。異変に気づけなかったことは、修行中の身として「まだまだ修練を積まなければならない」という不足を思い知らされることに繋がる。やはり幽々子からは、「まだまだ妖夢は半人前ねえ」

と返ってきた。一抹の悔しさに、妖夢は腰元の短刀の柄を強く握った。

祖父であり剣術の師匠でもある魂魄妖忌（あまひん）、彼に近づくための道のりはまだ長いということか。二振りの刀——楼観剣（ろうかんけん）と白楼剣（はくろうけん）を妖夢は所持しているが、まだ彼女にこれらを扱い切れてはいない。どうすれば「強く」なれるのだろうか。考えても、まだ彼女に真理と言う名の光は差し込まない。

とはいっても、と幽々子は続ける。

「基本的に冥界（こゝろ）と顕界（しん）は離れているから、この程度の違いを感じ取るのは難しいでしょうね。でも、妖夢も降りれば、すぐに解るはずよ？」

「そんなものでしょうか」

「そんなものよ。だから気負わず行ってきたさい」

悟られないようにしていたのに気付かれてしまった。妖夢は一層気恥ずかしくなって「う」と呻いた。幽々子はそんな彼女の様子を見て笑った。笑ったが——すぐに、真剣な表情になった。妖夢も思わず身構える。

「この異変は、今までとは少し趣が異なるわ。吸血鬼が起こした『紅い霧』とも、私たちが起こした『遅い春』とも、月の民が起こした『永い夜』とも、他のどんな異変とも違う。そんな異変よ」

「詳細には、どのような現象が起こっているのでしょうか」

「さあ、それは自分で見て触れて感じ取って、考えてみなさい」

「そうでした……すみません」

聞くは一時の恥、という言葉の意味を取り違えていた妖夢は、幽々子の叱責を受けてから「なるべく疑問は自分の手で解決しよう」と心掛けている。たまに抜けるし方法が極端になるしと、なかなか上手くいっていないようだ。剣術や庭の手入れ——刃物を扱う以外のほとんどに関して、彼女は不器用なのである。

「ただどねえ、と幽々子は憂う面持ちで溜息を吐いた。

「実を言つと、私にもよく分からないのよね。直接この目で視たわ

けではないもの。ただ、一つだけ分かることがあって、それに関して妖夢に頼みたいことがあるのよ」

「異変の原因を探ってくれば良いのですか？」

「貴方の方こそ、人の話はきちんと聞きなさい。異変の解決は紫や巫女たちに任せる、そう言ったでしょう。貴方に頼みたいのは、そうね——」

ふと、幽々子の視線が西行桜に向けられたような気がした。

西行妖。幾度春が巡っても咲くことのない、墨染の桜。以前、幽々子自らが「顕界の春を集める」という異変を起こした要因。

結局、彼女の望みは叶わなかった。だが、幽々子はそれにめげず、今でものほほんと暮らしている（元から余興程度にしか考えていなかったようだ）。その裏では色々思うことがあるのだろうが、付き人でしかない妖夢にそれは解らない。単に未熟だからだろうか。

ならば「強く」なる。そのために、今はただ真摯^{しんじ}に任務をこなす。そして、今回下される主人の命とは。

「——顕界にいる幽霊たちを、至急この冥界まで連れてきなさい」

S t a g e . 1 - 3 < 魂魄妖夢 : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/124126/>

Stage・1-4 <因幡てゐ：1>

永遠亭。

月の都の姫、蓬萊山輝夜ほうらいさんかくやと、その従者である賢者、八意永琳やちえいりんの居城であり、迷いの竹林の中に建てられている屋敷だ。幻想郷では人妖問わず掛かることのできる診療所として知られているが、その実、月の使者の追跡を逃れるための隠れ家でもあった。

不死という穢れを持った罪により月から追い出された彼女たちは、地上へ逃げ込み、やがてこの幻想郷へと辿り着いた。そこで、月都の使者の視界から姿を眩ますために起こした異変が、「満月を隠す」というものだった。

色々あって、ともすれば幻想郷の存続に関わるような大規模な異変となったが、最終的に解決。今では月の民に追われる心配も無くなり、彼女たちは同郷出身の鈴仙・優曇華院・イナバや、幻想郷の兎たちのリーダー、因幡いなはてゐらと共に仲良く暮らしている。

「うーん。これはちよつとばかり、ヤバいかもしれないねえ」

春先の夜風とはまた違う冷気を感じ、庭先で兎たちの相手をしていた因幡てゐは、身体をぶるりと震わせた。

幻想郷全域で気圧が下がっている——重みとは異なる奇妙な重圧によって、無理矢理に沈黙を強いられている。これが真夜中でなく、昼間活発に動いている時間だったならば気づかなかっただろう。そう断言できる程度の、小さな違和感だった。

姫様やお師匠様は気づいているだろうか。そう思って様子を見に行こうと邸内に上がったてゐの前に、鈴仙が姿を現した。

「あら、てゐ……あんた起きてたのね。また何か悪戯でも企んでいたの？」

「生憎、兎たちの世話をしていただけだよ。鈴仙こそどうしたんだ

い？」

見れば、鈴仙はいかにも寝起きというような、ラフな格好をしている。髪もぼさぼさだ。実際に寝起きなのだろう。ふぁ、と鈴仙は欠伸をする。

「いや、いきなり師匠に起こされちゃってね。何が何だかよく分からないけれど、異変が起きたって……それで、あんたを探すよう言われたの」

眠い眠い、と更に欠伸を重ねる鈴仙の顔を、力なく垂れた長い耳が覆った。いつもなら「間抜け顔」と笑ってやるところだが、今はじゃれ合っている場合ではない。眠気も冷めれば、鈴仙もこの違和感に気づくはずだ。

そして、さすがは月の賢者と言うべきか、二人の師匠である永琳も既に異変に感じている。早めに行動を起こす必要があると判断したのである。

「分かった、行こう」

早足で永琳の元へ向かおうとするのに、「何よ、やけに素直じゃない」と鈴仙がからかうように言う。

てゐはそれを無視し、星の光届かぬ暗闇へ溶け込んでいった。

「——てゐ、鈴仙、もうちょっと静かにできないかしら？　姫が起きるわ」

居間で待っていた永琳は、二羽の兎が入ってくるなり、彼女たちをそう戒めた。どうやら永遠のお姫様は優雅に就寝中らしい。異変が起きようとも己を貫くその姿には感服せざるを得ない——ではなく、よくよく注意しなければ気づけないような変化など、睡眠状態で知れるわけもないだろう。それに、

「姫にはあまり、この異変に関わってほしくない」

という意志が、永琳の言葉から読み取れた。彼女は既に、今回の

異変の本質的な危害について把握しているようである。

「はあ、すみません……それで、どうしたんですか、お師匠様」

抑えきれなかった欠伸と共に、鈴仙が尋ねる。この様子では、まだ異変に気づいていないらしい。永琳は呆れたように溜息を零し、赤十字の描かれた紺の帽子がずれないように手を掛けた。

「いい加減起きなさい、優曇華。でないと、この前毒遣いの人形から調達した鈴蘭のエキス、原液で飲ませるわよ」

「うわわわわ、起きます起きます！ 全く、冗談キツいですよ……」

ようやく鈴仙も、てゐと同じく違和感に気づいたようである。

「あれ？ 波長が、いつになく穏やかだ……」

「もつと北の方に集中してみなさい」

「北の方……？ ——って、え、これは！？」

あらゆる波に干渉できる鈴仙は、ようやく彼女なりに異変を察したようだ。彼女はこうして、という視線を永琳に向ける。

「この現象を起こしている直截の原因は、今のところ不明です。ただ、これから何が起こるのかは、ある程度推測できます。それで、貴方たちには、その時のための準備を手伝ってほしいの。後でまた詳しい指示を出すけれど、てゐはここに残って私の助手を務め、鈴仙は後で渡すリストに書かれた薬品を大急ぎで手に入れてくること」

てゐは頷き、鈴仙はより険しい表情をして言った。

「緊急事態、という事ですね……？」

「ええ。そして確実にもう、スキマ妖怪は博麗の巫女を連れて動き出していることでしょう。私たちは動かず、異変の余波の処理をする」

淡々と説明を続ける永琳だったが、その表情には見慣れぬ緊迫感が入り混じっていた。これから起こる事態がそれほど逼迫ひつぱくしているのか——あるいは、この異変自体が彼女の力を以てしても抑えることのできないほど大きなものなのか。

鈴仙が異変の源について訊くと、永琳は微笑み、軽い調子で答え

た。

「異変の発生源は分かっています。まずは、玄関に出てみなさい」
言われた通り、てゐと鈴仙は永遠亭を出た。

てゐにあやされていた兎たちは、もう眠っているようだ。ふと、暗さが気になって、二人は上空を見上げた。そして、永琳が笑って彼女たちを外へ行かせた理由を悟った。

満月の日ほどではないが、今日は綺麗な三日月が煌々と輝いているはずだ。それなのに——そこに見えるはずの月は、大きな影の裏に隠れてしまっていた。

「な、何なのよ、アレ……！？」

「……成程。確かにこれなら、異変の原因もすぐに判るってもんだね」

見たこともない光景に圧倒されていると、「おお」という声が竹林から聞こえた。目を向けると、そこには全身を炎で包んだモンペ姿の少女がいた。ずんずんところちの方へ歩み寄ってくる。炎の灯りが二人の足元を照らしたところで、彼女は立ち止まった。

「慧音に頼まれて来てみたんだけど……何だ、あんたたちももう気づいているみたいね。それなら話は早い——薬師と輝夜はどうしている？」

竹林に暮らす不老不死の人間、藤原妹紅だ。輝夜とは深い因縁があり仲が悪いものの、医者に掛かる必要のある人間を危険な竹林を抜けるまで案内するなど、永遠亭としては間接的に世話になっている存在である。

彼女の言う「慧音」とは、人里で寺子屋を開いている半人半獣の歴史喰い、上白沢慧音のことを指す。彼女の差し金ということは、十中八九人里に関連する要件に違いない。

「お師匠様なら起きてるよ。姫様は残念ながらお休み中だねえ」
てゐはおどけた調子で言った。

「ふうん、薬師が起きているなら問題ないわ。で、早速用件なんだけど」

何ですか、と鈴仙が聞こうとして、止めた。偏頭痛が起こったかのように、こめかみの辺りを抑える。異質な波長を感じ取ったのだろう。てゐにはそれが分かったが、妹紅は特に気にすることもなく続ける。

「これから忙しくなるはずだから準備しておくよう、慧音に伝言を頼まれたのよ。だからほら、ボケっとしている時間はないんじゃない？ それから、呑気にすやすや眠ってる、憎たらしいぐうたら姫も叩き起こしておいた方がいい。改めて言うけど、もうすぐ忙しくなるよ——人里から人間たちが運ばれてくるからね。今の内に、治療の準備をしておきなさい」

S t a g e . 1 - 4 < 因幡てゐ : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 2 4 7 8 4 /

Stage・1-5 <小野塚小町：1>

三途の川。

死した者たちの魂が霊となり、閻魔の裁判を受けるために渡る、永遠の距離を持つ川。周囲にはちらほらと、彼岸花が咲いていた。彼岸花の数は、霊たちの多さを表している。少し前にはこの花があらん限りに咲き誇っていたのだが、今では普段通りに落ち着いていた。

今、幻想郷側の岸に掛けられた棧橋には小舟が泊まっている。三途の川の案内人を生業としている赤髪の死神、小野塚小町は、その側に立つ木の幹に寄りかかってすやすやと眠っていた。

「むにや……だからウチの映姫様は……むにやむにや……っ——！？」

突如、彼女の両眼がかと開かれる。地に寝かせていた大鎌を取り、その鎌を構えるかと思いきや、そそくさと小舟の方に向かう。だが。

「——今更何をしても無駄よ、小町」

「きゃん！？」

背後からの声に、小町の全身が一瞬にして硬直する。ぎぎぎ、とても表現し得るぎこちない動きで彼女が振り向くと、そこには呆れ顔をした少女の姿があった。

「毎度毎度言わせないくれるかしら。そう、貴方は少し他人の忠告を忘れすぎる。適度な休憩を取ることを悪いとは言わないわ。だけど、貴方のそれは若干以上に度が過ぎている」

幻想郷を担当する閻魔、四季映姫・ヤマザナドゥだ。元来の説教好きで、話をさせるといつも異様に長くなる。仕事の関係上小町はその被害者（といっても自業自得なのだが）となりやすく、だから

彼女は映姫の言葉を切りの良いところで差し止めることにした。

「いや、あの……」

とはいえ、閻魔に言い訳など通用するはずもない。彼女の持つ浄玻璃ようはりの鏡にはあらゆる者の業を映し出す力があるし、映姫自身の持つ「白黒はつきりつける程度の能力」を前にすれば、小町は否応なく即断で「黒」と判決を受けることだろう。そんな能力を持っているのなら、説教したいことなど一言でバツサリ言い切ってほしいものだが。

「ふむ、無駄だと分かって言い訳はしないか。長い付き合いだけあって、それくらいの分別はついているようね。その点は評価してもいいわ。だが、それでも——」

また始まった。起きて早速説教とは、目覚めが悪いにもほどがある。

「四季様四季様。そんなことより、どうしてわざわざこちらまで？ サボっていたのは認めますが、それでも四季様が暇になったわけじゃ……」

と、ここまで言ったところで小町は「しまった」と思った。映姫の手が空いたのは、自分が霊を連れていかなかったからに違いない。怒って悔悟棒で叩いてくるだろうと思っていたのだが、しかし映姫は、珍しく嘆くような溜息を吐いた。

「溜まっていた霊の裁判はもう終わったわ。だから、確かに暇にはなっているわね。もちろん、次の仕事が来るまでは——だけど」

皮肉るようではあったが、説教をする様子でもない。

小町は不安げに首を傾げ、次の言葉を待った。

「貴方は三途の川の船頭でしょう。気づかないの？」

「は？ …… ああ、そういえば、霊の数が少なくなっているような周囲を見渡して、小町はようやく気づいた。感覚的に、小町が「休憩」を始めてから数時間は経過している。もう少し、彼岸で待機する靈魂が浮かんでいても良いはずだ。

「ええ、その見解は間違っていない。そしてもう一つ」

言つて、映姫は川とは反対側の空を指し示す。そこには。

「あれ。月が——無くなつてゐる？」

小町はそう呟いたが、すぐに己の勘違いに気づく。月は消えて無くなつてしまつたわけではない、その手前にある大きな影に隠されてしまつていたのだ。

「そう……そして、この二つの変化は繋がっている」

「どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味よ。幽霊の数が減っているこの現象は、あの正体不明の影が原因となつている。簡単に言えば、霊を吸収している

——」

「霊を吸収？ そりや大変だ、ここに霊がないつてことは、まだ四季様から判決を受けていないつてことになる。幽霊の量が『普通』から上下することすら問題なのに……」

閻魔の裁判に掛からず消えてしまつた霊は、転生することができなくなる。それは、即ち現世で生まれる子供の数が減少すること。現世とは切り離された場所で暮らす小町には実感の湧かない話だが、論理としてはそれが重要であることくらいは分かる。

「その通りよ。残念なことに、既に手遅れとなつた霊もいる。しかし幸いなことに、私が冥界に霊たちの保護を求めた時には、既に彼女たちは動いてくれていた。被害は最小限に抑えることができそうね」

「え、そんなことしても大丈夫なんですか？」

冥界は閻魔に裁かれた霊が転生を待つ場所。裁かれていない者が冥界に直接送られるなど、本来はあり得ないことだ。

「以前、花が咲き乱れた時のように、これは六十年に一度の自然現象ではないのよ。どころか、今回の異変は異変を通り越した緊急事態……つまり、このような措置も止むを得ないのよ。もちろん、異変が無事終われば霊たちはこちらへ返すようにするから、小町は安心して仕事に励みなさい」

「結局、その話に戻るんですね……」

頭をぼりぼりと搔く小町に、映姫は優しく微笑みかける。

「しかしそういうわけで、この彼岸にしばらく霊はやって来ないでしょう。ひとまず今溜まっている霊を地獄に送っていきなさい。私はやらなければならぬことがあるけれど、その後こそは、小町はいつも通りゆっくりしていて大丈夫よ」

いつになく穏やかな上司を見て、小町はようやく、今回の異変をただならぬものとして位置づけることができた。

Stage・1-5 <小野塚小町：1>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/125112/

Stage・1-6 <八坂神奈子：1>

守矢神社。

河童、天狗など様々な妖怪たちが跋扈する山の頂上付近に現れた、博麗神社に続く幻想郷二社目の神社である。失われた信仰を幻想郷で集めようとした二柱の神、八坂神奈子と洩矢諏訪子もりやすわこが、外界出身あらひとがみの現人神である東風谷早苗こちやさなえと共に、神社と湖ごと越してきた——というのが、「現れた」と表現した理由だ。

先に触れた信仰集めのため、博麗神社の営業停止を巫女である博麗霊夢に求めたのだが、最終的に守矢側が折れる結果となった。その際の妥協案と言うべきか、現在では博麗神社境内に小さな分社が建てられている。それにより参拝客も増え始め、霊夢も多少なりとも利益を得ているので、互いに損のない平和的な解決とも言えるのだろう。

「……神奈子」

守矢神社内の居間。丸い目の二つ付いた特徴的な帽子を被った少女は、卓袱台ちゃぶだいの反対側に向かってそう呼びかけた。神奈子なる紫髪の人物は、全身の至る所に巻かれた注連縄しめなわの内、首に掛けられたものを指で弄いじくっている。

指を止めると、神奈子はニヤリと笑った。

「何だい、諏訪子。私にいくら恨めしそうな顔をしたって、この前冥界の亡霊と庭師に差し入れた煎餅は返ってこないよ」

その話はもういいよ！ と噛み付く諏訪子だったが、何かを諦めたらしい。一つ重い溜息を吐くと、「でさあ」と言っ外に向けて指を差した。

開かれた襖のその先では、ある物を見て周囲も気にならないほど興奮している、緑色の巫女がいた。

「アレ、どうにかならないかな……」

「どうにもならんよ。早苗がああいうのに惹かれるってのは、この前諏訪子が造らせた例のドデカい風船、あの件でよく分かっているだろうに」

あーうーと呻く諏訪子を遮るように、緑の巫女の大きな声が届く。
「神奈子様、諏訪子様、あれってこの前のロボットより大きくないですか！？ 大きいですよー！？ うわあ、ちよつと不恰好だけどいいなあアレ！」

「だから早苗、ロボットじゃないって何度言ったら……」

「夢がないですねえ、諏訪子様。外の世界の若者だったら誰しもが『大きい^{イコール}ロボット』だと思うものです。ねえ、神奈子様？」

「ああいや、流石にそれは言い過ぎだと思っただが」

しかし早苗は否定を全く受け付けず、きやはうふふと少女らしくはしゃぎ回っている。二柱の神から漏れた溜息には、神の力を宿す者がこれで良いのだろうか、という不安があからさまに含まれていた。

「しかし、どうしたものかね。この異変、私たちが動くべきなのかな……」

早苗は放っておくことに決めたらしい。台に肘を突いた神奈子の悩みは、既に別件へ向けられていた。諏訪子は意気もなく畳に寝転がって、

「いいんじゃないかな、動かなくても。博麗の巫女やらスキマ妖怪やらが片づけてくれるでしょ。それがあいつらの仕事なんだから」
「それに、他の者も好奇心なり何だりで首を突っ込むに違いないから人は足りてる——ってことかい？」

「そこはまあ、幻想郷だからねえ。私たちもヒトのことも言えないけどさ」

「ただ、私としてはそれでも不安なんだよ」

「不安か。不安ね。どうしたのさ、神奈子らしくもない」

「だが諏訪子、お前も感じ取ってるんだろ？ この得体の知れな

い力を」

頷いて、諏訪子はぴょんと跳ねて起き上がった。

「まあそりゃあ、ねえ。でもだからこそ、今はまだ近づかない方がいいんだよ。君子危うきに近寄らず。私たちが今やるべきことは――」

――

言いながら、諏訪子は縁側に立った。そのまま早苗に目を向けて、
「――今にも飛び出していきそうな早苗を押さえつけること、だね」

S t a g e . 1 - 6 < 八坂神奈子 : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 2 5 3 3 9 /

Stage・1-7 <比那名居天子：1>

天界。

守矢神社の更に上方、雲を越えた宙に浮かぶ巨大な岩の上に、天人たちの住む楽園は広がっている（山を越えて空を飛んでいけば辿り着けるといっただけで、実際には冥界の一部である）。天人とは言うが、その誰もが聖人君子というわけではなく、なかなか人間味のある者たちも存在する。寿命で迎えにやって来た死神を追い払うなどとはよくある話で、極めつけには暇潰しに異変を起こすような天人くずれまでいる。

その天人くずれの名は比ひなな名居あてんし天子。彼女は今、黒い帽子の飾りに似た大きな桃を、つまらなそうな顔で頬張っていた。天界には桃くらいしかまとまな食べ物がないというのだから、そんな表情を浮かべるのもっともな話だろう。

だが、彼女が現在の表情に至ったのには、もう一つ別の原因があった。

「……総領そうりやうしゆめい嬢様。天界の端に立っていると危険ですよ」

夜風に暗い紅の羽衣をはためかせ、天子の目付役である龍宮の使い、永江衣玖ながえいくは言った。天子は衣玖の方をちらりと見ると、すぐに視線を戻し、宵闇に同化した地平を見つめた。違う、雲海の水平線と彼女との間に堂々と佇む、巨大な岩塊を見据えているのだ。

「大丈夫よ、これくらい」

「そうですか。ではせめて、卓に着かず桃を食べるのをお止めください。誰も居ないからとはいえ、それは流石にお行儀が悪いです」

天子は音もなく、もう一口桃を頬張った。

「そんなこと言っていられないわよ。衣玖、せめて貴方くらいは空気を読んでくれると思ったのだけれど」

「はあ。これでも読んだつもりですが」

「駄目駄目ね。今の私は、この異変に乗り遅れたことで酷く苛々しているの。もうちょっと気の利いたことを言ってほしいものだわ」

「気の利いたこと、ですか……そうですねえ。では、はつきりと言うことにしましょう。総領娘様、変な考えは起こさず、異変が収まるまでじっとしててください」

それを聞いた天人の娘は、更に機嫌の悪そうな表情になった。

「はあ、いっつもいっつも同じことばかり。変化を楽しもうって気概がこの天界にはないのかしら。停滞が樂園だとか、そんなことを信じているなんて哀れなものね」

びり、と衣玖の周りに静電気が発生したように見えた。天子にはそれが見えていないのか、それとも故意に無視しているのか、桃を虚空に投げるとそのまま言葉を続けた。

「どんなに美味な食べ物だって、ずっと同じ物を食べ続けていれば飽きが来る。それに満足できなくなる。つまり飽食ね。私が緋想の剣を持ち出して異変を起こしたのも、それが理由」

まあ衣玖にはわざわざ教えるまでもないことだけど、と言って天子は腰に提げた剣の柄を握った。

相手の弱みを気質として現出させ操るその力は、最近ではあまり振るわれていない。起こした異変の後はある程度下界との交流も増えたのだが、それでも退屈な暮らしに戻りつつあることに間違いはなかった。

「それが原因となつて、今まで以上に総領娘様への監視を嚴重にしなければならなくなつたのですが……それはともかく。しかし総領娘様、その理論に則るなら^{のう}ば、異変ばかりに関わっていても飽きてくる、ということになります」

「意地が悪いわよ、衣玖。常に同じ異変が起きるわけじゃない、つて反論されることくらい分かっているくせに」

ですが、という衣玖の言葉を遮って、天子は言う。

「ああそうだ。空気の読めるあんたのことだから、私よりもこの異

変で起こっていることも把握できているんじゃないかしら。どう？
正直に教えてくれたら、それで満足して大人しくしているかもしれないわよ。ただ駄目だ駄目だと言っているよりは、ずっと効果がありそうだけれど」

紅の羽衣から、再び細い電撃が奔る。^{はし}衣玖はしばらく考え込むようにして、やがて諦めの表情で溜息を吐いた。

「……全く、仕方のない天人様ですね。いいでしょう、現時点で私の知り得る限りのことを、総領娘様にお伝えいたします」

「そう来なくっちゃ」

永江衣玖は天子の言う通り、空気を読むという能力を持つ。例えば、地震が近いことを雲の様子などから感じ取って下界に知らせているのは彼女である。

そして、今回の異変では天界よりも高く聳^{そび}えている正体不明の岩塊が唐突に出現している。幻想郷を包み込む「空気」は大きく変化しているに違いない。

「——まだこの天界にまでは及びませんが、沈鬱な空気が下界を広く覆っています。丑三つ時だとはいえ、妖怪たちが異様に静かなのは総領娘様も感じ取っていらっしゃるか。しかし、確かに静かな空気なのですが、決して重くはないのです。何と云うか、呆然自失としている者が纏っているような、そんな空虚さがあると言つか……私も初めて触れるような感覚ですので、上手く表現できないのですが」

珍しく、真面目な顔に戸惑いが入り混じる。彼女をして困惑させるとは面白い話だ、そう思いながら天子は続きを促す。衣玖は表情を元に戻して、

「また、龍神様は『異変を放っておくと、この地は大いなる危機に脅かされるであろう』というようなことを仰いました。しかし既に必要な人が対策に動いているようなので、私たちが心配することはないかと思われます」

「へえ、龍神様がそんなことを」

天子は素直に驚いた。龍神は幻想郷の最高神だ。衣玖は龍宮の使いとして、龍神の言葉を下々に伝える役割も持っている。とはいえ、龍神自らが民に言葉を与えることは滅多にない。今回はそれだけの影響力を持つ異変らしいということが、天子の中で改めて認識された。

「現在、幻想郷各地で、強い力を持つ者達が行動を開始しています。今その動きは点在していますが、やがて集結してこの度の異変のおもとと激突することになるでしょう。その時に何が起こるのかは分かりません。ただ、危険であることに間違いはない」

「だから天界に留まっっている——結局、そういう話になるのね」

「ええ。今回ばかりは、下界に面倒事を持ち込むな、というこれまでの言い分とは違います。本気で総領娘様のことを、ひいては天界、幻想郷全体のことを心配なさっているのです」

では、私は少々用事がありますので——そう一礼して衣玖が去った後。

「……………」

天子は周囲の気配を窺い、それからじつと下界を覆う夜の暗闇を見つめていた。見た者は例外なく不安を覚えるだろう、そんなうっすらとした笑みを浮かべながら。

「ふふ、あんな面白い話を聞いて、この私がじつとしていられるわけがないじゃない。衣玖には悪いけれど、ちゃんと私を見ていないのがいけないのよ……そう、確かに異変が始まった時に動けなかったのは失態だったわ。でも、衣玖の言葉からして、まだ間に合わない時間でもない。変化はまだ始まったばかり。そんなわけで、たまには——」

自分を包む空気が興奮にざわつき始めたのを感じ、天子は一息に天界を飛び出した。彼女の身体はふわりと宙に浮かび上がり。

「——私が異変解決、っていうのも悪くなさそうね」

そして夜雲の海を突っ切り、地上へ向かって一気に急降下を開始した。

Stage・1・7 <比那名居天子：1>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/125339/

地靈殿。

妖怪の山の麓ふもとにある洞穴は、地下に在る広大な空間に繋がっている。そこでは旧都と呼ばれる地底の妖怪たちが住まう地区があり、更にその下には、かつて地獄として使われていた場所がある。いわば灼熱地獄だが、ここが使われなくなっただ今でも——いや、人工的に（神工的に？）利用していたからこそ、現在でも管理が必要なのだ。そして、その管理を任された者たちの暮らす建築物が、地靈殿と呼ばれる洋館である。

赤と黒のタイルが敷き詰められたフロア。地靈殿の主、古明地さとりの元に、一匹の朱い猫が走ってきた。さとりは子猫を抱いており、その猫の方には興味がないと言わんばかりに一瞥をくれただけだった。しかし、桃色の少女の胸に絡んだ紐——そこに繋がる大きな一つ目だけは、朱色の猫を喰い入るように凝視している。

しばらくして、さとりは小さく呟いた。

「……そう。報告ありがとう。持ち場に戻ってもいいわ」

猫がにやあと鳴くと、さとりに抱かれた子猫も同じように鳴いた。子猫の頭を撫でていると、用事の済んだ猫が出ていこうとしていたので、さとりは「ちょっと待って」とそれを引きとめた。

「それからもう一つ、おくうにも引き続き間欠泉の管理に努めるよう、鳥頭でも覚えられるようにしっかりと伝えておいてくれるかしら。こんな時に灼熱地獄が暴走するなんて、冗談にもならない話だもの……それじゃあ、任せたわよ、お隣りん」

こくりと朱猫は頷いて、姿を消した。

同時に、その場所に人の姿をしたものが現れた。猫が変身したのではない。ずっとこの場において、しかし誰の意識にも入っていないか

つた者が、さとの意識内に入り込んできたのだ。

「——あれ、お姉ちゃんが子猫ちゃんを抱いてるよ？ 珍しいこともあるものね」

黒帽を被った、さとりと似た容姿の少女は言った。彼女らの外見で異なるのは、髪の色と服装と、それから「第三の眼」が開いているかいないか、くらいだろうか。

「体毛が全身を覆い切ったばかりの年齢なのよ。妖怪になつていないから、まだ言葉も話せないし……それに何より、心を読まれるという薄気味悪さも、まだこの子は感じていないみたい」

「だからって今愛でると、その子が離れていった時に受けるショックが大きくなっちゃうんじゃないかなあ」

「いいのよ、慣れてるから。ところで、こいし——」

「——ああうん、旧都のみんなにはちゃんと伝えてきたよ。嫉妬の妖怪辺りを取りまとめて、鬼や土蜘蛛が先導して動いてるんじゃないかと思う」

うーん、とさとりは呻いた。無表情な顔に、唇が僅かに歪む。

「実際彼女たちに頼れるだけの力が備わっているのはいいんだけど、性格的に少し心配ね……まあ、それこそ既に冗談言っていられない状況みたいだし、それが分かっているなら大丈夫でしょうけど」

「冗談言っていられない、か……ところで、さっきのお隣の報告って、どんなことだったの？」

「ああ、地底の怨霊や妖精の数が減っているという話だったわ。前の時とは違って、地上には出ていないみたいなのよ。つまり、この地底の中で忽然と消えてしまったというわけ」

「へえ。でも、怨霊が減るのはいいことなんだろうけど、使い道のある死霊妖精ゾンビフェアリーがいなくなるってのは……不便になるなあ」

ちなみに、死霊妖精ゾンビフェアリーはゾンビ化した妖精ではなく、ゾンビの振りをした妖精たちのことを指す。どうしてそのような手の込んだことをしているのかは不明だが、恐らくは旧地獄に繋がる地底の「雰囲気」でも出したかったのだろう。

「……で、妖精たちを使って何をしようと企んでいるのかしら？」
冷めた視線を浴びせる姉に、ああいや言葉の綾言葉の綾だって、
とこいしは慌てて手を振って誤魔化した。

「で、でもさ、それならお燐ももつと慌ててるはずじゃない？ 霊
たちがいなくなってるのなら、人間の死体も少なくなってるんじゃないの？」

さとのペットであり、「おくう」こと霊烏路空れいうじうつほと共に地霊殿の
中庭から続く灼熱地獄の管理を担っている火焰猫燐かえんびよう。彼女の仕事は、
間欠泉付近の怨霊たちを見張ったり、灼熱地獄跡地の火力が小さく
なっている時に人間の死体を燃料として溶岩へ投げ込んだりするこ
とだ。

燃料が無くなつては火力の調整ができないとこいしは心配してい
るのだが、さとりは静かに頭かぶりを振った。

「いいえ、死体が消えたわけではないみたい。理由は分からないけ
れど、この異変——音も無く地を割ったこの異変が関わっているの
は、ほぼ確実でしょうね。早く修復しなければ、地底が地底ではな
くなくなってしまう」

地底の妖怪と地上の妖怪との間には深い確執がある。本当に確執
を持っているのは、古くから幻想郷に住まう一部の者だが、そうで
なくとも、基本的に地底の妖怪は地上に出てはならないと、幻想郷
を管理する大妖怪、八雲紫と取り決めが為されている。

永い間隔てられてきた壁——地面という名の天井が取り払われた
時、何が起こるのか。そう考えると、地底と地上、その互いのため
にも、今回の異変からこれ以上の被害を受けるわけにはいかないの
である。

「でさー、お姉ちゃん。私は次、何すればいいの？」

いつの間にか、こいしはさとのすぐ傍に移動していた。さとり
は僅かに身をびくりとさせるが、慣れた様子でこう答えた。

「そうね。できれば旧都の方を手伝ってもらいたいけれど……ああ、
そうだ、地上の様子でも見に行ってもらおうかしら。どうせ貴方、

何も無ければ地上に遊びに出ようとか、考えていたのでしょうか？」

「あれー、お姉ちゃんか私の心を読んでるよ？」

「読めなくても貴方の思考くらい分かります。長い付き合いなんだから」

「それもそうだねー」

「では、旧都での作業の進行具合を確認しつつ、地上へ向かいなさい。様子を見るだけで、異変に深入りしちゃ駄目よ」

「うん、分かったー」

棒読みに近い適当な返事に「全く……」と呟くさとりだったが、こいしの姿は既にそこには無かった。妹の無意識に任せた放浪癖は、いつまで経っても直らない。どうして地底には扱いに困る者ばかりが集まるのかとさとりは疑問に思ったが、ある意味で最も扱いに困る存在は自分なのだという事とも、彼女はこの上無く自覚しているのだった。

Stage.1-8 <古明地より…1> (後書き)

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/125616/

Stage・1-9 <寅丸星：1>

聖輦船^{せいねんせん}。

かつて地底に封印されていた、船の容を模した空飛ぶ穀倉である。以前地底で騒ぎがあった際、数名の妖怪と共に地上を越え上空へと脱出した。その目的は、散らばった飛倉の破片を集めることにより魔界（精確には、その一角にある法界）に封印された聖僧^{ひじりびやくれん}、聖白蓮を救出することにあつた。

この船を宝船だと誤解した博麗霊夢などの意図せぬ働きによって飛倉の欠片は集まり、結果的に聖白蓮は復活。その後船は人里近くに降り、「命蓮寺^{みょうれんじ}」と名乗るようになった。宝船から生まれた寺として、人里に住む者たちからは早速大きな信仰を受けているらしい。時折、魔界に向かう巡航船として以前のように空を飛んでいるようだが、かつてのように聖輦船と呼ばれる日が来ることは、恐らくもう無いだろう。

「——聖！ 聖！ 起きてください、大変な事態が発生しています！」

「……どうしたんだい、ご主人様。また宝塔でも失くしたのか？」
虎柄の装束を着た毘沙門天代理、寅丸星^{とらまるしょう}の背中に冷めた声が投げかけられた。驚いて振り向いた彼女は、余程慌てているらしい、勢い余って手に掛けられたままの襖の紙を破いてしまった。

「や、ナズーリンですか。こんな時間に騒いでしまつてすみません」
星は己の失態など気にもせず、大きな耳を持った小さな鼠の賢将、ナズーリンにそう返した。

「そうだ、そんなことよりもナズーリン、貴方も聖探しに協力してください。こんな大変なことになっているというのに、あの方はどこへ……」

落ち着きの無い星の肩をがっちりと掴み、ナズーリンはどすの利いた口調で、五月蠅い子供を脅すように言った。

「落ち着いて話をしようか、ご主人様……ここは確かに聖の部屋だ。だが、今しがたご主人様が確認したように、ここに聖の姿は無い。これがどういふことだか分かるかい？」

「分かるも何も、だから私は聖を探そうと貴方に——」

「そうか、だったらまだ寝惚けているらしいご主人様に解答をサービスしよう。聖は私の力で探すまでもない。ご主人様がまだ眠っている間に、既にこの異変に気づいて動き始めているよ」

「何だ、そういうことでしたか。ならば良いのです。さあ、ナズーリン、こんな所で時間を潰していないで、早く聖の元へ参りましょう」

言って、星は肩に掛けられた手を退かそうとする。が、身長的に下から押さえつけているはずのナズーリンの手は、渾身の力を込めてもびくともしなかった。

「ほう……毘沙門天様の弟子ともあるう者が、随分と傲慢な振る舞いをするのだね。ご主人様はどうやら、どうして私がここにいないか理解できていないらしい」

「……へ？」

首を傾げる主人を見て、ナズーリンはふっと腕に掛けた力を抜いた。訳の分からない展開で重圧から解放された星に、彼女は意地の悪い笑みを浮かべる。

「というわけで、ご主人様。私は聖に頼まれた用件があるから、少し外に出てくるよ。ご主人様においては、聖の所に行つて、私がさつきまでやっていた仕事をこなしてくればそれでいい——そして後で、呑気に情眠を貪っていた事を後悔するんだね」

去っていくナズーリンを呆然と見送った星は、我に返るとようやと状況を冷静に考えられるまでに落ち着いた。これまで聞こえていなかった周囲の声も、聞こえるようになった。

彼女が取り乱していた理由は、ここからそれほど離れていない場

所に天地を繋ぐような巨大な影の膨らみを見たからだ。今ではそれが、途方もない大きさの岩石だということも分かる。

声が聞こえてくるのは、白蓮の寢室の裏手——命蓮寺の玄関方面だ。やや騒がしいと感じるのは思い違いではなく、現実に変化が起こっていることの証左だ。星はすぐに白蓮の姿を求め駆けだした。

「——あら。星、ようやく目を覚ましたのですね」

星の姿を視界に入れると、聖人、聖白蓮は彼女に優しく声を掛けた。

彼女は命蓮寺を取り仕切る住職ということになるのだが、その容姿はあまりその肩書きにそぐうものではない。長い金髪が腰下辺りまで伸び、頭頂辺りは紫色に染まっている。その上で黒装束を身に纏う様は、やはり僧侶には見えないだろう。

しかし、やはり清浄な心を持つ者としてのオーラは滲み出ている。彼女の心に触れた者は、どのような悪人であれ、毒気を抜かれてしまふのだ。それを慕う者は多く、星もその内の一人だ。

「も、申し訳ありません、聖。異変に気づかずぐっすりと眠りこけてしまふとは……」

「良いですよ、星。この異様な事態は、しかし、なかなか気づける種類のものではないのですから。それに、貴方の無事をこの目で確認する事ができただけでも十分なのです。ナズーリンなどは、異変が起こっているのに一向に起きる気配を見せない貴方を、異変の邪気に当てられてしまったのではないかと心配していましたし」

え、と星の表情が驚きに変わる。先程の態度を思い返す限りでは、「心配」しているような雰囲気とはとても思えなかった。

「とはいえ、あまり悠長に話をしているわけではありませんけどね」「それは、聖の言う『異変の邪気』と関わっているのですか？ 私には、押さえつけられるというより、生気を吸い取られるような感覚を覚えるのです……」

「ええ、本質は星の言う通りです。ただ私は、適当な言葉が思いつかなかったので『邪気』と言っているだけです。そして、それ

が分かっているのなら、周囲にどのような影響がありどのような事態が起こり得るのか、簡単に予測することができるでしょう」

「そうですね…… ああ成程、他の者が出払っているのはそのためなのね」

さすがは星ね、話が早いです——無垢な微笑みを見せ、白蓮は続ける。

「今は人里及びその周辺を探索して、弱った者は竹林の奥にある永遠亭へ、そうでない者は後にこの命蓮寺へ集めることになっています。住人たちの救助を確認し次第、魔界へ避難する予定です」

住「人」たち、と白蓮は言うが、そこには当然のように妖怪たちも含まれている。それは、彼女の目指す理想が「人間と妖怪が平等に暮らす世界」だからだ。命蓮寺も人妖問わず、広く門戸を開いている。ただ哀しいかな、現実には、多くの人間たちが妖怪に虐げられていると思っているようだ。

ただ、その言葉を聞いた星の表情は優れなかった。

「聖……その、魔界へ避難するというのは？」

魔界とは一つの異世界である。幻想郷から訪れることは可能だが、内部は瘴気しやうきが充満しており、人間たちにとっては毒となる。そこに避難することとは、聖は今回の異変で感じる『邪気』を、それよりも危険なものだと考えているということなのか。

心配する星を優しく諭すように、ふるふる、と聖は首を横に振った。

「貴方の心配する気持ちも分かりますが、恐らく大丈夫でしょう。」

以前、私が封印されていたあの地——法界ならば」

「……え。法界、ですか？」

「法界は瘴気が薄く、更に異能の力を強めます。私を封印していた結界も、その性質を利用していました。その中は、ある意味では幻想郷よりも遥かに安全な領域となる……私は、この船全体に結界を掛け、法界へ避難することを考えています。星、貴方の力を借りることにしますが」

成程、と星は頷く。確かに法界で、聖人たる聖が結界を張るのであれば、相当の力でも破れない強靱な防壁となるだろう。

「そういうことでしたか……ならば問題ありません、聖の指示に従いましょう」

「ありがとうございます。それで、差し当たっては――」

「――はい、私も付近に住む者たちをここへ集めれば良いのですね？」

任せてくださいとばかりに意気込む星だったが、対する聖はそれを軽くあしらうように、再び頭を振った。

「いいえ、星はここに残っていてください。あの八雲紫が使うスキマの力でもない限り、人々を運ぶには身体を使う必要がありますからね。私が肉体派の魔法使いということは、貴方もよく知っているでしょう？」

「つまり、全体の指揮を私に任せるといことですか？」

「そうなりますね。何か事態に変容があるようなら、それに合わせて採るべき方針を私たちに知らせてください。藤原妹紅さんや白沢慧音さんも手伝ってくれているので、その二人にも指示をお願いします」

星が頷くと、「では私も行ってきますね」と言つて白蓮は己の居城を後にした。

これから、まだ健常な者たちが次々とやってくるだろう。故に星はその者たちの案内をすることになる。しかし、相容れない存在でなければならぬはずの人間と妖怪が同じ屋根の下に集うというのは、考えるまでもなく危険な状況だ。ナズーリンはこのことを言っていたのかと思うと、それがどれだけの激務なのか垣間見えた気がした。

「しかし、私は毘沙門天様の弟子です。更には恩人である聖からの頼み、どれだけの苦行であろうとも、必ずやり遂げねばなりませんね」

星は空を仰いだ。そこには、自分と同じ名を宿す幾つもの煌めき

が瞬いている。しかし、ある一角だけは、岩塊に遮られて虚無な闇を創り出していた。どこを探しても見当たらない月は、あの向こうに隠れているのだろうか——つい昨晚眺めていた美しい三日月を思い出しながら、続けて彼女は思った。

次の夜にはあの月とまた出会えるのでしょうか、と。

S t a g e . 1 - 9 <寅丸星:1> (後書き)

←舞台裏はこちら←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 2 6 0 8 1 /

魔法の森。

この年中じめつとした空気に包まれている薄暗い森には、魔力を高める場として多くの魔法使いたちが暮らしている。とはいえ、あまり住人が多いわけではない。中でも特に目立つ者と言えば――人間、霧雨^{きりさめ}魔理沙と、七色の人形使いと呼ばれるアリス・マーガトロイドくらいのもだろう。

謎の巨大岩塊が幻想郷に現れたものの、ある種の独立地区と化しているこの森にはあまり変化は無く、木々の密集している内から月光を妨げるその影を見ることは不可能だった。しかし敏感な者は、あるいは運の良い者は、魔法の森という場に生じた僅かな変化に気づいていた。

「――お、アリスじゃないか。起きてたのか」

「あら、魔理沙じゃない。……ええ、起きてたわ。今晚はアルコール、一滴も入っていないもの」

マーガトロイド邸玄関前での会話だ。魔理沙がアリスを訪ねてきたところ、ちょうど彼女が家から出てきたという展開のようだ。

「それで、貴方、こんな時間に何の用かしら？」

黒の大きな魔女帽を被った人間の魔法使いは、「ああ」と言いながら跨っていた木製の箒から降りる。箒に乗って空を飛ぶという光景は魔女らしいのだろうが、現実、わざわざ道具に頼って空を飛ぶ魔法使いなどほとんど存在しない（どこるか魔法使いでなくとも、力ある者の多くは自由に宙を舞える）。武器として使用したり魔法の媒介となったりと、確かに特段不便な物ではないのだが、単に邪魔者として扱われやすい箒を魔理沙がいつも持っているのは、アイデンティティの体現なのだろうとアリスは時折考えている。

そんなアリス自身も、傍らには少女を象ったバスケットボール大の人形を浮かばせている。どこからどう見ても指先で紐伝いに操作しているとは思えないほど精密な動きをするのだが、元々強い魔力を持っているのにわざわざ人形を使うこともないだろうと魔理沙は常々思っている。

「何の用かと訊かれてもな」

愚問だとばかりに、魔理沙は悪戯に笑った。

「そんなこと、聞くまでもなく分かっているだろう。それじゃあ、一体何のために籠もりがちのお前が外に出てきているってんだ」

「あら、ただの散歩かもしれないわよ？」

「異変の物見がてらに、って解釈でいいんだろうな」

まあそんなところかしら、と人形使いは微笑んだ。

「それで、あなたはその『散歩』のお誘いに来てくれた、と。……

ところで、あなたの方こそ良く気づいたわね。地割れが起きたような大きな音がしたわけでもないのに」

「ツチノコが珍しく騒ぎだしたんでな。ちよいと様子を見に行っただんだ」

「ああ、この前ペットにしたっていう？ 霊夢はすぐに飽きるだろうとか言いふらしてたけれど、まだ飼い続けてはいるようね」

「一度飼うと決めたものは飼う。それが乙女という奴だぜ」

「それって、ただ一度拾ったものが捨てられないだけなんじゃないかしら。家の中をあれだけ散らかせるような人間を、乙女とは呼べないわ」

放つとけ、と魔理沙はアリスの横腹を小突いた。その手をぺちんと払い除け、アリスはやや表情を強張らせて言う。

「それで、様子を見に行っただけはどうだったの？」

「とりあえず人里をちらりと見ただけなんだが……そうだな、静かな大騒ぎ、って感じだったぜ」

「何よそれ。もしかして皆でパントマイムの練習でもしているのかしら」

「その喻えも強^{あなが}ち間違つてはいないかもな。実際のところは、寝静まった里の人間たちにあまり刺激を与えたくないだけなんだろうがうん、近所迷惑も大概にしろって怒られたことも、昔はあつたなあ……」

「今でもよく近所迷惑に近い音出してるけどね……」

「あん、何か言ったか？」

小声での苦情は届いていなかったらしい。アリスは首を横に振つて、

「何でもない。とにかく、私たちと同じように異変に気づいて動き始めてる者がそこその数いるということね」

「そうなるな。霊夢も早速活動開始してるんじゃないか？」

「これまでに無い規模の異変なんだから、まあ当然よねえ。……けれど、あの蛹みたいな形した岩の塊、本当に大きかったわね。私の特製人形どころか、河童の造った風船すらも目じゃないくらいだったもの。何だか影が霞んでしまふ心地がして悔しいわ。ええ、あんたのペットみたいに」

「アレの話はもういいだろう。というか、こんな所で呑気に世間話している暇は無いんだった。異変と聞いて、この私が乗り遅れるわけにはいかないからな——ほらアリス、行くぞ」

どうして当たり前のように自分がついて行く流れになっているのだろう——大いに首を傾げたいところだったが、アリスは目の前に立つ人間が霧雨魔理沙という少女であることを思い出し、疑問に思うこと自体が馬鹿馬鹿しい徒労なのだと悟った。

それに、彼女の方も魔理沙を『散歩』に誘おうとしていたのだ、この流れに不都合は何一つなかった。

「あの、一応期待せずに聞いておくけど、店の方はいいの？」

魔理沙は自宅で『霧雨魔法店』という便利屋を営んでいる。立地の悪さと店主のやる気の無さとが相まって、客が訪れることはほぼ皆無だ。

アリスの予想通り、魔理沙は「いいんだよ」と即答した。

「何しろこんな時間でこんな状況だしなあ。流石にこの前の時みた
く、妖精共がやって来ることもないだろう」

「そう、結構緊迫した事態だということが少しは分かっているよう
で安心したわ」

「どんな危険が待ち受けていようと異変に立ち向かう。それが漢^{オトコ}
という奴だぜ」

「……ツツコまないわよ」

「つまり奴だな、と魔理沙が笑うと、お互いさまね、とアリスも
笑った。

それじゃあ行こう——魔理沙が言つて、二人は宙に舞った。

森を抜けると視界が拓け、遠くには天にも届きそうなほどの巨大
な影が佇んでいた。魅せられるように、二人の魔法使いは滑空する。

「——あら？ あの古道具屋さん、灯りが点いてる。へえ、こんな
時でも営業なんて、随分と熱心なものね。あまり感心できないわ」

アリスが見遣ったのは、やや後方、魔法の森と人里の境界に位置
する一軒家だ。玄関には看板が打ち付けられており、『香霖堂^{かうりんどう}』と

書かれている。半人半妖の珍品蒐集家、森近霖之助^{しんぢうしゅけ}の経営する道具
屋である。

「ああ、香霖ならいないぜ」

「灯りが点いているのに？ いいのかしら、泥棒に入られてしまっ
わ」

アリスは冷ややかな目で魔理沙を見たが、笑って誤魔化された。

「何があつたのかは知らないな。ただまあ、大方この異変に関する
ことだろう。しかしこの不穏な空気……何もなければいいんだが」

「その何かが起こる前に片をつける、それが貴方の役割ではなくて
？」

「アリスの言う通りだ。この程度の異変なんぞ、派手にぶっ飛ばし
てやる」

人里から離れるように北へ向かう。吸血鬼の居城、紅魔館とその
東に広がる霧の湖を眼下に、やや勾配のある丘へと進んでいく。そ

んな彼女たちを出迎えたのは、蒼い蝶の群れだった。

「こんなにたくさん……どうしたのかしら、ここはお花畑じゃないわよ」

「というより、今はまだ冬だ。春に近いとはいえ、流石にこれは異常だろう。異変の影響と見て間違いないな」

異変の中心地であろう巨大岩塊へ急ぎたい気持ちはあつたが、こちらの小さな異変も気に掛かったので、二人は丘に降り立った。

「ええ。それにしても、この近辺では見かけない蝶ね——」

「——この子たちは蝶じゃないよ」

背後から聞き慣れない声が届き、魔法使いたちは振り向いた。

そこに立っていたのは、黒いマントを羽織る、細い触角を生やした緑髪の小娘だった。

Stage.1-10 <アリス・マーガトロイド…1> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/126488/

「ああ、永夜異変の時の光蟲ひかりむしじゃないか。桜の花すらまだ咲いてないって時期だが、冬眠してるわけじゃあなかったんだな。で、何だった？ こいつらは蝶じゃないのか？」

虫を操る蛍の妖怪、リグル・ナイトバグに、魔理沙は物珍しそうな視線を隠そうともせず問い掛けた。

「そう、この子たちは『蛾』だよ」

「げえ、こいつらってあの害虫なのか？」

嫌悪感を見せる白黒の魔法使いを見て、リグルはむっとした。

「何よ、『蛾』だからってその反応はないんじゃない？ 蝶にだって害虫と呼ばれる種はいくつもあるし、もちろん蛾にだって有益とされる者もいる——それに何と言ったって、蝶と蛾では蛾の方が圧倒的に種類が多いんだ。蝶って、数多くいる蛾のごく一部に与えられた、希望観測的な名前に過ぎないんだよ」

そうなのか、と感心したように魔理沙とアリスは頷いた。魔法を研究するために虫を使う場面は少なくないが、それでも虫たちの総大将であるリグルより知識があるわけではないのだ。魔法使いたちにとって重要なのは、虫の科学的な分類ではなく、それが持っている特徴的な成分、あるいはその存在に与えられた意味なのだから。

「私は蝶と蛾の区別なんて気にしたことないけれど……こんなに綺麗な翅を持つ者もいるのね。こんな状況じゃなかったら、もうしばらく眺めていたいところだわ」

アリスの褒め言葉に、まるで自分が褒められたかのようにリグルは頬を紅潮させた。妖怪としてはそこそこの力を彼女は持っているが、中身は見た目通り子供であるようだ。

それで、と一瞬の間を狙って魔理沙が言った。

「お前はこんな所で何をしているんだ？ 夜行性の妖怪たちですら、今宵はこんなに静かにしてるってのに」

「この夜が静かなのは、妖怪たちが活動していないのが理由というわけじゃない。一番の理由は、虫たちが鳴かないから」

「あー、夜の虫って結構五月蠅い^{こもめ}からな。夏の蚊や蝉ほどじゃないが」

「五月蠅いって言うな！」

「……で、虫たちが寝静まっている理由は何なのかしら」

逸れかけている話を、アリスが元に戻す。

対するリグルは、頭を振ってこう答えた。

「これは妖怪にも言える話だけど、虫たちは寝静まってるんじゃないよ。いやまあ、まだ寒い時期だからっていうのもあるけど……違うのは、妖怪たちはまず異変に気づいていないか、あるいはこの異変に怯えて出てこないということ。そして虫たちは、あそこに向かって惹きつけられているの」

リグルが指差したのは、丘を越えた更に向こうにある、あの岩塊だ。

「あそこは危ない——だから私は、虫たちにあそこへ行かないように言っているわけ。私だって、できることなら遠くに逃げたいよ。ただ、何故かあまり言うことを聞いてくれないから、無理矢理にでも帰そうとしてるんだけど……」

「だったらこの蛾どもは何だ？ お前が喉^{けしか}けた奴らじゃないのか？」

魔理沙が強い口調で言うと、リグルは僅かに怯んだ。

「ち、違うよ、ただ……」

「怪しいな。何か隠してるんじゃないのか？」

「ちよつと魔理沙……」

何となく魔理沙が起こそうとしている行動を察し、止めようとするアリスだったが、既に聞く耳を持たぬ状態になっている。常に持ち歩いている小さな八角形の箱、手乗りサイズのミニ八卦炉^{はっけろ}を徐に^{おもむろ}取り出したのを見て、アリスは彼女を止めるという選択肢を完全に

諦めた。

「だから違うつて！ この蛾たちは元々幻想郷にはいるはずのない

――」

「あー分かった分かった。私に勝てたら、話を聞いてやるよ」

「――は？」

アリスはリグルの頬を一筋の冷汗が流れるのをみた。ようやく、何が起ころうとしているのか理解できたのだろう。可哀相に思うが、こんな所で魔理沙に話しかけてしまったのが運の尽きだと言っ
しかない。

魔理沙は緋々色金でコーティングされた八卦炉をリグルに突き出し、ニヤリと笑った。

「ほら、異変解決前のウォーミングアップだ。こんなに冷える夜なんだ、あの時みたく、少しは身体が温まるような弾幕を頼むぜ！」

ひらりと一枚の紙が宙に舞う。同時に、八卦炉が更に強い光を放った。

「恋符『マスタースパーク』！」

収斂した魔力が光の魔法となって放たれる。触れたものの全てを焦がし尽くすのではないかと思うような白光が、一直線に低空を貫いた。

「わわっ、いきなり何なの！？」

「む、避けられたか」

さも意外だと言うように、魔理沙は唸った。これに対して、横方向の移動で何とか回避に成功していたリグルは、

「『弾幕を頼む』とか言っておきながら、瞬殺する気満々じゃない！」

「いやだって、実はこんな所で時間掛けるわけにもいかなかったしな」

「自分勝手すぎるなあ……」

「妖怪が何を言っているんだ。ほら、さっさと退治されてしまえ」

「うつ……でも、私だって虫たちのために、ここで負けるわけには！」

リグルはやや膨らんだ七分の黒いズボンのポケットから、魔理沙が先程投げたものと似た紙を取り出した。——スペルカード。敵を滅しない程度の術を予め宣言する、安全な『決闘』のための道具だ。^{ツール}
「灯符『ファイアフライフェノメノン』！」

球形と八方体の織り交ぜられた光弾が周囲に展開される。一部の弾は逃げ道を遮るように、また一部は敵本体の狙うようにして、襲撃者を返り討ちにせんと美しい軌跡を描く。

だが、数々の異変を解決してきた魔理沙にとって、この程度の弾幕を回避することなど甚く容易であつた。

「最初の敵にしちゃ、いい弾幕だ——だが、私には敵わないぜ！」
幾重にも重なる光のカーテンを潜り抜けつつ、魔理沙は彩りある星型の弾を放つ。瞬く星たちは向かって来る弾幕と相殺し、残ったものは敵を追うように加速していく。

リグルはそれを避けるため、一度攻撃の手を止めた。だがその隙を、魔理沙が見逃すはずもない。自分の撃った弾とで敵を挟み込むように回り込み、逆に退路を失わせた。

一時の保身のために恰好の隙を相手に与えてしまったリグルは、全てを悟ったような顔をして、

「はあ。悪いことなんてしていないのに、どうしてこんなことに……」

「運が悪かったんだろう。観念して、大人しくしているんだな」
もう観念してるよ、という投降の言葉はもう魔理沙に届かない。

「——魔符『スターダストレヴァリエ』」

蛍の淡い光は、星々の強い輝きに飲み込まれ、すぐに失われた。

Stage・1-11 <アリス・マーガトロイド…2> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/126834/

「——うーん、何だか物足りない気分だな。あの虫、根気なさすぎやしないか？　ちよつと本気を出したただけなのになあ。全く、虫にしちゃあんだだけデカい図体してるんだから、二百二十五分の魂くらいは見せてほしいもんだ」

「そりゃあ戦う気がなかったんだから、そう感じるのも当然でしょうよ。他にやることがあるのに、あんたみたいな弾幕馬鹿の相手なんてしてられないわよ」

「あーん？　どこの誰が弾幕馬鹿だつて？」

「少なくとも私じゃないわね」

「つれない奴だ。でもまあいいじゃないか。そこそ役に立ちそうな情報はゲットできたわけだし」

「それもそうね」

リグル・ナイトバグを撃破した彼女たちは今、再び巨大岩塊を指して空を飛んでいた。リグルから虫たちに関する異変の話聞き、やはり異変の中心部に向かわねばならないと判断したからだ。

「この蛾は、幻想郷に住んでる種類のものじゃないんだ——」

戦いを終えた後、魔理沙に問い詰められたリグルは渋々そう答えた。

「あ？　だったらこいつらは、外の世界から持ち込まれたってことか？」

「……『勝つたら話を聞いてやる』とか言ってたくせに、負けても逃がしてくれないの？」

「ぐだぐだ言わずにさっさと答えな。虫の息な状態にされたいか？」
「されたくないです。……えーと、ちょっとややこしい話になっちゃうけど、この蒼い蛾たちからは幻想郷の匂いがするんだ。つまりこの子たちは、幻想郷の中で生まれ育ったの」

「……は？ お前さっき、『幻想郷に住む種類じゃない』って言うてなかったか？ 矛盾しているだろ」

「いやでも、私にはそうとしか言いようが……」

まだ何か隠してるのかと剣幕を凄める魔理沙を、アリスが制止した。

「つまりこういうことね——ここにいるはずのない外来種が突如発生した。突然変異だか何だか知らないけれど、今回の異変が関わっていることに間違いは無い」

「まあ、そんな感じかな」

話の分かる人物がいてくれて助かった、と白黒魔法使いに恨めしい視線を投げ遣りながらリグルは言う。

「虫たちがあそこに惹かれていつてる——実は私もそうなんだけど、どうしてかあそこに行きたいって気持ちになるの。私は妖怪になっていて理性があるからいいけど、虫たちは本能の感じるままに動くから……」

「ん、何の話だ？」

「ああ、成程ね」

魔理沙は首を傾げ、アリスは深く頷いた。

「解ってきたわ、あなたの言いたいことが……どうしてこの蛾たちだけは、あの岩蛹に惹かれていないのか」

こくり、とリグルも頷きを返す。アリスは魔理沙の方に向き直って、

「どうやらやはり、あの場所まで行かなければならないようね。行きましよう、魔理沙。あらゆる蟲たちを誘う危険な香り……これが、幻想郷に住む全ての者を虜としてしまう前に」

表情の陰しくなったアリスを見て動揺したのか、魔理沙は逆に、

余裕のある顔をして茶化すように言った。

「もういいのか？ 折角デカイサンプルを生け捕りにしたつてのに」
「標本にする気がーっ！」

リグルが涙目になって叫んだ言葉は、しかし魔法使い達にとっては煩雑なものでしかなかった。

虫の鳴き声は、時に風流でもあり、また時には不快感を助長させる要因ともなる。

さて、こうして初戦の名残を惜しみながら、魔法使いのタッグは再び足を進め始めた。

今彼女たちが臨んでいる岩塊は、その大きさ故か、そこまで遠くにあるようには見えない。だが、それなりの速さで飛んでいるというのに、なかなか距離が縮まっている気がしなかった。

「遠いな。幻想郷ってこんなに広がったっけか？」

「魔力を感じるから、距離を操る魔法でも掛けられているのかもね」
「距離ねえ。何なら三途の川のサボタージュ死神でも攫さらってくるか？」

「嫌よ。死神を自ら引き寄せるなんて、縁起でもない」

「耳寄りな話、天人に聞いたんだが、いざとなれば追い返せばいいらしいぜ。あいつくらいなら簡単に追い払えそうだ」

「そうなんだ……死神って、結構大変な仕事なのね」

ただ談笑しているだけでは異変は解決しないのだが、擬似的に作られているらしい長距離を漫然と飛んでいるのは退屈だ。必然、会話は多くなる。だが実のところ、それは徐々に大きくなる不安を有耶無耶にするための反応なのだと、果たして彼女たちは自覚しているのか。

「ところでアリス。さっきの光蟲の話でこの異変について何か掴んだみたいだが、何が分かったんだ？」

「うん？ ああ、別に大したことじゃないわよ」

「ケチ臭いな。いいから教えるよー」

「だから本当に大したことじゃないんだってば……まあ、強いて言えば、私が今こうして動いている理由が分かった、ってところかしら」

「……もしかして、今まで何も考えずに動いてたのか？」

「そんなことないわよ。動こうと思ったから動いているだけ」

「ますます分らないな。結局どうということなんだ」

「ここ最近で私が活動した異変は、鬼が起こしたものと、月の民が起こしたものと、後は天人が起こしたものと、それから地底の妖怪たちが上に出てきた時だったわね。鬼と天人の時は、自分のすぐ周りで異変が起きたから動かざるを得なかった。他の時は、幻想郷に大きな悪影響が及びそうだったから動いた」

「そうだったかな。それで、今回はそうじゃないのか？」

「そういうわけでもないわね。その両方、というのが正解かしら」

「ふうん？ 幻想郷に悪い影響がありそうだったのは分かるが、しかし別に、お前の周りで異変が起こっているようには見えないが」

「まあそうでしょうね、目に見える異変じゃないでしょうし。それに、異変は貴方にも起こっているはずなのよ。貴方がそれを感じ取れないというだけで」

「それは、私が鈍感だって言いたいのか？」

「ええそうよ、って言うてやりたいところだけど、残念ながら違うわ。私もあの蟲の妖怪のおかげで今気づいたところだから。つまりね、魔理沙。私たちも既に惹かれ始めているのよ、あの大きな岩蛹に——そう、あの蟲の妖怪と同じようにね」

「そうなのか？ 私はそうでもないと思うんだが」

「あんたは異変と聞くとすぐに頭を突っ込みたがる性格だからね……」

「人聞きの悪いことを。せめて正義のヒーローと言ってくれ」

「あんた女でしょう——いえ、漢、だったかしら」

「ふ。蛾と蝶の区別もできていない奴が男女差別とは、いただけいな」

はあ、とアリスは溜息を吐く。ツツコミを入れる気力は無かった。「とにかく、私は私の感情が不自然だと思っていたのよ。特に力のある者でなければ対抗しようとさえ思わないような不可思議な魔力を感じて、どうしてその魔力に触れたいと思うのか——ってね」

ほう、と興味深そうに魔理沙は呟く。そしてアリスの次の言葉を待ったが、一向に彼女が口を開く気配は無かった。魔理沙は半笑いになって、

「……え、もしかしてそれだけ？」

「何よその反応は。だから大したことじゃない、って言ったじゃない」

「いやまあそうなんだが、ここまで引つ張っておいて、まさか本当にそれだけとは思わなかったな」

「言いたくないから言い渋っていただけよ。意図して引つ張っていたわけじゃないわ」

「はいはい私が悪うござんした。ま、退屈凌ぎにはなったからいいか」

じゃあ次の話——と魔理沙が言いかけたところで、彼女の動きが止まった。何かと思ってアリスが振り向くと、魔理沙はアリスの向こう側を指差して言った。

「——おい見ろよ、あそこに飛んでいるの、霊夢じゃないか？」

そうね、と前を向いたアリスは短く言った。巨大岩塊との間に、紅白の巫女装束に身を包んだ者が飛んでいる。別段不思議なことではないと思ったが、魔理沙にはそれ以上に思うところがあるらしく、大きく舌を打った。

「マズい、出遅れてるじゃないか私たち。やっぱりあの光蟲如きに時間を掛けている場合じゃなかったな。おいアリス、スピード上げるぞ」

そう言って箒の推力を上げようとするのを、アリスは引き留める。

「ちょっと待って、無暗に飛び込むのは危険よ。このまま様子を見ましょう」

「何だよ、それは霊夢だって同じだろう？　むしろ、そんなに危険なら皆で行った方がいいと思うんだが」

「もう面倒だからぶっちゃけて言うけれど、霊夢には囷役になってもらおうと思うの」

「囷役？　そんなのがあいつに務まるわけがないだろう。あの巫女、来る者生かさず去る者逃がさずで、酷い時には敵じゃない奴まで皆薙ぎ払っちゃうんだから」

それはあんたも同じでしょう、とアリスは思ったが、魔理沙の言葉に一理あることも確かだった。だが、

「それはそれでいいのよ。霊夢が道を切り拓いてくれれば、私たちの消耗も少なくなるしね」

「うーん、そんなものか？　私としては正々堂々正面突破したいんだが」

「ちよくちよく盗みを働いてる奴が何を言っているのよ」

「だからあれは借りてるだけだって」

「はいはい、どうせ死ぬまででしょ」

「この前適当に『借りて』きた中には、西洋の神話が書かれているだけの、外の世界の本があったな。つまり本だったぜ。読んでみるか？」

「遠慮するわ。全く、勝手に『借りて』おいて何を偉そうに……とにかく、納得いかなくても、ここは私の言うことを聞いておいてくれないかしら。霊夢じゃないけど、そうした方がいいような予感があるの」

再度うーんと唸った魔理沙は、我を通すための論弁を思いつかず、最終的には頷きを返すことになった。前方を飛ぶ巫女を羨ましそうに見て、

「ちょっと口惜しい気分だが、ここは仕方ないということにしておこう」

空を飛ぶ二人の魔法使いは、その速度を落とした。
同時に、段々と募っていく不安が少し和らぐのを無意識に感じていた。

Stage・1-12 <アリス・マーガトロイド…3> (後書き)

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/127559/

S t a g e ・ 2 - 1 < 射命丸文 : 1 > (前書き)

何を願って、彼女らは美しさを手に入れたのだろうか。

妖怪の山には、その名の通り、多種多様な妖怪たちが暮らしている。更には、河童や天狗といった妖怪だけでなく、秋を司る神や厄集めの神といった、神格を持つ者とも出会うことができる。——もつとも、こうした魑魅魍魎ちみもつりょうの中を潜り抜けようと思える人間がいればの話だが。

この山の中腹辺りでは、鴉からすの翼を持った一人の少女が飛び回っている。飛び回ると言うほど元気な様子ではなく、どちらかと言うと悩みを持った人間がうろついている感じだ。下駄のような板が一枚だけ付いた奇妙なスニーカーを履いている彼女は、ぶつぶつと何かを呟つぶやいていた。

「うーん、この異変が近年稀に見る——どこか稀代の大スクープである事は確かなのに……どうしてか、動いちゃいけないような気がするのよねえ。嫌な予感と言うか、何と言うか」

鴉天狗からすてんぐの射命丸文しゃめいまるあやは、幻想郷で『文々ぶんぶん。新聞しんぶん』を独自に刊行している新聞記者だ。そもそも幻想郷では事件らしい事件も起こらないので記事自体のインパクトはないが、「ウラの取れない情報は記事にしない」という胡散臭い矜持きようぢが伝わっているのか、定期購読している者はそこそこの数いるらしい。しかしその多くは山に住む妖怪たちで、身内向けのメディアであることは否めないだろう。

なお、文のライバルに、同じ天狗の姫海棠ひめかいどうはたてがいる（というより、幻想郷で新聞を作っているのは天狗だけである）。しかし、彼女の発行している『花果子念報かかしねんぽう』の売り上げはあまり芳しいものではない。

天狗にはいくつか種類があり、そのそれぞれによって受け持つ役割が異なる。例えば白狼天狗は斥候に似た仕事をしているし、例え

ば文やはたてのような鴉天狗は、新聞記事を書いてはその辺に配って回っているわけだ。残念ながら、互いをライバル視する以前の問題として、現在幻想郷で最も人気のある新聞、『鞍馬諧報』くらまかいほうという壁が彼女たちの前に立ちはだかっているのだが。ただ、香霖堂の主人などは、その一番人気の新聞のように大仰に飾った文章よりも『文々。新聞』の方が情報としての価値がある、と一定の評価はしているらしい。

「しかし、幻想郷の住人に異変のリアルタイムの変遷を知ってもらうには、今すぐにも動かなければ……後になって新鮮味の失われた記事を書くなど、清く正しい射命丸の名に泥を塗ることになるわ」
文は己の飛行速度を生かして、より新しい情報を読者に提供しようとする。速さを追及するが故に文章が悪かったりプライバシーを穿ちすぎたりすることも少なくないが、それが彼女の新聞の評価を高めている。

「うーむ。何か、動くきつかけになるものが欲しいわね……あら？」
山の頂上からやや下った所で、小さな騒ぎが起こっているのを見た。最近山彦妖怪が不気味な声で経を唱えるようになったが、そういった種類のものではない。そもそも、頂上付近に住む者と言えは守矢神社の面々くらいしかないのだ。

異変関連で何か揉めているのだろうか、彼女は様子を探りにいくことにした。

「——異変は巫女が解決するもの、って霊夢さんも言っていました！」

「いや、だからそれはね？ 結界を守っている博麗の巫女だからこそその台詞で」

「宝船の時は許してくれたじゃないですか。幻想郷に慣れるために妖怪退治でもやってみろ、って言いましたよね？ 神奈子様も」

「う……あー、あの時と今回じゃ、ちと事情が違ってだな」

中空に三つの人影がある。白と青の巫女装束に身を包んだ緑髪と、背が低く二つの丸い目玉の付いた奇妙な帽子を被った蛙の祟り神と、大きな注連縄を背負った蛇の神力を纏う紫髪の軍神だ。

傍から見る限りにおいては、どうやら巫女が異変の中心地——巨大岩塊へ向かおうとするのを二柱の神が遮っているらしい。緑の巫女も、その実の正体は現人神であるようなので、これは三柱の神が言い争いをしているということになる。幻想郷でも滅多にない光景だろう。

文は、これが自分を異変へ向かわせる「きっかけ」になるだろうと思い、（怒りの矛先がこちらへ来ないか不安だったが）話しかけることにした。

「……えーと、お忙しいところ済みません。少しお話を聞かせてもらってもよろしいですか？」

突然の乱入者に、空間が沈黙する。案の定、引き留める側の二柱に睨まれてしまった。敵意こそないが、「邪魔をするな」という圧力が全身に重く押し掛かる。

これが神の力。呑み込まれてはならないと、文はぐつと堪えて言う。

「ああ、今回は取材じゃないんです。前準備と言つか、まあそんな感じで……ちょっとこの度の異変についてお話いただければ嬉しいのですが」

「私たちが天狗に何かを教える道理は無いよ。さつさと失せな」

祟り神の言葉に、まあそうでしょうねえ、と文は内心でそう思う。しかし、ある程度の無謀は覚悟で行かねば、情報を売る新聞記者などやってられない。

祟り神は続けて、

「粗方、早苗を使って異変の調査でもしようと目論んでいるんじゃないのかい？」

見抜かれていた。いや、見抜かれなくても思っていなかったが。

「あら、じゃあ一緒に行きますか？ 旅は道連れと言いますし」

「……だから早苗、何がどうあるうと、この山からは出さんぞ」

巫女は助太刀に來た（と勝手に思っている）文に向かつて爽やかな笑顔を向けているが、堪忍袋の緒が切れかけている神を相手に、よくもまあ余裕な態度を取っていられるものだ。どうやら巫女の器の大きさを過小評価していたようだ、と文は見る目を改めることにした。

対する巫女は、軍神の方へ向き直ると、大きな溜息を吐いた。

「はあ、神奈子様も強情ですね。諏訪子様とも一緒に来ていただければ、この程度の異変、怖くも何ともないじゃないですか」

「異変の解決は博麗の巫女たちに任せる、それが私たちの見解だ。諏訪子もいることだし柵に上げることにはなるが、どうか今回ばかりは勝手に動かないでくれ」

「どうしても行かせてくれないようですね——それなら！」

巫女は祓棒（はくぼう）を振り翳すと、無数の光弾を放った——戦闘だ。

対する二柱は、奇襲とも言える攻撃を見ても動じず、むしろ笑って言う。

「は、我を通すためには争いも厭（いと）わないと来たか。いいねいいね、幻想郷らしいじゃないか！」

「この前は負けてやったけど、今回は無理矢理にでも服従してもらうよ」

そして、同様に光弾を撃ち出す。夜を明るく照らす幾粒もの星たちは、ぐんと加速し、中心で激しく激突——

「はい、そこまでよ」

——しなかった。

何もないはずの空間にがま口のような穴が開き、そこへ弾幕が呑み込まれてしまったのだ。

「これは……スキマ妖怪か」

軍神の呟きに、「ご名答」と妖しい声が返ってきた。

空いていたスキマが閉じると、隣にもう一つスキマが生まれ、そ

これから白帽少女の上半身がぬつと現れた。

「八雲紫……一体何の用？　ここにお前の居場所はないと言ったはずだけれど」

祟り神から発されるプレッシャーに（今度こそは紛れもない「敵意」だ）、しかしスキマ妖怪は物ともせず、

「何、異変解決へ向かうとする勇敢な巫女を、過保護な神から解放しようとしているだけですわ」

「ふん、ヒトン家の教育方針に口出ししないでほしいね。冗談も大概にしないと、そのよく回る舌、呪い落とすよ」

「あら怖い怖い。……だけど、別に冗談ってわけでもないのよねえ。そう、人手が足りなくて困ってるのです。それでちよつと、ね」

「博麗の巫女だけじゃなく、他の者も動いているんだらう？　それでも足りないのか？」

軍神が口を挟んだ。スキマ妖怪は頷く。

「ええ。皆、今回の異変の異質さには気づいています。だから動きと言っても、保守的な行動を取る者がほとんど。いわば、攻める者がいないのですよ。駒が足りなければ、いくら孫子の兵法に従っても戦に勝てない」

「だから、『駒』として早苗を利用すると？　それを私たちが許すと思うか？」

「まあまあ、人の話は最後まで聞いて、それから判断しなさいな」

何だか剣呑な雰囲気になってきた——文は身の危険を感じ、密かにこの場を離れようと思った。それに、先程から彼女の存在は、空気に同化したと言っても過言ではないほどに薄くなっている。この騒ぎが異変へ向かう動機となり得なかった事は悔やまれるが、面倒事に巻き込まれるよりはマシだ。

正面を向いたままそろそろと麓へ向かうとする文の背中に、何かが当たった。振り向くと、新たに開いたスキマから細い手が伸びていた。

「待ちなさい。貴方にも用があるから」

ひ、という恐怖の声音を必死に抑える。いや、怖かったわけではないが、目前にいるはずの者の腕に背中を触れられれば誰だって驚くだろう。スキマ妖怪の能力を理解していても、その行動ばかりは先読みできない。

引き戻された文と三柱の神は、それぞれの思惑を持ってスキマ妖怪に視線を向ける。天狗も神までとは言わずとも、強い力を持つ方だ。この四対一という状況では、ちよつと腕つぶしに自信を持つ程度の妖怪などにすぐに逃げ出してしまうだろう（そして逃げることもできずに絶望するだろう）。だが、幻想郷創始者の一角である境界の賢者、八雲紫は、流石と言えば良いのか、ただただ不敵に笑うだけだった。

「で、突然現れておいて何の用か、という話でしたね。そう、私は、貴方たちに頼みたいことがあって来たのです。というの——」

Stage・2-1 <射命丸文：1>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/128489/

鈴仙・優曇華院・イナバは、妖怪の山の麓を脱兎の如く駆けていた。

実際は逃げているわけではなく、むしろ標的を追い掛けていると言った方が適確だ。その標的の正体は、彼女が手にしている一枚の紙のどこかに書かれている。

そろそろ目標近くに到達したらしく、鈴仙は徐に足を止めた。

「はあ、はあ……何か、幻想郷を一周したんじゃないかってくらい走ったわね。全く、師匠も材料がどこにあるくらい知ってるんだから、もう少し人手をくれればいいのに」

出かける前に着替えた服には、既に汗が染み込んでいた。彼女は今外界の学童たちのような制服姿で、厚い地のブレザーを羽織っている。季節を考えればやや寒いくらいの服装だが、走り回る際には邪魔にしかない。着て来るんじゃないかと後悔しつつも、結局ボタンを外すくらいしか対処法は思いつかなかった。

鈴仙は今一度、永琳から受け取った紙を読む。達筆で、様々な固有名詞は箇条書きにされている。薬を作るための材料のリストだ。

「でも、作る薬が強壮薬なんてねえ……何に使うのかしら。一応、傷薬用の材料も採っていることにはなっているけれど」

藤原妹紅から程なくして患者が運ばれてくるだろうと告げられた時は、何となく大乱闘でも起きて流血騒ぎになるのかと想像していたが、どうやらその推量は間違っていたらしい。

しかし、永琳はともかく、てゐも異変で起こるだろう現象を予測できていたことには、僅かながら驚いた。鈴仙も普段とは違う波長を感じ取ってはいたが、それが具体的にどう繋がるのかは分からない。

それに今はもう、時折感じる強い波長による痛みに耐えきれず、岩塊周辺から発せられている波をシャットアウトしてしまっている。初めは落ち着いたら様子を見に行こうなどと考えていたが、事件から離れた場所でただ永琳の命に従っていようと決めたのだ。

「……あー、それでも何か気になっちゃうわね、あの大きな岩」

「いやいや、と鈴仙はぶんぶん頭を振る。永琳から「大急ぎで」と頼まれたのだ。どうせいくら早く戻っても「遅い」と言われるのだから、激怒されない程度には材料の採集を急がねばなるまい。

リストに書かれた分量より少し多めに目的の材料を採っていると、上空に何者かの気配を感じた。見れば、最近幻想郷へ越してきた守矢神社の緑巫女が、人里方面に向かって飛んでいた。

巫女——東風谷早苗の方も鈴仙に気づいて、

「あら、竹林の診療所の兎さんではないですか」

「ええ、ちよつと薬の材料を探しに。異変ですからね」

どうしてこんな所に、と訊かれることは分かっていたので、鈴仙は先に答えておいた。

流れは掴んだので、逆に訊き返す。

「そちらは異変解決ですか？」

「えー……まあ、そんなところでしょうか」

何とも煮え切らない返答に、鈴仙は首を傾げた。よく考えてみれば、北側で起こっている異変を解決するために、東にある人里へ向かうのは不自然だ。何か他の狙いがあるに違いなかった。

早苗は鈴仙の疑念に気づいたのか、てへへと苦笑いして言った。

「いやあ、本当は直接あちらへ行こうと思っていたんですが、神奈子様と諏訪子様に遮られてしましまして……どうしても行くというのなら、山を下りた所で誰か信用できる者を探して連れていけと」

「どうやら保護者の静止を振り切ったの異変解決らしい。（現人神でもあるとはいえ）巫女が神様に従わないというのもおかしい話だ。しかし現実、博麗霊夢のような例も存在するため、巫女というのは総じて常識に囚われない者たちなのかもしれない。」

はあ、と鈴仙は適当な相槌を打つ。それは溜息に近いものだった。「で、その『信用できる者』って見つかったんですか？ ……まあ、どうやら見つかったていないみたいですけど。その様子じゃあ」

「そうなんですよねえ。だから、山を下りながら河童でも捕まえてこようかと思っただんですが。天狗には頼めませんでしたからねえ…ああいや、一人、千里眼を持っているとかで、一見働いていなそうな天狗を見つけたのですが、気が散ると言っただけで断られてしまいました」

「で、結局働いていない河童を捕まえることすら失敗したと」

「失敗したんじゃないです！ そもそも初めからいなかったんです！」

それも失敗に含まれるのでは、と鈴仙は思ったが何も言わなかった。

「河童だけでなく、天狗も駆り出されているのですよ。何でも、力の弱い者たちをウチの神社や地底に避難させるのだとか」

「……は？ 地底に？ 地上の妖怪たちを？」

自分の神社が避難場所となっているのに何をしているんだと思わなくもなかったが、「地底」というのはそれよりも衝撃的な単語だった。

地底と地上は基本的に断絶されている。両者が共存するなど、本来あつてはならないこと——そう決められているらしい。何と云っても、地底から噴き上げた間欠泉とともに地霊たちが地上に現れた異変では、あの八雲紫が（直接ではないが）動いたほどのものだ。

今では、その異変がきっかけとなりある程度の交流も生まれているようだが、それは有力者の一部に限られた話で、実質は以前とほとんど変わらない。故に、やはり地上地下の者達が合流する——させるというのは、普通ならば考えられない話なのである。

「とまあ、このような流れで、結局旅の道連れとなってくれる方が全然いなくてですねえ……でも、貴方が現れてくれて助かりました」
「成程、偶然ここで出会ったから、私を連れていくつもりなのね」

「ええ、もうこれ以上お供探しを続けるのも嫌ですしね。ここで出会ったのも何かの縁、ということですよ。それに、兎さんのお供なんて、何とも可愛らしいじゃないですか。……貴方はちょっと大きすぎますが」

「どういう意味よ!」

とりあえず何か失礼なことを言われたことは分かった。だが早苗はそれに答えず、

「ふむ。どうしても嫌だと言うのなら、弾幕勝負をしても従えるしかないですね」

「例え貴方が勝ってもそれは駄目です。私は押し寄せてくる患者さんのために薬の材料を集めなければなりませんから。——そうだ。むしろ、私が勝ったら、材料集め手伝ってくれませんか。材料が足りなくなる度に一人で調達しに行くの、結構辛いですよね」

それならば、勝負に費やした時間を取り戻すことができる。事実、こうして会話している間にも時間は無駄に過ぎているのだ。

だが、早苗はその提案を良しとしなかった。

「それこそ駄目ですよ。私は現人神として、この異変をきっちりさっぱり解決しなければなりませんから」

「ならば、交渉は決裂ですね。これ以上私の邪魔をしないでください。でないと——」

「でないと?」

鈴仙はブレザーの胸ポケットから、数枚の紙を一気に抜き取る。

いつの間にか、彼女の瞳は深い真紅に染められていた。

「貴方をしばらく動けないようにさせてもらいます。……ああ、大丈夫ですよ、その後は永遠亭で治療しますから。だから——さあ、安心して無秩序に揺蕩^{たゆた}う波の中へ迷い呑み込まれるがいい!」

S t a g e ・ 2 - 2 < 鈴仙・優曇華院・イナバ：1 >（後書き）

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/128846/>

なかなか決着のつかない勝負に、鈴仙は焦っていた。

早く収集作業に戻らなければ、永琳にこぴつどく叱られてしまう。いや、もう遅いのかも知れない。だが、既に多くの患者が薬の仕上がりを待っているだろう。彼らのためにも、目の前の敵に時間を掛けてはられないのだ。しかし、

「——くっつ！ 風で弾幕の軌道を変えるなんて厄介ね！」

相手は人間だが、その身に神の力を宿す風祝だ。かせはふり神としては生まれたてほやほやの新人であるが、その能力は馬鹿にできるものではない。

「そちらこそ！ 幻覚使うなんて卑怯ですよ！ 正々堂々戦いなさい！」

あんたが言えた口ですか、と鈴仙は呆れたように小さく呟く。

今彼女は、波長を操る能力によって、相手に本来とは異なる映像を見せている。本気を出せば精神を狂わせることも簡単だが、スぺルカードを使った戦いでは「相手が必ず避けられる」ような弾幕しか放つことができない。必然、能力にも自主的に制限を掛けることになる。

「だけどこれじゃあ、いつまで経っても終わらなそうね……」

短期決着を望むならば、残りのスぺルカードを全て使って畳み掛けるしかない。もし破られたとしても、こちらの負けということでは勝負はつく。

だが、これまで鈴仙はそうした作戦を採っていない。いくら他にやるべきことがあるとはいえ、勝負は勝負。純粹に「負けたくない」という想いがあるのだ。敗北の道を視野に入れたくはなかった。とはいえ——

「——これ以上あんに構つてゐる暇は無いの！ 散符『インビジブルフルムーン真実の月』」

銃弾型の光弾が球状に展開された。それが広がりゆくのと同時に、弾幕が一瞬消えたように見えるよう可視光の波長を操る。

見失われた弾丸は、ほんの僅かなインターバルを置いて、敵の目の前に現れる。

「ようやく動き出しましたね！ 待つてました——それでは、こちらからも行きますよ！ 開海『モーゼの奇跡』！」

だが、弾丸が早苗の身を貫くことはなかった。逆に、大きな力によつて鈴仙の弾幕がかち割られたのだ。拓けた隙間から、大量の弾幕が押し寄せてくる。

目には目を、歯には歯を、スペルカードにはスペルカードを。早苗は真つ向からの力勝負を狙つていたらしい。どうやら、時間が無いと考へているのは相手も同じようだった。

ならば、乗るしかない——好都合だと思い、鈴仙は更に撃ち返す。
「波符『マインドシェイカー赤眼催眠』！」

今度は半球状の弾幕が連続して撃ち出された。相手の弾と相殺しつつ、殺しきれなかった弾は避ける。

このスペルカードは、彼女の持つ中ではかなり弱い部類の物だが、今はこれでちょうど良かった。次を放つために、できるだけ力を温存しておく必要があつたのだ。

こちらの弾幕は相手まで届かない。よつて、早苗が返しのスペルカードを使うことはない。いわばそれは油断だ。そこを全力で突く。間髪入れず、鈴仙はもう一枚のスペルカードを宣言した。

「これで終わらせる——『ルナティックレッドアイズ幻朧月睨』！」

光弾が歪な直線を描くのと同時に、鈴仙の周囲から球状に散開した弾丸が数層に分かれて拡散した。左右の移動を制限しつつ押し潰す——大きく後退すれば避けやすくなるが、それは逃げたも同然だ。その場合は、こちらの勝ちとして採集に戻らせてもらふ。そうでなければ——

「——っ、そんな……！？」

驚きの声を上げたのは、早苗ではなく鈴仙の方だった。いつの間にか、懐に入り込まれている——離れた位置にいますかと思ひ込んでいたため、彼女の狙いは大きくずれてしまった。しかし、軌道修正は間に合わない。

「弾幕戦において、貴方の力は、主に時間差を生み出すために使われる……ですが、それが有効に作用するのは、ある程度の距離が保たれている場合のみの話です」

だから、多少の危険を承知した上で接近した。こうまで近づかれたのは、手抜きの実行ではどうにもならない。鈴仙はふつと笑う。
「意外と度胸あるじゃないですか、少し見直しました」

「神たる者、常に威風堂々としていなければならぬのです。では——」

ちよつと痛いですが覚悟してくださいね、と早苗は優しく言つて。

「——奇跡『弘安の神風』」

ちよつとどころではない激しい弾幕を、零距离で放ってきた。

「あー、無駄に体力を喰つたわ……急がないと師匠に怒られちゃう」
しばらく地に伏せていた鈴仙は、体力が十分に回復したと感ずると、すくつと立ち上がつて仕事を再開した。永遠亭を出てから、かなりの時間が経過している。勝負にも負けたことで、この口スを取り戻すのは不可能となつていた。

今から全力で頼まれた品を回収して誠意を見せ、山の神社の巫女から妨害を受けたと報告すれば、いくらか免責されるだろうか。そんなことを考えている内に、薬草が一つ二つと摘み取られていく。

「でも——何だか少し、様子がおかしかったわね、あの巫女」

鈴仙は早苗と闘いながら、そんなことを感じ取つていた。個人の存在を一つの波長として感知できる彼女だからこそ、その違和感に

気づけたのだろう。

いくら自尊心の強い早苗とはいえ、従う神の言いつけを破ってまで「異変解決」に乗り出すような不遜は犯さないはずだ。異変の中心地から発される奇妙な波長の影響を受けてしまっているのかもしれない。

「それこそ私が看なきゃいけないんだろうけど……ま、大丈夫ですよ」

「ここは幻想郷なんだし——そう言う彼女の心中にあるのは、確かに油断だった。」

S t a g e ・ 2 - 3 < 鈴仙・優曇華院・イナバ：2 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/129301/>

Stage・2・4 <小野塚小町：2>

「しっかし、神様つてのも随分世俗的になつたもんだねえ……まさか、子守を頼まれるとは思わなかったよ」

小野塚小町は今、大鎌を肩に掛けながら人里周りをふわふわと浮かんでいた。

行く当てがないわけではない、上司である閻魔の手伝いとして幻想郷内の見回りをするにしていたのだが、どこから手をつけたものが迷っているだけである。繰り返すが、決して行く当てもなく彷徨っているわけではない。

物珍しさに惹かれて出て来るんじゃないかなあ、と彼女は小さな後悔の念を抱く。

恐ろしささえ感じられた閻魔の笑顔を見て、「手伝います!」と言ったところまではまだ良かった。その後、人里と妖怪の山で忙しくない動きがあつたのを見かけたのだが、ここで山の方へ向かう選択をしたのが全ての間違いだった。

普段は好戦的な妖怪たち（特に今は夜なのだ）なのだが、今回は妙に大人しかった。幽霊たちが消えていることに関係しているのだろうか、それが彼らの沈黙にどう繋がっているのかは分からない。

小町の姿を無視するように、先導する天狗や河童に従って地底や山の頂上へ向かっていった。彼女の目にはそれが「逃げている」ように映ったのだが、その印象は決して間違っていない。

もののついでに、天界とやらまで行ってみるか——最早観光のよくな気分になっていた小町だが、それが実現することはなかった。途中、山の神社の上を飛んでいる時に、そこへ住まう神から声を掛けられたのだ。

「おお、怠慢で有名な三途の死神じゃないか。こんなところまで何の用？」

「や、この異変で幽霊がいなくなっているから、見回りをしているのさ」

「へえ。こんな山奥にまで、ご苦労さんなことだねえ」

小町は呼びかけてきた蛙の神から少し離れた、湖のほとりへ降り立つ。

互いの態度にやや棘があるのは、小町は「怠慢」と言われ、この神は死神のことを「不浄」として疎んでいるためだ。とはいえ、この対立は確執と呼べるほどのものではない。これだけ多くの種族が共存している幻想郷だ、その中で多少反りの合わぬ者がいても不思議はないだろう。

「でも、ここに幽霊はいないよ。何を見回っているの？」

「ああ、幽霊たちは今頃冥界に避難してるだろうから問題無いよ。

あたいは、異変の影響を受け弱って動けない者がいないか探しているのさ」

「成程、死神のお迎えが来るってことだね。泣きつ面に蜂、みたいな」

「あんたが言うなら、弱り目に祟り目だろう……しかしまあ、あたいはただの船頭だから、そんなお命頂戴な真似はしないって」

くすりと蛙の土着神——守矢諏訪子は笑う。魂狩りをしない死神という構図が可笑しかったのだろうか。対する小町には、諏訪子の被る帽子に付いた二つの目まで笑っているように見えて、気分を害された。

「そういうあんたらは、ここで何をやってるんだ？」

何もやっていない、というわけではないと小町にも分かっていた。邪を寄せつけない強い力が、神社の周辺を覆っている。これだけの力を展開できるのは、諏訪子たちくらいのものだろう。

「そつちと似たようなものかな。力の弱い妖怪たちをここで匿っているのさ」

「ああ、だから神社の中から妖気を感じるのか」

「そうそう、折角信仰してくれている者たちを見捨てるわけにはいかないからね。受けた信仰を加護として信者に還元する、これが神様の仕事だから」

山の神社の面々は、幻想郷の住人としては新入りの部類になるが、山の妖怪たちからは早々に信仰を受けているらしい。これまで神がないも同然の博麗神社しかなかったところに、現人神の巫女を含む三柱の神が現れたのだ。元々人間より信仰深い妖怪たちがそちらに流れたのも、無理の無いことと言える。

「——ところであんた、暇なんでしょう？」

諏訪子の嘲笑うような言葉に、小町の表情は更に不機嫌そうなものとなる。だが、すぐに無表情まで戻した。何か先があると感じたからだ。

「言つたろう、見回りにしているんだから暇じゃないよ……でもそうだねえ、何か頼み事でもあるんだつたら、そのついでに引き受けてやつてもいいよ。はは、『神頼み』というのもなかなか面白そうだしねえ」

そうだね、と諏訪子は機嫌良さそうに笑った。

「分かっているじゃあないか——というのも、ウチの早苗が異変解決だとか言つて、神社を飛び出しちゃったんだよねえ。そこで頼みなんだけど、もし早苗を見つけたら、軽く懲らしめてしよつ引いてきてくれないかねえ？」

「ふうん。巫女に逃げられた神様ねえ」

「仕事を無くした死神に言われたくはないね」

「無くなつたのはあの馬鹿デカイ岩のおかげだけだねえ……まあいいさ。うん、それくらい用の件なら引き受けよう。あたかも暇じゃあないんだが、都合良く時間が空いてるからね——感謝しなよ」

「礼を言うのは成果を確認してからだ。神は信仰しない人間にご利

益をあげたりしないんだよ。死神だってそうじゃないの？」

小町は頷く。死神にも様々な種類がいて、彼女はその中でも三途の川の渡し船の船頭だが、それでも答えは変わらない。

死した者が三途の川を渡るには、船頭に渡し賃を払わなければならない。生前に徳を重ねた者ほど、死んだ時に銭を多く持っている。銭を多く持つ者ほど、早く川を渡って閻魔の裁判を受けられる。

ただ、小町は渡し賃の多寡を——つまり善人が悪人かを問わず、幽霊たちを船に乗せてしまいがちだ。渡し賃の一部は小町の報酬となり、そのことから閻魔に「もっと欲を持って」と説教されたこともある。

「そういうことなら、今は黙って承ろう。生命力が強く活発な者には、自然と周囲の存在物が集まってくる……ここの巫女を探すというのも、あたいの見回りに役立つかもしれないしね。それに、失敗したところで、あたいにはあまり損がない」

「そう言ってくれると助かるよ。今私と神奈子は、神社周りに結界張ってるからここを動けないんだよねえ」

「ま、貸しは貸しだよ」

「ちゃんと早苗を連れ戻してきてくれたら、借りとしてあげるよ」
ふん、と鼻で笑って、三途の死神は一度鎌を大きく振り回した。
「任せときな——あたしや鬼じゃないが、鬼ごっこは得意なんだ」

小町は神社を去り、山を下りていく。見回りと観光を兼ねているので彼女の能力は使われないが、それでも、背後から発された祟り神の声がその耳に届くことはなかった。

「——早苗、今回はこれ以上の助力はできないよ。気を付けてね……」

早苗は人里の方へ向かった——その情報を聞き出すと、小町は先に回り込んで進路塞ぐ作戦に出た。早苗が神社を飛び出してからあ

る程度時間は経過してしまっているが、これくらいならば彼女にとって問題にはならない。

三途の川の幅は、幽霊たちから支払われた渡し賃によって変化する。その変化を司るのが小町なのだ。距離を操る彼女は、「鬼ごっこ」という遊びに関しては鬼以上の厄介さを誇る。

「——で、あえなく捕まってしまったというわけですか。私も運が無いですねえ。逃げぬ一兎すら仲間に来れなかったかと思えば、今度は死神の御用にされかかっているとは……ああそうだ、この際ですから鞍替えして、一緒に異変解決しに行きませんか？　同じ神社に住まう神ですから、信仰の対象は変わりませんよ？」

東風谷早苗は朗らかな顔でそう言ったが、小町が首を縦に振ることはなかった。彼女には「見回り」という表面上の仕事を請け負っていたし、神社へ連れ戻すことに失敗したのならともかく、家出のほうじょ幫助をしたとなれば祟り神から何を呪われるか分かったものではない。

それに、彼女はやはり退屈を感じていたのだ。ちょっとした好奇心から上司の手伝いを買って出たが、既に主要な場所では有力者が動いている。近くに「弱って動けなくなっている者」などいなかった。特定の人妖しか近づかない場所などもあるが、そんな所へ積極的に行きたいと思うほど彼女も冒険者ではなかった。つまり、

「まあそう言いなさんな。あたいは頼まれ事をこなさなきゃならなし、あんたはさつさと異変の解決に行きたい。両者の目的に齟齬そごがあるんだから、やるべきことは談合じゃなくただ一つ——弾幕ごっこしかないだろう。これ、互いの気晴らしにもなる良案だと思うんだけどねえ」

「話し合いで双方の妥協点を見出す、という方法はないのですか？　互いの歩み寄る道のりを調整するのは、貴方の十八番だと思うのですが」

「別方向の道だったら、間を取るよりどちらか一方に統一した方が手っ取り早い。問題解決までの距離は、あたいの力で短くしてあげ

るよ」

それに——と言って、小町は大鎌を早苗に向けて構えた。

「あんただって、もう幻想郷の空気に十分染まっているんだろう？
ならば分かっているはずだ——話し合いだなんて奇跡的な日和主義、ここじゃああんまり通用しないよ！」

対する早苗は、被棒を小町の方へ突き付ける。

「……そうですね。ここは兎も戦う幻想郷、ならば人であり神である私が戦わぬ道理は無い。ならば、ここは全力をもって突破させてもらいましょう。貴方はもうこれ以上、私との距離を縮めることはできない！」

Stage・2-4 <小野塚小町：2>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/129786/

Stage・2・5 <小野塚小町：3>

直後、星型をした弾が一直線に小町を襲った。

鎌を振って鎌鼬かまいたちを連想させるような風の渦を生み出し対抗するが、相殺とはならなかった。あの星弾は異様に堅いのだった、と思い出し手遅れとなる前に回避する。グレイス

弾を掠るようにやらずれて、返しに放つのは弾幕代わりの銭投げだ（この銭は、三途の川を渡る霊たちから渡し賃として受け取ったものである）。牽制程度にはなるだろうと思っていたのだが、上に飛びあがった早苗は先程の星弾五つを広く撃ち出し、これを一方的に消し去った。

「全くもう、厄介な星だね！」

と言いつつ、弾幕戦が楽しくなってきた笑ってしまう小町だった。「ふふ、神の力ですから。——しかし、風を使っても疎まれてしまふ私は、どうやって闘えばいいんでしょう。後はお守りとおみくじくらいしか、弾幕に使える物ないんですけど」

「いや、言つとくけど普通それ、投げて使う物じゃないから……」

あまりご利益の無さそうなお守りとおみくじだった。

「まあでも、自ら攻撃手段を減らしてくれるのはありがたいねえ。

余裕の表れかい？　しかしあたいにゃ油断としか映らないんだが」

「外の世界では、こうした場面での油断を『死亡フラグ』と言うのですが……残念ながら私は、そんなフラグを立てるような甘さは持ち合わせてませんよ。例え立っても、そんな旗、神の風によってなぎ倒してくれます。それに——油断してるのは、貴方の方じゃないんですか？」

「へえ、言っねえ」

「言いますよ、そして言いましたよ——『ここは全力をもって突破

する』と！」

「っ——！？」

早苗が懷から一枚の紙を取り出したのと同時に、強い力が彼女の身を包むのを小町は感じた。それは純粋な暴力に近く、周囲の空気はその力に任せて暴れ出した。

早苗は生み出した暴風に無数の弾幕を舞わせる。

「——大奇跡『八坂の神風』」

小町は、早苗の言う通り一本取られてしまったことを自覚する。弾幕を潰されると分かれれば、対策は簡単だ。遠距離攻撃をさせないよう接近戦に持ち込めば良い。そして実際、彼女は敵に近づこうとした。

しかし、事はそう簡単ではない。もし、相手がその方針転換を読んだ上で、初めの星の弾幕を放っていたとするなら。近づいたところを狙い撃ち、という結果は目に見える。そして実際、そうなってしまった。

「くっ、これは流石に避けられない……死神『ヒガンルトウール』」

！
先程とは比べ物にならない量の小銭が辺りにぶちまけられた。多少重みはあるものの、しかしこれほどの強さの風には耐えられない。相殺しきれなかった弾がいくつか、小町の身体に触れた。

「ぐう……暇潰しはいいけれど、痛いのは勘弁だね」

たくさん溜め込んでおいて良かった、と思いながら吹き飛ばされないように耐える。荒れ狂う風に身を任せてしまえば、そのまま八つ裂きにされてしまいそうだった。

やがて、気流の暴走が収まる。久々に相手の顔を見た気がしたが、再開の挨拶を投げかけられるほど小町に余裕はなかった。遊びの範疇ではあれど、相手は本気で向かってきている。折角生まれたこのチャンスを利用しないわけにはいかない。一気に畳み込むべきだ。

「どうやらあなたの言う通り、あたいは油断してたみたいだね……」
「けど、もうあなたに奇跡は起こらない！ 死価『プライス・オブ・

ライフ』！」

銭の作る幾重もの曲線が、敵を囲うように現れた。「どうあつても避けられない弾幕」は禁止されているため多少の隙は作つてあるが、回避の可能性を極限まで下げるべく、その檻の外から弾幕を放つ。

だが、見切られてしまっているのか、早苗が被弾する様子はない。このまま同じ攻撃をしていれば、今度はこちらがやられる。そう感じて、小町は一度手を止め、別のスペルカードを取り出した。

「スペルカード無しで避けてくるとは、面白いじゃないか……ならば、これならどうだい？——死歌『八重霧の渡し』」

短く紅い光の剣が、ハリセンボンの針の如く小町の全身から突き出された。それを回転させながら、浮遊霊の弾幕を放つ（職権乱用）と同時に、相手に突っ込む。やはり距離を取った戦闘では分が悪いと判断した彼女は、再び接近戦に持ち込もうと試みているのだ。

先に撃った弾幕が効いたのか、早苗は構えたまま動かずにいた。いや、弾幕を返してはいるが、堅い星弾も光剣に当たれば切り裂かれてしまう。対抗手段が見つからない故の、苦し紛れの抵抗だろう。先刻は動きを予測されていたが、やはり接近戦は苦手らしい——小町は死神の大鎌を高く振りかざし、このまま勝負をつけることにした。

「あたいは死神だからね。命乞いなんて聞きやしないよ？——だからただ黙つて、肅々と閻魔様の裁判を待つがいい！」

鎌を振り下ろす——その瞬間、小町は見た。

早苗の口元が、笑みに歪んでいるのを。

「……やっぱ、攻撃する時には収めるんですね、そのレーザー」
早苗はただ冷静に、襲いくる大鎌の刃をかわした。装束の裾が裂ける。しかし構わず、取り出した一枚の紙を小町の眼前に突き付け

「生は奇跡であり、なればこそ、死もまた一種の奇跡である……しかし、貴方を打ち倒すのに、神の奇跡など刃の切っ先ほどとも必要無

い
」

——大いなる神の風が、赤い死神を容赦無く吹き飛ばした。

Stage・2・5 <小野塚小町：3> (後書き)

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/130669/

「神社を出てから、もう二人も相手しちゃった。あんまり、敵陣へ乗り込む前に体力を消耗させなくなかったんだけど……ま、仕方ないわね」

悪徳者に罰を与えるのも、神の仕事なのです——言いながら、早苗はふと後方を見遣る。

山、竹林、人里、森、湖。

幻想郷の小さく壮大で神秘的な景色が早苗を見上げ、彼女はそれを俯瞰していた。

今彼女は、小野塚小町の妨害を振り切り、再び北西方面——巨大岩塊へと進路を向けている。「仲間を連れていけ」と言われてはいるのだが、その発言者本人は山の上の神社で待機中なのだから、別に一人で向かっても良いではないかという考えに至っていた。命令違反ではあるが、一人の力で異変を解決したと聞けば、必ずやあの二柱も「よくぞここまで成長した」と喜んでくれることだろう。

山の中腹の道場に住む自称仙人にでも協力を仰ごうかと思った時もあったが、どう想像しても説教を受けそうだったので諦めた。ご高説に耳を傾けている時間は無いのである。

多少の消耗をしても兎と死神との勝負を終わらせようとしたのも、いち早く異変解決に向かうためだ。彼女らが仲間となってくれなかったのは、早苗にとって少々誤算だったが。

「……とはいえ、まだ異変の源までは遠い」

岩塊自体の大きさもあって、それほど遠くないような印象を持っていたのだが、実際に進んでみるとそれが間違いであることはよく分かった。

前進すれど前進すれど、巨大岩塊が近づいている感じはしない。

何かの術が掛けられているのかもしれない。だとすれば、勝負の結果を突きつけ、距離を操る死神を強引にでも連れてきた方が良かったか。

「いや、ここは誰の助力も借りられないと思って進むべきね」

今回の異変が特に異質なものであることは、八雲紫の登場である程度理解できた。これは幻想郷全体に小さくない影響を及ぼす異変であり、故にそれぞれの役割を果たそうとすれば、自然と攻め手が少なくなる。早苗はその少ない攻め手の一人として紫の後押しを受けたが（諏訪子と神奈子は反対しているものの）、やはり更なる人手は期待できないだろう。

しかし、大分出遅れてしまったようだ——早苗の心には、拭えない焦りが生まれていた。紫の話では、既にもう一つの神社の巫女、博麗霊夢は岩塊へ向かっているらしい。自分が彼女に劣っていると思っていないが、霊夢の力量は確かなものである。ともすれば、早苗が月兔や死神と交戦してまごついていた間に、異変のほとんどを解決してしまっている可能性も考えられる。そうなれば自分は役立たず——素直に二柱の忠告を聞き、神社に戻っていた方が良かったのかもしれない。

ぶんぶん、と早苗は頭を振る。霊夢だけでは事態に收拾をつけられないと判断したからこそ、紫は早苗にも岩塊へ向かうよう言ったのだ。後々、自分の力は必ず必要になる——そう、いつだって神は遅れてやってくるものだ。

「これで非想天則みたいなロボットがあれば、格好いいのになあ」
辺りを見渡してみるが、もちろんそのような都合の良い物はなかった。しかし代わりに、「あれ？」という疑問符が零れる。前方を飛びゆく、彼女が期待するよりもずっと小さな、人型をした物体を見たのだ。

「あれは——あの人は、紅魔館の？」

もしかすると、旅の道連れとなってくれる者かもしれない——早苗はその人物に一刻も早く追いつくべく、スピードを数段階上げた。

Stage・2・6 <東風谷早苗：1>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/130669/

S t a g e ・ 3 - 1 <伊吹萃香：1>（前書き）

誰しもが偽っている事を自覚した。そう、己の内に潜んだ恐怖を――

|

博麗神社の一室で、床に就いていた一人の小柄な少女が身を起こした。

彼女は鬼だ。かつて妖怪の山で最も高い地位に立つ者として君臨し、いつしか地底に移り住み、つい最近まではその存在自体が伝説となりかけていた者たち。それが、幻想郷の中でも最強と呼ばれる種族、“鬼”である。

少女――伊吹萃香^{いぶきすいか}は、その中でも特に力のある一人だった。

頭には立派な二本の角が生えている。右、左腕にはそれぞれ赤錐と黄球、腰元まで伸びる髪の前には青い箱状の飾りが、鎖に繋がれている。これは彼女自身と、彼女の「疎密を操る」という能力を象徴する物だ。

起き上がった少女は、側に置かれた大きな瓢箪^{ひょうたん}を掴むと、中の液体を一口ぐびりと飲んだ。

周囲に強いアルコールの香りが漂う。

「中身が少なくなってきたねえ……ちよっと、補給でもするかね」
伊吹瓢の内側には、水を酒に変える性質を持つ「酒虫」という極小の鬼のエキスが塗りとくられている。常に水を瓢箪に入れておけば、四六時中酒が飲めるというわけだ。人間が飲めば即倒しかねない度数を誇るらしいが、鬼という種族は元来酒に強く、彼女はいつも適度に酔っぱらっている。

縁側に出ると、不快な空気が彼女に纏わりついた。遠くで三日月を隠している、蛹のような形をした岩塊がその原因だ。

居候を（渋々）許可してくれた紅白の巫女は、萃香の友人でもある八雲紫に叩き起こされて、異変の原因を調査しに向かっている。萃香は眠りながらその気配を感じ、しかし同行することはなかった。

もしもそうする必要があるなら、紫がそう言ってくるはずだからだ。何も頼みに来なかったということは、「手出しは不要だから好きにしろ」ということか、あるいは別の者から頼みが来るということだ。来るとすれば、そろそろではないか——そう思いながら瓢箪に水を汲んでいると、ちょうど良いタイミングで、その人物は現れた。「相変わらず神出鬼没だねえ……久し振り、古明地んとこの、こいしちゃん」

「あちゃちゃ。驚かそうと思ったのに、気づかれちゃったか」

萃香の真後ろに立っていたのは、無意識を操る地底の少女、古明地こいしだった。

神社に来る前、地底で暮らしていた時には何度か面識はあったので、彼女のことは幾分か知っている。地上に興味を持っており、時折地底から出てくることもだ（実際に目撃したこともある）。

だが、このような形で博麗神社を訪れることになるとは、萃香も思っていなかった。ただ、地底で起きているだろう事態を想像してみると、可能性としては十分あり得る人選だった。

一応、挨拶がてらに質問する。

「で、地底の屋敷からわざわざ何の用だい？ 霊夢なら出てるけど」

「あの人じゃないよー。用があるのは、貴方の方」

言いながら、ふらつくように辺りを彷徨い歩くこいし。じっとしているのが苦手なのか、無意識に身体が動いているらしい。萃香は彼女の様子を、愛玩動物を見るような目で眺める。

「私に用があるってことは、勇儀ゆうぎからの頼みかい？」

「そうそうー。『暇ひまだったら旧都に帰ってこい。呑むぞ』ってさ」「絶対呑んでる場合じゃないよねえ……まあそれでも、あいつが嘘なんて吐くわけもないし、当初より状況は落ち着いてきたってことかね」

鬼は嘘を吐かない……いや、必ずしもそうというわけではないよ。うだが、少なくとも嘘を嫌っている。同族の友人である星熊ほしくま勇儀が「呑む」と言っているのだから、何があっても酒宴は開かれるだろ

う。宴会好きの萃香にとって、あまり地底に帰らないということもあってか、友人のその言葉は魅力的な落とし文句だった。

「ま、そうでなくとも初めから誘われりゃ行くつもりだったけどね」

「うん、そうしてくれると皆も喜ぶよ」

「だが……そんな酷いことになってるのかい？ 鬼の手も借りたいほどに」

「うーん、致命的ってほどじゃないんだけどねー。ただ、あの岩の塊、凄く大きいじゃない？ だから、結構広範囲に罅^{ひび}が入っちゃって……」

こいしが言っているのは、地底の天井——つまり地面のことだ。

巨大岩塊が現れた時、その莫大な質量に耐えきれず、大量の亀裂が生じているのである。

萃香もそれを予測していたが、岩塊の出現位置が離れていたことと、静かに現れたことに安堵した。ともすれば地面が割断され、地底が圧潰していたかもしれないのだ。その程度で地底の妖怪たちが命を落とすとは思えないが、一時的にでも住む場所を失うのは色々^{ます}と拙い。地上から地底へ移り、更にまた地上へ戻って時代の変遷を見守ってきた者として、地の上下の隔たりが失われることの重大さはよく解っていた。

「その修復を手伝ってくれてことね。終わったらぱーっと呑む、と」

「そうそう」

「ところで、他の奴らはどうしてる？」

「んーとね、お姉ちゃんたちは灼熱地獄が暴走しないようにしてて、今は家から離れられないわ。後は、鬼とか土蜘蛛たちが天井を直してるのと——そうだ、旧都には山の妖怪たちが避難してきてて、嫉妬の橋姫さんが何とか取り纏めてるよ」

「ふうん……って、え？ 地上の妖怪が地底に？」

「うん、スキマの妖怪から『危ないからお願い』って言われたらしいよ、お姉ちゃん。よっぽどの緊急事態みたいね」

萃香の両目がぱちくりと瞬きを繰り返す。啞然としているのだ。

しかしすぐに落ち着きを取り戻す。異変が起こってもしばらくは様子見していることの多い紫が、いち早く動き出していた。今回起こっているのは、それだけの大異変なのだ。なまじ強すぎる力を持っているだけに、この「不快な空気」がどれだけ危険なのか、量り間違えていた。

異変に気づいた時、身体を霧にして幻想郷各地の様子を見ておけば良かったか。そう思うが、もちろん過ぎた時間は戻ってこない。吸血鬼の館のメイドでも、永遠の月の姫でも、それだけは不可能なのだ。

萃香の心を見透かしたのか、こいしは地上の状況を伝えた。

「旧都で伝言をお願いされた後、地上に来てからいろんな場所見て回ったけど、何処も結構な慌ただしさだったわ。誰も相手してくれないし、あの岩の塊まで辿り着くのは時間が掛かりそうだったからもう帰ることにしたの。どうせ、貴方を地底に連れてかなきゃいけなかったし」

「ふん。どうせとは、鬼に向かってよく言うね」

でも素直なことは好きだよ、と萃香は笑う。こいしや霊夢などは自分に素直すぎて逆に掴み切れない部分もあるが、性格上嘘を吐くことはない。鬼として、その点には大いに好感を持てる。

宴会を開くためにその「萃める」能力を使って異変を起こした後、萃香が博麗神社に屯するようになったのは、偏に霊夢の性格が「素直」だったからだ。人間は嘘を吐く生き物だが、彼女の場合は特別だった。とはいえ、掴み所がないだけに、戦う時あまり楽しめないのは難点だが。

萃香はぱちんと手を鳴らした。

「話は分かったよ。それじゃあ早速、旧都に帰るとするかね。こんな所で世間話を続けるなんて、私もこいしちゃんもそんな柄じゃないだろう」

「そうだね。もっと地上で殺戮めいたことが起こってれば、もうち

よつとこつちで遊んでても良かったんだけど。ってことで、出発
発〜

鳥居を抜け長階段を降りようとするこいしを追い掛けつつ、萃香
はちらりと神社を振り返った。何もなければいいんだけどねえ――
そう一言呟くが、返ってくるのは不安を具現化したような沈黙だけ
だった。

萃香はまた一口、瓢箪の酒を飲んだ。

Stage.3-1 <伊吹萃香:1> (後書き)

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/133506/

「——おう、萃香。やっと来たか。待ちくたびれたよ」

「——やあ、勇儀。こっちも何だか大変そうだねえ」

地底で萃香の来訪を迎えたのは、土木作業をしている大勢の鬼や妖怪たちだった。

地上の妖怪も交ざっている。対立が起きているのかと思いきや、殊の外上手く付き合えているようだ。事態が事態だけあって、協力的にならざるを得ないのかもしれない。あるいは、上位の存在である鬼の前で勝手はできないということか。

「ところで、さとの妹はどうしたのよ？ あんたを連れてきてくれた礼を言わなきゃならないんだが……」

「ああ、こいしちゃんなら先に抜けて地霊殿に帰ったよ。『お姉ちゃんに地上の様子を報告しないと』だってさ」

「ありや、もう通り抜けてったのかい。こう色々な気配がある時に、無意識で通り過ぎられると流石に分らないねえ」

まあそこが面白いんだが、と一本角の鬼は快活に笑った。

星熊勇儀。かつて妖怪の山で、萃香と共に「四天王」の一角として怖れ畏れられていた鬼だ。現実世界の体操服のような上着に、やや透ける地の長スカートを穿く（その中に何が見えるのか、それは各自の持つロマンによるだろう）。

だが、彼女が畏れられている理由は、ただ鬼という種族であることにも、その珍妙な衣装にもない。いや、ある意味で両者とも「理由」ではあるのだが、もう一つ、明らかに彼女の強さを「異常」せしめているものがある——彼女は戦闘において、本気を出すことがほとんどないのだ。

いつも片手に大きな盃さかずきを持ち、そこに入った酒を一滴も零すこと

なく戦う。だが、それだけのハンデを自ら課しても、大抵の相手は蹂躪じゅうりゅうされてしまうのだから、彼女の戦闘における技量と実力は推して知るべしである。

「時に萃香。大抵の話は避難してきた地上の妖怪から聞いたんだが、あんたから見てこの異変はどうなんだ？」

友人からの問い掛けに、萃香はうーつと唸って難しい顔を返す。

「私じゃ勇儀の知ってる以上の話にはできないと思うよ。何だか知らないけどどこか調子悪くて、こいしちゃんに呼ばれるまではずっと神社にいたからねえ」

「調子が悪いのは、もうすぐ新月だからじゃあないのかい？ 碎く月が無けりゃ、力もやる気も半減するだろう」

「そうかなあ」

「それより、神社にいたって……ああ、あの巫女の所だったか。しかし萃香、随分と気に入っているみたいだねえ」

「うん、気に入っているよ——神社という場所も、霊夢という人間も」

「いいなあ。私ももっとあの人間と話をしたかったもんだ」

「霊夢からは、また異変でもなきや行かないだろうねえ、地底には「物騒な奴らが多いしねえ……特に奥の館とかにや」

私もあそこの主人には会うのは避けたいね、と萃香は頷いた。続けて、

「まあ、それもあるけど、結構面倒臭がりじゃん？ 霊夢は」

「……え？ ああうん、そうなのかな。そうだったかな」

勇儀の元に進捗状況の報告が来て、生返事になってしまった。

伝令の桶入り釣瓶落としが、どこからか垂れる糸に釣られすうーつと去っていくのを見送って、萃香は尋ねる。

「まだ作業は終わってないようだけど、手伝わなくていいのかい？」

「ああ、そうだったそうだった。そのために呼んだんだったか」

「おいおい、呑むんじゃないの？」

「そりゃ呑むが、その前に一仕事頼もうと思ってさ。何と言っても、

働いた後の酒は格別だからね」

あんたはいつも呑んでくれてるじゃないか！ という批判が、作業中の土蜘蛛妖怪から浴びせられた。二人の鬼が「違う」と笑って返すと、周囲からも笑いが起こった。仄暗い地底に似合わない、良い雰囲気だ。

「……まあ、手伝われるのは分かったからいいけどね。ところで勇儀、あんたは臆動かさなくてもいいの？」

「それがなんか、いつの間にか現場監督に任命されちゃってねえ。全員の動きを把握しとかなきゃならないのよ。ま、土蜘蛛たちのリーダーとしてあのヤマメが作業の中心になってくれているから、私がいなくとも補修工事の進度にあまり影響はない」

「確かに、細かい作業は土蜘蛛の方が得意だしね。勇儀が遊び半分で手伝ってたら、罅割れが直るところか酷くなっちゃうよ」

「馬鹿言え。全て吹き飛ばせば、酷いも何もないだろう」

「直してあげなよ」

ツツコミを受けて笑う勇儀の顔から、しかし僅かに明るみが失われた。

「もちろん冗談だから気にするな。……しかし、これだけ大きな損傷だ。自然にとっては、無理に維持させておくよりもこのまま崩落させた方がいいのかもね。私たちの都合で、この空間は住处として保たれている。それは、一種の傲りおごりだよ。妖精たちのように、自然と同一化などできないからね。ただ、そういった意味じゃあ、我々も人間どもと変わらないのかもしれない」

「……………勇儀」

「ああ、ただの独り言だから気にしないでいいよ。でも、時たまそんな事を考えてしまうのさ。特に、地下地上の境目が薄くなってきた最近だね」

少しだけ沈黙が続く。

やがて、手伝ってくるよと言って、萃香は友人に背を向けた。

「おう。力使いすぎて、ここを砂場にするんじゃないよ」

「しないしない、しないって」

萃香はにこやかな顔で返したが、やはり表情に翳りは隠せなかった。

「あ……そうだ。一つ、伝えとかなきゃならないことがあったな」
振り向いた萃香に、勇儀はぼそりと言った。

何かと訊く二本角に、神妙な面持ちと声で一本角は答えた。

「ちよつと前にここへ来て、『鬼の力を、後々借りる事になるかもしれない』って、そう言ってたんだよ——あの、地上の賢者がね」

Stage・3・2 <伊吹萃香：2>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/134391/

永江衣玖は物陰からひっそりと、比那名居天子が天界から飛び出していく様子を目撃していた。

彼女がまず持った感想は「やっぱりか」だ。

「伝聞程度で満足するようなお方じゃありませんよね……総領娘様は」

煩惱を捨て去った者たち——それが天人であるはずなのだが、「くずれ」である天子にその理論は通用しない。それらしい知識や礼節を携えてはいるものの、彼女はやはりまだ「少女」なのだ。それを分かつてはいたのに、止めることはできなかった。

力づくでは天子に敵わない、ということもある。いや、弾幕勝負で天子自身と戦うだけならば、まだ何とかなるかもしれない。天界の桃の効用で身体を鍛えられてはいるが、能力の応用で雷撃を操れる衣玖にはまだ勝算があった。

だが、彼女は相手の弱みとなる気質を常に纏った緋想の剣を持っているのだ。真剣な衝突でそれ振るわれれば、まず勝ち目はないだろう。ここ幻想郷で「真剣な衝突」など滅多に起こるものではないが、今は特に異質な異変の最中だ、この奇妙な力に染められてしまえばどのような行動に出るか分かったものではない。

とはいえ、目付役を任せられている以上、天子を天界から出してしまったのは彼女の責任だ。何としても連れ戻しに行かねばならない。比那名居家の主人に伝言をし、早速追いかけることにした。

「地を制し天を統べれば、人を導く存在となれる——総領娘様はその前に、ご自身とその周囲に目をお向けになるべきなのです」

天界を去った龍宮の使いは、天子の気配（というよりも緋想の剣の気配だが）を追いかけて、颯爽と空を切る。

空気を読むことに長ける衣玖にとっては、風の流れを利用してより速く飛行することなど朝飯前だ。この調子ならば、岩塊へ辿り着くまでに天子に追いつけるだろう。本来天子が持っているのは「地の力。空中でのかけっこにおいては衣玖の方に分があった。」

「かなり大きな岩だけど……地震が起こることはなさそうね」

ちらりと、目下にある博麗神社を一瞥して呟く。

以前の異変で、あの神社の下には、地震からその地を守る“かなめいし要石”が埋められている。神社を別荘にしようと目論んだ天子の仕業だ（境界を操る妖怪によって、こつてりと絞られたが）。

ただ、要石は確かに地の怒りを鎮めることができるものの、溜まったエネルギーを発散するわけではない。要石が抜けてしまうと、蓄積された歪みの力が一挙に放出され、大災害が起こってしまう。巨大岩塊の出現でどれだけの歪みが発生したのかまでは分からないが、万が一要石が取り除かれてしまった時に起こり得る事態を想像すると、言いようのない不安が彼女を包んだ。

少し北へ進むと、それまで感じていた押しつけがましい静けさは別に、魔力的な力を含む独特の空気が混ざり始めたことに気づく。発生地はあの巨大岩塊らしいが、衣玖は何となく、この魔法が岩塊そのものから発されたものではないと直感した。それは、岩塊の周囲、あるいは内部に魔法を使役する者が存在していることを意味する。

「こ、これは……？」

魔法の効果範囲内に入れば、それが何の力を持っているかはすぐに判った。

距離を操っているのだ。

本来ならばそう遠くないはずの道程を、十倍二十倍——あるいはそれ以上に伸ばしている。

ただ、それ自体はさほど驚くべきことではない。彼女が思わず首を傾げたのは、どうにも不可解な食い違いが目の前で起こっているからだ。

距離を長くされたというのなら、そこには「近づいてほしくない」という術者の意志があるはずなのだ。それはしかし、ずっと前から幻想郷全体を包んでいる「沈鬱な空気」——他の感情を奥へ押し込め「とにかくそこへ行きたい」と強制的に感じさせる魅惑とは、赴きを全く異にする意志だった。

「どうやら外の世界から移動してきたもののようだけれど……内部抗争でも起こっているのかしら。それとも、幻想郷の者が既に乗り込み、何らかの対策をした結果？ いやしかし、そうだとしたら、このような状況にはなり得ないはず」

分らない、と衣玖は溜息を漏らす。

もしこの魔法を幻想郷の者が使ったのなら、異変に粗方のケリがついていることになる。術が発動されたのは、岩塊がある位置とほぼ同じ場所だからだ。そうなれば、狂おしいまでにこの地を愛する少女、八雲紫が現状をこのまま放っておくはずもない。まだ異変は解決しきっていない——その現実、術者が外界の（そして恐らく巨大岩塊と共にやって来た）者である、という結論を大きく支持していた。

何者かは幻想郷の住人たちを引き寄せようとし、また別の何者かは逆に遠ざけようとしている。前者の方がより強い力を持っているが、それは魔力とはまた別物の、不可思議な力だ。このように、身の回りで起こっている事象は解析できるが、そのそれぞれが何の役割を持っているのかまでは、さすがの彼女にも想像がつかなかった。

「あ——」

思考を中断せざるを得ない事態が起こった。眼前に、追跡する標的を発見したのだ。

やはり飛行速度はこちらの方が早い。じわじわと距離を詰め、十分近づいたと判断すると、衣玖は大きな声で“彼女”を呼んだ。

「——総領娘様！」

げ、と言って天界から逃亡した指名手配犯の少女はゆっくりと振り向く。

その顔には、心底参ったような表情がありありと浮かんでいた。

「あ、あらあら、追いつくのが早いわね……もしかして、天界から降りるところ見てた？」

「ええ。この目でしかと見届けさせていただきました」

「何か恥ずかしいわね……それで、貴方は私を止めに來たのかしら？」

「そうですね。ということで、素直に従ってくださいとありがたいのですが」

天人と龍宮の使いが対峙する中空。

静かな相對に、敵意が無いことと戦意がいくらかあることを、互いに感じ取る。

しばらく動かずにいた両者だったが、痺れを切らしたのか、天子はどこからともなく数枚の紙を取り出した——スペルカードだ。

「残念ながら、貴方も知ってる通り、私って素直じゃないのよねえ！」

気符——と天子が言いかけたのを、「ストップ」と衣玖は制した。
「もう、何なのよ！ 戦うんじゃないの？」

「お止めください。私は、総領娘様と戦うつもりはありません。あ
あでも、このまま本気を出さないのであれば、話は別ですが……」

「何よ、貴方相手に本気なんて出すわけじゃないじゃない」

「では、弾幕勝負で私が勝ったら、素直に天界へ戻ってください」
数瞬戸惑いを見せたが、天子はすぐに否定を返した。

「駄目よ。駄目駄目。その取引は何かあっても受けつけないわ。も
う抜け出してきちゃったのに、何もしないで帰れると思う？」

「帰れるでしょう。飛べるんですから」

「そういう意味じゃないわよ！……ともかく、衣玖が何と言おう
と、私はあの岩の塊まで辿り着くわ。ちよつとだけ、本気を出して

でもね」

そう言つて緋想の剣を構える天子を見て、しかし彼女にとってはつまらないことに、衣玖はただ冷静に白旗を上げるだけだった。

「ふむ。それじゃあ私では敵わないですね。天界へ連れ戻す任務の方は、諦めることにしましょう」

「……何か続きがありそうな台詞ね。じゃあどうするって言つたのよ」「ついて行きます」

「……は？」

即答に、沈黙という大きな空気の塊が、二人の間を占拠した。天子は衣玖の真意が掴めず、いやいやと首を振つてもう一度同じことを訪ねた。

当然ながら、衣玖から返つてきた答えも、先程と全く同じものだった。

「だから、総領娘様について行くのですよ——名目上、『監視』のために、ね」

S t a g e . 3 - 3 < 永江衣玖 : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 3 5 0 2 0 /

幻想郷の奥地に広がっている、太陽の畑。夏には向日葵が一面に咲き誇り、「太陽」の名を冠するに相応しい、壮麗な景色を見せてくれる。

畑を管理しているのは、風見幽香かざみゆうかという古参の妖怪だ。花々を操作する能力を持ち、「四季のフワーマスター」なる二つ名まである。非常に強い力を持つ妖怪で、人間はおろかそこそ腕の立つ妖怪ですらも、刃向かうことはできない。歯が立たない。刃が断たない。

たまに人里で買い物をする姿を目撃されるが、彼女の容姿を知っていれば、勝ち目のない無用な諍いいさかを回避できる。

緑髪のボブで、チェックの入った紅いベストとスカートに身を包み、日傘を携帯していることが多い。話しかけること、話しかけられることがあっても、敵意や下心なく接すれば特に問題は無い。人を喰らう妖怪は多いが、一方的に喰らうていては幻想郷のバランスが崩れるのだ（逆に、人が妖怪を退治しすぎるのも危険である）。古くより幻想郷に住む彼女も、その点についてはよく理解している。狭間の世界に存在する「夢幻館」を拠点としているが、外出することも多く、最近ではここ太陽の畑を主な活動場所としている。ただし、あくまで「主な」であり、普段は季節の廻りに合わせ花々の咲く場所へと放浪しているらしい。

だが、今は春先だというのに、彼女の姿は太陽の畑の中にあつた。「ああ……なんて、なんて静かなの」

まだその季節ではないので、当然向日葵は咲いていない。彼女の能力では、無理矢理に花を咲かせることも可能だが（花のため、普通は使わない）、土の下に眠る生命の鼓動を感じ取ることもできる。

もう少しで心地良い暖かさが広がるこの時期には、今にも芽吹かんとする向日葵の種たちの活気が、畑全体から伝わってくるのだ。

しかし、幽香が感じたのは静寂だった。何も感じなかった。生命はそこに、一つたりとも無かった。

確かに草花は生きている。生命活動に必要な機能はきちんと働いている。だが――生きているが、生きていない。死んでいないが、死んでいる。まるで、魂の抜けた人形のような。そう、「今にも芽吹かんとする活気」が、今の畑からは全くとって良いほど感じ取れないのだ。

「……………」

原因は解っていた。突然現れた巨大岩塊から滲み出ている、正反對の意味で不穏な空気のせいだ。

この空気の含む妖しげな力が、草花の魂を吸い取っている。生かさず殺さず――だが、今年の夏も向日葵は咲くだろう。咲き誇るだろう。しかしそこには、何も無い。彼女の望む景色は、そこには無い。

「さて……どうしようかしら」

幽香が考えているのは、この異変に対してどう行動すべきかということだった。

これまでも幻想郷に異変は多くあった。しかしそのほとんどにおいて、彼女は動いていない。他を圧倒し得る強い力を持ちながら、手遊びに幻想郷の住人を（本人曰く）「虐めて」回るくらいで、他の遊びに興じることもあまりなく、ただ花々を管理する役割を淡々とこなし続ける。

その理由は簡単だ。そうした異変が、花に関わるものではなかったから。冥界の者たちが起こした「幻想郷の春の到来を遅らせる」異変では花の成長に悪影響を及ぼしかねなかったが、手遅れになる前に博麗の巫女らの手に解決された。少し暴れたとすれば、六十年に一度くらいの間隔で発生する、幽霊の大量発生の時くらいだろうか。幻想郷中で様々な花が咲き誇り（何と、竹の花まで咲いた）、

ちょっとした騒ぎになった。

幽香はその能力から犯人ではないかと疑われたりもしたが、これは濡れ衣だった。しかし、別段鬱陶しいわけでもなかった。その小さな異変のおかげで、多少実力を持つ者たちと「遊ぶ」ことができたのだから。

「花たちを保護して……っていうのは無理ね。幻想郷は狭いけれど、私一人で守れるほど小さな箱庭でもない。騒がしくしている人里や山に行くのもいいけれど……私って、そんなキャラじゃないわよね」

ここまで異変が進んでしまっている以上、花に関して彼女ができることはもうない。奪われてしまった魂は、もう戻ってこない。それに関してはきっぱりと諦めがついている。

だが、それで事が済むわけでもない。彼女の気が収まることはない。静かな表情にあって、しかし彼女の中にあるのは確かな怒りだった。だから、

「いや、私がやるべきことはただ一つね。あの忌々しい岩の塊を――」

「――ぶっ壊すのは、もう少し待ってからにしてくれない？」

「……うん？」

背後からの声に、台詞を遮られた。

他人の気配はほんの少し前まで無かったが、唐突に大きな力が現れた。幽香は小さく首を傾げながら、その少女らしい態度に似合わない、持っていた傘の先端をその気配に向けて突きつけた。

気配の正体、それは、幻想郷を統べる大妖怪――八雲紫だった。

「あら、随分と手荒い歓迎ね」

「いきなり後ろから話しかけられれば、そりゃあ仕方無いわよ。太陽を追い掛ける向日葵だって、急に向きを変えられるわけではないのです」

敵意は無いと察して、幽香は傘を収めた。折角の機会なのでそのまま戦っても良かったが、それより優先すべき事項があるので渋々

諦めることにした。

「あら、でも、貴方の反応の速さは、植物とところか人間にも真似できるものではないでしょう。草木のように鷹揚と生きよ——確かにそれは素晴らしい理念ですが、違う生き物として創られた私たちに至底無理な話なのです」

「貴方はその草木以上に、遊惰な暮らしをしているようだけれど」

「お花屋さんには咲いてもいないお花しか見えていないのかしら？」

今の私は、どこからどう見ても職務の真っ最中よ」

「お客さんとして咲いてもいないお花を買いにすることが、貴方のお仕事なのかしら？　でも残念ながら、向日葵が咲くのはまだ先の話よ」

「まあ、私や貴方の力があれば、今すぐ咲かせることくらい簡単だけれどね」

「やれと言われてもやらないけどねえ……それで、何の用かしら？」

「向日葵さんを買いに来たのー」

「似合わないから子供っぽい口調はやめてくれる？」

「えー、けちんぼけちんぼー」

「……貴方の言いたいことがよく分かったわ。今すぐ畑の肥料にしてほしいのね？」

幽香が凄みを利かせると、紫は「いやいや」と慌てて手を振った。

「冗談よ、冗談。こんな時に、戦えばタダで済まないと分かっている相手と勝負するわけがないでしょう」

「だったらすぐに用件を言いなさい。確かに私はあの子たちのようになれないけれど、だからこそ、悠長に待つこともできないわよ？」

S t a g e . 3 - 4 < 風見幽香 : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ↑

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 3 5 8 3 5 /

「はあ……まあいいわ。ですが、向日葵を買いに来た、と言ったのは強ち嘘ではないのです」

「ふうん。じゃあ、貴方の言う向日葵は、私ということでもいいのかしら」

「ええ。もちろん、買収するわけではありません。貴方も、買収されるなんて嫌だろうし」

「まあ、そうね」

「だから、これは『相互利用』です。私はこの異変を解決したい。貴方はあの岩の塊を壊したい。そこに利害の一致がある。ならば、手を取り合わないという手は、それこそないと思いますわ」

幽香はしばらく考え込む。紫の提案を却下するつもりはないようだが、どうやら相手の真意を測りかねているらしい。大妖怪だけあって、その胡散臭さは並みのものではなく、一挙一動に何らかの意図があるのではないかと勘繰ってしまうのだ。

「ちよつと訊きたいんだけど、いいかしら？」

「ええ。お花以外のことなら、何でも訊いて構いませんよ、お花屋さん」
フラワーマスター

「もう少し待て、というのはどういう意味？」

「今貴方があの岩を破壊しようとしても無駄、どころか事態が余計に悪化してしまう」

「私が全力を出しても？」

「出せば出すほど」

「それは興味深いわね……幻想郷に突然咲いた岩の蕾が、そんなに頑丈だなんて」

「あの岩の塊自体は、そこまで硬くありません。貴方なら、全力を

出さずとも破壊することはできるでしょう。だけど――」

「だけど？」

「――問題は、あの中にある、“あるもの”なのです」

「“あるもの”？ 良ければ、それについて詳しく教えていただけないかしら」

「……蝶」

「え？」

「見慣れない蝶が、あちこちで舞っているでしょう？」

ええそうね、と幽香は頷く。この太陽の畑もそうだが、他の場所でもちらほらと蒼い蝶を見掛けていた。不思議なものだと少し気に掛けていたのだが、ここで紫からその話が出るとは思わなかった。

虫と植物は、大抵の場合において切っても切れない関係にある。時に共存することもあれば、時には成長を阻害し死に至らしめる。花に詳しい幽香は、故に虫に対する造詣も深いのだ。

ただ、それは幻想郷内に生息するものに限る。「見慣れない蝶」は、彼女の知らない種類のものだった。

「あれは、“あるもの”から生み出されているようなの。生ける者の魂を吸収し、鳥の骨や林檎の芯を残すように、あの蝶を生み出している」

「成程……それが、異変の正体というわけね？」

ならばますます、その“あるもの”とやらを破壊せねばならない。「まあまあ、そういきり立たないで最後まで話を聞いて頂戴。私は『魂を吸収』すると言ったけれど、実際に何を吸い取れるのかまではまだ判明していないのよ。もしかすると、運動熱量電磁気力、あらゆるエネルギーを吸収できるのかもしれない」

私たちの弾幕もね、と紫は付言する。

「なら、さつさと調べてきなさいよ。貴方ならすぐにできるでしょう」

「ええ、大体済ませておかなきゃならなかったことは終わらせたから、これから向かおうと思っているわ。それから、異変が幻想郷を

呑み込むのを遅らせるために、既に何人かを向かわせている。まあ、勝手に動いてくれてる子たちもいるのだけれど」

「私はその先遣隊には加われないのかしら」

「貴方のような強い妖怪を、様子見如きに使えるわけがないでしょう。切り札は最後まで手に持つておく。戦略の基本です」

「あら、お世辞が上手なのねえ。でも、美しい花を咲かせるためには、きちんと本心から褒めなければならぬのですよ？」

「お世辞じゃありませんわ。……とにかく、次に私から指示があるまで、異変には深入りしないように。呼び掛けたら、その後は好きにやっちゃっていいわ」

「そういうことならいいけれど……ちゃんと、呼んでくれるんでしょうね」

「本当は、呼ばなくともいい状況のまま片をつけたいところなんだけれど」

「幻想郷を最も愛するが故に、無法者の天人を美しく残酷に半殺しにした妖怪が口にするとは思えないくらい、弱気な台詞ね」

「半殺しなんて、こんな可憐な少女がそんなことするはずないでしょう。何かの間違いではなくて？」

「やはり肥料にしてあげる必要がありますよね」

「……貴方、もしかして子供嫌い？」

「少なくとも、無理して子供の振りをする妖怪は好きじゃないわ」

「まあともかく……確かに、少し弱気にはなっているかもしれないわ。吸血鬼が引っ越してきた時以上の、幻想郷の根幹を揺るがしかねない異変だもの。いや、既にその影響は始めている……早く何とかしないといけないけど、事が繊細な問題であるだけに、焦って排除しようとするわけにもいかない。黒幕の正体を掴むまでは、慎重に動くつもりです」

「ふうん、そうは見えないけれど。ま、私の出番があることを祈ってるわ」

「貴方、今の私の話聞いていなかったでしょう」

「花は時に、何人の囁きも聞き入れない豪胆さも持つものです」

「貴方の場合、『時に』じゃなくて『いつも』のような気がするわ……」

ところで、と紫は一呼吸を置いた。今までの会話も十分に意味を持つものだったが、これからの会話こそが真に彼女の目的なのだろうと、幽香は微かに眉を顰める。

だが、大妖怪から発されたその疑問は、あまりに呑気なものだった。

「——今宵の月。貴方はどこか、違和感を覚えませんか？」

「うん？ 別に、かくれんぼしていることを除けば、普通だと思うけれど」

素直に答えておいたが、期待していたものではなかったのか、紫はやや表情を翳らせた。

しかしすぐに元の妖しい微笑みを戻して、

「そう……ありがとう、参考になったわ」

「ふうん？ よく分からないけど、月占いでもしているのかしら」

「ええ、まあ、そんなところです」

「似合わないわね。代わりに、花占いでもやってあげましょうか？ 私がやると、これがまた、よく当たるですよ」

「ふふ、雅なお誘いね。でも、悪い結果しか出ないと思うから、遠慮させていただきますわ」

「それは残念です。大凶を引き当てさせるつもりだったのに」

「御神籤は神社で引くものよ。妖怪の言葉など当てにできません」

「ふふ、それは自分に対する皮肉かしら……まあ、少なくとも、巫女の言葉よりは当てになりそうだけだね」

「あら、あの子の勘はよく当たるのよ？ それこそ皮肉みたいだね、それじゃあ、そろそろ行ってくるわ——そう言っただけで紫は、作ったスキマの中に消えていった。幽香はそれを見送ると、何気なく三日月を見上げた。

だが、月は岩塊に隠れて見えなくなってしまうている。認識でき

ない物は、存在していないことと同じだ——土に眠る草花もまた、芽を出すまでは誰にもその命を知られることはない。

そしてまた、風見幽香の中に眠る「全力」を知る者も、この幻想郷にはほとんど存在しないのだった。

「折角蕾まで成長したのだから、綺麗な花を咲かせてあげないと——ね」

花々の鮮麗さは生を象徴し、儂さは死を象徴する。幽霊が花に宿ると言われるのはこのためだ。

幽香にとって幽霊がどうか言う話はあまり興味を持てるものではないが、彼女は全ての花には魂が宿っていると信じている。花々は生きているからこそ、高らかにその生命を謳い、可憐に散っていくのだ。その美しさを奪う者は、何人たりとも許されない。

彼女の浮かべた幽かな笑みは、周囲の空気を怯えるようにぶるりと震わせた。

S t a g g e . 3 - 5 < 風見幽香 : 2 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ↑

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 3 6 7 7 3 /

博麗の巫女が異変の中心地へ向かい、二人の魔法使いが森を抜け、天人と龍宮の使いが下界に降り、守矢の巫女が二柱の神と言い争いをしていた頃。

蒼い蝶の舞う丘を抜けた辺りを、魂魄妖夢は飛行していた。

彼女は仕える白玉楼の主人の命に従い、幻想郷中の幽霊たちを集めるべく顕界へと降りてきた。

とはいっても、その内容自体は妖夢が最近から任されるようになった仕事とあまり変わらない。八雲紫の手によって顕界と冥界の境界が薄くなり、顕界へ出てしまった幽霊たちを回収しているのだ。ただ今回は、その緊急度重要度が段違いなだけだ。

しかし、冥界にいた時には異変のことなど全く気づかなかったが、こちらへ来るとすぐに分かった。

いや、あれほど大きな影の塊に気づくなどという方が難しいだろう。また、それとは別に、彼女だからこそ感じ取れる変化があった。

幽霊特有の気質が、ほとんど失われていたのである。

幻想郷では幽霊など特に珍しくもない。大体は三途の川岸にいるが、偶に冥界から観光などで降りてくる者もある（転生するまでの間は暇なのだ）。特に力の強い者は実体に近い身体を手に入れ、妖怪と変わらず「弹幕ごっこ」に興じたりもしている。

代表例としては、プリズムリバー三姉妹が挙げられるだろう。騒霊と呼ばれる彼女たちは、それぞれが得意の楽器を持って、色々な場所でライブ活動を行っている。

それから、正確には人間の血が半分混じっているものの、妖夢自身も人里へはちよくちよく買い物に出掛けている。一時期冥界を留守にしがちになっていたことで閻魔に叱られ、それ以来、買い出し

や仕事以外での積極的な活動は控えるようにしているが。

「しかし、ここまで霊気が薄くなっているとは……」

人間と妖怪に区別可能な気配があるように、幽霊にもそれと判るような「臭い」がある。人里へ降りてきた時、薄くはあったが確かに、妖夢はそれを何時も感じていた。

だが、今はどうか。

夜の静寂はそれらしい雰囲気醸し出しているようだが、実質は全く違う。幽かで怪しいものではなく、そこにあるのは一点の曇りもない虚無だ。

静と動の機微がない。

生と死の概念がない。

止まったように流れゆく時間。その奇妙さは、妖夢をすら薄気味悪いと思わせる程だった（もつとも、彼女は元より怪談話などを苦手としているのだが）。

「このおかしな力の影響だろうけど……何だか、全身がムズムズするわ」

人里では既に、命蓮寺の者たちや歴史喰いの半獣を中心に、住人の避難作業が行われている。その側でそわそわとしていた騒霊三姉妹を発見したので（手伝うべきか迷っていたのだろう）、妖夢は声を掛け、人里周辺の幽霊を捕まえて冥界へ連れていくよう頼んだ。

三姉妹も幽霊であることに変わりはないのだが、大妖怪クラスとまではいかずとも、彼女たちは非常に強い力を持っている。「おかしな力」の影響を受けやすくはあるだろうが、それなりの耐性もあるはずだ。それに、いつまでも人里にいるよりは、他の幽霊たちと一緒に冥界へ逃げてくれた方が安心だった。

巨大岩塊から遠い場所は騒霊たちに任せた。故に妖夢は、できるだけ岩塊に近い範囲を搜索することにした。

「おかしな力」は、まるで虫たちを集める樹蜜のように、幽霊たちを惹き寄せている——霊気が薄くなっていると彼女が呟いたのはそのため、それはつまり、多くの幽霊たちが既に岩塊へ呑み込ま

れかけていることを意味する。花の異変が起こった時よりも遙かにずっと、憂慮すべき事態であつた。

とはいえ、岩塊に近づきすぎるわけにもいかなかった。妖夢のその存在の半分は霊体なのだ、騒霊ほどではないにせよ、「おかしな力」の影響を受けやすいことに変わりはない。呑み込まれないギリギリの距離を見計らいながら、危険と判断すれば、幾許かの幽霊を見捨てることになつてでも、すぐに引き上げる決断力が必要だつた。先にその「ギリギリ」の距離を確かめておき、撤退しながら幽霊を保護すべきだろう——妖夢はそう考えて、現在北へ向かい全速力で飛行している。距離を長くする魔法が掛けられているのか、なかなか前へ進んでいる気がしない。冷静さを欠いては駄目だと分かつてはいるが、事の性急さを考えると、やはり焦りを抑えることはできなかつた。

「——集中」

瞼を一瞬閉じると、妖夢の目つきが鋭く変わった。

迷いを断つ浄化の刀、白楼剣の持ち主として、心に不純を生じさせておくわけにはいかない。今はただ、無駄のない動きで与えられた任務を全うするべきなのだ。とはいえ、即座に気持ちを切り換えられる辺り、彼女の剣士故の集中力の高さには目を瞠るものがある。しかし、と妖夢は思考する。

先程通り過ぎた丘もそうだったが、生まれてこの方一度も見たとのない蒼い蝶が、そこかしらを舞っているの見た。それも一種の異変であるが、彼女が気に掛けているのは「どうして急に慣れぬ蝶が発生したのか」ということだけではない。蒼い蝶が、幽霊と同じような臭いを持っているように感じられたのだ。

似た例を妖夢は知っている。主人の西行寺幽々子が操る反魂蝶だ。

はんこんちょう

古来より、蝶は魂の象徴として扱われてきた。自身が亡霊であり、幽霊の管理者である幽々子が操るに相応しいものだろう。反魂蝶は本物の蝶ではないが、その形を創る基になつているのは魂であり、儚さ故の美しさを持っている。

対して、妖夢の見た蒼い蝶は、実際に生きているものだった。だが、その周りにはどことなく、幽かな気配が漂っていた。

花には霊が宿り、蝶には魂が宿る。両者は同じようできて、しかし異なるものだ。

霊は転生して別の器を得るが、魂は一つ一つの器が持つ「個性」のようなものだと思えば良い。靈魂を揃えて持っている間はそれに強い力を持って、それを使って存在を維持し続けることが可能となる。やがて魂は浄化され、純粋な霊体となった者は次の生を迎えるのである。

「問題は、どうして“魂”を持つ蝶がこんなに沢山発生し——つつ！？」

不意に何者かの気配を感じ、妖夢はいつの間にか俯けていた顔をはっと上げた。

遠くに見えていたはずの岩塊は、いつの間にか眼前に聳え立つていた。

そして、己の不覚を悟る。

しまった、深く考え込んで接近に気づいていなかった——だが、もう遅い。

何処か近くにある気配はこちらに気づいており、徐々に近づいてきている。

岩塊から発される奇妙な力場に惹かれていたのは、他ならぬ妖夢自身だった。呑み込まれまいと思っていたはずの彼女は、既に魅了され誘い込まれていたのだ。

出発前、幽々子に掛けられた言葉を思い出す。「自分の力を過信して、不用意に元凶へ近付くな」——その忠告は虚しく散り果て、現実となってしまった。

気を付けていた、はずなのに。

どうして自分はこれほどにまで未熟なのだろう。

「——おや、何か大きな気配が近づいていると思ったら」
地上。

広がる林から姿を現したのは、おかしな格好をした少女だった。下駄を履き、モンペに甚平を羽織った異国の者だ。しかし、最も特徴的なのは、何と言っても、短い茶髪の左右から生えている牡鹿の角だろう。二本角の鬼を連想するが、それよりも更に太く長い。少女の身長の上半分以上はあるのではないかと感じるほどだ。

妖夢はその容姿に圧倒され、言葉を紡ぐことを忘れていた。

牡鹿の少女はかったるそうにコキコキと首を鳴らし（角が重いのだろうか）、ふわりと浮かび上がって妖夢と同じ高さにまで昇ってきた。そして言う。

「あんた、幽霊さんかい？——それなら、もしもあんたが生まれ変わりたいと望むのなら、ウチについて来るといい。その望み、叶えてあげよう」

「……は？ 望み？ 生まれ変わりたい？ 何のことですか？」

初めて邂逅した者から掛けられた何の脈絡もないその言葉に、妖夢は困惑するしか術がなかった。

牡鹿の少女はその様子見て、同様に困ったような表情を浮かべる。「あーあー、あんたもしかして、何にも気づかずここまで辿り着いちまった輩か……だったら悪いことは言わん。魂が惜しけりゃ、さっさと家に帰りな」

「貴方が何を言っているのか、よく分からないのですが……しかし、折角のご忠告を無視するようで申し訳ありませんけれど、私はまだここに用があるのです。さっさと家に帰ることなどできません」

「……うん？ ってことはアレかい？ やっぱり蝶になりたいのか？」

蝶になりたい？——首を傾げる妖夢だったが、今探りを入れるべきはそこではないと妖夢は思い直す。

奇妙な力場の影響は、気づかぬ内に彼女を蝕んでいる。ここで時間を掛けていてはならないのだ。

牡鹿の少女の疑問は無視して、畳み掛けるように続ける。

「私はこのおかしな力に惹き寄せられた霊たちを集めているのです。

見たところ、貴方はこの岩の塊の関係者……邪魔をすると言つのなら、容赦なく斬らせていただきます」

妖夢は背中の中刀、楼観剣に手を添えた。ちゃき、と小さく鋭い音が空を裂く。

未熟者ならば未熟者なりの意地を見せねばなるまい。この状況を切り抜け、任務を果たし、無事に冥界へと帰るのだ。

牡鹿の少女はその決意を前にして、僅かに動揺したように見えたが、すぐにつまらなそうな顔になった。

「幽霊を連れて帰る、ねえ。それはウチらとしても嬉しいことなんだけど……最も、中に入ってしまった奴らはもう手遅れだと思うよ。既にその魂は、蝶へと変わってしまったっているからね」

「え、そうなんですか？」

「それでもあんたは、この中へ入ろうと言つのかい？　だが――」

「いや、だったら話は別です。救えなかった霊が出てしまったのは残念ですが……それなら探索も、この周囲で終わらせて撤退することになりますね。まあ、貴方とも戦わずに済むのは、無駄な体力を浪費しないので良いことなんです」

「――だが、残念だけどそれはウチが許さないよ。あんたには、“アレ”に抗えるだけの力があるとは思えないからね！」

「……って、話聞いてます！？」

シ力を決められた。

牡鹿の少女はぐつと腰を低くする。露わになった闘争心が視えない小さな刃となって、妖夢の全身にピリピリとした刺激を与えた。

この敵とならば戦える――ふと笑みが零れてきそうな高揚感を抑え、甚く冷静に妖夢は言う。

「ああもう、結局妨害されてしまうのね……ならば、力づくで押し通るのみ。貴方のことは存じ上げませんが、今は自己紹介などしている暇はありませんね。さあ、名も知らぬ妖怪よ――夜の静寂に紫魂の華と散るがいい！」

未知との闘争は突然に。

一振りの刀と二本の雄角が、甲高い烈音を立てて激突した。

S t a g e . 3 - 6 < 魂魄妖夢 : 2 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 3 8 0 4 3 /

「――斬れない!？」

初めに声を上げたのは妖夢だった。楼観剣と白楼剣の二撃を受け切った――どころか、弾き返しまでしたその角の強度に驚いたのだ。相手の妖力の源はあの角にあると見ていたが、やはりと言うか何と言うか、そう易々と剥ぎ取れるものではないらしい。

いや、刀に対して怖気もせず突っ込んできた時点で気づくべきだった。刀如きで角を斬り断つことはできないと、それだけの自信を彼女は持っていたのだ。

牡鹿の少女は「あははははっ!」と、月まで届くような高笑いをする。

「なかなかいい太刀筋だ!　だけど、ウチには見えるよ、流れを制御できず無理矢理力を振るおうとするあんたが。そんなんじゃないやウチにその刃届かないね!」

笑いながら、息つく暇も与えず突進してきた。受け流すように剣を振るって、それを避ける。

と、牡鹿の少女は急停止をした。

いや、片足の先を宙に固定し、もう一方の足で残った勢いを乗せた回転蹴りを放ってきたのだ。

「――っ!?!　がはっ!」

防御が間に合わない。蹴撃はまともに妖夢の鳩尾みぞおちへとヒットした。今は空中戦で、地上のように踏ん張りは利かないはずなのだが、この威力。馬の脚力が凄まじいとは聞くが、似た動物である鹿も同じように、常人離れた力を持っているのだろう。

「っ――っはあ!　はあっ……はあっ……」

くるりと後ろに一回転し、何とか体勢を立て直す。

すぐに敵の姿を再補足しようとしたが、少女の姿はどこかへ消えてしまっていた。

「——ほらほら、まだまだ行くよ！」

「っ!？」

呼吸を整えている時間は無かった。かなりの距離を蹴り飛ばされたのだが、牡鹿の少女の愉しそうな声は妖夢のすぐ耳元で響いていた。

少女の顔が視界に入った時には既に、右足は大きく振り上げられていて——

「させない! —— “炯眼剣”!」

踵落としての威力が最大となる前に、白楼剣の柄を突き出しこれを止めた——いや、止め切ることはできなかったが、その揺らぎを利用して、観楼剣の強烈な一太刀を少女の脳天へと浴びせる。

「当身かい!? やるね! だけど、それも通らないよ!」

牡鹿の少女は少しだけ首を傾げるようにして、剣撃を角で弾いた。だが、今度は妖夢も狼狽^{うろた}えない。むしろ、僅かでも防御に意識を転じさせた時点で彼女の意図は叶っている。

バランスは取れないままだったが、一瞬の隙について、妖夢は敵から大きく距離を取った。

相手の挙動を分析せぬまま接近戦をするのは少々分が悪い。しばらくは弾幕を使って様子を見るべきだと判断した。

「どうしたどうした、もう諦めて逃げるのかい!？」

「そんなわけないでしょう! ——天星剣『涅槃寂静の如し』!」
ひらりと一枚の紙が舞う。瞬間、無数に生まれた鏃^{やじり}のような白い刃が、牡鹿の少女目がけて一斉に飛んでいった。同時に、その周囲へ小さな弾幕をばら撒かれる。

様子見とはいえ、甘い攻撃をするのも危険だ——妖夢はそう考え、スペルカードを使うことを決めた。

しかし少女は、小さな弾幕を避けながらすっと横に移動して、向かってくる白い刃から逃れた。

その動きはまるで、初めから妖夢の放ってくる弾幕を知っているかのようだった。

「そうかそうか……これが、あいつの言ってた『スペルカード』って奴だね？ 成程成程、魔法みたいな力で弾幕を作って攻撃するのか。あんまり信じていなかったが、どうやら話は本当だったみたいだね」

少女の言葉に、感覚と現実が噛み合っていないような、そんな気分妖夢はなつた。しかしすぐに、頭の隅で予測していた事態の一つが的中していたのだと思い至る。

距離を取ったまま両者は硬直する。息を整え、妖夢は尋ねた。

「スペルカードを知らなかった？ ……まさか貴方、外の世界から来たのですか？」

「そうだよ？ それこそ知らなかったのかい？ こんなデツカイ岩の塊なんて、急に湧いて出たりしないだろう」

「……いや、予想はしてたんですけどね。それに、幻想郷では、デツカイ岩の塊が急に湧いて出たりしても不思議ではありませんので、」
「だろうだろう、驚くのも仕方はない……え、そうなの？」

「ええ。この前なんかは、空飛ぶ船が地底から湧いて出てきましたし」

「……何だか面白そうな所だな、ここは。もう少し遊んでみたいもんだ」

「遊ぶ？ いや、貴方みたいな力ある不審人物を、野放しにしておくわけにもいきません。ここは大人しく退き下がっていただきます！」

「また来るのかい！？」

「——獄神剣『業風神閃斬』！」

大小様々な赤い光弾が、牡鹿の少女に降り注いだ。

妖夢が剣を振るうと、紫色の大玉が弧を描くように並び、少女に向けて発射された。

「あーあー……さすがに慣れてないと避けるのは難しいね。しかし

仕方ない、不慣れな流儀だが、郷には従うべきだ——というわけで、
こっちからも行かせてもらっよ！ 鹿符『鵜越の逆落とし』！」

S t a g e . 3 - 7 < 魂魄妖夢 : 3 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 3 8 8 2 7 /

少女が叫ぶと、数えきれないほどに生成された一対の棒状の光が、次々と空高く舞い上がった。

巨大岩塊の頂端と重なった所で一瞬止まったかと思うと、向きを変えて妖夢の方へ襲い掛かってきた。

「スペルカード!? ……くっ!」

互いの弾幕がぶつかり合い、相殺する。

小さな光の衝突はいくつも重なり、強い閃光が絶え間なく放出された。

しかしその美しさに見とれることなく、生き残った弾幕を両者は避ける。

「スペルカードを持っている? ……貴方、つい最近外の世界から来たばかりなのでは?」

結局、妖夢の弾幕が相手に届くことはなかった。

牡鹿の少女はやや緊張しているようだったが、それでも自信に満ちた笑みを浮かべている。

「そうだよ。ウチらは、つい数十分前に、あんたたちの言う『外の世界』からここへ入ってきた」

「ウチ……ら? 他にも仲間がいるということですか?」

「そりやそうさ。一人で呑気にこんな所まで来るような、そんな愚かな奴に見えるかい? このウチが」

「うーん、それはどうとも答え難い……」

「まあともかく、ウチが『スペルカード』ってのを知ったのも、その仲間のおかげさ。ここに来る前、練習も兼ねて少し遊んだりもしたしね」

「……『ここに来る前』?」

妖夢の思考に疑問が浮かぶ。

外の世界でスペルカードを使った「弾幕ごっこ」をしていたと、彼女は言った。スペルカードルールという幻想郷独自のシステムが外界に伝わっているのだとすれば、それは幻想郷の存在を揺るがす一大問題だ。

「そうそう、一足先にこの幻想郷に入った奴がいてね。そいつに教えてもらったのさ、ここの文化を少しね。そいつは今この中にいるけど」

背後の岩塊を指差す牡鹿の少女に、成程と妖夢は頷く。

初めから彼女たちは幻想郷に侵入するつもりだったのだ。ならば下見をして「弾幕ごっこ」について知っていても、何ら不思議はない。

「しかし……他にも仲間がいるのか。となれば尚更、何としてでもこの場を切り抜けないと」

「ふん、心意気は買うけど、果たしてそれをあんたに実現できるかな？」

「できないという問題ではなく、やるのです！ 行きますよ——

人神剣『俗諦常住』！」

「いいねいいね！ そういう性格、ウチは嫌いじゃないよ——悪夢『飼い主殺しの猟犬』！」

眩い光が二人の周囲を包んだ。傍目から見れば、そこで何が起きているのか分からないどころか、そこに人がいることすら認識できないだろう。それほどにまで大きな衝突だった。

妖夢はしかし、飛び交う弾幕の中を、切れ目を縫うように抜けていった。激しい攻撃ではあるが、ある程度は自分の弾幕で打ち消せるため、避けきれないほどのものではない。

それに、ここは多少無理をしても突破しなければならなかった。そうしなければ、チャンスは作れない。

光弾の嵐を抜けると、一気に視界が開けた。妖夢の眼前には、驚きの表情を浮かべる牡鹿の少女の姿があった。

妖夢は確信する。初めこそ驚かされはしたが、まだ彼女たちの弾幕戦における実力は、実践レベルに達していないのだと。

「知っているとはいえ、やはりまだ慣れ切っていないようですね……ならば教えてあげましょう、ただ避けるだけが弾幕戦じゃありません！」

「くっ……この弾幕の雨の中を突っ込んでくるのかい!？」

「わざわざこちらの習慣に合わせてもらって何ですが、敵対している以上容赦はできません。お覚悟を——人符『現世斬』!」

「いいや、まだまだウチはやられないよ! “春日灯籠”!」

神速の斬撃が牡鹿の少女を襲った。

少女の背後、剣を収めた妖夢は、柄を握っていた掌を見つめ、首を傾げる。

「確かに手応えはあったけれど、これは……。——っ、まさか!？」

振り向くと、少女は妖夢に笑いかけていた。やや辛そうではあったが、まだ闘う力を失ってはいない。

「だから、まだまだやられないと言ったはずだよ!」

「まるで石を斬りつけたような感覚……。何らかの術で全身を硬化させたようですね。分かっているれば斬れたのに」

「だろっね、そんななまくらじゃあ斬れな……。え、斬れるの?」

「斬れますよ。妖怪の鍛えたこの楼観剣に、斬れぬものなどほとんどありません。ですから、その防御も次は通用しませんよ!」

「……ふふ、ああそうかい。ふふふ、ふふっ、あははははははっ!」

「……急に高笑いをして。何がおかしいのですか?」

「いやいや、何だか楽しくなってきたと思っただけ、さっきのでウチを仕留めきれなかったのはあんたの失態だよ。鹿は神の使い、傷つけた者には相応の罰が与えられる……。故に! 覚悟するのはそっちだよ、死罪『鹿と眠る朝寝坊』!」

淡い光の点滅が無秩序に、しかし段々と妖夢へ近づいてくる。光自体に威力はなさそうだが、かといって容易に触れるのも危険だ。妖夢はじつと光を見つめ、その動きを注意深く観察する。

牡鹿の少女への牽制も兼ねて軽い弾幕を放ってみたが、大した変化は見受けられなかった。どころか、明滅のタイミングは徐々に早くなって、光の強さも増し、更には移動の速度と距離も大きくなっている。

光を目で追い切れなくなった頃、痺れを切らした妖夢が敵へ攻撃しようとした瞬間、彼女の懷に強い光が現れた。

「なっ——!?」

咄嗟に後退した妖夢は、爆発した光から大量の光弾が放たれるのを見た。

だが、回避行動を取ったことは良かったが、これは全ての弾を避けられるような距離ではない。この後の敵の動きは予測できていたが、防御に回らざるを得なかった。

妖夢は白楼剣を構え、

「“反射下界斬”！」

「……ほうほう、弾幕を跳ね返す事もできるのか。しかし、あんたは今、決定的な隙を作ったよ！」

やはり来たか。

背後に回っていた敵を振り返る。妖夢は焦りを抑え、相手の動きを見切ることには専念した。

闇雲に動いてもやられてしまう、己の反射神経を信じて、対処として適切な行動を取るしかない。

「さあ、あんたの意地を見せてくれ！ 大角『怪力の武士』！」

「くっ……！」

来たのは、弾幕でも体術でもなく、ただの力業だった。

首をすぼめて角を構え、そして突進からの突き上げた。動きはシンプルだが、それ故に受け切ることは難しい。回避するのが最善だが、それは現状不可能だ。

「ならば、こちらも力に対抗するまで！ 断迷剣『迷津慈航斬』！」

「これだけで終わると思ったら大間違いだよ！ 神鹿『建御雷招来』！」

「天神剣『三魂七魄』！」

「神無『処女神ディアナの天罰』！」

繰り広げられるスペルカード級の術の応酬。互いに被弾して体力は確実に削られているが、どちらも決定打には至っていない。

このままでは決着がつかないと、両者ともに解っていた。解っていたことを、互いに知っていた。

だから彼女たちは、息も合わせず同じ行動に出る。

全力を以て、相手を叩き潰しに掛かったのだ。

「これで決めます——『待宵反射衛星斬』！」

「これで終わりだ——『ケイローンズ・アプレンティス』！」

月の隠れた夜。

宵闇に火花を散らす二つの人影は、無意識の笑みを浮かべていた。

S t a g e . 3 - 8 < 魂魄妖夢 : 4 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/139086/>

「……はあ。負けたよ負けた、完敗だ。強いね、あんた」

巨大岩塊にめり込んでいた牡鹿の少女は、ふわりと浮かんで妖夢の前に出ると、覇気のない声でそう言った。

もう闘う意志はないらしい。妖夢は再び握っていた剣の柄から手を離す。

「貴方も十分強かったですよ。おかげで良い修行になりました」

「修行ねえ。あんたよりも強い奴が、ここにはたくさんいるのかい？」

「それはもう。私のような未熟者なんか、まだまだです」

「あーあー。ホント、悔しいくらいに楽しそうな所だね、ここは」

「では、異変が終わった後にでもまた遊びに来る、というのはどうでしょう？ 下心が無い貴方のような方なら、皆も受け入れてくれると思いますよ。私も、もちろん貴方を歓迎します」

では、と言い残してこの場を去ろうとした妖夢に、少女は声を掛けた。

「あんた——そういうえば、幽霊を集める、とか何とか言っていたね」

「ええ、そうですけど」

「もう一度言っておくけど、まだ外でウヨウヨしているのはともかくとして、中に入ってしまった奴らは手遅れだよ」

「知ってます」

「それでも中に入る？」

「入りません」

「そうか、だったらウチは止めな……え、入らないの？」

「そうですよ。さっき同じ質問をされた時、だったら私にこの岩の塊の中へ入る理由はない、と答えたはずですが」

「……聞いてなかった」

でしようねえ、と妖夢は呆れたように大きな溜息を吐いた。

「つてことはあんた、主犯格をぶった斬りに来たんじゃないのかい？」

「私は主人の命で、顕界を彷徨う幽霊たちを冥界へ連れ戻しに来ただけです。むしろ、早く戦いを終わらせて帰りたいくらいですから」

あれあれ、と牡鹿の少女は首を捻るだけでは足りず腰から身体を傾げた。どうやら妖夢が岩塊の中へ乗り込もうとしていると、ずつと勘違いしていたらしい。人の話を聞いていなかったのだから当然か。

ともすれば吸血鬼屋敷の昼寝門番よりも性質が悪いのではないかと、妖夢は再び嘆息した。

「——っ！？ げげ、まずい！ また誰かこっちに来てる！」

急に慌てだした少女の視線を追い掛けると、離れた場所に見覚えのある色が飛んでいるのを視認した。

紅白の巫女装束。博麗の巫女だ。

「そろそろ忙しくなってきたね……まあいい、ちょっと行ってくるか」

そうだ、と妖夢を見向きもしないまま、牡鹿の少女は言った。

「あんたはウチに勝った。誤解してて悪かったけど、中に入らないんだったらウチにあんたを止める理由はない。無理をしない範囲で、自由に幽霊探しをするといい。……んじゃあ、ありがとうね。実はもう会えないかもしれないけれど、あんたと闘えて楽しかったよ」

「——あ、待って下さい」

牡鹿の少女は動きを止め、「何だい？」と呼び声の主を振り向いた。

「いえ、名前くらい聞いておこうと思ひまして……」

きょんとした顔を返された。

次に彼女は、実に愉しそうな笑みを浮かべて、

「ふふ、律儀なもんだねえ——まあいいだろう、ウチの名前はシャ
ンディア。シャンディア・アクティオン。しがない浮浪の遊び鹿だ
よ。あんたは？」

「……私は魂魄妖夢。冥界で庭師をしています」

「魂魄妖夢か……その名前、この胸にしかと刻み付けておこう」

「鹿だけに、ですか？」

「そういうこった。……それじゃあ、健闘を祈るよ、魂魄妖夢」

「ええ、私も——あ、あの巫女は強いですから、気をつけてくださ
いね」

「ご忠告ありがとう。まあ、負ける時はあっさり負けてくるさ。私
は遊び鹿、紅葉の如く華やかに散っていくのが生き様だからね……
とはいっても、今は梅とメジロの季節だけれど」

「梅に紅葉ですか……紅と紅、種としても同格だと思いますけどね」
「違いない。それじゃあ、季節外れの私は梅を追い掛けてみることに
するよ。もしかしたらあんたの言う通り、いい勝負ができるかも
しれない」

願わくば再び相見えんことを、そう言って、牡鹿の少女は巫女を
追って地を駆けていった。

わざわざ地上に降りた辺り、空を飛ぶよりも地面の上を走った方
が早いらしい。さすが鹿だ、と妖夢は思いながら、徐々に小さくな
っていく少女の姿を見送っていた。

「さて、私も行かないと……」

妖夢は何事もなかったかのように、再び幽霊集めを再開した。

これで良い。自分は主人の命を肅々と完遂し、異変は巫女に任せ
れば良いのだ。

過ぎた行いは身を滅ぼす。博打の好きそうなあの牡鹿の少女とは
赴きを逆にするが、だからこそ彼女との間には近い何かがあるよ
うに思えた。そして、学ぶべきものも彼女は持っていた。

結局、異変について新たな情報を仕入れることは叶わなかった。
いや、判明した事実はいくつかあるが、どれも事態を好転させ得る

ようなものではない。しかし何となく、無事に異変が収まるような予感を、妖夢は抱いていた。

遊び鹿——シャンディアと闘って思ったのだ、あの少女に敵意はあるが悪意はない。むしろ彼女は、異変の源へ近づく者を危険だとらと追い返している。この異変で何が起こって何が起こりつつあるのか。分からないことばかりだが、少なくとも彼女が立っている限り、最悪な事態は起こらないだろう。本当に何となくだが、妖夢はそう感じた。

「……早く戻らないと、幽々子さまに叱られてしまう」

だが、後に彼女は思い知らされる。これはただの希望的観測だった、現実はその甘いものではなかった、と。

そう、温い平和の中に浸かってきた者は、知らないのだ。本当の「最悪」というものを。「最悪」の生まれる寸前が、最も恐ろしいということ。

S t a g e . 3 - 9 < 魂魄妖夢 : 5 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ↑

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 3 9 9 2 6 /

S t a g e ・ 4 - 1 <博麗霊夢：2> (前書き)

王はただ立ち尽くす。

強さとは、必ずしも勝利に繋がるものではないのだと知りつつ。

月を隠すように聳え立つ巨大岩塊。そのすぐ手前で見慣れた弾幕合戦が繰り広げられているのを、紅白の巫女、博麗靈夢は見た。

十分近づいた頃には戦闘は既に終了していて、誰と誰が闘いどちらが勝ちどちらが負けたのかは分からない。とにかく、この岩塊について知っていそうな者が居るので、彼女はまずその人物を探してみることにした。

「しかし……馬鹿みたいに大きな岩ね。天界まで届きそうだわ。というか、縦に立っているのが不思議なくらい」

距離を魔法で伸ばされたところで、進めば必ず近づけるのだから、ごり押しするようにひたすら飛べば良い——面倒だと思いながらも何とか此処まで辿り着いた靈夢だが、彼女は今「どうやって岩塊の中へ侵入すれば良いのか」という問題に直面していた。

スキマ妖怪の八雲紫に頼めば即座に解決なのだが、彼女は「ちょっと他にやることもあるから」とどこかへ行ってしまったている。肝心な時に役に立たないわね、とぶつくさ言う靈夢だった。が、実際にはそこまで不満に思っているわけではない。元々期待していなかったのだ。

「どうやって入るかだけど……そうね、人探しをする前に、折角紫に言われて陰陽玉を持ってきたんだから、ちょっと風穴開けられるかどうか試してみようか」

「——おいおい、人の住処に手荒な真似をするもんじゃないよ」
太極図を立体化したような球体、陰陽玉を浮かばせ力を込めようとしたところで、靈夢は背後から声を掛けられた。

「ばさり、と左手に持つ被棒を振りながら声の主の方を向くと、そこには猛々しい二本の雄角を生やした少女が宙に浮いていた。」

「……あら、幻想郷では神社を二度も壊されるなんて日常茶飯事よ」
「いや、それが日常茶飯事だったら流石にちよつと引くわ……」

唐突な出会いにも何事もないように答える霊夢の胆力に怖気づいたのか、牡鹿の少女は少したじろいだ。

霊夢は睨むように少女を見て言う。

「で、何かしら。見ない顔だけれど、もしかして貴方、この岩の中に住んでいる者？ いや、さっきの台詞からして絶対にそうね。ところで訊きたいんだけど――」

「――待て待て、話が早いって。一度落ち着いてウチの話を聞いてくれ」

「何よ、だったら早くしてくれないかしら？ 私今、寝てたところを叩き起こされて気分悪いのよねえ。それに、あんたのせいかどうか知らないけど、気持ち悪いのよこの空気。何とかしてほしいもんだわ」

「あーあー……それはともかく、ウチは今この中に入ろうとしてる輩を案内したり追い払ったりしてるわけだが、それで一つあんたに尋ねたい」

「ここに来た目的なら一つよ？ 異変を終わらせに来たの。どうやらこの岩の中に異変の原因があるようだから、当然中には入らせてもらうわ」

「……ふむふむ、だったら追い返さねばならないな」

「あら、できるのかしら？ 見たところ、貴方、全身ボロボロよ」

霊夢の言う通りだった。牡鹿の少女の羽織る甚平はスタスタに切り裂かれ、見える素肌にはいくつもの傷が窺える。明らかに先程ここで戦闘を行っていた者だった。

わざわざ探すまでもなかったようね、という霊夢の呟きは、牡鹿の少女には届いていないようだった。

「ああ、さっき二刀流の武士の幽霊と一つドンチャカやってきてね」

「……成程、さっき闘っていたのは妖夢だったのね」

「そう、魂魄妖夢。なかなか強くて、面白い奴だった」

「あんたの評価なんて興味ないわ。それで、どっちが勝ったの？」
「ウチは負けたよ。で、妖夢は中に入らず帰っていった。幽霊を集めて冥界に連れ戻さなければ、とか何とか言っていたな」

まだこの異変に関して情報の整理ができていなかった霊夢だが、これまで見てきた異変の影響や少女の話から、大体の流れを理解することができた。妖夢は岩塊へ惹き寄せられた霊たちを追って、ここまで来ていたらしい。指示を出したのは、当然あの亡霊だろう。

普段は動かないはずの大物が「暇潰し」でない動機による動きを見せている——それほどにまで、この異変は重大な問題を抱えているのだ。ならばより一層、異変の解決に精を出さねばならない。それは、博麗の巫女としての義務だった。

「ふうん、まあ大体分かったわ。……それで、この岩の中に入る方法を教えてくれるかしら？」

「私も大概だが、あんたも人の話はちゃんと聞くべきだよ……」

「あら、聞いていたわよ？　つまり、あんたを倒せば中に入れてくれるのよね。でも、もしかしたら戦わずに方法を聞き出せるかもしれない。これは素晴らしい平和的な解決法よ。どう？　普段は腹いせに妖怪退治もする私だけど、今日は気分が良いからサービスよ」

「気分悪いんじゃないのかい……」

「ああ、そういえばそうだったわね。だったら勝負よ。例え手負いの者だって、相手が妖怪というのなら手加減はなし。覚悟しなさい！」

「結局こうなるのか……まあいい、元々こうするつもりだったんだからね。それじゃあ行くよ、名も知らぬ巫女！　私の名はシャンディア・アクティオン——妖夢に『強い』と言わしめたあんたの実力、じっくりと見せてもらうよ！」

「へえ、鹿さんはそんなに余裕こいてても大丈夫なのかしら？　鍋に入れられた後で後悔しても知らないわよ！」

季節外れの紅葉と粗暴な梅との対決は、こうして始められた。

S t a g e . 4 - 1 <博麗靈夢：2>（後書き）

←舞台裏はこちら←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 4 3 6 6 3 /

数分後——牡鹿の少女の身体には、更に生傷が増えていた。避けても避けても追尾してくる光弾に、悪戦苦闘しているようだった。

他の者も相手を直接狙う弾幕を放つことはあるが、靈夢のそれは別格だ。威力こそ強くないが、ほぼ確実に標的へヒットする彼女の標準的な弾幕——ホーミングアミュレット。肉体的なダメージ以上に、精神面で相手を不安定にさせることに長けた攻撃だ。

現実、この時のシャンディアは非常に苛立っているように見えた。「全く、厄介極まりないねこのホーミング弾幕は！」

「厄介だと思ふのなら、さっさと全力で掛かってきなさい。叩き潰してあげるわ」

「言われずともそうするさ。遊び鹿と言ったって、ただぐうたら遊んでるだけじゃないんだよ——仙人『トナカイに乗った白髭赤衣』！」

生まれた赤と白の弾幕が縦に並ぶ。瓢箪のような形に整うと、靈夢に向かって緩やかに動き始めた。靈夢は下らなそうに嘲笑を浮かべる。

「何よこれ、ノロいわね。本気出さんじゃなかったの？ それとも、どうやって幻想郷に入ってきたかは知らないけど、所詮外の妖怪なんてこんなもののかしら？」

「……………」

上に下に、前に後ろに、左に右に。水面に揺蕩^{たゆた}うかのような動きで、シャンディアの弾幕は相変わらず、敵をゆつくりと追い続ける。その間にも、相手の攻撃は彼女の身体にダメージを蓄積していった。「ホーミングにはホーミング、ってところかしら。でも、そろそろ鬱陶しいわね。蹴散らすわよ——靈符『夢想妙珠』！」

霊夢の背後に色取り取りの光弾が展開された。ふわりと浮かび上がるような動きを見せると、地に向かい僅かに孤を描きながら、シヤンディアの弾幕を打ち消さんと飛んでいく。

ホーミングにはホーミングを。苛立つような攻撃には苛立つような攻撃を。相手の思い通りの行動に、シヤンディアはにやりと笑った。

「——今だ！ あいつに季節外れのプレゼントをくれてやりな！」
「っ！ 急に動きが早くなった!？」

シヤンディアの弾幕が蛇のようにぐにやりと曲がって、霊夢の『夢想妙珠』を避けた。今までの緩い動きからは考えられないほどのそれは機敏な動作だった。

瓢箪状の弾幕はするりと敵の背後に回り込み、大きな口を開けて獲物を喰い千切らんとする獣のように、広く拡散して霊夢を包み込んだ。

「やってくれるわね……ちょっとあんたのこと舐めすぎてたかしら！」

「サンタクロースって知ってるかい？ 良い子たちに望まれたプレゼントを配って回る粹なお爺さんさ。だけど、良い子じゃないあんたにやあ、少しばかり痛い贈り物をしてあげるよ！」

「ふん。タダで物をくれるのはありがたい限りだけど、残念ね、私の守備範囲に年寄りが入ってないのよ！——夢符『二重結界』！」

弾幕が獲物を喰らい尽くす直前、霊夢を覆うように透青色の箱が二重に重なって出現した。

箱に噛み付いた弾幕は、しかし結界の力に耐え切れず、消滅した。

「もう、どこに行ったのよあの鹿は！ まさか逃げたんじゃ……」
無事に身を守ることに成功した霊夢だが、牡鹿の少女の姿を見失っていた。

やがて『二重結界』の効力も切れる——霊夢はその時ようやく、頭上から彗星の如く降ってくるシヤンディアの存在を視認した。

「……逃げやしないよ！」

重力を利用しつつ、上空から全速で落下するシャンディア。

放たれた弾幕は、相手から逃げ場を失わせ、一対一の力勝負に持ち込ませるための準備。

上方から攻撃を仕掛けたのは、彼女の卓越した脚力から放たれる蹴撃を最大限に活かすための手段。

絶大な破壊力が今、霊夢の存在を粉々に打ち砕こうとしていた。
「聖獣『太占導来世』——脆くも割碎したあんたの骨は、一体どんな未来を見せてくれるんだろうねえ！」

自信を笑みとしてその顔に浮かべる牡鹿の少女に対し、はあ、と霊夢は溜息を吐いた。決して観念したわけではない。決して諦めたわけではない——彼女はただ、呆れ果てただけだった。

博麗霊夢。

外界と幻想郷を隔てる『博麗大結界』を管理する少女。

「運命を読むのは紅い吸血鬼だけで十分なのよ——神霊『夢想封印』

彼女が赴いた異変で、これまで解決できなかったものは、何一つとしてない。

「——ふん、鹿相手じゃこんなものね」

最終的に勝利したのは霊夢だった。

シャンディアは既に妖夢と戦闘を行っており体力を消耗していため、これは当然の結果と言えよう。万全の状態で挑んだならば、勝てるかどうかはともかくとして、半人半霊の庭師が言うように良い闘いにはなっていたかもしれない。

「で、私が勝ったんだから、約束通りこの岩の中に入る方法を教えなさい。でないと、本当に鍋の具にしてやるわよ」

近頃の巫女は物騒なんだねえ、と冗談めいて言う牡鹿の少女を、霊夢は一睨みした。逆らえば本気で殺しに掛かってくるのではない

かと思えるようなドスの利いた表情に、飄々とした態度を貫き通してきたシャンディアも、観念せざるを得ないようだった。

「はいはい言うよ言いますよ。鍋にされちゃ敵わないからね。……とはいっても、別段ややこしい構造になってるわけじゃあないよ。ちよつと岩に手を当てて、ぐるつと一周してみな。スイッチみたいなものがあるから、それに触れれば転移魔法で中に入れるよ」

「面倒ね……やっぱ壊しちゃ駄目？」

「やめてくれ……まあでも、防御結界が発動するから多少の攻撃には耐えられるだろうし、むしろ跳ね返ってくるから、試すだけ骨折り損だと思っけどね」

「どうやらそうみたいね。結界は中から張られてるから、こっちからは解除できそうにない……まあ、普通に正面から入ることにしましょうか」

「……あんた実は今、『地味だなあ』なんて思ってるだろう」

「あれ、あんたって悟りの妖怪だったっけ？」

「……………」

その後、霊夢は一人「スイッチ」探しを開始した。暗がりになって見えにくいはずなのだが、勘が良いのかどうなのか、彼女はすぐに目的の物を見つけ出した。

すぐにでも乗り込もうと思ったが、何となくそういった気分になったので、霊夢はシャンディアの方を向いてこう言った。

「ああ、そうそう。もう少ししたらワラワラと客がやって来るわよ。貴方は門番みたいなもんでしょう？　なら仕事はきちんとしなさいよ」

「妖夢に負けてあんたを中に入れた時点で、きちんと仕事なんてできてないんだけどね。まあいい、それで、その客もあんたと似たようなもんなのかい？」

「違うわよ。あいつらがここに来るのは、ただの好奇心。私は仕事でここに来てるの。あいつらと一緒にしないでほしいわね」

「あんたも十分好奇心のほうが勝ってそうだけどねえ」

「自称遊び鹿のあんたには言われたくないわ」

「違う、とシャンディアは力なく笑って、続ける。

「しかし、負け続きでもう身体が動きそうにないね。次から来るお客さんは素通りすることになりそうだ」

「ちよつと、それじゃあ私だけ無駄に消耗したことになるじゃない。だからちゃんと働けて言ってるのよ」

「やれやれ、鹿使いの荒い巫女さんだ……もう少しで角が生え変わる、鹿にとっちゃデリケートな時期だっていうのに」

「それだけの口が利けるなら、まだまだ元気ってトコね。こりゃあ鍋の肉にはできそうもないわ。それに、ちよつと古そうだし」

「そうそう、だから大切に扱って……え、古いつてどういう意味？」

「そのまんまの意味よ。角が抜け落ちるって、そういうことなんですよ？」

「違うよ！ これは我々鹿にとって、心機一転を図るための重要な合図で……そして、毎年やって来る春先の目安なんだよ！ 元気な角が生え変わってくる内は、ウチはまだまだ現役だ！ きつと肉も美味しい！」

言って、シャンディアははつと口元を抑える。捕食者を前にして自分の肉を美味さを語る獲物が、果たしてどこにいるというのか。しかし幸いにも、霊夢は彼女の言葉に耳を傾けていないようだった。

「はいはい、文句は私に勝ってから言いなさい——もつとも、猪と蝶を連れてきたところで、あんたに負ける気は全然しないけどね」

「どんだけ強い梅なんだい、そりゃ」

「梅？ ……いいえ、私は巫女よ。それ以外の何者でもないわ」

そうか、と消え入るような声で、牡鹿の少女は呟いた。
しかし霊夢はその小さな声を聞き逃すことなく、やや苛立った様子で訊く。

「何？ 言いたいことがあるなら言いなさい。負け犬……負け鹿の遠吠えくらいは聞いてあげるわよ。鍋にできない代わりにね」

「いや、大したことじゃあないよ。ただ——」

少女は空を仰ぐ。そこにあるのは、世界の半分を覆い隠した巨大な岩の塊だ。しかし、それを見た霊夢は思った。

彼女は確かに、岩塊の向こうに浮かぶ三日月を見ているのだ——と。

「——あんたになら、“アレ”を止めることができるかも、思っ
てね」

S t a g e . 4 - 2 <博麗靈夢...3> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 4 4 4 0 4 /

Stage・4・3 <霧雨魔理沙：1>

「……そろそろいいかしら。ほら、魔理沙、行くわよ」

離れた物陰から巫女と鹿の争いを眺めていた人形使い、アリス・マーガトロイドは、尾行に気づかれていることも知らず、隣に座る霧雨魔理沙にそう言った。

対する黒白魔法使いは不満そうに口を窄めて、

「えー、折角だから鹿鍋にしようぜー？ あのまま放置しとくのはもったいないだろう。じゅるり」

「あんたのお腹がすいてるのはよく分かったから、効果音を口に出すのは自重しなさい。はしたないわよ」

「だってさ、聞いてくれよ。霊夢の奴、この前私が『池の爺さん亀とっ捕まえてすっぱん鍋にしようぜ』って言ったら、何て答えたと思う？」

「想像もつかないわね」

「『食べられる時期なんてとっくの昔に過ぎてるわよ』だってさ」「すっぱんじゃないことを真っ先に否定しない辺りが霊夢らしいわね」

それで何よと訊くアリスに、魔理沙は気恥ずかしそうに頭を掻いて、

「いやあ、それなら代わりにあの鹿を持ってってやれば、霊夢も喜ぶんじゃないかと思ってな。この季節はやっぱり鍋だろう。茸と一緒に香霖堂に持っていくのも一つの手だな」

「……何を言うかと思ったら。あのねえ、今の私たちにそんな悠長なことをやっている暇があるわけじゃないでしょう。それに、霊夢だってあの鹿を食べたいのなら、それこそ『とっくの昔』に鍋にされているわよ」

「うーん、それもそうだな……」

「というか貴方、単に自分が食べただけなんじゃない？」

「む……何故バレた」

「口から漏れ出てるのが、効果音だけじゃなかったからよ」

ええっ！？　と慌てて口元を拭う魔理沙だったが、それらしきものは少しも垂れていなかった。

アリスは吹き出すように笑って、

「こ、こんな単純な手に引っ掛かるなんて……」

「……よし分かった、帰ったらお前のために特製の茸鍋を作ってやるっ」

「ごめんなさい謝りますから勘弁してください」

「ふっ、分かればいいんだよ分かれば」

崩れ落ちるアリスと、勝ち誇る魔理沙。二人の魔法少女が織りなす芸術的なシルエツトが、そこにはあった。「シヨウブアリー」という人形の声が、静かな夜に虚しく響き渡った。

「——それで、霊夢に続いて岩蛹の内部に侵入しようと思うのだけれど」

コントは終わりだ。表情を真剣なもの戻して、アリスは言った。

「あの鹿の妖怪にもう戦意はないようだけれど、念には念を入れて、裏側から回り込みましょう。貴方も分かてるんでしょうけど、この中から出ている力は相当強いもの……下手に体力を消耗するわけにはいかないわ」

「分かてるぜ。実を言うと、結構背中を冷汗が流れてたりするしな。これって想像以上にヤバいんじゃないか、って思っているところだ」

「あら、貴方にしては弱気な台詞ね」

「なーんて冷静に言うお前も、鳥肌くらい立っているんじゃないのか？」

「う……嫌いわね！　とにかく行くわよ！」

牡鹿の少女は岩塊のやや右手で、倒れるようにして休んでいる。

こちらの気配は感じ取っているだろうが、襲ってくる様子もない。わざと見逃すつもりなのだろう。ならば、せめて彼女の意を汲んで、こっそりと侵入するのが空気を讀んだ判断と言える。

左へ進むと、岩塊の壁が切れ、月がその姿を現した。

怪しくも神々しい、淡い光を放つ三日月。

満月の夜は妖怪たちを活性化させる不思議な魔力を持っていると言うが、今宵の月も、それに全く劣らぬ魅力を持っていた。

「……ここね」

静かな声で、アリスが言った。彼女が手を翳す先には、岩塊——に埋め込まれた不自然な人工物があつた。

何かの装置のようで、魔法の力が内蔵されていることは（彼女たちにとって）一目瞭然だった。

「ああ、そうみたいだな。しかし実際、どうやって入るのか疑問だった。成程、転移の魔法が使われているのか」

「距離をおかしくしていた魔法使いの手によるものかしら」

「断定はできんが、多分そうじゃないか？　この中に魔法を使える奴がそんなにたくさんいても困るだろう」

「幻想郷は弾幕を放てる者で溢れ返っているけど……」

言いながら、アリスはいつまでも装置を手で覆っている。装置に備えられた転移魔法が安全なものであるか確かめているのだ。

少しして、彼女は装置から手を離すと、魔理沙の方を向いて小さく頷いた。

「どうやら大丈夫そうね。それじゃあ行きましようか。魔理沙、心の準備はいいかしら？」

「誰に言ってるんだ。異変を前に逃げる私じゃないと言ったはずだぜ？」

頼もしいわね、と言ってアリスが先に装置に触れた。瞬間、彼女と彼女の連れる人形の姿は消え去り、後には虚空が残る。

「さあてと。大酒呑みが出るか、それとも山の神様が出るか……」

魔理沙はごくりと唾を呑み込み、アリスの後を追って装置に触れ

た。

「——あら、随分と遅かったじゃない、貴方たち」

そこに立っていたのは、尾行対象の被疑者、博麗霊夢だった。凄まじい怒りのオーラを放ちながら仁王立ちをする彼女のこめかみ辺りには、傍から見取れるほどに青筋が浮き立っていた。

こっそりと後をつけていたはずの者に待ち伏せをされている——予想だにしない状況突きつけられ、二人の魔法使いが声も出せずに震え上がったことなど、わざわざ言うまでもないだろう。

「それで？　こそこそとヒトの後をつけてラクウーにここまで辿り着いた、卑怯者たちの感想を聞いておきたいのだけれど」

「……あれ？　いや、そんなことより霊夢、何でお前はまだここにいる？」

「はぐらかそうとしても無駄よ。それとも、鏡でも見せるべきかしら。できれば、見たら中の世界に閉じ込められちゃう奴」

怒りの収まらない巫女と正面切って向き合った魔理沙だが、彼女の表情に先程までのような恐怖は貼りついていない。

誤魔化した風でもない甚く冷静な態度で、彼女は手を振って否定の意を示した。

「いやいや、素直な疑問だよ。お前を尾行してたのは確かだし、それについては謝るよ。だが霊夢、お前なら、例えば私たちに気づいていてもそのまま進んでいくだろう？　そこに何か違和感があつてない別に意図なんてないわよ……ああいや、あんたたちを懲らしめるつていう明確な目的があつたわね」

「……だが、それだけじゃあない。と、私は読むわけだ」

「何が言いたいのかよ」

「それを訊きたいのはこっちだぜ」

魔理沙は確信めいた笑みを浮かべる。

霊夢は「あー」と唸るようにして、やがて誤魔化すのも無意味と観念したのか、大きく肩を落とした。

「この岩の中に、強い力を持つ者が数人いるわ。三、四人といったところかしら。正確な實力は分からないけれど、恐らく並みの妖怪よりは上ね。そして当然だけど、奴らは私たちが侵入してきたことに気づいているの。更に言えば、私が察知している以上に、向こうは私たちのことを調べているでしょう——それなのに、私は今こうしてここに無事でいる」

「——つまり、誘っている、というわけね」

相槌を入れたのはアリスだ。霊夢は頷きを返す。

「ここは敵の根城……地の利はあっちにあるから、領域に踏み込んだ以上、当然不利になるのは私たちね。この中で敵の歓迎をたった一人で迎え撃つなんて、いくら私でもそんな無謀はできないわよ」

「で、私たちが来るのを待ってたわけか。こうなるなら、最初に霊夢を見かけた時にさっさと合流しておけば良かったぜ」

そう言って、魔理沙の視線がアリスに向けられた。ぎくりと身体を硬直させるアリスだったが、霊夢は初めから彼女の思惑だろうと気づいていたらしく、ただ「全くよ」と吐き捨てるだけだった。

「それでも、あんたたちが来てくれたのは正直助かったわね。紫もどっか行っちゃったし、全部を一人で相手しないといけないのかと思っていたわ」

「よく言うよ。今までは大抵一人でやつつけてきたじゃないか。まあ、たまにはスキマやら鬼やらブン屋やらを連れていたようだが」

「それは、これまでの異変が幻想郷の内輪で起こっていたからでしょう。この岩の塊は外の世界から来た……さっきの鹿はともかくとして、外来人がわざわざこつちの領分で戦ってくれるとは限らないわ。ウチの神社ふらついてた悪霊やら、魔界の神やらが暴れていたのもスペルカードのない時代だったけど、あいつらみたいに『遊ぶ』なんて日和った思考を持っているとも思えないしね」

「言われてみればそうだな。なら、甘かったのはあの鹿だけだと思

つていた方がいいか……どうやら、今のルールに浸り過ぎていたみたいだぜ」

「他の奴らも、私たちのやり方で戦ってくれと楽なんだけどねえ。まあ、それでも面倒な戦いとなることに変わりはないさそうだけれど」
そうね、と横からアリスが頷く。

「この不思議な力場を発している者の正体は不明だからともかくとして、距離を弄^{いじ}っていた魔法使いはそこその実力を持っていると思うわ」

「ほう、私やアリスよりも強いのか？」

「さあ、どうでしょうね。単純な比較ができるほど似通った性質の魔法を使っているわけでもなさそうだから、私や魔理沙、それからパチュリーなんかとも違う、新手の魔法使いだと思って掛かるべきでしょう」

紅い館に住む動かない大図書館の姿が、ぱつと浮かんでは消える。

ともかく、と霊夢は話を仕切り直す。

「これで戦闘要員の数だけは大体互角よ。贅沢言うなら、この流れに乗ってもう少し助っ人が欲しいところ何だけど、期待はしない方が——」

「——そう、敵城を攻めるには、敵の兵力の三倍の兵を集めるべきだ。それでいて、貴方達は愚かにも、無謀無策で敵地へ攻め入っている」

唐突に出現した二つの影が、霊夢の言葉を遮った。

「なあつ！？」——何でお前らがここにいるんだよ！」

驚く魔理沙の声に、影の一方は「愚問ね」と薄い笑いを返す。

影の正体——それは、遥か上空より来る有頂天の住人、比那名居天子と永江衣玖だった。

S t a g e . 4 - 3 <霧雨魔理沙：1>（後書き）

←舞台裏はこちら←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 4 5 0 5 6 /

一同が啞然とする中、一人浮いた空気を纏わせ、天子は言う。

「まあ、とはいっても、三倍の人数を集めるなんて本気では言っていないわ。今更そんなことできないでしょうしね。それに――」

「当たり前だ。何を呆けたこと言ってるのかとツッコむところだっ

……」

「――それに、この私がいるのだから、これ以上の増援など必要ない！」

「……………」

「……………」

啞然のもう一つ上の段階が、彼女たちを包む空間を支配した。

「……………なあ、空飛ぶ鰻うなぎ」

「龍宮の使いです。……………それで、何でしょうか、白黒さん」

「一発でいい、こいつにマスタースパーク撃っていいか？ 特大のを」

「はあ。私としても、できることなら懲らしめてやってほしいところなんです、総領娘様は無駄にお強いですからねえ」

「無駄につて何よ無駄につて！ この私の力をもってすれば、こんな岩の塊なんて須臾しゆんも掛からず砂くれに変えられるのよ！」

「しかし、その力を異変起こすのに使うんだから、無駄っちゃ無駄だな」

「宝の持ち腐れかしら。いえ、というかむしろただの迷惑ね」

「そうよ！ 神社を二度も壊された恨みは、まだ晴らされていないわ！」

四面楚歌の状況に、ぐぬぬと狼狽うろたえながら天子は後ずさる。流石の天人も、実力者四人を相手取るのは厳しいいらしかった。

「それで貴方、雲の上からこんな所にまで、わざわざ何をしに来たのよ」

「ふん、見て分からないのか、人形使い」

「分かるけど、嫌な予感がするから言いたくないわ」

「ならば、望む答えを教えて差し上げましょう……何あろう、今回私は、異変を解決しにやってきたのです！ さあ、諸手を上げて感謝なさい！」

邪魔だ帰れ、という蔑みの異口同音が天子の全身を貫いた。

シヨツクに崩れ落ちる天人くずれを見下ろし、霊夢は深い溜息を吐く。

「はあ……助っ人が欲しいとは言ったけれど、まさか天人とはね」

「……あら、何か？ またえらく不満そうですね」

余裕を取り戻した天子が、スカートの裾を手で払いながら立ち上がった。

しぶとい奴ね、と霊夢は言って肩を竦める。

「そりゃあばやきの一つも吐きなくなるわ。何度も言わせないで頂戴」

「やれやれ。そんなことじゃあ、いつまで経っても煩惱を取り除くことはできないね。愚直な貴方は、最も非想から遠い存在よ。言わなかったかしら？ 紆余曲折を経た先に得る悟りこそが涅槃ねはんなのだと。一切衆生悉有仏性……まあ、神道に身を捧ぐ貴方に言っても仕方ないのですが」

「棚に上げた説教は、閻魔の長話よりも要らないわ。そも、私は天人になるうだなんて考えていない。あんたと出会ってからの特にね」

「そう、残念ですね。貴方が天界に来てくれれば、とても面白いことが起きそうなのに」

「……総領娘様、これ以上天界に厄介事を持ち込むのは止めて下さい」

やや不穏な雰囲気の話に、呆れ顔の衣玖が割って入った。意味のない争いが起こりそうな状況を見れば、ある意味で空気を読んだ

行動なのだろう。本音が漏れた、という可能性も十分あり得るが。彼女に倣って、魔理沙は話の流れを変えることにした。

「ところで天人。もしかしてお前ら、私たちの後をつけてきたのか？」

「は？ そんな矮小な真似、私がするわけないでしょう。正々堂々、正面突破してきたよ……入口を守っていると思しき妖怪がいたけど、もう誰かにやられてるみたいだったから、そのまま前を通させてもらったし」

どうしてあんたたちが空気読まないんだ！ というツツコミが魔法使い二人から浴びせられたが、天子はその反応を気にも留めなかった。

「礼儀正しく挨拶したら、『どうぞお通り下さい』と返ってきたもの。ここで身を引くのは返って彼女に失礼だと思えますけど？」

「いや、そこはそもそもだな……」

「しかしまあ、流石は神の使いともされる鹿ね。時と場合と相手に沿った対応というものをよく分かっている。おかげで、何とか異変解決に乗り遅れずに済みました」

「あの鹿を倒したのは私よ。諸手を上げて感謝なさい」

「だから、感謝すべきは貴方の方でしょう。この私が自ら異変解決を手伝ってあげると言っているの。素直に喜びなさい」

つい口出した霊夢だが、天子にあっさりと返され黙ってしまう。しかしその表情からは、ただ何も言い返せないだけなのか、それとも天人からのらしくない言葉に驚いているのか、上手く読み取れなかった。

しばらくして、「仕方ないわね」と霊夢は嘆息する。

「あんたたちが加勢するのは何か釈然としないけれど、気にしないことにするわ。ここでもくだらない仲間割れをしている場合じゃないし——」

「あ、間違えた。メインは私ね。手伝うのは貴方たち」

「——ちよつとでもあんたに期待した私が馬鹿だったわ！」

獣のように荒ぶる巫女を、魔理沙は「どうどう」と抑えつけた。
それでもなお発される、霊夢の苛立ちを超えた一睨みは、しかし天子には届かない。天人くずれば理解不能とも言つように、怪訝な表情を浮かべていた。

代わりに、側に侍る龍宮の使いは、霊夢の怒りを察したらしく、
「総領娘様、お願いですからもう少し自重してください……」

「何よ衣玖、私が巫女に何を言おうが勝手じゃない」

「いえ、ですから……はあ、もういいです」

「おいおい、そいつを止めるのがあんたの役割じゃないのかよ」

魔理沙は苦笑しながら、暴れる巫女の動きを封じ続ける。

落ち着くまでにはもう少し時間が掛かりそうだと踏んで、今度はアリスに疑問を投げかけることにした。

「さて、これからどうするか。私としては今すぐ掃討作戦を始めてもいいんじゃないかと思うんだが、もう少し増援が来るのを待つかな？」

「うーん、これ以上待つのはどうかしらね。今より人数増えてもあまり意味はないだろうし、何より、私たちは異変の影響の広がりを一刻も早く止めるという役割を担っている。外の様子が見えないのだから、ここは急ぐべきでしょう」

「善は急げ、つてか」

「それでも、初動はいつも悪の方が早いみたいだね」

もういいわ、という巫女の声が腕の中から聞こえ、魔理沙はようやく霊夢から離れた。どうやら落ち着いたらしい。

皆が霊夢に視線を向ける。

博麗の巫女——異変解決の専門家。

ここに集まった者たちを率いるのは彼女であるべきだと、誰もが無意識の内にそう思っていたのだ（天人はどうだか知らないが）。

「とにかくこれで、数の上では私たちが有利になった、ということになるわね。地の利を考慮すれば五分五分の戦いになるんだろうけど——」

「——私たちに可能性の問題なんて論すだけ無駄、だろう？」

「そうね、図々しさにかけて、貴方たちの右に出る者はないでしょう」

「いや、総領娘様も相当な折り紙つきですけどね……」

それぞれの言葉を受けた霊夢は無言で頷き、四人に背を向けばさりと被棒を振るう。

そして、奥の暗闇を睨み、岩塊全体へ響かせんとする大きな声で、高らかに宣言した。

「じゃあ、面倒事はさっさと片付けるわよ！ 皆、閻魔の如くキリキリと働きなさい！ この、ただ大きいだけの味気も風情もない岩を、あんたたちの墓標にしたいくないんだったらね！」

S t a g e . 4 - 4 < 霧雨魔理沙 : 2 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syo-setu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/145809/>

岩塊内部は、その外見とは裏腹に、人が住まうための体装がきちんと整っていた。壁こそ岩そのものであるが、床と天井は鉄の板で舗装されている。薄暗い雰囲気を打ち消す為か明るい赤色の絨毯^{じゅうたん}まで敷かれているのだから、なかなか凝ったものである。

岩壁は外の空気が染み込んだように冷たかったが、それほど寒気は感じない。換気はされているようだが、基本的には密閉状態にあるため、気温は季節にあまり左右されないのだろう。照明もないのに空間全体が明るく照らされていることから考えると、魔法の力によって温度を調整している可能性もある。ただどちらにせよ、侵入者たちの作戦とも呼べない作戦を実行するには、さしたる影響はないのだが。

十数歩進んだだけで、戦闘を歩く霊夢の足が止まった。

「――階段があるわ」

どうしよう、と後続に訊いているのは瞭然だ。

霊夢の言う通り右手に階段はあるものの、このまま真っ直ぐ進むこともできる。

「何を迷う必要があるの？ 両方行けばいいでしょう」

「うん、今回ばかりは天人の意見に賛成だ。その方が手っ取り早いしな」

そんな天子と魔理沙の意見に対し、衣玖とアリスは消極的な態度だ。

「私は、皆で固まって動くべきではないかと思うのですが……」

「そうね。チームに分かれるということは、それだけ多く敵の仕掛けに引っ掛かる可能性があるということ。互いに連絡が取れず助けには行けないと考えれば、いざという時になるべく損失の少なそう

な方を選んだ方がいいんじゃないかしら」

「霊夢はどうしたいんだ？」

魔理沙から返ってきた問いに、霊夢は人差し指を立てた。周りの四人は一瞬首を傾げたが、すぐに「上に行きたい」という答えなのだと理解する。

皆の合点を認めると、今度こそ彼女は言葉で意志を伝えた。

「勘だけど、今私たちがいるのは最下層だと思うの。異変の元凶らしきものは、もっと上の方にあるわ。皆で最短っぽいルートを攻めた方が、被害はともかくとして、最速でそこまで辿り着けるんじゃないかしら」

「霊夢の勘なら信じられるが……しかし、皆がまとめてやられたら一気にゲームオーバーだぜ？」

「一度に攻めるなんて、そんな要領の悪いことをするつもりはないわ。あんたたちだって思うでしょう？　こんな狭い中で暴れるのに、他の仲間がいても邪魔なだけよ。初めに一人か二人を小出しにして、様子を見計らってから残りが突入する。これで被害は最小限に抑えられるはずだけど」

成程、と頷いたのは衣玖だ。

「もし仮に接敵したとして、倒せると踏んだ相手ならば皆で袋叩きにすればいい。そうでない場合は、先に進んだ者に敵を引きつけてもらい、後続はその隙に奥に進めば良い。と、いうことですね」

「そういうことよ。……というわけで、上に進もうと思うんだけど、いいかしら？」

霊夢に任せる、という同じ反応が四人から返ってくる。なら行きましょう、と言って一行は階段を上り始めた。

岩塊内にいくつの階層があるのかは分からないが、各フロアの間はそれなりに開いているらしく、やけに長い階段だった。明らかに飛んだ方が楽だが、注意深く進もうとするならば、やはり歩くべきだろう。ここは最早幻想郷ではない——そう、どこに罠があるとも知れないのだ。

「ところで、栄えある先鋒を務めるのは誰になるのかしら」

アリスの問いに、霊夢は「そうねえ」と一言置いて、

「誰でもいいとは思うけど……じゃんけんで決める？ 先に勝った二人が行く、って感じで」

「じゃんけんだったら、勘の強い貴方が勝っちゃうじゃない。不公平よ」

アリスの言葉に、うんうんと他三名も頷く。

もちろんそうでない者もいるが、幻想郷に住む少女たちの大抵は好戦的なのだ。「弾幕ごっこ」の登場そのものが、それを如実に示している。

あるいは——あるいは、すぐ近くから発される奇妙な魅了の力に、彼女たちは既に毒されているのかもしれないかった。

小さな火花の散る静けさの中、ねえ、という声が上がった。

「私に行かせてよ。だって、ここに来るまで一戦も交えてないもの」

天子だった。そろそろ体動かしとかなないとね、と彼女は笑う。

「衣玖もそうでしょう？ ……まあ、嫌なら私一人でも十分だけけれど」

「いえ、ご一緒させていただきます。色々な意味で心配ですので」

「相変わらず意地の悪い言い方ね……ああでも、そういうえば」

言って、天子は視線を二人の魔法使いへと向ける。

「貴方たちも霊夢の後に入ってきたんだっけ」

「あー……確かにそうだが、実を言えば、私の方は既にウォーミングアップが済んでいるんだ。鈴蘭の丘を越えた辺りで、光蟲に遭遇してな」

だからそういうことなら譲ってやるぜ、と魔理沙は笑った。

「でも、アリスは見てただけだから……」

「ああ、私なら大丈夫よ。二人に任せましょう」

即答したアリスに魔理沙は僅かに困惑し、天子は満足そうに頷く。それを見たアリスは、隣に行く黒い魔女帽の傘下にそっと顔を寄せると、

「……実は、あの天人と組みたくなかったただけだったりして」

などと耳打ちした。魔理沙は思わずぷつと吹き出し、周囲の注目を買ってしまった。何よ何よ、と笑われた天子は慌てるが、勿論彼女の疑問に答える者などいない。

はあ、と大きな溜息が霊夢の口から漏れた。

「全く、何を呑気に遊んでるのよ……で、あんたたちが先に行くんでしょう？　ならさっさと前を歩きなさい。そろそろ次の階に着くわよ」

「はいはいドンと任せなさい——じゃあ衣玖、前は任せたわ」

「……え、総領嬢様、あれだけ言っておいて逃げるんですか？」

「冗談よ。ただ、私がいきなり本気出したら、すぐに終わっちゃうじゃない。それはとてもつまらないわ」

ふふ、と全てを悟ったように上品な微笑みを浮かべる天界の住人だったが、彼女の口にする言葉は、とても「上品」とは言えないものである。

だが、天子の笑みはすぐに消えた。いや、彼女だけではない。他の四人も、その気配を感じて、すぐさま身構えた。

彼女たちが辿り着いた二つ目の階層は、何も障害物のない、ただ広いだけの空間だった。明かりも灯っていない。かろうじて、階段からの光が五人の足元を淡く照らす程度だ。

こつり、と彼女達のものではない足音が、暗闇に反響した。

「すぐに終わる——ねえ。果たして、それはどうかしら？」

「——っ！？　皆さん、下がってください！」

まず初めに反応したのは衣玖だった。声の発生源は、思ったよりも近い——こつり、こつり、こつり。足音は徐々に大きさを増しながら、彼女たちに近づいていく。

こつり。

足音が止まる。そしてそれは、ようやく「気配」と呼べるだけのものを発した。

後方から来る微かな光は、気配の正体の足元だけを照らし出して

いる。

「暗がりにも身を隠すお前は一体何者だ？——姿を現せ！」

いつになく鋭い目の天子に、暗闇は「いいでしょう」と答えた。

「さてさて、今宵の来客はどうやら大物のようね……ところで貴方たちは、“アレ”を喰らいに来たのかしら、それとも、“アレ”に喰われに来たのかしら。いや、どちらでもいいわね。私の果たすべき使命は、ただ一つだけだもの」

静かに。

ぶん、と重い棒状の物体が振り回される音が空を切った。

「私の名前は穴崎^{ししきありね}檻音——そして貴方たちは、獅子の住む檻の中に閉じ込められたおいしそうな晩餐^{ばんさん}。これ以上の楽しい狩りはない。

さあ、小動物共、無慈悲な神に感謝の祈りを捧げながら、纏めて我が血肉となるがいいわ！」

潜む気配は躍動した。

同時に、空間を明るい光が包み込む。

快晴の下で浴びる陽の光ほどではない。不便なく生活を送るに必要な光量よりやや強い程度のものだ。

だが、その強さは、暗闇に目が慣れかけていた侵入者の視界を一瞬で真白に染め上げるには十分すぎるものだった。

Stage・4・5 <霧雨魔理沙：3>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/147182/

Stage・4-6 <十六夜咲夜：1>

「——只今戻りました、お嬢様」

時は少々遡り、場所を南に移して、紅く幼い吸血鬼の館——紅魔館。

その中に設置された広大な図書館（と言うより書物庫と表現するべきだろうか）に、完全で瀟洒な従者、十六夜咲夜は姿を現した。

「あら、貴方にしては随分と遅かったわね」

「本当よ本当。ってことで咲夜ー、早く紅茶淹れてきてー。……あ、もちろん普通のね。変なのは入れないでいいから」

図書館の主と紅魔館の主、どちらの言葉にまず応えるべきか。当然答えは決まっっていて、咲夜に戸惑いは欠片もなかった。「かしこまりました」と頭を下げると、彼女の姿は煙のように一瞬消え去り、また次の一瞬には、カップを二つ載せた盆を持って再び現れる。

二人の「主」が頭を寄せるテーブルに紅茶の入ったカップを置きながら、咲夜はまだ処理されていないもう一つの要求に応えた。

「パチユリー様は既に感じておられるかもしれませんが、あの巨大な岩塊を中心に、距離を引き延ばす魔法が展開されていました。遅くなってしまったのはそれが原因です。申し訳ありません」

「大丈夫よ、特に気にしてないわ」

不敵に笑う吸血鬼の主人に、咲夜は微笑みを返す。

紅茶を一口含みながら、紫苑しおんの魔法使いは言った。

「そうねえ……ここまで影響は及んでいないけれど、確かに魔力は感じているよ。だけど、例え魔法を使っているとしても、貴方なら距離の長短なんてほとんど関係ないんじゃないかしら」

「ええ、そうですね。だから一番乗りは私だったと思います。ただ

……」

「ただ？」

「とても退屈でしたね。他の面々が長い距離を潜り抜けてやってくるまで、ずっと待っていないといけませんでしたから。暇潰しに見張り役らしき妖怪を相手していても良かったのですが、お嬢様の命令では『様子見』ということになっていましたので……」

「あら、別にそのままあの岩壊しちゃっても良かったのよ？」

主、レミリア・スカーレットも紅茶を飲んで、納得するように頷いた。

「まあいいわ。それで、咲夜、『様子見』の結果を教えなさい」

「はい。まず、幻想郷全体の動向ですが、保守的になっている者が多いように見受けられました。それこそ『様子見』ですね。即座に解決できるような異変ではないと皆思っているようです。また、人里や妖怪の山では、力の弱い者を寺や地底に避難させていましたね」「地底に？ 確か、パチエの話だと、地底の妖怪と地上の妖怪は不干涉が原則なんじゃあなかったっけ」

「そうね。だから今回は、それだけ切迫した異変ということなんでしょう。その話だと、ほとんどの所が動いているようだし」

「帰りにもちろと様子を窺ってみました。大きな混乱は起こっていないようでしたので大丈夫でしょう……そして岩塊付近の状況ですが、先程霊夢が見張りの妖怪を倒し、内部に侵入を果たしました」「霊夢が？ さすが巫女ね、異変となれば動くのが早いわ」

「実はその前に妖夢がその妖怪と一戦交えていたのですが……まあ、あの子はすぐに冥界へ戻ったようなので、特に関係はありませんね。ともかく、それからですが、霊夢に続いて人形師と白黒の泥棒が岩塊内に入ろうとしていました。加えて、天人の娘と龍宮の使いが飛んでいるのとすれ違いましたが、恐らく今頃はあの者たちも乗り込んでいますでしょう」

「ふうん、魔理沙はともかく、あの人形使いがね……」

「パチユリー様？ どうかありませんでしたか？」

「いえ、結構いろんなのが行ってると思ってね。私も行ってみよう

かな」

「お。やっとパチエが動く気になった」

咲夜は首を傾げる。この会話の流れを上手く掴み取れていないのだ。

パチユリーはやや拗ねているのか、何も答えようとはしない。やれやれと肩を竦めながら、レミリアが説明を始めた。

「咲夜が帰ってくるまで、私たち、この異変に対してどう動いたものか話し合っていたの。それでパチエったら、この不思議な力が気になって気になって仕方がないって顔してたのに、意固地になつて梃子でも動こうとしないのよ。私はここを動けないから——」

「——え、そうなのですか？」

更に大きく首を傾げる咲夜だった。確かにレミリアはあまり活発に外へ出ないが、それは吸血鬼特有の「日光や流水に弱い」という性質のためである。

しかし、今は陽の光の届かない半宵。星たちの瞬く好天の下では、夜の王たる彼女を妨げるものは何もないはずだった。「動かない」というのならば分かるが、「動けない」というのは、果たして——
「そうよ。咲夜、貴方もあの岩の近くまで行つたのだから、分かっているでしょう。感じているでしょう。自分の中の何かが吸い取られてしまうような、そんな感覚を……」

「はあ。吸い取られるというか、惹き込まれる感覚でしたが……そうですね、どうしてか『もっと近づきたい』と思っている自分に気づく、ということなら何度ありました」

「そう、それは確かに、貴方が魂を吸われかけていた証拠よ」

「魂、ですか……」

「心を奪われる、とよく言うでしょう。ともすれば、奪われた心は戻ってこなくなる。己を強く保てる者なら長い時間堪えられるけれど、そうでない者は、自分自身を見失ってしまうわ」

「では、あの岩塊から発せられているのは、魅了の力なのですね」

「ただ、あれはとても暴力的な力よ」

「そうなのですか？」

「ええ。例えば、咲夜がレミリア・スカーレットという主に仕えているのは、貴方が私に魅了されているから、とすることができるとも、今の貴方は確かに『十六夜咲夜』としての自己を堅持している。それは偏に、魅了という力は発する者の意志によって調整し得るものだからよ」

もちろん自分がその力に気づいていればの話だけどね、と吸血鬼は妖艶に笑う。

彼女は酷く自覚的に周囲を「魅了」しているのだと、咲夜は感じた。

「だけど、“あれ”は違う。無差別に、無慈悲に、無造作に、あらゆるものを惹きつけようとしている。目には映らない分、抵抗しようとする思えない分、魅了というのは残酷な力なのよ。それを『暴力』と言わずして何と言うのかしら。外で暴れる力は抑えつけられなければ、内で暴れる力に対抗するのは至難の業。さながら、大抵の存在が己の運命を変えることができないようにね」

「ですが……それが、お嬢様が動けないこととどのような関わりがあるのでしょうか」

鬼のパワーと天狗のスピードを併せ持ち、強大な魔力をその身に収めている、最強との声も名高い種族——吸血鬼。弱みも少なくないが、それを突いたとしても、吸血鬼の動きを完全に抑えることは難しい。

陽光も流水も無い現状、果たして何が彼女の足を踏み止まらせているのか。

「いい？ 咲夜。吸血鬼というのは本来、『死の魂』なの。魂——魂。鬼——魂。私たちは人間の血というある種の『死』を媒介にして、そこに含まれた魂を喰らっている。吸血鬼の存在を支えている魂の比重は、人間なんかより遥かに大きいわ」

「成程。だから逆に、魂を吸い取ろうとするこの力は脅威となる……」

「まあ、一度吸われてしまったら、人間も吸血鬼も変わらないんだけど……いや、違うわね。恐らく、私たちの肉体は失われてしまう。魂なしでは、吸血鬼の軀を形そのままに保っておくことはできないからね。場合によっては、人間ならば蘇生することもできるかもしれない。けれど、吸血鬼はその僅かな可能性すらないのよ。他の方法で死なない分、圧倒的な死が私たちを塵も残さず消滅させてくれるわ」

「そしてそれは——妹様も、同じ」

言いながら、咲夜は、主の言わんとしていることを理解し始めていた。

「最悪の事態にまだなっていないから、フランをこの館から出すことはできないわ。でも、私以上に脆いフランは、“あれ”の力の影響をより受けやすいはず。だから、逃げることはできないのなら、いつそ私はフランと共にここで身を潜めていようと思う」

「お嬢様……」

困惑の表情を浮かべる従者を見て、紅い幼き月は笑う。

だが、その笑みには、微かに儚さが混じっているようにも見えた。
「……咲夜、私を弱いと思うかしら？ ひよこつと天敵が現れただけで何もできなくなってしまうこの私を、貴方は弱いと嘲ってくれるかしら？」

Stage・4-6 <十六夜咲夜：1>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/148110/

静寂。

出そうとする声が出ない。

咲夜は必死に、私は、と言葉を紡ぐ。

「私は……そうは思いません。その『弱さ』は、お嬢様の『強さ』でもあるのだと、私はそう思います。それに——」
「それに？」

「——それに、お嬢様が何もできないままにいるなど、そのようなことは絶対にあり得ません。この程度の異変で、貴方を殺すことはできない。貴方の運命はまだ、紅く染まり切っていない」

ふふ、とレミリアは満足そうに笑った。

「潇洒な答えね、それでこそ咲夜よ」

「ということは、何か考えがおりになるのですか？」

「いいや、私は何も考えていないよ。ただ……ね」

パチエ、と彼女が呼び掛けると、いつの間にか読書に耽っていた魔法使いの頭が上がった。もう機嫌は直っているらしい。

「咲夜が館を出た後、スキマ——八雲紫がここに来たの。当然、異変に関する要件だね。色々回り諄^{くど}く言っていたけれど、簡単に纏めれば『後で暴れさせてやるから今は大人しく力を蓄えている』という話だったわ」

「……何やら、全てを解つていそうな口ぶりですね」

「そうそうそうそう、そうなのよー」

今度は、レミリアが拗ねる番だった。

「あいつ、絶対に何か知っているはずなのに、肝心なことは何も言わないんだ」

「どうせ後々分かるんだから、その時に教える必要がなかっただけ

じゃないの？　そうやってヒトをからかって面白がろうとするのは、レミィ、貴方も同じでしょう」

「……パチエ、私とあの妖怪と一緒にしないでくれる？」

「あら、気に障ったかしら。それ以外の点を較べてみても、割と似た者同士だと思うのだけだね」

「ちよつ、パチエ、私のどこがどう紫と似ているのか、詳しく言ってみなさい！」

「嫌よ、言ったら面白くなるじゃない」

うー、と唸るレミリアを見て、パチユリーの唇が僅かに歪むのを咲夜は見た。どうやら、彼女の機嫌はまだ直っていなかったようだ。「ところで、パチユリー様。あの岩塊へ向かわれるのですか？」

「……ええ。あまり釈然としないけれど、レミィにあれだけ言われればね。実際気になることもあるし、自分の目で確かめてみようと思っわ」

「では、私も一緒にした方がよろしいのでしょうか……お嬢様？」
咲夜は確認を取るため主人を見遣ったが、返ってきたのは否定だった。

「さつきスキマ妖怪が来たと言ったでしょう？　その時に、人手が足りないから誰か貸してくれて頼まれたのよ。咲夜は美鈴メイリンと一緒に、そっちに行って頂戴」

思っていなかった要請に、咲夜はどういうことなのか詳しく尋ねる。

それによると、幻想郷の住人たちの大移動だが、それを早い内に完了させてしまいたいと八雲紫は考えているらしい。咲夜の見た通り、現時点で大した問題は起こらず作業は順調に進んでいるものの、いつ暴動のようなものが発生するか分からないというのが実態のようだ。

今よりもよりスムーズに作業を進められるよう、騒動が生じてもすぐ鎮静できるよう、指導者側の人員を少しでも増やしておきたい。特に、それなりに名の知れた、実力のある者を――それが、スキマ

妖怪の言い分だった。

そして、「後で暴れさせてやる」ことの見返りとして、レミリアはメイドと門番を派遣すると答えたのである。

「美鈴にはもう言つてあるけど、メイド妖精やウチの小悪魔も一緒に連れていってくれるかしら。……ああ、役に立つとは端から思つていないわよ。ただ、あの子たちがこのままここにいては、『魅了』されてしまつかもしれないでしょ？」

無表情に、パチュリーはそう言った。しかし、彼女の心情は見えないが、伝わってくるものはあった。自分を遣わすのは、もしかすると妖精や小悪魔を無事に避難させるため、という理由が主なのではないかと咲夜は思う。妖しさと怪しさの権化である八雲紫からの要求を、レミリアとパチュリーが二つ返事で受け入れるとは考えられなかったからだ。

身内の弱者を護るための方便として、紫との取引を利用した——きつと、それが真実だろう。それが彼女たちの、当然にして無愛想な優しさなのだろう。

咲夜は思う。そんな彼女たちだからこそ、自分は魅了されているのだと。誠心誠意を込めて、仕えることができるのだと。

「——さて、それじゃあ早く行きましようか。先に行った者たちが暴れ出せば、私が着くまでに片づいているかもしれないしね」

「できれば早く終わらせてほしいものだけだね。咲夜がいないと色々不便なのよ。この屋敷は広いけれど、状況的に、暇潰しの手段は限られているし」

「まあ、ここにいれば大丈夫なんじゃない？ 本なら数百年掛かっても読み切れないほどあるんだし。ちゃんと物を壊さないようにできるなら、妹様も呼んでいいわよ」

「本当？ じゃあ……って、あの子が真面目に本なんて読むのかしら」

「正直期待はできないわね……」

まあ屋敷の管理はしばらく任せたわよ。そう言い残して、一冊の

本を手にとったパチュリーは、咲夜の方を向いた。

反応がないのを見て「咲夜？」と呼びかけると、完全に瀟洒な従者は完全で瀟洒な慌てぶりを披露した。

「——え？ あ、ああ、す、すみませんパチュリー様！」

「全く、いざという時に頼りないわね……ほら、行くよ」

「……ごほん。で、では、お嬢様、行って参ります」

いつてらっしゃい、とひらひら手を振る主人に、咲夜は今度こそ瀟洒な一礼を返す。

図書館の扉は閉められ、レミリアの姿は見えなくなる。

そして、夜の闇が、再び彼女を迎え入れた。

S t a g e . 4 - 7 <十六夜咲夜：2>（後書き）

←舞台裏はこちら←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/149050/>

居城を後にし、メイドや門番たちと別れたパチュリーは、外気に触れることで改めて「魅了」の力の異質さを感じていた。

「確かに、魔法を使って人や物に『魅了』の力を宿らせることはできる。だけどこれは、魔法ではない、純粋な魅力……それも、本体を知覚しない内にここまで強い力を発しているとなると、その正体は並大抵のものではないわね。そして、恐らくそれは生物の容を模したものではない。伝説、神話クラスのアイテムがああ岩塊に眠っていると考えていい」

いや、もう目覚めているのか——誰もいない宵闇に、彼女は呟く。しかし、確かにその言葉通りの興味もあるのだが、パチュリーが岩塊へ向かう理由は他にもいくつかあった。

その一つが、八雲紫の暗躍である。

あのスキマ妖怪が紅魔館にやって来たのは、先程咲夜に説明した通り、待機命令と助力要請のためだった。それは、幻想郷を愛する紫からすれば、一見当然の対応のように思われる。何人もの想像を絶するほどに頭の切れる彼女が、幻想郷の要人たちを様子見もせず敵地へ送り出すとは思えない（総力を掛けねば解決できない異変なのだとすれば話は別だが）。

ただ、紫と言葉を交わしたパチュリーは、それを怪訝に思った。あまりにも対応が適切すぎる——と。

特に「最悪の事態となるまで待っている」と言ったのは、そんなだろうことを彼女は既に予期しているということだ。聞けば、他の有力者たちにも似たようなことを吹聴しているらしい。だが、それだけの力を集めなければならぬような異変だというのに、彼女の表面に焦りは全く見られなかった。

彼を知り、己を知らば、百戦危うからず。パチュリーから見た八雲紫の表情には、そうした余裕が見て取れた。紫は少なくとも、外界から異変が舞い込むことを予め知っていた。それが今のパチュリーの考えだ。

ならばどうして、事前に策を弄しておかなかったのか。外界と幻想郷との境界を生み出しているのは八雲紫だ。博麗の巫女も境界を管理する能力を持つが、創造主以上に自由に境界を操ることはできない。逆に言えば、境界の創造主であるはずの紫は、明らかに幻想郷にとつての敵となるだろうあの岩塊の侵入を敢えて見逃したことになる。

普段から胡散臭さ満点の大妖怪だが、楽しみを求める程度に活動はするものの、幻想郷に害をもたらすような真似は絶対にしない。つまりここから考えられるのは、外界の者と結託した予定調和であるか、あるいはこちらの領域に敵をおびき寄せたかだ。咲夜の報告から実際に被害が出ていると分かった以上、前者の可能性は薄いとすれば、解答は後者に絞り込まれる。

確実に勝てると紫は見込んでいるが、早々に最高峰の実力者を送り出すわけにもいかない。博麗、守矢の巫女をけしかけたというが、一方で、幻想郷に散らばる各勢力のトップには待機しておくように言っている。それ以外の多くが力の弱い者の保護に駆け回っているというのなら、手持無沙汰にしている自分は巫女達に加勢するべきだろう。知り合いの魔女二人もいるのだし——というのが、パチュリーの導き出した結論だった。

妖しい賢者に肩を貸すのは癪だが、吸血鬼の親友が言う通り、折角辿り着いた幻想郷という平穏な場所を外界からの脅威に曝すのはもつと気分が悪い。

「はあ……しかし、本当に退屈しないわね、ここは」

こほん、と咳払いを一つ。今日の体調は珍しいほどに悪くないが、喘息持ちの彼女にとって、咳をするのは一種の癖になっている。

「癖、か。しかしレミィも、本当に大事なことだけは言わないのよ

ねえ」

呟く内にも、岩塊の影は瞬く間に肥大していく。本来の長さを無理矢理捻じ曲げられてしまった道のりを更に無視しているかのよう
に、パチュリーと岩塊との距離はぐんぐんと縮んでいる。

まだ紅魔館を出る気が起きていなかった頃に、岩塊を中心に展開
されていた魔法を何となく解析していた賜物^{たまもの}だった。

「元から我儘な性格してるんだから、どこまでも貫き通しなさいよ」
彼女の思考は、既にスキマ妖怪から離れていた。今思うのは、彼女
の重い腰を浮かせたもう一つの理由についてだ。

現在紅魔館の中にいるのは、当主のレミリアと、その妹フランド
ールだけだ。そうなることをレミリアが望んだからである。八雲紫
の助力要請にレミリアが「メイドと門番を貸す」と即答した時から
粗方その予想はついていた。やけにパチュリーを異変に向かわせよ
うとしていたが、裏にはそうした思惑があったというわけである。

パチュリーは妹の件については触れず、館を後にした。今は騒が
しいメイド妖精すらもない、紅い姉妹の完全なる領域だ。このよ
うな状況など滅多に起こり得ない。何者からも横槍を入れられるこ
とのない、姉妹水入らずの時を過ごせるまたとない機会だった。そ
れを台無しにしてしまえるほど、パチュリーも野暮な居候ではない。
館内に残った彼女たちが何を話そうとしているのかは分からない。
何かが変わるかもしれないし、何も変わらないかもしれない。四百
九十五年の呪縛は、その幾許^{いくばく}もない短時間で簡単に解けるものでは
ないだろう。

ただ、ほんの少しだけでも、彼女たちが本当の姉妹へと近づくこ
とを期待していた。そう、怖いもの知らずの人間たちが、狂想の吸
血鬼の潜む牢を開け放った、あの日のように。

「なーんて、深く考えることもないね」

レミリアと八雲紫が後にいるのだから、自分は心赴くままに岩塊
内部を漁り尽くせば良いだけだ。本や髪を傷める日光の届かない夜
に異変が起きたのは、そうした意味では僥倖だったと言える。

それに、遅れて出発したということは、予想される大抵の面倒事は、先に岩塊へ突入した巫女たちが片づけてくれているということだ。多少の妨害はあるかもしれないが、そこまで身体を張る必要もないだろう。病弱なパチュリーにとっては、それだけでも随分と気が楽になるのである。

「しかし……何だろう、この違和感は」

気は楽だが、同時に不安な要素もある。その正体は分からないが、例えばそれは、世界を構成する数多のルールの内、たったの一つが変わってしまったような。あり得ない現象が起こっているような、そんな気がしてならないのだ。

何となしに、月のある方角——そこに聳える岩塊を見つめる。その向こう側には隠れた三日月が輝いているはずだ。だが、本当にそうなのだろうか。この、規則の塗り替えられた、限りなく現実に近い非現実的な世界で、果たして「そこに月がある」と断言できるのだろうか。

答えは月と同じように見えない。ヒントはどこに転がっているのだろうか。そもそも、この疑問こそが間違っているのだろうか。

紅魔館で、紫から聞いた言葉を思い出す。

「今回の異変を起こした者は、幻想郷の中でも特に貴方たちに近い存在です。だからこそ、貴方たちの活躍には期待しています」

敵は自分たちに近い存在。ただ、それを聞かされたところで、何がどう近いのかは分からないのだから、打つべき手も探しようがない。紫には悪いが、彼女の期待には応えられそうもなかった。

元々、応える義理もないのだが。

「この異変、月のありかが大きなファクターとなる。気をつけなさい」

最後に紫は、呟くようにそう言った。

その言葉によって自分と友人に何をさせたかったのかは分からない。紫が去った後もこの件について言及しなかったので、恐らくレミリアも真意を掴めていないだろう。ただ、そう伝えることによつ

て成立する事象がある——紫はそれを狙っている。問題は、それがパチュリーたちにとって利益となるか不利益となるか、だ。

悩んでいても仕方がないと、パチュリーは思考をシャットアウトする。

今分らないことは、後で自然と知れるか、そうでなければ調べれば良いだけの話だ。そのための近道が、あの岩塊へ向かうこと。彼女は今、自身を蝕む『魅了』の力さえも利用しようと考えていた。

「さて、一人で行動するのは、天人の一件以来かな。とにかく、文句と言いつつ嘘ばかりの本泥棒がいないのは、とても清々しい——って、え？」

「——待つてください！」

嫌な予感に襲われ後方を振り向いたのと同時、彼女の耳にそんな呼び掛けが届いた。

声の主は猛スピードで近づいてくる。距離を伸長されている状態でどうやってこのような速度を出しているのかと不思議に思ったが、その正体を見てパチュリーはすぐに納得した。

「貴方も、あの岩の所へ向かっているのですか？ だったら、一緒に行きましょう！ 旅は道連れ世は情け、ここで会ったが百年目、です！」

「……本当に百年に一度会う程度の頻度なら良かったのだけど」

「そこ、ツツコミどころ間違ってますよ！」

蛇と蛙、二神の加護を纏い、風を操る緑の巫女——東風谷早苗。

八雲紫から岩塊に向かわせたと聞き、咲夜の報告にその名前が挙がらなかったのも、その時から疑問に思っていた。どうして彼女はまた岩塊に到達していないのか、と。

もしかすると咲夜と入れ違いになったのかもしれないとも考えていたが、実際には出遅れた自分よりも後ろからやって来ている。彼女に何があったのか気にならなくもなかったが、それ以上の心情が今のパチュリーにはあった。

これまた面倒な人間と鉢合わせてしまったものだ、と日陰の少女は深い溜息を吐いた。

S t a g e . 4 - 8 < パチュリー・ノーレッジ : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 5 0 1 8 9 /

「……うーん、流石に一对五じゃあ、全部は止め切れないわ」

「……あら、随分な余裕を見せてくださるんですね。三人減ってもまだ貴方の前には敵が二人残っているというのに」

「二人なら、何とかできるもの。相手するのは面倒だけれど」

「そうかしら？ 初手に目眩ましなんて姑息な手段を使ってくるものですから……まあ、底は見えているわね」

隅々まで光の行き届いた方形の広いフロアには、現在、三つの人影が並んでいる。

寄り添うように近くに立つ二人は、桃の飾りの付いた黒帽を被る天人と、真紅の衣を纏う龍宮の使いだ。

そして、その二人と対峙しているのは、彼女たちの侵入したこの岩塊の住人であると思われる、獣の尾と耳を持つ少女だった。

「ふん、胡散臭い上っ面がようやく剥けたようね」

「だって、よく考えれば、私って客人じゃない。丁寧に対応する義理はないわ。特に、貴方みたいな卑怯者相手にはね」

「ま、姑息とでも卑怯とでも、何とでも言うがいいわ。侵入者は五人と聞いていたからね。全員まとめて相手するのは分が悪いから、ちよつと仲間に協力してもらったのよ。だから、わざわざ貴方たちが残ってくれたのは、私にとっては好都合だったわ」

長身かつ細い少女の身体は、ともしれば歩いて棒に当たるだけでへし折れてしまうのではないかと思えるほどだ。が、同時に、力が無駄なく凝縮された引き締まった肉体であるようにも見える。彼女の持つ尾と耳が示しているように、獣の力——それも、彼女の言葉から察するに、恐らくは獅子の力を宿しているのだろう。

何を警戒しているのか、周囲の音を漏れなく拾わんと耳をびくび

く動かしながら、少女は続ける。

「貴方たちが二手に分かれることも考えて、別のルートに待機してる子もいるんだけど……結局、貴方たちは五人揃ってこっちに来た。半数で敵を誘導し半数が先に進む。敵を倒した半数は残りに追いつく。その策略は間違っていないと思うわ。でも、そうね——貴方たちは、見事に私というハズレを引いたみたいよ。おめでとう、貴方たちがお連れ様と再会できる日は二度と来ないわ」

ぶん、と再び重い音が宙に一瞬浮いては消えた。獅子の少女の持つ太い棘の付いた棍棒が振り回されたのだ。

片手で自由に扱っている辺り、その怪力を相手に見せつけているのだろっが、

「ハズレ、ねえ……確かにそうかもしれないね。お前のような、貧弱な骨すらないような者を相手にするのは。残念ながら、この世界には、たかが獣なんかよりももっと厄介な者たちが地を蔓延はいつっているんだ」

私たちを喰いたいと言うのなら、もっと桃を食べて鍛えてからにしないさい——と天人、比那名居天子は挑発するように言ったが、もちろん相手にその意味は通じていないだろう。

「果物で顎を強くするなんて、聞いたこともないわね。桃なんて、腐った林檎よりも柔らかいじゃない。それに、多少硬い肉なら、簡単に喰い千切る自信はあるわ。多少堅い骨も、容易に噛み砕いてみせましよう。そのパワーこそが、私の取り柄だもの」

棍棒を振った際胸の前に掛かった淡い黄色の長髪を、少女は手で払い退けた。

頭の後ろで髪を束ねているその紐を解けば、獅子らしい雄大で壮美な鬚たてがみへと変貌するだろう。今こそ「邪魔になるから纏めている」という様子だが、実際には、それは彼女のあり余る力を封じ込めているのではないかと、龍宮の使い——永江衣玖は感じた。

実際、幻想郷の中で本来の力を抑えている者は多い。それは全力を出すと周囲にただならぬ被害を及ぼすためであり、また、実力が

下の相手とも楽しんで弾幕勝負をするためでもある。例えば天子などがその良い例だが、宍崎檻音なる少女にも似たような匂い、空気を感じていた。

「さて、お喋りはこの辺にしましょうか。私に任された仕事は、貴方たちを足止めることじゃなくて、貴方たちをここから追い出すことだからね——もちろん、美味しそうなら食べてもいい、って話だったけれど」

「美味しそう、ね。だったら私はどうなのかしら？」

「聞きたいの？」

「一応ね……あ、衣玖の方の感想もついでにお願い」

「何をさらっと言ってるんですか総領嬢様！」

主役を引き立てるべく沈黙を決めていたのだが、空気を読んだ彼女の行動も天子の前では形無しだった。

「そうねえ。じゃあはつきり言うけど、その衣玖って奴はちよつと食べてみたいかも」

「貴方も悪ノリしないで下さい……ええ、何だか涎が垂れているような気がします」と私の目の錯覚でしょう」

それとももしや本気なのだろうか、と衣玖は僅かに身を引く。

「ってあれ、私は食べたくないの？」

「うーん、食べられなくてもいいだろうけど、私の好みじゃあないわね。ディア辺りなら『風情ある味わいだ』とか言いそうだけど」

「ディア？　って誰よ。貴方の仲間？」

「ええ。貴方も見かけたはずよ、この外にいる角生えてる奴」

「ああ、あの鹿ね。あれこそ鍋なんかになると美味しそうだったわ」

「でも、青臭いから私は好きじゃないのよねえ……ちよつと古いし」

「そうなの。残念ね、あまり彩りのない天界の料理には飽き飽きしていたところなのに」

「だけど、衣玖って奴は本当に美味しそうよ。あまり嗅いだことのない魚の匂いがするわ。最近、魚といえば鮭ばかりしか食べてなかったから……」

「……あれ、確かライオンは肉食だったような」

「割と雑食よ。野菜は苦手だけだね」

「ふうん、でも、衣玖は多分あんまり美味しくないよ。諦めなさい」

「総領娘様、それはあまりフォローになっていません……」

緋色の涙が零れてきそうな気分になった。

「……というか、『お喋りはこの辺に』するのではなかったのですか？」

そう言うのと、天子と檻音は「おお」と感心するように衣玖を見遣った。どうやら食べ物談義に花を咲かせて夢中になっていたらしい。このような状況下でも緊張感を持続できないのが、幻想郷で暮らす年頃の少女たちなのである。

当然ながら、「年頃」なのは見た目だけで、天子も恐らく獅子の少女も、外見よりずっと長く生きているのだが。

「……危うく使命を忘れてしまふところだったわ」

「……危うく衣玖が食べられてしまふところだったわ」

二人は同時に言い、ようやくと敵らしく互いを睨み合った。

天子は非想の剣を抜き、檻音は棍棒を刀を持つように構える。

そして。

「——あら。私はまだお魚さんを諦めたわけじゃあないわよ？」

「——へえ。なら、そんなに欲しいのなら死に物狂いで捕ってみなさい。だけど、衣玖にはただ力が有るだけじゃあありつけないよ。

そしてこの私は、幾ら非力が頭を捻っても、絶対に突破できない！」

「そう、ならば試させていたかくとしましょうか……獲物を前にした空腹の獣を、果たして貴方たちに止められるかしら！」

そして、取り残された衣玖はただ、乗ることのできない流れを呆然と見守っているしかないのだった。

S t a g e . 4 - 9 < 永江衣玖 : 2 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 5 1 4 9 1 /

「衣玖、ちゃちゃっと片づけるわよ！」

「了解しました——雷魚『雷雲魚遊泳弾』！」

前を駆ける天子の動きに合わせ、衣玖は雷撃を発射した。

青い光の尾を閃かせながら、雷球は檻音を狙って飛んでいく。だが、

「——遅い！　こんなんじゃあ私は捉えられないわよ！」

野球でバットを構えるように体を捻ると、雷球は標的に当たることなくそのまま真っ直ぐ進んでいった。

そして檻音は、接近戦を挑む天子に棍棒を殴り払う。

「つつ！　痛いわねえ……！」

「——え？」

ダメージを受けたのは確かに天子だったが、驚きの表情を浮かべたのは檻音の方だった。

どうしてあの一撃を喰らって立っていられる——そんな疑問が、彼女の顔にははつきりと書かれていた。

「舐めないでほしいわね。だから、そう簡単に私たちは喰えないと言っただろう。しかし哀しいかな、鹿と違って卑しい臭いの染みついたお前の肉など、私たちは欲していない」

振るわれた緋想の剣が、敵の衣服を斬り裂いた。

とはいっても、斬られたのは羽織るように着ている上着だけで、それ以上のダメージはない。

「この距離で躲^{かわ}すか……流石に身のこなしは人間のそれじゃあないわね」

「それこそ舐めてもらっちゃあ困るわ。これでもまだ、窮屈してるのよ。本当なら全部服を脱いで闘いたいくらいだもの」

「……それはちょっと遠慮してほしいところね」

檻音の服装は、シンプルと言えばシンプルだったが、目の遣り場に困るほど露出の多いものだった。やや厚めの下着しか着ていない、と言っても良いくらいだ。上着がある分マシではあるが。

しかし、あの上着と下に履いている短パンは、幻想郷ではあまり見かけない地だ。外の世界で流行しているものだろうか。

「――衣玖、何をポケットとしてるの!? 私のことは気にしないでいいから、どんどんやっちゃいなさい!」

「ああ、すみません……珠符『五爪龍の弾』!」

衣玖の周囲に湧き出た無数の雷球が、次々と光の線を結ぶ。

そうして大きな五芒星となったものが、一つ二つと、近接戦闘を行う二人へ向けてゆっくりと動き出した。

「ちよつと、衣玖!? どんどんやれと言ったけど、これはいくら何でも大きすぎるわよ!」

星状の電撃に触れる二人は、バチバチと弾けるような音を立てる。途端に、彼女たちの動きが鈍った。幾ら身体を鍛えているとはいえ、体内の電気信号を乱されれば思った動きができなくなるのは当然だ。

「いえ、『私のことは気にしないでいい』と仰られたので……」

「だからってコレはないでしょう! 私がやられてもいいの!？」

「まあ、それはそれでアリなのではないかと……」

「……帰ったら覚えてなさいよ」

「……それはこちらの台詞です」

言いながら、衣玖は五芒星の展開を継続し、天子は檻音との肉弾戦を続ける。

堅い身体を盾に突進する者と、その攻撃を身軽に躲しつつ反撃する者。

二人の闘いは拮抗しているようで、しかし互いの消耗は決して小さくない。そこへ衣玖の弾幕が無差別に襲ってくるのだから、近い内にその均衡が破れることは容易に予測できた。

受けるダメージが大きいのは天子の方だが、乱れる弾幕の中で動きを制限されているのは檻音だ。

故に、衣玖の弾幕が息切れした瞬間即座に大きな動きを見せたのは、檻音だった。

「ああもうじれったい！——三星『住吉三神横一文字』！」

左手に持つ棍棒とは別に、右腕のブレスレットには三連の飾り——野獣の牙が提げられている。バックステップで宙に跳んだ檻音は、これを豪快に掴むと戸を引くように牙で空を引き裂いた。

その斬撃は空気の刃と化し、天子を襲う。

「ふふ、そう動いてくれるのを待ってたわ！——天符『天道是非の剣』！」

天子は緋想の剣を下げぐつと腰を低く構えると、三連の刃——の先にいる檻音に向かって強く跳躍した。

「くつ、切り裂けない!?」

「そう、ちやちなナイフじゃあ私の身体は貫けない。穢れに染まったお前には、天人である私に牙を立てることも叶わない！」

「ちいっ——小三星『暗馬炎棍縦一文字』！」

緋想の剣を振り上げるように斬りつける天子。

妖力により緋炎を上げた棍棒を振り下ろす檻音。

二つの相反する軌道は、激突し、大きな衝撃を生み出した。

「今よ、衣玖！」

衝突の反動で弾き飛ばされた二人だったが、互角と思われる戦いを繰り広げる彼女たちには、一つだけ大きな相違があった。

「っ！まさか、弾幕を収めたのは……!?」

「ええ、このためです。というわけで、お覚悟を——魚符『龍魚ドリル』！」

檻音の落下先には衣玖が待ち構えていた。彼女の存在こそが、今の檻音にはない天子の強み。地を統べ天を舞う者たちに、たかだか一匹の獣が敵うはずもない。

紅い羽衣の形作った円錐が、激しく回転しながら獅子の少女を貫

いた。

「――躲された!？」

衣玖の攻撃は、檻音の肉体に届いていなかった。猫のようなしなやかな動きで仰け反り、寸前で避けられてしまったのだ。

しかし、それは同時に檻音を貫いてもいた。錐の先端は確かに、彼女の束ねられた髪を捉えていたのである。

無事に檻音が落下すると、先程の攻撃で髪留めが失われてしまったらしい、長く薄茶色い髪が彼女を覆うようにふわりと広がった。

瞬間、天子と衣玖は身を硬直させてしまう。

檻音の身体から発される、これまでとは段違いの強い気配を感じて。

「ふふ、うふふふ、はははははは……！」

穴崎檻音は俯いたまま、ただ気味の悪い笑い声を上げる。

しばらくこんな調子が続いたかと思うと、何の前触れもなく突然顔が上げられた。

前に掛かった長髪を手で払いながら、彼女は声高らかに笑う。

いや、ただ笑っているのではない。

それは、喜びの咆哮だった。

[illegible]

そうそうそうよそうなのよね、と檻音は自信の言葉に相槌を打つ。投げ出された棍棒が、虚しい音を立てて床を転がった。

「食べたいのなら、最初からこうすれば良かったのよ。狩人なんて、この女に合わせて遊んでいても仕方ないの。こんな簡単に基本的なこと、すっかり忘れていたわ——人間のままじゃあ、貴方たちを食べることはできない」

人間のものとは思えない声量の雄叫びが、世界を揺らした。

穴崎檻音は――いや、獅子の王は、全てを貫く眼光を誇り立ち尽くす。

「我こそが百獣の王！ あらゆる生命は王が足元より我を崇拜する！ さあ、か弱き者たちよ、貴様らも我が威光に屈せ！ 平伏せ！
ひつまず 跪け！」

Stage・4-10 <永江衣玖：3>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/152587/

「——っ！ 来てるよ、衣玖！」

「くっ！？」

天子が注意の言葉を発し終える頃には、既に檻音は衣玖の目前まで近づいていた。

烏天狗の新聞記者と手合せをした経験がある身としては、感じるその速さは特に驚異的ではない。相手の動作の転換を空気を読むことで察する、ある意味予知的な能力を持つ衣玖にとって、檻音の拳動は簡単にいなせるはずのものだった。

「首ががら空きだ！」

だが、檻音の動きにその予兆となるものが全く見えない。結果的に「見てから動く」ことになり、先読みに慣れている衣玖には対応しきれない速度であるように感じられた。

「がら空きなのはそっちよ！——“緋想の威光”！」

衣玖の眼前が赤い光線の束によって遮られた。天子が自前の小さな要石から発したものだ。

「ちっ、殴り合いしか能がないわけじゃあないのか！」

ほぼラグのない攻撃ではあったが、何とか避けていたらしい。狙いが近接戦に弱いと察した衣玖一辺倒なのか、それでも天子は後回しにして檻音は更に接近を試みてきた。

しかし、同じ策が何度も通用する衣玖ではない。

「——羽衣『羽衣は空の如く』」

「っ……何だ、風が！？」

強い気流が衣玖を包むように発生した。強風に触れた檻音の拳は衣玖から逸れて、何も無い空間を殴る。衣玖は流れるような動きで檻音の背後を取った。

しかし、そのまま反撃に移ることはできなかった。こちらを振り向いた檻音の威圧的な表情に怯んでしまったのだ。

たまらず距離を取り、己の得意とする遠距離を保つことを選ぶ。

「行くわよ、衣玖——気性『勇気凛々の剣』！」

「はい、総領嬢様——雷符『ライトニングフィッシュ』！」

緋と青、二つの光が絡み合い、より強力な一撃となって敵を貫かんとする。

幻想郷の中でも、これを受けて無事で済む者はほとんどいないだろう。

だが、対する檻音は——

「避けない！？ どういうつもりよ、あいつ！」

——ほんの一瞬だけ、小さく笑ったように見えた。

「貴様らに本物の『王』というものを教えてやろう。全ては私の望むがままに——“王の威圧”」

僅かに届いたその声は、しかし、直後に起こった大きな衝突音に掻き消された。

結果を言えば、天子と衣玖の連携攻撃はほとんど意味を為さなかった。

檻音はかすり傷一つ負うことなく、それどころか、一歩たりとも元の立ち位置から動くことはなかったのだ。せいぜい、相手の隠していた手の内を少しばかり晒した、という程度のものでしかない。

「弾幕が、避けた……？」

衣玖の呆然とした呟きに、檻音は少女らしい口調を取り戻して言った。

「そう、私に『避ける』なんて逃げの行動は取れないし、そもそもそうする必要がないのよ。だって——向こうから、勝手に私を避けてくれるんだから」

ギリリ、と檻音の両眼が鋭く光る。その視線の持つ重みは、目に見えないが暴力そのものだった。

だが、その力は、不思議な魅力をもつて視界内の者たちを惹きつける。さながら、この岩塊の中央辺りから発せられている謎の力のように。

「……………」

警戒を怠らないまま、衣玖は首を傾げた。「謎の力」が感じられなくなっている。力の解放を止めたのか。幾つかの可能性は思いつくが、すぐに解が見つからないことも分かっていた。

小さな疑問を頭の隅に置いておき、思考を目前の脅威へと向ける。

“王の威圧”——と檻音は言っていたか。しかし、空気の質は重みのあるものに変わったものの、気流の変化は感じなかった。つまり、先程衣玖がやってみせたように、攻撃をいなしているわけではない。

だが、弾幕の方が敵から逃げた、という表現にもどこか違和感がある（自分で言うておいて何だが）。言うならば、元々定められていた軌道に沿っただけ、のように感じられたのだ。そして当然、天子と衣玖の放った弾幕は、檻音に照準を合わせていた。それが示す真実は。

「成程、軌道を逸らす程度の能力——ですか。厄介ですね」

「あらら、もうタネがバレちゃったみたいね……でも関係ないわ。理屈が分かっても、貴方達にこの力を防ぐ手立てはないのだから。ああいや、一応、『私を倒す』という手段があるわね。でも、『ごっこ遊び』程度の攻撃が王たる私に届くことはないわ」

「……………そう言う割に、『ごっこ遊び』に付き合ってくれているような気がするけどね」

「ええ、だって、本気を出したらここが壊れてしまうもの。わざわざ自分の住処を潰すような真似はしないわ」

「ふうん、ここが住処ねえ……王様が隠れ住むような場所ではないと思うのだけれど」

「まあ、色々あつてね……。それに、貴方だつてそうなのでしょう？ 貴方だつてそう思っているのでしょうか。——『本気を出してもつまらない』って」

「……ふん、分かつているじゃあないか」

「本当は、^{このチカラ}“王の威圧”を使うつもりもなかったんだけど」

今日の反抗者は珍しく相当な手練れみたいでね、と檻音は悪戯に笑う。

どうやらこの王は、民の反乱も余興程度にしか考えていないらしい。上に立つ者としての自信が、それだけあるということか。もちろん天子も衣玖も、元から檻音の下についていたわけではないが。『自称王様が何を言っているのやら。それくらいやつてもらわないと、むしろ張り合いがないわ。所詮獣如きの牙が、悟りを啓いた者に届くはずもない』

「最初に悟りを啓いた者は虎に喰われたと、そう聞いたんだけど」

「それは前世の話。それに、自らその身を差し出したのだから、襲われたわけではありません」

「貴方はその身を私に差し出してはくれないのかしら？」

「生憎、あんたは飢えてなさそうだからね——それでも私たちを喰いたと言つのなら、その『本気』とやらを出すことね。でないと、その欲望は一生満たされないだろう」

「『本気』は出さないと言つたでしょう。だから、貴方たちのルールに従つて、『ごっこ遊び』に興じてあげるわ。強き者は、相手のフィールドに降りて戦うものなのよ」

「それで負ければ身も蓋もないわよ。王位失脚も目前ね！」

「言つてなさい——我の前では、真っ直ぐ歩むことも儘ならぬ。永久に目的地へ辿り着けぬまま、倒れ朽ち果てるがいい！ 汝の命を全て我に捧げよ！ 暴君『苛政は虎よりも猛し』！」

檻音が拳を高々と振り上げると、その上に小さな光の球体が生まれた。

赤く燃えるように輝くそれは、みるみる内に肥大して、人間一人

を軽く呑み込んでしまうような大きさまで成長した。

「民を統括する賢明な術は『生かさず殺さず』——言の葉一つさえ漏らす気力も無くなるまで、^{なぶ}騁り甚振り玩^{もてあそ}んでくれよう!」

放て、という王の言葉と共に、球体から無数の光線が発された。

それは無差別的な破壊と言って良かった。

赤い光線は触れた全てを燃やし、砕き、薙ぎ払う。

床も壁も天井もない、無事に済んでいるのは檻音の付近だけだ。

いや、そしてもう一ヶ所。

「……雷符『エレキテルの龍宮』」

弾くような音と青い光がそこから生まれた。

青い光は半球となって、腕を伏せるように広がる。対する赤い光はその壁を突き抜けようとしたものの、中の標的に届くことはなく、バチバチと音を立てながら小さく爆ぜるように散っていった。

やがて赤い光の暴走が収まると、青い光もすつと消えた。

「ちよつと衣玖ー、レーザー防いでくれたのは助かるけど、狭いわよ」

「我慢してください、総領娘様。本来ならもつと強く広い防壁となるのですが……生憎と、ここに雷が落ちることはなさそうですので、青い電光に包まれた者たちは、檻音の攻撃を無事に耐えきつたらしい。緊張感に欠けた口調で場に似合わぬ軽口を言い合っている。

それに気力を削がれることもなく、檻音は既に次の行動を開始していた。

「全方位防御か……でも、防ぐのに精一杯だった割に、随分と余裕じゃない?」

「——っ!?!」

檻音は後ろに回り込んだ。王の瞳に移り込むのは、紅色の衣を羽織る少女の不意を突かれた表情。

当然、（手を抜いた上でだが）彼女に容赦をするつもりは全くない。

「やっぱり、面倒なのはお魚さんの方ね。先に潰しておきましょう」

か」

獅子の少女は大きく手を広げる。周囲に、人間の頭程度の大きさの赤い光弾が幾つも散らばった。ばら撒かれた光弾はある時ピタリと空中に停止し、もごもごと形を歪めたと思えば、獅子の頭のような形に変容する。小さな獣たちは低い呻り声を出しながら、檻音の周囲を飛び跳ねるように回り始めた。

動けない衣玖エモに止めをさすべく、百獣の王は何人にも逆らえぬ号令を発した。

「今回は小さめだけど、これで十分でしょう——我に従いし野獣たちよ、道無き道を踏み荒らせ！ 獅子『百獣闊歩』！」

「甘いわよ！」

小さな獣たちが衣玖を目がけて飛び出していったと同時に。

檻音の背後には、更にもう一人が回り込んでいた。

「何……っ！？」

「これだけ近いなら避けられないでしょう——剣技『気炎万丈の剣』！」

緋色の輝きを纏った剣が、目にも留まらぬ速さで振り回された。

その一振り一振りから発される鋭利な弾幕が、背を向ける檻音に斬りかかる。

「くっ……狩人『百万回死んだ猛者』！」

スペルカードの宣言を聞いて、天子は一度攻めの姿勢を解き、反撃を受ける構えを取った。しかし。

「ぐっっ……！」

しかし、何も起こらない。気質の刃を弾くことも躲すことも逸らすこともなく、檻音はただあるがままに、弾幕を受け入れた。

「何よ何よ、何かしてくるんじゃないやあなかつ——」

「総領娘様、周りを！」

「——え？」

その言葉にとりあえず左手側に目を遣った天子は、衣玖が何を言わんとしていたのかを即座に悟った。

赤橙色と青白色の丸い光弾たちが、天子の正面を除く全ての方向に散りばめられている。無論、その狙いは天子以外にない。

身構える時間すら与えられず、彼女の身体は二色の光に呑み込まれた。

S t a g e . 4 - 1 1 < 永江衣玖 : 4 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 6 3 5 4 4 /

「……っ、やられたわ。まさか、我が身を傷つけてまでも反撃してくるとはね」

「……それは私の台詞よ。まさか、襲われているお魚さんに構わず私の後ろを取るなんてね」

互いに大きな一撃を与えた二人だったが、まだ戦う気力と体力は残っていた。

共に服装は、衣服としての役割を半分以上失っているのではないかと思わせるほど、斬り刻まれ焼き裂かれている。特に元々露出の多かった檻音は、全身の傷が誇るように生々しく浮かび上がっていた。天子の側も、目に見えた生傷はないが、似たようなダメージを受けているに違いない。

その状況を吐き捨てるように、ふん、と天子は氣取った笑みを浮かべた。

「だって、あれくらいの弾幕でやられる衣玖ではないもの」

「……いや、それはいくら何でも、期待しすぎだと思うのですが」「何言ってるのよ、実際無事じゃない」

「いくらかまともに喰らったので、少なくとも無事ではありませんがね」

批難するようには言ったが、天子より被害が少ないことは目に見えて明らかだったので、語勢を強く言うことはできなかった。

だが、互いの安否を気遣う暇はない。檻音は次の行動に移ろうとしている。先程のような隙を作らないためにも、迅速な反応が必要だった。

「最早小細工は使っまい。貴様らはまとめて血の海に沈めてくれる——さあ、血税徴収の時間だ！ 支配『アトロシーヤス・キングダ

△「！」

言った瞬間には、何も起こらなかった。だからこそ、天子と衣玖は不可解な表情を浮かべつつも警戒を解かない。先程のような攻撃が待ち受けているかもしれないからだ。

そして、警戒から一步を踏み出さなかった彼女たちの判断は正解だった。

「――下から!?」

床に小さな円状の赤い光が灯った。

直後、そこから天井へ向けて一直線に光が奔^{はし}った。

衣玖の放つ、天より来たる青い稲妻とは真逆。

地獄より呼ばれし赤い雷が、炮烙^{ほうらく}の柱となって彼女たちの眼前を貫いた。

「熱っ!」

赤光の柱に最も近かった天子が、飛ぶように後退した。だが、その時にはもう既に柱は消え去っていて、代わりにまた近くで別の柱が燃え上がった。

足元から次々と噴射する火柱を避けながら、天子は小さく言った。
「本当に面倒な弾幕だ。あいつの動きを見ている余裕がほとんどない」

「こちらが鰹節のように踊っている様を楽しんでいるようですが」

「……貴方、仮にも龍宮の使いなのだから、もう少しエレガントに『龍の舞』とか、その辺りの言葉を選びなさいよ」

「そのような荘厳な雰囲気ではないので……おおっと。とにかく、何もしてこないところを見ると、こうしている間は動けないのかもしれない」

「そうかもね。でも、このままじゃあこっちも動けないよ――って、いい加減熱いのよ!」

火柱の上がる間隔は、そう速くもない。ただ、隙をついて檻音へと一気に接近できるほどのない。

敵の動きを気にしながらでは、その場で避け続けることが精一杯

だった。

「だけど、当たってもいないのにこの熱量……直接触れると、結構危ないわね」

「いや、大体の弾幕は触れると危ないですよ。だから私たちは、彼女たちは、避け続けているのです。いつもと何ら変わらないでしょう」

「避け続けていても、反撃できなきゃ勝てないわよ！」

言って、天子はどこから出現させた大きな岩の塊——要石に力を込め、針のような弾幕を再び放出した。様子見なのでそもそも期待していなかったが、やはり檻音は薄く笑うだけで、随分と余裕を持ってその攻撃を回避した。

だが、こちらに何かを仕掛けてくる気配はない。

「——どうやら誘われているようね。ここは乗って、近づいてみようか」

「わざわざ敵の誘いに乗るのですか？」

「あーはいはい確かに危険よ危険ですよ言わなくても分かるわよそれくらい……だけど、このままではジリ貧になってしまう」

「それはそうですが……」

「反論できないのなら行くわよ。このレーザーは私たちを追っているようだから、左右に分かれて負担を減らしつつ、挟み撃ちにしてやりましょう」

「……了解しました」

衣玖の言葉尻に合わせて、二人は互いから一気に距離を取った。

一度離れたからには、檻音の位置まで止まらず駆けるしかない。

光の円が床に描かれてから柱が発生するまでには、多少の時間差がある。少し先を見ていれば、赤雷に身を焼かれることもないはず

「あああああああああああああああ——！」

「総領嬢様！？——きゃあああ——！」

天子のものとしか考えられない叫び声に、しかし行動は許されな

かった。

避けたと思っていた火柱が、服の先端を焼いたのだ。

「――ぐっ！」

そして更に追撃。後ろに避け、赤光の残滓を見たことで、衣玖は全てを悟った。

柱の太さが先程の倍以上になり、発生する間隔も明らかに短くなっている。恐らく天子は、この変化に吞まれてしまったのだ。

「衣玖、戻りなさい！ 今すぐ！」

だが、すぐに天子の声が届いた。衣玖は反射的にそちらへ声を返す。

「総領娘様、無事なのですか！？」

「いいから早く！」

天子の作戦が失敗したことは分かっていた。やはり二人は誘われていたのだ。

だから素直にその言葉に従い、元いた場所まで戻ろうとしたが。

「……え？」

視界が回った。

それは、衣玖本人にとっては、天地がひっくり返ったかのような感覚だった。全く意識していない動きを、自身の身体は取っているいや、とても自分の身体とは思えない。まるで別の意志を持った身体を与えられているようだった。

「ぐあ……あっ！？」

無理な動作によって全身が軋みを上げる。激痛が見舞われたところを、更なる脅威が襲いかかる。

雷を招来するための赤い円陣が、衣玖の足元に広がった。

Stage・4-12 <永江衣玖：5>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/170875/

「――衣玖！」

火柱はしかし、彼女を焼き散らすことはなかった。

同時に柔らかい感触に包まれ、痛みがずっと和らぐ。

助けられたのだ、と衣玖はまずそう思った。

天子に抱えられ、檻音から離れ部屋の隅まで退いた。衣玖はそっ

と下ろされ、恩人に礼を言おうとしたが、憚^{はばか}られた。天子の表情は、

これまでになく荒ぶる感情で覆われていたからだ。

「世界は軌道から成り立っている」

静かに、重く、王の言葉が鳴り響く。

「物体が動けばそこに軌道が生じる。全ての物体が停止した世界など、時のない世界くらいしか存在しない。世界自体が動いているとすら言える。そして、ほんの少し、ほんの僅かだけその軌道を逸らしてやるだけで、動きを支える歯車は機能しなくなる。世界は狂ってしまう。貴方たちの動きを意図せぬものに変え、貴方たちの世界を狂わせることなんて、私にとっては造作もないことなのよ」

本気を出せばこんなものじゃあ済まないわよ、と獅子の少女は続ける。

「ここは私の『王国』なのよ？　ずかずかと王の領域に踏み込んで無事でいられると思って？　私に近づけば近づくほど、貴方たちは激しい抵抗に阻まれる。炙^{あぶ}られるような熱さに痺れを切らし、意図する道程^{みちのり}から逸らされる……もう一度言おう。ここは私の『王国』だ。このまま尻尾を巻いて逃げるのならば、追いはしない。王の威厳を以て約束しよう」

さあ、どうする。

問い掛けに、俯く反逆者たちの導き出した答えは。

「……そう。そうね、確かにここは退くしかなさそうだ」

「そう。ならば、このまま帰るべき場所へ帰ることね。貴方たちを食べられないのは残念だけれど、結構楽しめたから良しとするわ」

檻音は小さく溜息を吐くと、瞳を閉じてふるふると頭を振った。

このまま終わってしまうのは名残惜しいと、そう感じているのだろう。その気持ちは分からなくもないが、故に衣玖は癢に感じてしまった。天子の考えていることを悟り、そう思ってしまった。

どうやら敵を喜ばせるような真似をしなければならぬらしい、と。

「——ねえ。一体、どこの誰が『帰る』と言ったのかしら？」

「……え？」

瞼を開けた檻音は、敵の姿を見失っていた。いや、すぐに見つけたが、驚きを隠せずにはいらなかった。まだ彼女たちに戦う意志が残っていた、ということに。

天井近く、浮かび上がった岩の上に、天人と龍宮の使いが乗っていた。

「まだ……まだ貴様らは牙を剥き続けるというのか！」

赤い雷が立ち上り、要石の下端に当たって弾け消えた。檻音から十分に離れている場所では、要石を砕くほどの威力を出すことはできない。そして、下から攻撃が来るのなら、上に昇って下方向に防壁を張れば良い——たった、それだけのことだった。

地に足をつけた足掻き程度で、比那名居天子は止められない。

「ふん、この程度で終わ리と思わないことね——還るべき場所へ還るのはあんたの方よ！ 乾坤『荒々しくも母なる大地よ』！」

瞬間、岩塊内部第二階層の床が、今度こそ跡形もなく砕け散った。

「近づけば弾幕が厚くなるというのなら、遠くから狙い撃てばいい。それを確かめるためだけに、あんたの誘いに乗って近づいてあげた

のよ。まあ……想定外のダメージを受けたことは、素直に認めるけどね」

「おお。総領娘様が、総領娘様が自らの否をお認めになった……！」
「いやいや、何を感じ動してるのよ、衣玖……それはともかくとして、しかし、貴方も随分タフなのねえ」

フロアの奥半分は瓦礫の山と化していた。だが、その崩壊に巻き込まれたはずの檻音は、その上に悠然と立っている……いや、余裕ぶってこそいるが、重い一撃が全身に響いているようだった。

「お褒め預かり光栄ね……でも、流石にちょっと疲れてきたわ」

「それに関しては同感ね。もっと早く終わらせるつもりだったのに」「そう……ならば、望み通りすぐ終わらせてやろう！ これで最後だ——王符『前人未到の絶対領域』！」

赤とも青とも取れぬ淡い輝きが檻音を包んだ。

薄い膜のような表面を、小さな光の粒が隆盛の如く縦横無尽に駆け巡っている。美しいが——ただそれだけ。他に何かが起こるわけではなかった。

「大層な事を嘯うそいておいて、結局壁を張っただけ？ ただ護っているだけじゃあ、私たちを喰らうどころか、追い出すこともできないよ！」

天子は先の尖った岩を弾丸のように撃ち出す。衣玖もそれに合わせて雷弾を数発放つ。

「——無駄よ。様子見程度の攻撃だけじゃあ、私を倒すどころか、先に進むこともできないわ！」

二人の弾幕が光の膜に触れた。瞬間、弾幕が全く別の方向へと向きを変えて飛んで行く。

だが、驚きはしない。タネは既に分かっている、あの膜に触れたものの軌道を変えているのだ。

「成程、ならばここは私が行くべきですね」

「……何が『成程』なのか教えてくれるかしら？」

「聞くまでも無く、総領娘様も感づいていらっしやるでしょう——」

「お喋りする暇なんてもう与えないわよ！」

戦いの狂喜に満ちた声が届く前に、檻音が二人の間へ飛び込んできた。

見切っていたのか、天子と衣玖は互いから離れるように突進を避ける。

「こつちです！」

敵から離れつつ、衣玖は光の球に包まれた檻音へ向け雷撃を放った。

当然弾かれるが、気にしない。衣玖の意図した通り、攻撃的な視線が彼女へと向けられた。同時に檻音の足が床を離れ、目で追うのも難しい速度で再び突進を繰り返してきた。

光球の表面、膜に触れれば、そこで動く者は軌道を逸らされ全身を歪められてしまう。しかし、だからこそ、真正面から叩かねばならない。

離れた天子にも届くよう、衣玖は大きな声でこう言った。

「——相手はあの膜を盾に接近戦に持ち込もうとしている！ ならば、こちらでも力勝負で挑むしかありません！ 棘符『雷雲棘魚』！」

衣玖の全身が青い光に包まれ、バチバチと強い音を立てながら棘のように電撃を放出し始めた。身を守りつつ触れた者を刺す、差し詰め刃の鎧だ。「侵入者」の軌道を狂わせる檻音の光球に似たものと言える。

そして、鎧を纏った衣玖の行動は。

「槍を突き出し——動かない」

それは、自身の運動を停止させる事により「軌道」の生成を防ぎつつ、突進してくる相手の勢いを逆手に取り貫かんとする構えだった。だが。

「考えたようだが、その程度の小細工など通用しない！」

檻音は自身の軌道を変え、錐状に固められた紅色の衣を避けた。それは衣玖を避けたようにも見えたが、周りに広がる光の膜が彼女に触れていた。

だが、それだけでも檻音にとっては十分だった。

十分過ぎるほどに身勝手で、しかし絶対的な「領域侵犯」だった。

「ぐ……うつ！」

己の内の「何か」が狂わされ、衣玖はその場に崩れ落ちた。

未だ青電の光を発する衣玖の背中を踏み付け、檻音は高らかに言う。

「『軌道』を生む行為は即ち『移動』！『移動』の為に必要となるのは即ち『速度』！貴様が『停止』していようが、我が『移動』すれば、その分だけの相対的『速度』が生まれる！そこに『軌道』が生まれる！」

「……………っ！」

「『停止』は罪！動かぬ民は我が王国に不要なり！なれば、その血肉を以てせめてもの贖罪とせよ！さあ、残るは貴様だけだ！貴様もこの魚と同じように、世界の歪みに吞まれ揉まれて潰されるがいい！」

S t a g e . 4 - 1 3 < 永江衣玖 : 6 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 7 2 2 5 0 /

次の標的として睨まれた天子は、嘲笑するような顔で檻音を挑発した。

「へえ……世界を歪ませるだなんて、まるで神にでもなったかのよ
うな物言いね」

「そうだ、この力をもつてすれば、神と成ることすら不可能ではない！」

天子はまたも「へえ」と適当に返した。王の演説には興味がないらしい。

彼女の興味はそれよりも、王の足元へと向けられていた。

「……どうした？ 怯えて足も動かないか？」

様子をしばらく眺めていた天子は、やがて冷静に「ああ」と呟いた。

「『力勝負で挑む』っていうのはそのことだったのね……ええ、ならば貴方の勇氣と苦痛に応えましょう。もうこれ以上、あの欲望塗れの卑しい獣の言葉など耳に入れたくない。だから、これで今度こそ終わらせる！ 気符『無念無想の境地』！」

衣玖の「青い電光」と同じように、今度は天子の全身から緋色の光が発された。

力には力で——彼女の選んだスペルカードは、自身の身体強度を大幅に高めるものだった。

それを感じたのか、檻音は生えた芽を取り除くかの如く、素早く天子を潰しに掛かろうとしたが——

「——くっつ！？ か、身体が……？」

「『身体が痺れて動けない』——ですか？」

檻音の口が震えながらも「な、に」という言葉を発そうとする。

だが、ちょうど強い痺れの波がやってきたのか、それが声になることはなかった。

「簡単なことなのです」

動かない——動けない衣玖の「軌道を逸らす」ことは、もうできない。

痛みから解放され、それでもやや苦しそうな表情を浮かべたまま、彼女は小さく微笑む。

「私が『停止』して、貴方が『停止』すれば、後は総領娘様が少し我慢すれば良いだけなのですよ。どうやら『速さ』が小さいほど、軌道を逸らすことのできる度合いは小さくなるようですからね」

「くっ……」

凶星なのか、強い痺れを感じたのか、檻音は苦悶の表情を浮かべる。

「『停止』は罪……確かにそうかもしれませんが。今はこうしてそれを強要されているとはいえ、それは怠惰以外の何物でもない。ならば、『停止』してしまった貴方もまた、相応の罰を受けるべきでしょう」

「ちいつ、下等生物が生意気にも……！」

「——生意気なのは貴方の方よ」

目前から発された声に、檻音はびくりと身体を振るわせた。

それは、彼女がこの戦いで見せた、初めての「恐怖」だった。

恐怖が、己を絶対とする王の領域に、足を踏み入れた。

「ふふ、ふふふふ。ああ、痛いわねえ。痛いわねえ。自分の思う道を行けないというのは、とてもとても痛いわねえ。痛くて痛くて痛くて痛くて……あまりの痛みに、有頂天に達してしまいそうだ！」

「っ……な、生身で『領域』を破った!？」

膜——境界を越えられたとはいえ、いくらゆっくり動いているとはいえ、未だ堪えがたい激痛が「侵入者」を襲っているはずだ。それなのに、「侵入者」は痛みを感じていないかのように笑っている。

痛みを受け入れてなお、笑い続けている。

「——ところで、神様になりたいと身の程も知らずのたまう王様は知っているのかしら？ 日本には『痛み分け』という、博愛の精神に満ちた素晴らしい言葉があるのよ」

「ぐ……がはっ！」

首根っこを掴まれた檻音は、そのまま勢い良く床に押し倒された。お前の目指す神は、どうやら全知全能の神らしい。万能故に痛みを負うこともない。だが、痛みを忘れることはできても、消し去ることは不可能だ。ならば、私と衣玖と、二人の貴方——全てに等しく分け与えましょう」

基のと今のと二人分、甘んじて受け入れなさい！——天子は言つて、握った拳を大きく振りかざした。

「はああああああああああああああああっ！！」

「がああああああああああああああっ！！」

直後。フロアに、二つ目の穴が穿^{うが}たれた。

一人の王と一つの王国が、大きな瓦解の音と共に崩落した。

「衣食^{えじき}の中に道心無し——その際限のない貪欲と渴望は、お前を永遠に地に這^ひわせる縛^{いまし}めとなるだろう。そう、欲を以て民を従える王が神と成ることは決してない。先^まずは己の住まう世界が矮小であることを知れ」

勝ち誇つて天子は言ったが、その声は相手に届いていないようだった。

「……あの人、完全に伸びてますよ、総領娘様」

「え、何よ何よ、天人様からのありがたい言葉なんだから、姿勢を正してきちんと聞きなさいよね」

「いやだから……それに、総領娘様の言葉はあまりありがたくありませんし」

「あんたも正直者ねー。『言わぬが仏』という諺を知らないのかしら」

「混じってます。貴方が間違えないでください」

「分かってるよ。にしても、面白味に欠ける連れないツツコミねえ」
監視役にそんなことを——と衣玖が反論しかけた時、重い者同士が激しく衝突するような音が階下から響き渡った。

直後、ずずうん、と地震に似た揺れが彼女たちの全身に伝わってくる。

「……衣玖、今の音、聞こえたわよね」

「ええ。どうやら下の階で、何か起こったようですね」

「先に行った三人……じゃ、ないわよねえ」

「そうですね。新たに侵入してきた者たちがここに住む別の者と交戦している、という可能性が高いです——行つて、様子を見てみま
すか？」

「それがいいかもね。私たちは役割を果たしたんだから、もう自由に動いていいわけだし。奥に続く道も、瓦礫に塞がれちゃったし。

それに、敵味方問わず、戦力の把握をしておくことは大切よ」

ふふ、と衣玖が笑う。

理由が分からず、天子は怪訝な視線を向けた。

「ああいえ。『味方』だなんて、総領娘様らしからぬ言葉だと思いまして」

「……ただ現実が一番近い意味の言葉を使っているだけよ。人間の作つた言葉は、純然たるものを表すため身勝手に定められた一種の穢れ。真実の実体を言い表すことはできないわ」

「何だか必死な言い訳ですね」

「あんた、自分が思っている以上に空気読めてないわよ……」

そうですか、と首を捻る衣玖に、天子は肩を竦めるばかりだった。

「——ところで衣玖、傷は大丈夫なの？」

悟られまいとして動きがきこなくなっている様子を見て、天子は言った。あれだけの攻撃を受けたのだ、満身創痍になっていない

のが不思議なくらいだった。

もちろん、服は所々破れたり切れたりしてしまっている。鬼ほどではないのだろうが、檻音の自慢していた「パワー」の凄まじさが如実に表れていると言って良かった。衣服の内側も、見た目以上に損傷を受けているのは間違いない。

衣玖は短くなった羽衣の先を名残惜しそうに弄びながら、こう答えた。

「多少痺れるような感覚はありますが、特に問題ないでしょう」

「何が問題ないのよ。この先、さっきみたいにいつでも助けられるわけじゃあない。役目を果たすのも大事だけど、その前に我が身を守りなさい。それが、その身体を持って生まれた貴方の、自分に対する義務よ」

「……痩せ我慢して殴り合いをする貴方に言われたくありません」

ともすれば——いや、確実に、天子は衣玖以上のダメージを受けている。天人の肉体が頑強なものとはいえ、あれだけの攻撃を受けて堪えないはずもないのだ。

だが、天子は頭の後ろで腕を組み、甚く面倒そうな溜息を吐いた。「あーもー、口の減らない魚ね。——まあでも、ここから出る方法も分からないしねえ。倒す前に聞いておけば良かったわ。とにかく、下に行ってみるかなさそうね」

「入ってきた場所に行けば戻れるのでは？」

「とりあえず、それを確かめるのも兼ねて行ってみましょう。この岩蔵は相当頑丈に出来ているようだけど、それでもこれだけ響いたということは——私たちみたく、苛烈な争いが起こっているに違いないわ」

まあ私は本気で遊んだ程度だったけどね、と天子は余裕の笑みを浮かべる。

「確かに、いくら何でも二対一は卑怯ですからね。妖精みたく寄ってたかって、などするほど力が弱いわけではないですし」

「そういうことよ。でも、遊びだとしても本気を出せて、なかなか

楽しめたわ。正直なところ、ここまで苦戦するとも思っていなかったけれど」

「ふむ、今日の総領娘様はやはりどこかおかしいですね。この奇妙な力に当てられてしまっ……あ、そうでした」

「そういえば、気味の悪い空気がなくなっているわね。どうしたのかな」

「ええ、そうなんです。少なからず幻想郷の住人に悪影響を与えているようなので、この力が消え去ったのは良いことなのですが……しかし、良くない予感がしますね。様子を見つつ下に降りてみましょう」

ええ、と天子が答えて二人は歩き出す。

彼女たちの姿は、音もなく階段の影に消えた。

S t a g e . 4 - 1 4 < 永江衣玖 : 7 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 7 3 3 8 1 /

S t a g e ・ 5 - 1 < パチュリー・ノーレッジ：2 > (前書き)

欲を持たぬ美女は、かつて裏切りの汚名を受けた。
真実の意味で裏切られたのは、彼女の方だというのに。

「――貴方はどう思う？」

「ええと、それは、パチュリーさんの言う『魅了』の力が消えたことに関してですか？　そうですね……目的の者をきちんと『魅了』できたので、力を使う必要もなくなった。そう考えるのが自然だと思いますが」

岩塊内部に無事侵入を果たしたパチュリーと早苗は、入口付近にあった階段をひとまず無視し、初めのフロアの廊下をそのまま直進していた。

岩塊に入る前、門番らしき鹿の妖怪が寝転んでいたのを見つけたので、パチュリーは問答無用に弾幕をぶち込むことで、その戦闘を回避した。敵の拠点へ潜入する前に本格的な戦闘をするのは気が引けたし、喘息の調子がどこまで良いかを試したかった、というものもある。そして何よりの理由は、居眠りの多い紅魔館の門番を思い出したことだ。

また館の花畑に悪戯をして彼女を困らせてやろうかとパチュリーは思ったが、やけに積極的になっている自分を自覚して、撤回することにした。肌で感じる力はなくなったとはいえ、『魅了』は世界のあらゆるものに潜んでいるのだ。己を己として常に確立させておかなければ、例えば不意の敵襲にも対応できなくなってしまう。

恐らくそうでしょうね、と気を取り直した紫の魔女は、隣を歩く緑の巫女に言った。

「逆に言えば、目的の者以外は必要ないということ。だから、この岩の周囲に距離をおかしくする魔法が掛けられていたの」

「まだその魔法は掛かっているんですか？」

「そうね。少なくとも、『魅力』が消えた時にはまだ掛かっていた

わ。まず間違いなく、今も継続しているでしょう。折角目当てのモノを手に入れたのに、邪魔をされたくはないでしょうからね」

「ああ、だから上から誰かが戦っているような音が聞こえたのですね。それでも入ってきてしまった邪魔者を、排除するために」

その通りよ、とパチュリーは頷いたが、その視線は早苗とは反対の方向に向けられていた。

二人の進行は決して速くない。パチュリーが「もしかしたら罠があるかもしれない」と言つて、廊下の隅々をチェックしながら進んでいるのだ。早苗としては「さつさと先に進みたい」ともどかしい思いに苛まれるばかりなのだが、消極的が実体化したような魔女が好奇心を理由にして動いているのだから、彼女も内心うずうずしているに違いないと思うことで納得した。

「でも、私たち、上に行かなくて良かったのですか？」

「どういうこと？」

「だって、苦戦しているかもしれないじゃないですか。如何に霊夢さんや魔理沙さんといっても、何をしでかすか分からない外界の者が相手では、そう簡単に突破できないでしょう。パチュリーさんが言うには、それなりの實力を持った者がこの中にはいるみたいですし」

「何をしでかすか分からない外界の者、なんて貴方も同じじゃない。多少實力があるのは認めるけれど、ここは幻想郷。この程度の戦いなんて日常茶飯事、いつもと同じでしょう」

それでも貴方と会うことになるとは思わなかったけれどね——開いた本をぱたんと閉じながら、パチュリーは皮肉っぽく言った。あまり一緒にいたい相手ではないようだ。

しかし早苗はその程度の皮肉など気にも留めず、

「いやいや、こんなに大きな岩が突然出現しただけでも怪異なのに、その中が怪しげな組織の建物みたくなっているんですよ？ 敵の本拠地待ち構えている者が、強力な敵でないわけがありません」

ロボットが出てきそうにないのは残念ですが……と本気で落ち込

む早苗を見て、パチュリーも本気の溜息を吐いた。自分は自分で目的があるというのに、お気楽少女に構われるなど不幸以外の何物でもない。しかし、かといって「ならそのまま上に行けば？」と言いつつこともできなかった。いざという時の護衛や囷として、奇跡の風を操る巫女は役に立つ可能性が高い。

だが、彼女はこの時既に、「一人では目的の場所まで辿り着けないかもしれない」と無意識の内に感じ取っていたのだろう。

「とにかく、このまま先に進むわよ。上の方はあっちに任せておけばいい。先に行った者たちが通った痕跡のないルートを選ぶことで危険と遭遇する可能性を減らすのよ。それに、上が行き止まりでないという保証はどこにもないしね」

「何だか消極的ですねえ」

「それが私だもの」

「実は、自分のやりたいことを邪魔されるのが面倒なだけだったりしません？」

「実はも何も、それしかないわよ。むしろ、今まで気づかなかったの？」

「いえ……それにしても、変な人ですね、パチュリーさんは」

「魔法使いよ。まあ、人間にとっては別種の魔法使いなんて皆『変』になるのでしょうけど。それに、私にとっては貴方の方が十分『変』よ。もちろん、人間としてね」

「そりやもう、私は現人神ですから」

「……ええ、まあ、そういうことにしておきましょう」

そう言つて、パチュリーは足を止めた。

何か「畏」を見つけたのだろうかと思つて覗き込んだが、そのような様子はない。何事かと尋ねると、

「——どうやら、この先にも敵が待ち受けているようね」

「そうなんですか？」

こくり、と無言の頷きが返ってくる。

「距離を狂わせた魔法使いとは違うみたいだけれど……小さくない

魔力を感じるわ。それも、私の使う魔法とよく似ている」

「パチュリーさんの魔法……確か、七曜の属性を操るものでしたっけ」

早苗はパチュリーの持つ本をジロジロ見ながら、やや不安げにそう言った。

“火” “水” “木” “金” “土”の五行に“日”と“月”を加えた七つの属性の魔法を使いこなす「一週間少女」、それがパチュリー・ノーレッジだ。複数の属性を同時に操ることも可能で、相性の良いもの同士を組み合わせることはおろか、互いの性質を阻害する属性を合わせる離れ業もやってのける。

その手の魔法に詳しくない早苗には、説明をしても「ほえー」としか反応が返ってこなかったが、「何だかよく解りませんけど凄いですねえ」と言われてパチュリーは少し満足した。

「しかし、相手は最低でも五行は扱えると見て良さそうね」

「それで、どうします？ その魔法使いと交戦しますか？」

早苗の質問に、パチュリーははつきり、ええ、と答えた。

「私が行くわ」

「ええっ！？ でも、貴方には他の目的があるんじゃない？」

「貴方だつてここで無駄に戦うためにやって来たわけではないでしょう。そして、私の目的はこの岩の中を探検することよ。岩の中で自分と似た者に遭遇すれば、観察したくもなるでしょう。何か他の情報が得られるかもしれないし」

「はあ……そんなものですか」

「だから、貴方は先に行っていなさい。ついでだから情報収集しておいてくれると、後々手間が省けて助かるわ」

二人の前には、金属製の重厚な扉があった。魔法を使わずとも、手動で開けられるタイプのものだ。その前後を完全に隔絶しているように思えるが、中から魔力が漏れ出している。扉が開けば、もう少しそれが強いものになるだろう。

パチュリーはその魔力が自分より上だとは思わなかったが――似

て非なるもの、別方向への異質さもまた感じ取っていた。

「中の敵は私が惹きつけておくから、貴方はその隙に先へ進みなさい」

「分かりました。では、先に行つて待つていますね」

「待つていなくていいわよ。追いついた時に、色々教えて頂戴」

「……………」

黙った早苗が何を考えているのか、パチュリーには分からなかった。

少しの、しかし知識の少女にとっては多くの「分からない」に囲まれたまま、彼女は扉を開いて未知の世界を迎え入れた。

Stage・5-1 <パチュリー・ノーレッジ:2> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/174806/

「これは……！」

思わず、吃驚と感嘆の声を漏らしてしまった。早苗の姿が見えなくなるまで意識的に我慢して、それでもなお耐えきれずに出てきてしまった声だ。

それは、今この空間にいるもう一人に届くことはないだろう。だが、この驚きだけは、しっかりと伝わっているはずだ。

「そんな……しかし——こんなことが、あり得るの？」

抑えきれない言葉が、まるで他人の口から出ているように聞こえる。

パチュリーの視線の先、十メートル弱離れた位置。

青い野球帽を被った少女が、金髪のツインテールの片方を弄りながらこう言った。

「あー、緑の人が先に行っちゃった。どうしよう、おりねえ檻姉に怒られる……」

ただ、敵を目の前にしていつまでも放心状態になっているわけにもいかない。パチュリーは雑念を取り払い、来たる闘争を有利に進めるべく、役に立ちそうな情報をひたすら集めることにした。

どうやら少女は、「檻姉」なる人物と二手に分かれて侵入者を待ち構えていたらしい（片割れは、上のフロアで戦っている者だろう）。岩塊内にはこの二人以外にも大きな魔力を持つ者が少数存在しているが、先行する博麗の巫女たちが抑えているのか、こちらに乱入してくることはなさそうだった。

……と、新手の登場を心配しているのは、パチュリーが目の中の少女たった一人のために、大きな苦戦を強いられそうだと感じたからだ。

少女から発される匂いは、魔法使いのそれというよりも人間や妖怪のものに近かった。人間と妖怪のどちらなのかは区別がつかない。両方の匂いが混じっているようだ（人間としての匂いの方が少し強い）。つまり、恐らくは半人半妖なのだろう。

ただ、少女の持つ魔力はそこまで大きくない。妖怪としての力も強くないし、それを補うための経験も十分には重ねていないように見える。先にも感じ取っていたように、その魔力はパチユリーが慣れ親しんでいるものとよく似ているが――問題は、「量」ではなく「質」の方だった。

魔法とは、人工的に自然の理を歪めることによって「本来なら起きないはずの現象」を発生させる手段である（現実とは異なる理を敷き、その上で行使する魔法もあるが、ここでは語らない）。つまり自然という存在、概念に直接干渉するのだが、魔力とは一般的に「どれだけ大きな歪みをそこへ与えられるか」という尺度を示す。歪みが大きければ大きいほど、反動として返ってくる現象も強いものとなる。膨大な魔力を持つ者は、それに見合うだけの強力な「自然現象」を行使することができるのだ。

ところで、魔力の量だけでなく、その質も魔法を使う上で無視できないものとなる。簡単に言えば、「得手不得手」の問題だ。パチユリーは努力の成果もあって七つの属性を操ることができるものの、他人に同じことが出来るかといえば当然そうではない。“火”を得意とする者もいれば、“木”の魔法を好んで使用する者もいるだろう。己の魔力の性質に気付かず、あるいは知っていて敢えて別属性の魔法に注心する者も中にはいる（よく本を盗んでいく黒白魔法使いがそうだ）。

このように多少の偏りがあるのは良いが、一方向に特化しようとしても限界があつて、それを破るためには他の属性の研究もしなければならぬ。実践的、理論的という差異こそあれ、魔法は科学と同じで、自然の理を解明するのがその理念だ。例え苦手な分野であっても、探究の精神が必要なのである。

このように得意と不得意が生じるのは、魔力が自然そのものにとだけ近いが、それに個人差があるからだ。魔法は自然を外から挟こじ開けるものではなく、内に同化して作用を施す行為である（もちろん例外もあるが）。故に必然、同じ魔力量を持っていたても、質の違いによつて結果として生じる「現象」の強度には差が出てくる。量に差があつても、高い質を維持できる得意な属性の魔法を使うことにより、それを埋めることができる。

パチュリーは、早苗を先に行かせるために少女と交戦した僅かな時間で、少女の魔力の質を量り取っていた。そし分かつたのは、少女の魔力はパチュリーも操る全ての属性について限りなく自然に近い質を有している、ということだった。限りなく、ですら表現として生温い。それは、自然そのものと言つても良かつた。自然の力を借りる（あるいは利用する、か）のではなく、自然そのものを動かしていると言つても過言ではない。大した魔力を持たない、そもそも魔法使いですらない少女がそれだけの質を持っているとは、どうにも考えられない話だった。

パチュリーですら、魔力から不純を完全に排することができずにいる（「ほぼ」取り除くことには成功しているが）。魔法使いは純粹を求める性を持つが、それは永遠に極めることができないからこそ、「性」として認められているのだ。純粹を得るためには純粹が必要となる。よつて、初めに不純しか手に入れることの叶わなかつたこの世界の住人に、純粹を生成することは理論上不可能なのである。これが、他のどんな原理よりも先立つ世界の理である——はずだった。

しかし、紛うことなき「完成」が、パチュリーの目の前にあつた。それは彼女にとつて、岩塊中心部から発せられていた謎の力よりもずっと大きな、『魅了』の力だった。

「……うん、だから、せめて、この人だけでも足止めしよう。しなきゃ」

俯いて何やらぶつぶつ呟つぶやいていた少女は、そう言つて顔を上げ、

パチュリーを見た。

初め見た時は、外界で流行っているらしい派手な衣装で、内面も似たようなものだと思っていたのだが、何とも自信のない、気弱そうな顔だ。魔法使いに特有の熱意も感じられない。そんな少女がどうやって「完成」に行き着いたのか、疑問は膨らむばかりだった。

「北方の我が子を護る哀憂の大熊様——どうか、私に力を！」

「——っ、魔力が増大した!？」

少女は、首に提げた鍔やじりのような形をしたペンダントをぎゅっと握りしめる。すると、少女の内にある大きな力が解放され、先刻よりもずっと強い魔力が発されるようになった。匂いが、妖怪としての色味を増した。

「ごめんなさい、と少女は敵であるはずのパチュリーに頭を下げる。関係無い人はここから追い出せ、って言われてるから……」

「……謝る必要はない。どうせ私も、戦うつもりでいたんだから」少女の力はまだ、致命的な脅威とまでは至っていない。彼女の持つ魔力には心惹かれるが、しかし惹かれたままではそれでも負けてしまいかねなかった。格下だからと言って油断は禁物。故に、「これ以上」がやってくるまでに、芽を摘み取っておくべきだろう。

数分前に早苗が言った通り、何をするか分からない者を相手取るのは相当な注意を要する。日陰を好み漁り尽くした知識を誇るパチュリーにとって、最大の敵は「未知」「正体不明」なのである。

「あの……名前、聞いてもいいかな？」

「これから戦うって時に、悠長に自己紹介でもするつもり? —— まあいいわ。私はパチュリー。パチュリー・ノーレッジ。どこにでもいる何の変哲もない魔女よ。貴方は?」

「いや、何の変哲もないって……ああ、ええつと、ごめんなさい。私はナビユールだよ。ナビユール・カリストニフ。幻想郷こっちでは、一応、『妖怪』ってことになるのかな」

「そう。で、そのナビユールさんは私を足止めすると言っていたけれど、残念ながらそれが貴方にできるとは思えないわね。私の歩み

を遅らせることは確かにできるでしょう。だが、それだけだ」

「……………」

「それに、私を止めたところでその意味は薄いわよ。貴方の言う『檻姉』という者は、先にこの岩の中に入った巫女たちが相手しているでしょう。どれだけの実力があるかは知らないけれど、それ以上に巫女たちは強いわよ。全員を止めることはできないだろう。それでも、貴方は戦うの?」

大熊の少女、ナビユールはしばらく黙って、そして、強く頷いた。「私はそれでも、やらなきゃいけない。貴方の目的が何であつても」
「なら、そうするといいわ。私は、私の目的を突き通すために、貴方と対峙する。ただそれだけ。戦いはとても単純な^{シンプル}ものよ。まるで真理のようにね。だから魔法は、戦場で使われることを良しとした」
「貴方の方こそ、退くつもりはないんだね……………」

甘えとは思えない言葉に、今更の愚問よ、パチユリーは吐き捨てた。

「私の剣は貴方を貫き、私の盾は貴方を防ぐ。対する貴方が武器を取れば、そこに戦いが生ずる。それはある意味において『真理の探究』に他ならない。さあ、戦いましょう、争いましょう……………今日は喘息の調子もいいから、流れ動く全ての知識を掴み取ってやろう!」
敵の勢いに怯んだのか、ナビユールは僅かに後ずさった。しかしすぐに、右足を強く床に踏みつけることで、呑まれかけた心を取り返す。そしてようやく、少女からはつきりとした敵愾心^{てきがいしん}が放たれた。その刃のような視線を放つ瞳は、紛れもなく「狩る者」のそれだった。

大熊の両眼に灯る昏い輝きが、魔女という獲物を照らし出した。「パチユリーさん、貴方はきっと強い。私じゃ勝てないかもしれないくらい。でも、痛いのは嫌だけど、少なくとも貴方だけは上に行かせない。私たちのために——そして何より、この世界に生きるみんなのために!」

「そうよ、来なさい——私たちが求め辿り着いたこの地、それを荒

らす者に容赦はしない。己の無知と無力を嘆きながら、その身を森羅の糧へと還せ！」

Stage・5・2 <パチュリー・ノーレッジ:3> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/177105/

「飛ばしていくよ——月木符『サテライトヒマワリ』！」

本を開くパチュリーの頭上に生まれた黄と緑二つの光球が、宙を昇り天井へ貼りついた。

二色の球は敵へ向かって進みながら、大粒の光の雨を降らせる。

「そして、追撃——“サマーレッド”！」

火球が雨を物ともせず飛んでいった。

『サテライトヒマワリ』は相手を誘導するためのもの、本命は初めからこの火球——というわけではない。

「これくらい、どうってことないもん！」
フレズレット “息吹の籠手”！」

ナビユールの右腕に巻き付くように強い風が生じたのを、パチュリーは感じた。風の力を得た腕を薙ぐと、触れた火球が弾かれて、誰もいない方向へと飛んでいった。火球は壁に当たると、重い音を立てて消えた。

だが、壁には傷一つ付いていない。破壊を防ぐために、別の魔法でフロア全体が覆われているようだ。恐らく実力的に、これはナビユールが施したものではない。奥に別の魔法使いがいることは確かだろう。

「ほら、まだまだ行くわよ——“サマーレッド”！」

そんなことを考えながら、パチュリーは次々と火球を放っていく。熊、というイメージから、相手は近接戦闘を得意としているらしいと彼女は当たりをつけていた。弾幕で牽制し敵を近づけさせない戦法を採っているのはそのためだ（彼女自身が接近戦を苦手としているということもあるが）。

実際、ナビユールの魔法の使い道は、パチュリーの予想通りだった。七曜の属性を弾幕として放つよりも、身に纏って使うことを得

意としている。魔法使いとしての実力が下だとは言え、懷に潜り込まれれば圧倒的不利な状況に陥ってしまうだろう。持病の喘息の調子は良いが——いや、だからこそ、相手との距離は常に保つようにしておかねばならない。

そしてそれは、大熊の少女も既に悟っているだろう。だから。

「このままじゃ進めない、なら……」
アクアシールド “水鏡の盾”——」

どこからか生成された数多の水滴が、不定形であるにも関わらず一つの形を作り上げていく。それは言葉通り“盾”の姿を得、ナビユールの構えた左腕に装着された。

水剋火。パチュリーの放った火球は、盾にぶつかりとふっと消えてしまった。ナビユールは盾を突き出したまま、一直線に突進してくる。

パチュリーはそれを見て、冷静に頷いた。

「成程、違う属性の魔法を同時に使うことはできるのか……だけど、それは二属性の融合には遠く及ばない技術！ 篤と見なさい、未熟者——その剣と盾、共に打ち砕いてみせよう！ 水木符『ウォーターエルフ』——」

もう『サテライトヒマワリ』の雨は必要ない。一度放出を止めた魔力を新たに練り始めたパチュリーは、周囲に緑色の小球と黄色の小球を展開した。

小球はまばらに、大球は秩序立てて——弾幕は総じて美しく。敵を殺すためでも、倒すためでもなく。

ただ「魅せる」、それだけのために、弾幕は放たれるのだ。
可憐な少女たちによって。

「——っ！」

大熊の少女の叫びは、パチュリーの耳まで届かない。
空間全体が、目も眩むような光量に覆われた。

「ふう。気分が良いからって、調子に乗ってはしゃぎすぎたかもね。ちよつと疲れてきたわ。まだまだいけるけど」

もう十分だろうとパチュリーは弾幕を撃ち止め、額の汗を拭いた。火属性魔法を多く使っていたので、大分周りの気温が上がっていた。水を織り交ぜた魔法を使ったことで暑さも緩和したが、既に掻いた汗が引くほどではない。もつと水魔法を使うか、と考える。得手不得手をほぼ克服している彼女にとって、色々な属性を操ることは大した苦ではないのである。

パチュリーが相手の「武器」と同じ属性の魔法で対抗したのは、圧倒的な実力差を見せつけるためだ。敵の戦意を喪失させれば、それだけ不毛な戦いを早く終わらせることができるし、また結果的に消耗も少なくて済む。幸いにもナビユールは各属性間の相性についてそこそこの理解があるようなので、地力の差をより強く感じることになるだろう。

そう、パチュリーは思っていたのだが。

光の和らいだ空間。そこには、球状に巡る強風に包まれたナビユールの姿があった。

「仔熊『セオドアの加護』——貴方の攻撃は、全部防ぎきったよ」
「……武器を捨て、守りに専念したのか。その切り替えの速さと言い、貴方への評価をもうちよつと高くしなければならぬようね」
いくら魔力の質が高くとも、使用する者がそれを使いこなせねば意味がない。パチュリーはナビユールに対して「使いこなせない者」と判断していた（もちろん油断はしていない）のだが、どうやらある程度は思い通りに操ることができるらしい。魔力——自然に、彼女は受け入れられているようだ。魔法使いというよりも、妖精に近いのかもしれない。

事態は想像よりもずつと厄介なものとなっていた。相手を惑わし力量差を見せつけることに専念していれば、何時か自滅するものだとパチュリーは考えていた。ナビユールの使う魔法は、あまりにも純粹すぎる。それは相手だけでなく、自らにとっても毒となるので

は——と思っていたのだが、どうやら甘い考えだったらしい。

ただ幸いなことに、それでも敵はまだ己の魔力を扱い切れていない。魔法使いとしての鍛錬をあまり経験していないのか、使い方が非常に雑である。質のことを考慮すればこれでも十分な性能を持つのだろうが、パチュリーは気づいている。本当にその魔力が解放された時には、この程度では済まないだろう。長い年月を掛けて精錬された彼女の魔法をもつても抑えきれるかどうかは分からない。何しろそれは、暴走を始めた大自然を相手にするようなものなのだから。

「手っ取り早く済ませた方が良いとは分かっているけど……厄介ね」
全力を出して、もしも仮に止められるようなことがあれば、敵は他の侵入者を追っていくはずだ。ナビユールはパチュリーを足止めしていると考えているのだろうが、その構図はパチュリーの側からしても成り立つ。ここで敵と戦闘している間に巫女たちがこの岩塊を攻略すれば、どうしてもナビユールの意識はそちらに行ってしまう。そうなればこちらとしても都合が良い。

急がば回れ。本気を出すという選択肢は最悪の事態に陥るまで取っておくべきだ、とパチュリーは判断した。この戦いの後も、岩塊内を調べるといふ目的が彼女には残っているのだ。元々の体力が見た目の少女らしく少ない彼女にとって、余力は残っていればいるほど良いのである。

「……何をぶつぶつ言っているのかは分からないけど、隙だらけだよ！ 輔星『アルコル・ザ・フラジャイル』！」

もやもやとした淡い光が投げつけられた。光はパチュリーに当たる直前で小さく広がり、太い縄のように細い身体を縛りつけた。

ナビユールは敵が動けなくなったと思い、パチュリーに向かって駆け出す。その顔には、初めて見せる笑みがあつた。

しかしそれは、突けばすぐ壊れてしまいそうな、空虚な笑み。

「痛いかもだけど、これでも喰らえーっ！ 遺罪——」

「——隙だらけ？ ああ、そうでしょうね。貴方が攻撃してくるよ

うに誘っていたのだから」

「っ！？ 何を笑って……！」

一瞬、ナビユールの動きが止まった。心が揺らいだ。

そこに生まれた小さな間隙へ、パチュリーは確信した笑みを投げ込む。

「どうやら、戦いの駆け引きというものを、貴方は何も知らないようね。いえ、それ以前の問題かしら。貴方は争いを、誰かが傷つくことを好まない。青い、実に青いわ。だから教えてあげよう、思い出したいくらいに——若さ故の過ちが、己に何をもたらすのかを！ 月符『サイレントセレナ』！」

パチュリーの足元に蒼色の魔法陣が描かれたかと思うと、それを囲うようにして、同色の光の柱が天井へ向かって発された。

魔法陣の中に足を踏み入れていたナビユールは、蒼い柱に突き飛ばされ、宙を舞うと呼べるような時間も与えられず、天井に潰された。

やがて、大熊の少女はふわりと落下した。

床に伏した少女は、時間が停止したように動かなくなった。

「——貴方の天気は、差し詰め、驟雨しゅううというところかしら。降ってはすぐ止むその様は、まさに貴方のような軽慮浅謀を表している。あるいは、怖いものに触れようとする時のようなね。貴方は、他人に刃を向けるには、あまりにも臆病すぎる」

からん、と硬く小さな物体の落ちる音が響いた。ナビユールが首に掛けていた、あのペンダントだ。

パチュリーは冷めた瞳でナビユールを見る。その言葉は、果たして彼女に届いているのか。

興味もないね、と背を向けたパチュリーの後ろで、小さな身体がぴくりと動いた。

Stage・5-3 <パチュリー・ノーレッジ:4> (後書き)

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/186279/

Stage・5・4 <八意永琳：1>

博麗の巫女が鹿の妖怪と戦闘を開始したのと、ほぼ同時刻。

竹林に囲まれた大屋敷の玄関から、赤い十字の描かれた青帽を被る女が現れた。

赤と青のツートンカラーに身を包んだその様は、周囲の雰囲気から浮いているようで、しかし似合ってもいるような、独特の不思議さを醸している。彼女が一步を踏み出す度に、三つ編みにされた長い銀髪は揺れ、隠れた月を代替するように淡く光った。

彼女——八意永琳は、月より地上に降り立った永久とこしえの賢者だ。幻想郷で「人間」として暮らすため、ここ永遠亭で傷つき病める者たちの治療を行っている。だがそれは、「人間は他者のために働き生きる」という存在理由に従っているからに過ぎない。

実際、永遠亭の者たちは、「妖怪」の側として暮らすこともできる。それだけ強い力を持っているからだ。しかしそれ故、彼女たちは妖怪を恐れない。それはある意味で「人間あるまじき」性質であり、実質的に永遠亭という勢力は、「人間」にも「妖怪」にも属さない（あるいは両方に属する）と言えるのかもしれない。

そう、彼女たちは普段こそ命を救う活動をしているが、決して敵に対抗する力を持っていないわけではない。例えば先刻守矢の巫女と争った鈴仙・優曇華院・イナバのように——いや、それ以上の力を、八意永琳は持っている。

彼女の手にする弓は、張られた弦によって大きく反り、まるで半月のような形を作っていた。

「……………」

門を潜った所で永琳は立ち止まった。そして、振り向きもせずと言う。

「——輝夜、どうして」

屋敷の入口でこっそり彼女を窺っていた人影が、一步、星明かりの下へゆっくりと踏み出した。

麗しき漆黒の長髪をふわりと靡かせるその少女は、月都を追放された美姫にして永遠と須臾しゅゆの罪人——蓬萊山輝夜しゅゆだった。

「あらら、バレちゃった……いや、たまたま外に出るのを見かけただけよ？」

「そのたまたまが起こらないようにしたつもりなのだけど……どうして？」

「貴方らしくないわね。そんな、どうだっていいことをわざわざ訊くなんて——ところで、足跡どころかご丁寧に気配まで消して、一体どこへ行くつもりなのかしら。ねえ？ 永琳」

竹林の作る闇をじっと見据えたまま、永琳は答えない。

謎を解き犯人を詰問する探偵のように、輝夜は笑って続ける。

「もしかして、危ないからって貴方一人で戦おうとしていないかしら？」

「……はあ。困ったお姫様を持ったものだわ」

「嘘は吐かないのね。地上に降りて千数百年、私たちは十分穢れてしまっているでしょうに」

「貴方に嘘なんて吐いても無駄だと分かっているもの」

「——それで、あの情緒も何もない岩の塊でも砕き割ってくるの？」

「残念、その解答は間違っています。ただ、方向性は間違っていない」

「そうやってはぐらかしても、私はここには残らないわよ」

「……本当に、困ったお姫様ね」

肩を落とす永琳に、輝夜も少し不機嫌な顔になった。

「困っているのは私の方よ。永琳なんでしょ？ 異変が終わるまで妹紅を永遠亭に置いておく、なんて言ったのは」

人里周辺で異変の被害を受けた者達を永遠亭へ搬入する作業は既に終わっている。運ばれた患者の手当ても大分落ち着きを見せ、今

は鈴仙やてゐ、それから輝夜を目の敵にしている藤原妹紅がそれを引き継いでいる。

永琳は輝夜もそれに加わらせ、人知れず外に出ようとしたのだが、こうして輝夜に見つかってしまったという次第である。

「ええ、私がそうするように言いました。本人も嫌がっていたけど」

「そりゃあそうでしょう。私だって、居心地は良くないわ」

「ごめんなさいね。でも、そうする必要があるのよ」

「理由は教えてくれないのね」

「貴方なら、薄々分かっているでしょう？ だからこそ、私は貴方にこう言うわ。ここに残りなさい、と」

「……………」

「それに——私と一緒に来れば、誰が貴方の育てている盆栽を護るのかしら。今もこうして目を離している隙に、あの人間がここぞとばかりに盆栽を燃やしているかもしれないわよ」

「……あ、そうだった！ こうしちやいられないわ、早く戻って監視しないと！——あ、いい、永琳？ 今回は見逃してあげるから、必ず夜明けまでには帰ってきなさいよ！」

忠告に慌てて屋敷内に戻っていく輝夜だったが、それを見送る永琳の表情は、微笑んではいたものの、どこか切なそうに見えた。

「……ありがとう、輝夜。信じてくれて」

しくじるつもりはない。が、夜が明けても帰れない可能性が僅かでもある——そう思うと、やはり輝夜達を永遠亭に置いていく判断は間違っていないのだと確信できる。

死という最後の穢れを負うのは、自分だけで十分だ——

永琳は笑みを収め、毅然と林奥の闇へ足を踏み入れた。

S t a g e . 5 - 4 < 八意永琳 : 1 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 1 8 8 9 8 4 /

竹林を北東に抜けた辺りには人里がある。時刻が時刻だからか、はたまた状況が状況だからか、明かりの点いた民家はほとんどない。足元すらはつきりと視認できないほどの深い暗闇に包まれている。つい数刻前には、ここで異変が起きたことに対する反応としての「静かな騒ぎ」があつたはずだ。今ではもう落ち着いていて、周辺の人妖を避難させた空飛ぶ倉も、既に離陸の準備を整え終わっているようだった。

それでも飛倉が人里を離れないのは、そこに八意永琳を待っている者が居るからだ。永琳はその人物に、一つの報告をしなければならなかった。

「お待たせしました。貴方の言う通り、彼女は永遠亭に匿いました」「そうですか、ありがとうございます。これで私も安心して船に乗れる」

そう言つて胸を撫で下ろす動作を見せたのは、上白沢慧音だった。派手な青い角帽を被り、その身のこなしからも、知性と礼節を感じられる人物だ。半分妖怪としての血が混じっているが、人間を愛する知識人として、人里の者には好かれている。ただ、教師としての実力は今一つなのか、寺子屋での授業は子供たちに「退屈」と思われているようである。

永遠亭の患者受け入れ準備が整ったこと、そしてその最大収容人数を伝えるため、永琳は一度人里を訪れていた。その時彼女は、慧音にこの異変がもたらす影響について話し、それを受けた彼女からある頼みを聞いた。それが、「妹紅を永遠亭に避難させてくれ」というものだ。

永琳はそれを承諾し、最後の患者を運んできた妹紅をそのまま永

遠亭に引き入れた。そして、自分が外出することを理由に、患者の診察を手伝うよう妹紅に伝えた。大抵の者はただ弱っているだけだったし、多少の病氣や怪我ならてゐや鈴仙で十分に対処できる。ただ様子を見て回るだけでいい——そう言うと、やや不満そうだったが、妹紅は受け入れてくれた。

目の敵にしている輝夜と同じ屋根の下で過ごすことを嫌がっていたのだろうが、それは彼女の表面にある感情ではない。本当はこの自分こそを恨んでいなければならないのだと、永琳は知っていた。妹紅に起こった「異変」、起こり続けている永遠の「異変」——その全ての原因は、自分が蓬莱の薬を作ってしまったことにあるのだから。

あるいは不満の原因は慧音と離れることにあるのかもしれない、などと考へつつ、永琳は報告に必要な補足を加える。

「大勢の患者に対して慣れない仕事をする——今の彼女に、永遠亭を出る余裕はないでしょう。それこそ、姫への復讐すら考えられないほどに」

「助かります。あの人は、人であることを止め、そしてそれ故に、永遠に人として生きる——そうした矛盾を抱くことを決意した身。このままここに残っていれば、『異変を解決しに行く』などと言出しかねませんから」

「ふふ、あの人間の生き甲斐は、姫と殺し合うことと細やかな人助けだものね。自分が思っている以上に、彼女は人間に肩入れしている」

「ええ。あの人は、人間の本来から外れてしまったからこそ、より強く人間であろうと思っています。迷いの竹林に入った者の道案内をしているのは、それが彼女の『仕事』だから。彼女が『人間』だからです。ただ、それを認めようとしなないのは、あの人が素直ではないからです」

「捻くれているのね」

「貴方ほどでは」

短く言って、慧音は微笑む。まるで先程の輝夜とのやり取りを見ていたかのような物言いだった。

慧音は永琳の持つ弓を指差し、やや寂しげな表情で続けた。

「……その弓。貴方はこれから、異変の元凶を討ちに行くのですね。大切な者達を家に置いて」

「そんな大層な話ではありません。ただ私は、姫を奪ってしまう可能性のある存在を排除したいと思っていますだけ」

「それは、言葉が違っただけで、同じ意味です」

「ならば、どちらも同じように、大層な話ではないのです」

私はもう、穢れてしまった者なのだから。

その言葉に、慧音は何かを言いたそうにしていたが、結局黙っていた。止めようとしたが、無意味だと判断したのだろう。聡い者たちばかりだと、永琳は慧音に見えないよう苦笑する。

「……さて、そろそろ船に乗った方が良いのでは？ 貴方を待つているようだけれど」

「ん？ あ、ああ、そうですね。早くここから離れないと、折角避難した者たちも弱ってしまうかもしれない」

「ええ。それに、お迎えも来たようだし」

「え？」

慧音が後ろを振り返る。そこには、飛倉の方からこちらに駆け寄ってくる影があった。

暗い人里の中、飛倉から漏れるただ一つの光を受け、その影は頭頂辺りを紫に染めた黄金色の髪を揺らす——かつて法界に囚われていた聖人、聖白蓮だ。

「あの、少し遅いかなと思って様子を見に来たのですが……」

「ああ、すみません。話し込んでしまいました。もう行きますので」
慧音は頭を下げつつ、一步退いて永琳から距離を取った。

反対に、白蓮は一步永琳に近寄る。そして、深く腰を折った。

「……お礼が遅れてしまいましたね。突然でしたが、私の願いを聞き入れてくださってありがとうございます、八意永琳さん」

「構いません。それに、突然というほどでもありませんでしたしね。あの岩塊が現れた時から——あの奇妙な力を感じた時から、永遠亭が必要とされることは予測できていましたから」

飛倉——聖輦船として姿を変えた命蓮寺と永遠亭の二ヶ所に分けて人里付近の者を避難させる、その方策を提案したのは白蓮だった。白蓮はまず人里で顔の広い慧音にこの話を持ち掛け、そして慧音が竹林付近の地理に明るい妹紅に、永遠亭の協力を仰ぐよう指示したのである。

一度永琳がここへ来た時には、飛倉の中に居たのか彼女とは会えなかった。その後も、永琳は運ばれてきた者の診察、白蓮は患者を背負って里と永遠亭を往復していたので、ともに言葉を交わすのは異変中これが初めてだった。

ただ、事は急を要する。折角の機会ではあるが、これ以上世間話に花を咲かせている暇はない。永琳は服のポケットから巾着袋を取り出し、それを白蓮に手渡した。

「もし異変の影響を受けて弱ってしまった者がいれば、この中にある薬を飲ませてください。急造なので効き目は薄いですが、ないよりはずっと安全です。他の対策は特にありません。ただ、励まし続けることによって、症状の進行を遅らせ、快復を早めることはできます。大切なのは、強く己を保とうとする心なのです。静かに怯えているより、いつも通りの雰囲気で酒宴でも開いていた方が良いでしょう。潰れると拙ますいですが」

冗談交じりにそう言うのと、白蓮と慧音は小さく笑った。

「ええ、分かりました。皆にも伝えておきます」

「ですが、雰囲気作りに関しては心配ありませんね。氷精や夜雀、からかさお化けに闇の妖怪といった面々がはしゃぎ回っていて、寧ろ困っていたくらいですから」

ね、と同意を求める慧音に、ええ、と白蓮も共に苦笑した。

話によると、あまりに避難者たちが賑やかすぎて、彼女たちが船キャブテン・ムラサに戻らねば幽霊船長が舵を取ることも儘ならない状況なのだという。

季節柄眠気を感じているのに周りで騒がれ、それ煩わしく思った冬の妖怪が暴れ出した、という話もあった。また、大人しいと思われていた大妖精や香霖堂の本読み妖怪なども、気分が高揚しているようで、まるで騒霊三姉妹の次女の演奏を聞いたような状態になっているという。

ともあれ、船長や入道雲を従える尼、最近入信した山彦妖怪だけでは、皆を外に出さないようにするだけで精一杯のようだ。初めは彼女らを手伝っていたはずの捻くれ者の鵺ぬえは、いつの間にか「騒ぐ」側に回っていて、更なる人手不足になっているらしい。早く戻らなくては、と言う白蓮だったが、しかしその頬は緩んでいた。

彼女たちの気分が高まっている理由を永琳は知っている。これも一種の「症状」——幻想郷を覆う奇妙な力に、皆が魅せられ始めているのだ。

一人の機嫌が良くなったら、それは周囲に伝搬していく。そうして慧音や白蓮が言うような騒ぎに発展しているのだろう。元より自然の具現化である妖精などは、今回の異変の影響をかなり受けやすいと思われた。

ただ、話を聞く限り、自分が謎の力に魅せられているということに彼女たちは気づいていない。まだ彼女たちは自分自身の心を持っている。なので、混乱を招くリスクを負ってそれも異変の影響だと知らせるよりも、このまま放っておいた方が良さだろうと永琳は判断した。

しかし、異変の影響だとはいえ、普段は馴れ合わない人間と妖怪が、今、一つの空間に集っている。暴動の一つ二つは起こっても致し方ないと永琳は考えていたが、どうやら今回のような緊急事態となれば、同じ「幻想郷の住人」として手を取り合えるらしい。自分たちもその中に含まれているのだろうか、などと何となしに思惟してしまう。

だが、異変はまだ終わっていない。「それは良かった」と相槌を打った永琳は、表情を陰しいものに一変させて、忠告する。

「……ただ、貴方たちも十分に気をつけてください。これは、幻想の力を持つていればどうにかなるような類のものではありませんから」

重みの増した彼女の言葉に、向かいの二人はこくりと頷いた。

白蓮は慧音に向けて一つ目配せをする。慧音が同じように返すと、白蓮は永琳の弓にちらりと視線を遣りながら、胸の前で合掌した。

「では、私たちはこれで……ご健闘を」

「ええ、お互いにね」

しかし、急ぎ去ろうとする彼女たちを引き留めるものがあつた。待つて、と呼びかける少女の言葉——そして、その声のする方に現れた、宵闇を裂く空隙。

最早言つまでもない。スキマの中から現れたのは、八雲紫だつた。

「——待つて。貴方たちに頼みたいことがあるの」

「あら……随分と遅かったわね。もう来ないのかと思っていたわ」
驚きもせずただ笑う永琳を見て、慧音と白蓮は身構えを解いた。

だが、緊張感は解けない。月の賢者と地上の賢者が並び立つというこの状況——彼女らのことを詳しく知らない者でも、周囲の空気が強く張り詰めているのは肌を感じられることだろう。

「なかなか貴方が住処を離れなかったので、別の用事を先に済ませていたのです。実はこの後も、花の妖怪とコンタクトを取り行かなければなりません。ああ、多忙ですわ、多忙ですわ」

「そう言つて嘆いている余裕がある内は、多忙とは言えないわね」
永琳の顔から不敵な笑みが消え、一気に不機嫌そうな表情になった。

二年と少し前。第二次月面戦争——戦争、と呼べるほど大規模なものではなかったが、幻想郷の妖怪達が月へ侵攻するという出来事があった。既に幻想郷の住人となっていた永琳も、その裏側で密かに動いていた。彼女はこの時月の民の側についていたが、首謀者であつた紫に一杯喰わされる——否、一杯吞まされてしまう。

だからと言つて、その程度のことです紫に対し恨みつらみを持つほど、八意永琳の器は小さくない。ただ、彼女の姿を見ると少し気に喰わないように思えて、意地の悪い歓迎の言葉を浴びせてやったわけだ。実際、遅かれ早かれ彼女は自分の元にやつて来るだろうと、永琳は予め予測を立てていた。

だが、紫は永琳の揶揄やゆを物ともせず、悠々とした態度で応えた。これではまるで自分が小者のようではないか、そう思うと機嫌いさかが良くなるわけもない。二人の賢者の間では、こうした小さな諍いさかいが水

面下で行われているのである。

「とまあ、挨拶はこの辺にしておきましょう。時間もないことだしね。して、八雲紫。貴方の頼みとやらを聞きましょうか」

永琳の「用事」はそれほど急ぐこともないものだが、こうしている今も、幻想郷は岩塊から発される奇妙な力を受け続けているのだ。命蓮寺には外部からの力を遮断する魔力的な保護が掛けられているようだ。未知であるが故に、それでも完全に安心とはいえない。当然、魔界へ脱出する（というのもおかしい話だが）のは早い方が望ましい。

しかし紫は、そんなことはお構いなしとも言つように、「あら」と悠長に答えた。

「既に知っている者にまで答えを教える時間はないではありませんでしたっけ？ それに、私はそこまでお喋り好きでもありません」「どこの口がその台詞を言っているのかしら……しかし、貴方の言う通り、私は貴方の頼みとやらの正体を知っています。それでも、この二人にはきちんと説明をする必要があるのではありませんか？」

二人、という言葉に慧音と白蓮が反応する。永琳は紫の方を向いたまま続ける。

「折角の機会だから、私は確かに彼女たちをここに留めておいたけれど、貴方の望むことについてまで説明をした憶えはないわ」

「いえ、そこまでしていただけただけで十分です。貴方からの貸しは無暗に増やしたくないもの。隠された月の異変のこともある。だから、色々な意味で、お気遣い感謝致しますわ」

「礼など不要よ」

忌々しそうに永琳は吐き捨てる。紫は「あらあら」と笑って、「わざわざこの二人を留めておいてくれたのに、甚く不機嫌そうじゃない」

「その態度が気に喰わないのよ……それと、勘違いしてほしくないのだけれど、これは貴方のためにやったのではない。たまたま、貴方のやるうとしていることと、私の望みが、同じ標的を持っている

というだけ。言うなれば『相互利用』よ」

「『相互利用』……成程、良い言葉ですね」

「ええ、間に信頼があるようで無い、という意味ではね」

あら酷い、と紫は微笑むと、その視線を側に立つ二人——その内白蓮の方へと向けた。

「聖白蓮——貴方に一つ、頼みたいことがあります」

「何でしょう、八雲紫」

「貴方はこれから、命蓮寺へ避難させた者たちと共に、魔界へ身を隠そうとしている。そうですね？」

「ええ、間違いありません……それが、何か問題でも？」

「いえ、問題はありません。むしろ、私が言わずともその使命を果たしてくれたことに感謝しているくらいです」

「私も、感謝の言葉など要りません。それが私の生きる道なのでから」

「人妖が支え合って暮らす世のために……かしら」

「その通りです」

「では、私の願いも聞き入れてくださるでしょう」

「……聞きましょう」

身構える白蓮に、紫はその瞳を妖しく光らせる。

「夜が明けるよりも前、幻想郷は大いなる危険に晒される可能性があります。もしもそれが起こってしまった時、貴方の力を借りたいのです」

「危険？ それは、この度の異変とはまた別物なのですか？」

「いいえ、この異変に関するものです。ただ、あの岩蛹にはまだ、巨大な力が眠っている。眠っていてなお、これだけの力を発している」

「力……この『邪気』のことですか？ これで眠っている状態だと？」

紫は何も答えず、ただ静かに岩塊の方を見遣った。説明はこれで十分だとして、白蓮に答えを求めているのだ。

「分かりました。もし貴方の言う通りであれば、確かにこの地は『大いなる危険に晒される』ことになるのでしよう。私もそれは望みません。喜んでこの手を貸しましょう。ですが――」

再び、怪しい視線が白蓮へ向けられた。

「――心配することはありません。敵が目覚めるまでには、まだ時間がある。貴方は従来 of 予定通り、魔界へ皆を避難させてください。時が来たなら、私が呼びに行きますので」

「星たちにも呼びかけておいた方が良いですか？」

「それは駄目。私が迎えるのは、貴方一人だけです」

「どうしてでしょう？ それほどの危機ならば、私一人の力では足りないかもしれない。星ならば、貴方の足を引っ張らないほどの力を持っていると思うのですが」

「そういう問題ではないのです。確かに人手は欲しいところですが、既に十分な数の協力者は得ていますし。それに、藍と橙――私の式と、その式に、大規模な結界の下準備をさせています。確実に敵を打ち倒すための策は、既に練られているのです。無暗にこちらへ戦力を回して、足元を疎かにしてはならない」

白蓮ははつとして、「足元」――空飛ぶ船として地を離れる用意をしている命蓮寺を見る。その中には、人里に住む者や、その周囲に暮らす妖怪たちが集まっている。今でこそ平穏ではあるが、いつ小さな騒ぎが大きな暴動となるか分からない。普段は人妖の關係に慣れているのだとしても、こうした「普段」ではない状況下、本来を取り戻した彼らが争いを起こさないという保証は全くないのだ。

仏の見守る寺の中で、卑しい行いをさせるわけにはいかない――と、彼女は考えているのか。ならば、『邪氣』に当てられ己を見失ってしまうのを防ぐためにも、やはり星という者には避難者の管理を続けてもらう他ないだろう。

「――了解しました。貴方の頼み、全て引き受けましょう」

「助かるわ。でも、何から何まで無償でやってもらうのは悪いわねえ」

「世の中持ちつ持たれつ、ですよ。今度私たちが困った時、救いの手を差し伸べてくだされば、それで良いのです」

「それでは私の気が済まないのよ……そうねえ、ではこうしましょう。異変が終わったなら美味の銘酒を仕入れておきますわ。宴会でも開いて、それを皆で楽しみましょう。どうかしら？」

「……どうせ宴会は開くつもりなのでしょう？ ふふ、まあ、皆で呑む酒ほど心身に染みるものはありません。ありがたく頂戴しましょうか」

Stage・5-6 <八意永琳：3>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/206017/

ぱん、と紫は拍手を一つ。この件はこれで終わり、ということだろう。

ただ、彼女の用事がこれで全て片づいたわけではない。

「——それで、私にも頼みたいことがあるのか？」

頃合いを見計らったように割り入ってきたのは慧音だ。彼女は続けて、

「残念だが、私はお前の力になれそうもない。戦いに参加するつもりはないし、何より、人里の者として彼らの側にいる義務もあるからな」

「もちろん、私は貴方にそのようなことを頼むつもりはありません。貴方に頼みたいのは、異変が終わった後のことなのです」

そうだろうな、と慧音は警戒するように言う。

「つまり、お前はこう言いたいのだな？ 今回の異変に関する歴史はなかったことにしろ——皆からこの現実が見えないようにしろ、と」

そうではありません、と紫は首を横に振った。

「私が貴方に望むことはただ一つです——何が起ころうとも、この異変全てを、始まりから終わりまで、なかったことにはしないでほしい」

「……は？」

しばらくの空白の後、慧音の口から出たのはこの一文字だけだった。

「貴方は今回、何もしなくていい。歴史——事實は、あるがままに残しておくべきもの。貴方には、正しい歴史を知る者となってほしい」

「いや、何を言っているのか、分からないのだが……」

「貴方の能力では、現実を不可視にすることしかできない。また、強い力を持つ者にその能力は通用しない。貴方がその能力を使うと、後処理が一段とややこしいことになってしまうのよ。だから貴方には、歴史を正しく認識するという、大切な役割を担ってもらいます」

「私は元より、『正しい歴史』を紡がんとする者……言われずとも、この異変が起きたという歴史を喰ってしまうつもりはない。しかし、お前の言葉からは、後に歴史の持つ正しさが歪められてしまう、そう受け取ることができる——お前は一体、何をするつもりだ、八雲紫」

ただ異変が起きて終わるだけならば、紫自らがこのようなことをわざわざ頼みにくるわけもないだろう。今は歴史が操作された痕跡は見られないが、異変が終わった後、何らかの細工を施そうとしていることに間違いはない。それが人里の者に害を為すことになるのなら、何としても紫の計画を潰さなければならぬ——例えその計画が、幻想郷全体のためを想ったものであってもだ。

微笑む紫は、柔らかな口調で、とんでもないことを言い放った。

「私は幻想郷に住む者たちから、この異変に関する記憶を抹消するつもりです——ただし、ほんの一部、例えばここに居る者を除いてね」

更なる驚きが慧音を襲った。いや、彼女だけではない。隣に立つ白蓮もまた、並々ならぬ衝撃を受けたようだ。ただ一人、慧音の向かいに立つ八意永琳だけが、全てを悟っているように眉一つ動かさずにいた。

重大な選択が迫られている。慧音はそう感じて、より己を強く保ち、改めて紫と対峙する。

「それは……そんなことを、してもいいと思っているのか」

記憶を消す——それは、個人の歴史を喰らうということに他ならない。喰われた者は、残された空白を埋めようとする反動が起き、歪みを生じてしまう。慧音の能力と同じで、事実それ自体を消すわ

けではないから、周囲の歴史と己の歴史に齟齬が生じることになる。その齟齬を受け流すことができなかった者は、最悪、壊れてしまうかもしれない。人の記憶を消すことは、それほどのリスクを抱えているのだ。

それとは別に、歴史の操作に関しては、稗田阿求ひえだのあきゆという大きな壁がある。彼女は歴史全般を扱う慧音とは違って、幻想郷に的を絞った歴史（主旨は「人間への妖怪対策提示」であるが）を紡いでいる。そうして代々書き継がれてきた『幻想郷縁起』は、慧音の能力が及ばない「正史」である。明らかに妖怪絡みと思われるこの異変について、人々の記憶を消すことに彼女が賛成するとは思えなかった。

慧音がそう言つと、しかし、紫は事もなげに答えた。

「ええ、この件は御阿礼の子にも話しており、承諾を取っています。ただ、歴史の記述については意地があるようで、『公には出さないから事実だけは記させてくれ』と。まあ、その記録は後々必要となる可能性もあるので、そのまま任せましたが——ああ、もちろん、あの子も記憶を残す例外の一人よ？」

「しかし、記憶を消してどうなる？　そこにメリットがなければ、御阿礼の子も首を縦に振るはずがない。きちんと説明してもらおうか」

「この異変の重大さは、貴方もよくよく分かっているでしょう。ともすれば、吸血鬼が幻想郷にやって来た時以上のものです。あの異変の時の混乱ぶりを憶えていれば、私のこの考えにも理解してくださると思うのですが」

平穏の中で暮らし力を弱めていた妖怪の多くが吸血鬼の傘下に入り、瞬く間に幻想郷最大勢力となった異変——吸血鬼異変。その脅威は妖怪勢力の全てに知れ渡り、多くの者を怯え震わせた。人間たちにもこの異変のほとんどが伝わっていないのが不思議なくらいである。

今でこそ吸血鬼に関するいざこざは落ち着いているが、当時以上と紫の予測する『大いなる危険』がもしも現実となった時は、確か

にその恐怖から人々を逃すべきなのかもしれない。レミリア・スカーレットの戯れに引き起こした紅い霧が里を覆った時の人々の反応を振り返れば、そう思えてくる。経験あつてこそその成長だが、それは時に成長を妨げることもあるのだ。

「つまり私は、ただ待つて、事の顛末を受け入れるだけでいいんだな？」

「ええ、分かってくれて嬉しいわ」

「……幻想郷を愛しているという点では、お前を信じられるからな」
最高の褒め言葉よ、と紫は愉快そうに笑った。

「苦を知らず、即ち是れ小人なり——愛情とは時に、鞭で打つような痛みを要するのです」

慧音と白蓮が船に戻るのを見送つて、紫が口を開いた。

「さて、それでは私は残りの仕事を済ませてきましょうか。貴方は好きなように行動していればいいわ。ただし、貴方の用事が終わつて、もし時間を持て余しても、あの岩蛹の中には決して乗り込まないこと」

「……どういふことかしら。それだと、私がこのタイミングで出張つてきた意味がないわ」

「さつきもあの法僧に言つたでしょう。『その時』が来たら、貴方たちを頼ることになる」

「逆説、『その時』が来るまでは動くな、ということね……その点を少し誤解していたわ。成程、これで貴方が皆の記憶を消そうとする理由が段々と解つてきた。つまり、私の『用事』も、少々予定より遅らせた方がよいのかしら？」

「うーん、月の賢者は何でもお見通しね」

「それは月都の酒と同じで、皮肉と受け取ってもいいのかしら？」

「あのお酒は確かに美味しいけれど、皮肉は皮肉で、捻くれた味わ

いがあるものです。けれど確かに、純粹を謳うものの肴としては、相応しくないのかもしれないわね。しかし残念、これは皮肉ではありません。貴方こそ素直になりなさいな。地上の穢れに染まりすぎよ。私は、月の民としての貴方たちを評価しているのですから」

「……まあいいわ。貴方のその減らない口は、祟り神でも封じられそうにないし。それで、一つ訊きたいことがあるのだけれど——貴方は『その時』が来るのを望んでいるのかしら？」

「……………」

紫は何も答えず、ただ微笑みを浮かべたままだった。

しばらくして、彼女は、永琳の質問とは全く関係のないことを言う。

「そうそう、貴方も予測できているでしょうけど、その内怪我人が運ばれてくると思うわ。貴方がいなくても大丈夫なのかしら？」

「ええもちろん。貴方も知っている通り、その点については心配いりません。既に対処法は兎たちに教えてあります」

「流星は月の賢者、頼もしいですわ」

「褒めても何も出ないわよ。それに、そんなことよりもずっと大きな問題があるでしょう。貴方が気づいていないとは言わせないわ」

「あら、何のことかしら」

そう肩を竦める紫だったが、永琳は「やっぱり分かっているんじゃない」と、その韜晦^{とうかい}を一蹴した。

「月が本来あり得ない現象を起こしている。けれど、幻想郷の皆はほとんどそれに気づいていない。この私ですらも、それが分かったのは相当時間が経ってからだった」

「今、幻想郷には、二つの異変が起こっている……と」

「そう。一つは、この奇妙な力によって幻想郷全体が魅せられている、という異変。そしてもう一つ——別の大きな力が、月をおかしくしています。そして、人間はそうでもないけれど、貴方たち妖怪は月の影響を強く受ける……あの岩蛹はともかくとして、この異変を貴方が見過ごせるとは思えないのだけれど」

「そうね。でも、見過ごせないのは貴方も同じでしょう?」

「……僅かでも、危害の及ぶ可能性があるからね。しかしほつとしたわ、以前の時のように私たちの仕業ではないと、分かってはいるよね」

「ええ、もちろん。そして、だからこそ、貴方はあの月の異変に不安を抱いている……そう、だってあれは、正真正銘『本物の月』ですものね」

「……………」

「でも大丈夫、貴方と同じように、既に手は打ってありますわ」

そう言って、紫は振り上げた人差し指をすつと下ろす。その軌道に沿うようにして、夜が小さく裂け、更なる闇がそこに生まれた。

永琳を一瞥すると、紫は静かに、スキマの向こうへと消えていった。

溜息を吐いた永琳は、とりあえず岩塊へ近づくことにした。紫の忠告通り、内部へ侵入することはない。しかし、近づくことで新しく判明することもあるだろう。いや、近づかなければ、彼女の目的は完遂されない。それに、『その時』が来た際には、岩塊の近くにいる方がより早く対応できる。

船が夜空を泳いでいく。その向かう先は魔界だが、これから幻想郷を襲うのは、それよりも危険なものらしい。紫はこの幻想郷への侵入者のことを知っていたようだが、それを敢えて見逃したのは――

「……八雲紫。これが貴方の余興でないことを願うわ」

さあ、どうなんでしょうね――そんな地上の賢者の心の声が、どこからか聞こえてきたような気がした。

S t a g e . 5 - 7 < 八意永琳 : 4 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 2 1 5 3 7 9 /

大きな魔力が背後に生まれたのを感じ取って、パチュリーは慌てて振り返った。

増援が来たのかと思ったが、そうではない。まるで別人かと思うほど、段違いにナビュールの魔力が増大したのだ。

「——天？『巨門のメラク』！」

一点の青白い煌めきが、大熊の少女の頭上に昇った。一瞬光が大きくなったかと思うと、無数の弾幕がパチュリーを襲う。

その光は、この岩塊に隠された月から放たれるものと、よく似ていた。

「くっ、これは……！」

防げないわけではなかった。確かに、力任せでよく練り込まれていない術ではあった——力任せであるが故に、その純粋性を発揮できてはいたが、それでも殺しきれない威力ではなかった。

防壁を展開するパチュリーが驚いたのは、ナビュールが起き上がってきたこと、そして、これまで近距離戦を挑んできた彼女が急に遠方からのまともな弾幕を放ってきたこと、それから——遠距離戦に切り替えてきたかと思いきや、再び突っ込んできたことだ。

そして、その腕の先は、大きな獣の手と化していた。

「切り裂け、“セレナーデ”！」

銀色に煌めく大爪が、寸前で攻撃を避けたパチュリーのスカートを大きく裂いた。

近接戦は苦手だ、と困る暇もなく、ナビュールは二撃目を加えようとす。

「っ——“スプリングウィンド”！」

強い風がパチュリーを中心に発生し、ふわりと浮かび上がった。

ナビュールは堪えようとしたが、耐え切れないと判断したのか、吹く風に任せて後ろに飛ばされる。

何とか距離は取ったが、今のナビュールは、距離があっても安心できる相手ではない。

「次——天権『文曲のメグレズ』！」

二つ目の光の点が浮かび上がった。最初の光点よりややパチュリーよりの位置に止まり、先程と同じような弾幕を放つ——今度は“水”の属性を含んだものだ。

「もういっちょ！——玉衝『廉貞のアリオト』！」

更にもう一つ。展開される弾幕は、見た目には変わり映えしないが、パチュリーにはその違いがよく分かる。次は“木”の属性だ。

「そろそろ……壊さないと危ないかしら、アレ」

弾幕をいなしながら、パチュリーは言い知れぬ危機感を抱いていた。

そう、（あくまで比較的に、だが）こうして簡単に回避できるようなスペルカードであることが不安なのだ。厄介でない上に、あまりに持続性がない。スペルカードではない通常の攻撃よりもあつさり対処できるくらいだろう。

ただ、油断できない事実がある。弾幕を放った後の青白い光点が三つ、ナビュールとパチュリーの間に残っていることだ。役割を終えてなお、留まり続ける仕掛け——「役割を終えて」いるわけではないことは、容易に想像がつく。これまでにないタイプのスペルカードだが、恐らくこれは「複数設置することで大きな効果を発揮する」タイプの攻撃だと考えられる。

問題は、このまま放っておくと何が起こるかということだが——「メラク、メグレズ、アリオト……そして『大熊』、七曜の力」連想されるのはただ一つ、「北斗七星」だ。

世界のあらゆる所で、「七」を象徴するとされてきた星群——北斗七星。パチュリーの操る七曜もまた、北斗七星と関連付けられることができる。一つの星に一つの属性が割り振られているとすると、現

在ナビユールが展開しているのは“月”“水”“木”の三属性。先程繰り出してきた大爪による攻撃“セレナーデ”が“月”の属性を持つていたことを考えれば、あの光点それぞれが、自身の持つ属性の力をナビユールに与えていると予測できる。

属性の調和が儘^{まま}ならずとも、複数の属性を持っているというだけで、その攻撃への対処は格段に難しくなる。このまま残り四個の星が補完され、その力をもつてパチュリーが苦手とする近接戦に持ち込まれたなら。

「——やはり、放つてはおけない！ 土符『トリリトンシェイク』」
黄土色の大小様々な光弾が、空間全体にばら撒かれた。

「土には木を！ 吹き荒べ、“シルフィード”！」

きらりと三つ目の光点が光ると、それと同調するように薬指に当たる爪が淡い緑の茫洋に包まれた。ナビユールが交差させた両腕を薙ぐと、“スプリングウインド”のような強風が生まれ、襲い来る弾幕を防ぐ壁となった。

「成程、そのカラクリ、大体理解できた」

「理解してももう遅いよ！ “シルフィード”、このまま敵を押し潰して！」

「その程度でやられはしない！ 行け、金符『シルバードラゴン』」
「！」

「金には火を！ ——天？『祿存のフェクダ』！」

弾幕によって形作られた白銀の竜が、赤い光弾を受けて重い呻きを上げた。ナビユールの言う通り、威力の差にも依るが、火剋金——火は金に勝るとされる。これは属性魔法の欠点とも言えるのだが、どうしても大きな弱点を持ってしまうのだ（だからこそパチュリーは、複数属性を「融合」させることでカバーを図っているのだが）。

だが、このような「常識」から導ける必然の結論などどうでも良い。問題は、上手く四つ目の星を起動させてしまったことだ。

星たちを消す方法は色々考えられる。だが、その大抵はナビユールによって潰されてしまう。属性魔法を使わない、召喚魔法に頼る、

などの手もあるが、それはパチュリーの好む手段ではない。相手が七曜を操るからこそ、こちらと同じもので相対するべきである。

ナビュールに妨害されない案としては、妨害しきれないほどの大規模な魔法を行使する、というものがある。身を守るだけで精一杯になるような攻撃が襲ってくれば、四つの星の消失は免れないだろう。

ただ、消耗を無視した後先考えない方法は、確かに幻想郷らしくはあるのだが——しかし、別の面から見れば全く彼女たちらしくない。相手を完膚なきまでに圧倒するのでは、戦いを全く楽しめない。美しい弾幕を放ち合い、それを避け合い潰し合い——その心地良い苦しみの先にある決着こそが、弾幕戦の醍醐味なのだ。

「しかし、このままではジリ貧になりかねない……」

「うう、なかなか隙を作ってもらえない……」

激しい撃ち合いが続く。実力はパチュリーの方が数段上だが、それを取り越え得る究極の純真がナビュールをここまで戦わせている。素人目には知覚できない程度の違いではあるが、その僅かな差異は絶対の壁だ。その壁を盾とし矛とし、矛盾なき一直の意志をパチュリーに突きつけてくる。

その意志の強さが、魔法をより強くする……いや、彼女自身を強くする。ともすれば脆い鎧だが、パチュリーにその破壊を実行するつもりはなかった。実行するべきではないと思った。

「……どうやら、私が間違っていたようね」

「はあ、はあ……もう、降参して帰ってくれる、の？」

「違うよ。貴方相手に手を抜いて勝とうと思っていた自分が間違っていた、と言っただけ」

「手を、抜いていた、って？ そんな、折角『浄化』してもらった魔力が、それで相殺される、なんて……」

余程己の魔力の質に自信があつたのだろう、全力を出さずに拮抗してきたパチュリーに、ナビュールは少なからぬ怯えを見せている。「もう下手な小細工は必要ないわ。七つの星の力を解放し、全力で

掛かってきなさい——それを私が、全力で叩き潰してやる！」
全てを吐き出し空になることで、その純真は護られる。

Stage・5-8 <パチュリー・ノーレッジ:5> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/219807/>

「そ、そこまで言うならやってやる！ 開陽『武曲のミザール』！
揺光『破軍のベネトナシュ』！ そして最後——天枢『貧狼のド
ウーベ』！」

連なる星々の尾の部分に二つ、そして四つ目の星の上、頭の部分
に一つ。前者の星二つは青白色、最後の締め^{ひしゃく}に煌めく一つは橙色。
灯った光点が描くのは、日本では柄杓^{ひしゃく}と喻えられる、オリオン座と
並んで世界で最も有名な星列——北斗七星だ。

北斗七星はおおぐま座の一部（背中から腰、尾にかけた部分）で
あり、ならば大熊の力を得たナビユールが七曜を操っているのは必
然と言える。そしてそれは、日本において、永遠に沈まない星——
周極星である。太陽がなければ日中でも観測できる星であり、つま
り、時間に関係なく星の加護を得ることができるということだ。

また、おおぐま座は、かつて神の従者だった者の成れの果てだと
いう。すなわち、神でこそないが、それに準ずるほどの力が今のナ
ビユールには与えられているということだ。

永遠の聖光を宿した、純粹たる力。

もちろん陽が出ている時には、享受する力も微々たるものだろう。
それでも、地平線の下へ沈む時間帯のある月に依存する妖怪よりは、
能力の安定性が高いと言える。ここに満月の光が加われば、大抵の
者では齒が立たなくなる。

幸いなのは、彼女が完全な妖怪ではないということと、今日は満
月ではないということか。あのペンダントが力を抑えるための鍵だ
ったのだろうが、相手をしてみれば成程、普段それを封じている理
由も分かるうというものだ。

「全く、笑えないわ…… 外の世界にはまだ、こんなとんでもない代

物が眠っていたのね」

“金” “土” “日”、三属性の力を持つ弾幕を目の前にしながら、パチュリーは自身の言葉とは裏腹に、薄い笑みを浮かべていた。無意識のそれは、脅威に対する諦観ではなく、同じ土俵で強者を相手にする歓びだ。

弾幕の奥に立つ大熊の少女に向け、紫苑の魔女は高らかに言った。
「そうだ、それでいい！ 邪心を捨て、己の全てを吐き出せ！」

彼女の周囲には既に魔法陣が浮かび上がっている。そこから灯る朦朧とした光の色は赤。 “木” の力により助長された大いなる “火” の塊が、陣を中心として無数に散りばめられた。

「前座の弾幕など、さっさと焼き払ってしまえ！ 木火符『フォレストブレイズ』！」

空中に設置された星は、ナビユールの鉤爪に属性の力を与えることが本来の役割である。 「本来」 でない、練り込まれていない魔力で放たれた弾幕が、パチュリーのそれに敵うはずもなかった。

視界が晴れる。ナビユールは瞳を閉じ、両手を上に突き上げ、何かをぶつぶつと呟いていた。魔力を練っているのだ。 いや、最高の質の魔力をもって放たれる魔法を、より強力なものにしようとしている。

パチュリーはそれを妨害せず、ただ黙って彼女を見つめていた。見守っていた。 本さえも閉じていた。 攻撃せず、されることもないと解っていた。 ナビユールもそうだ。 敵対する二人の間には、奇妙な信頼感が芽生えている。

「……もう、いいよ」

ナビユールは準備を終えたらしい。腕を下ろすと、覚悟を決めた目をパチュリーへと向けた。 凄まじい圧迫感が敵対者を襲う。

「そう、なら、何も言うことはないわ。始めましょう、私たちの戦いを」

「どうして」

構えたパチュリーを無視するような呟きに、「うん？」と顔を上

げた。

「どうして貴方は、そこまでして私と戦おうとするの？」

「……それを聞いて、貴方に得をすることがあるのかしら？」

「……私に全力を出せって言って、貴方に得をすることがあるの？」

「あるわよ」

「どんなこと？」

「それは、教えられないわ。凡庸な魔法使いの個人的な酔狂とでも思っ
てちょうだい」

「酔狂……酔狂、か」

「そう、何に魅了されたか、私は今、貴方と戦うことに愉しさを感じ
ている。だから私は、貴方の全てを求める。初めは物色目的で貴
方たちの住処に潜り込んだのだけれど、今は違う。貴方と全力でぶ
つかり合うことが、そして勝利することが随一の目的よ。その後の
ことは、もうどうでもいい。そもそも私は、ここに来るつもりはな
かった。この岩の塊の中にいる私以外の者から情報を聞ければ、そ
れで満足だしね」

「魔法使いは、戦いを求めるの？」

「魔法使いは、知識を求めるのよ。そのためにはこうした争いをも
辞さない。また、実践により新たに得られる知識も多い。特に、貴
方のような者を相手にするという機会は滅多にないからね。これを
みすみすと逃すわけにはいかない」

「そんな……そんな自分勝手な考えで」

ナビユールの方が小刻みに震える。怒りの感情が圧迫をより強く
し、粗くし、乱れさせる。

「落ち着きなさい。では訊き返すけど、貴方が戦うのは自分勝手な
理由ではないのかしら？」

「そんなわけ、ない……私は、私はみんなのために！」

「『みんなのために』になりたい自分のために、じゃあないの？」

「うつ……」

動揺は更に大きくなる。パチユリーは諭すように言う。

「貴方が自分の魔力からどのようにして不純物を取り除いたのかは知らない。でも、自分の心から欲望を完全に取り除くのは、それよりも遥かに困難だ。天人でもない限り無理でしょうね」

「……………」

「貴方たちが何をしたいのかは私には分からない。けど、酷く自分勝手なのは貴方たちも同じよ」

「っ……………！ そんなことは——」

「あるよ。貴方はその現実から目を逸らしているだけ。それは、私たち魔法使いにとっては最大のタブーだ。もっとも、貴方は魔法使いじゃないけどね。でも、私にはそれが許せない。偽りの殻に包まれ、狭まった世界しか覗き見ようとしないう、貴方のような者が」

だから私は言うわ——言いながら、パチュリーは一枚の紙を取り出し、新たな魔法陣を展開した。赤、青、緑、黄、土——半透明の整った形をした宝石たちが、瞬くように輝きながら、彼女の周りをくると回る。

「火水木金土符『賢者の石』——貴方の目の前には今、私しかない。幻想の他者に縋^{すが}らず、心から自分のために戦いなさい！」

Stage・5・9 <パチュリー・ノーレッジ:6> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/227841/>

こくり、とナビユールは強く頷いた。揺るぎない決意が、瞳の奥に再び灯る。

純粋な魔力を最大の効率で利用するには、術者の純粋な精神が必要となる。彼女の内に少しでも迷いがあれば、それは後々穢^{けが}れとなってしまう。不純となったナビユールは、強大な魔力に呑み込まれてしまうかもしれない。

彼女は生き抜くために、いつまでも純真でいなければならないのだ。

「七つの海を越え、夜の永久を輝け！ 魁杓『北斗七星の奇跡』！」
言うところ、光の七点が一本の線によって次々と繋がれた。ナビユールが再度野獣の両手を掲げると、その十爪に向けて七星から光の糸が伸びる。

種々の色相を淡く帯びた彼女の腕先には、澄んだ魔力が凝縮されている。軽く振るっただけでも空間が割れるだろう。強く振るえば、力無き者たちは皆薙ぎ払われるだろう。

「——行くよっ！」

大熊の少女が駆ける。強大な魔法を使役しているにも関わらず、ナビユールの表情に苦悶は窺えない。まるで負担になっていないのだ。彼女はただ自然の中にいるだけなのだから当然だろう。

自然——精霊魔法を使うことで負担が掛かるのは、そこに不自然的な歪みを加えているためである。そのものをあたかも自身の所有物であるかのように扱えるのなら、わざわざ歪みを与える必要はない。彼女に掛かるリスクと言えば、身体を動かすことによる疲労の蓄積程度でしかないのだ。

接近戦を苦手とするパチュリーは、しかし、誘い込むように敵が

近づくのを待っていた。ナビユールとは違い魔法を使う度に魔力を消費している彼女は、既にこれまででその多くを消耗している。今まで以上に的確に応戦し、決着の一撃に備えておかねばならない。

「——そこだ、“オータムブレード”！」

何もない空間を左手で救うようにすると、パチュリーの胸の前に大きな丸鋸まるのこが現れた。通常の弾幕よりもやや遅い速度で、空を裂く音が聞こえるほどの回転数で、無数の刃がナビユールを迎撃する。

「熔とかせ、“サラマンドラ”！」

対して出現したのは、重々しい体躯を持った炎の竜だ。竜は大口を開けて“オータムブレード”を一呑み、多少痛がる素振りを見せたが相殺はされず、そのままパチュリーに突進を仕掛け——られなかった。

冬の吐息のように白い蒸気が立ち込める。

巨大な水の飛礫ついでが“サラマンドラ”を襲ったのだ。

「その影に隠れているのも分かっているわ！——“フラッシュオブスプリング”！」

悶える火竜を貫くように、圧縮された風の弾幕が立て続けに発射された。“水”の攻撃によって力を弱めた竜は低い呻き声を上げ、弾幕の衝突で生じた風圧がその腹に大きな穴を開ける。穴の向こう側では、襲撃の失敗に顔を歪めたナビユールが、体勢を崩しながら風の弾丸を避けていた。

実際、それまで走っていた軌道を無理に逸らしてまでも回避することを選んだのは正解だっただろう。『賢者の石』の更なる追撃が待っていたからだ。ナビユールは更に転がってそれを躲したが——
「……って、あれ」

——相手の姿を見失ってしまった。無理もない、彼女の前方に広がる水蒸気のせいで、視界が悪くなっていたからだ。

隙について、パチュリーは密かに罫を仕掛けていた。

水蒸気の奥から美しく輝く金石の破片が飛び出す。炎に包まれた獣の腕がそれを薙ぐと、返すナビユールの声が霧の壁に鋭く突き刺

さった。

「貴方も隠れてるんでしょ!? —— 吹き荒べ、“シルフィード”」

前に同じ術を使った時と同じように腕を振ったが、今回はその威力が段違いだった。強風どころではない凶暴な竜巻が生まれ、霧のカーテンはあつという間に消え去ってしまった。

「——っ!?」

だが、驚きの表情を浮かべたのはパチュリーではなかった。

「な、何? 何なのコレ!?!」

ナビユールは空中で溺れていた。溺れたようにもがいていた。

しかし、彼女の全身に纏わりつく紫色の水泡は、割れることなくその四肢を宙に持ち上げている。

「“スティッキバブル”…… 貴方の動きは封じさせてもらったわ」

パチュリーの声が響く。その発声源は、ナビユールの背後だ。

気づいたナビユールは、大熊の腕を必死に動かし抵抗するが――

「くっ、こんなもの、すぐに……!」

「動くな――“フォールスラッシャー”」

床から幾本もの長剣が生え出て、パチュリーの頭上で停滞した。

牙を剥けば、それが届くまでに、この剣が少女を貫く。それが解つてか、ナビユールは完全に沈黙してしまった。

パチュリーは開いた本を閉じ、未だ強い輝きを放っている北斗七星を見る。

「成程…… 七つの星を線で結ぶことにより、各属性の威力を高めたりすることができるのか。地味だけど、相手をしていてこれほど厄介なものもないね…… ただ、使う者が変わらなければどうということはないわ」

争いを好まぬナビユールは、やはり戦い方を知らないのだ。属性魔法の使い手としても、また、幻想郷の住人としても。

「今、貴方に北斗の光は届いていない。その泡が光をシャットアウトしているからね。魔力の底上げがなければ、こちらの出力を上げ

ることで属性の相性を無視できるほどには、私の方が実力は上よ」

実際には、パチュリーの魔力も少なくなってきたため、彼女が「出力を上げる」時は、つまり「一気に積み掛け決着をつける」時となる。もつとも、この状況からナビユールが抜け出すのは困難極まりない。このまま大人しく白旗を上げるのなら、無駄な消耗をせずに済むのだが。

さあ、これで終わりよ——パチュリーの言葉が、数多の水泡に反射する。

「あ」

「……え？」

「——あああああああああああああああああつ！

！」

けたたましい獣の咆哮がパチュリーの耳を劈いた。

思わず目を背け耳を塞ぐ彼女の全身を、ビリビリと痺れるような感覚が襲う。絶叫を終えても、それでもなお脳内に反響する轟音が、彼女から寸分の動きをも奪った。

「——大熊『慈母寵愛』！」

それは、この戦いの中でパチュリーが見せた初めての「隙」だった。

いつの間にか“スティッキバブル”は破裂し、射出された“フオールスラッシャー”が貫いていたのは、誰もいない空間と堅い床だけだった。それを確認した頃には、既に狂想の殺意がパチュリーの目前まで迫っていて——

「く……ああつ！」

薄紫色の小さな身体が、軽々と吹き飛ばされた。浮き上がり、床に落ち——それでも勢いは殺せず、全身を打ちつけながら転がる。

最後に、寝返りを打つようにゆっくり回転すると、パチュリーの口から「かはっ」と小さく息が漏れた。

咄嗟に『賢者の石』でガードして、これほどの威力。息も絶え絶えになっているが、相手は敵がまだ倒れていないと解っているはず

だ、必ず息の根を止めるべく追撃を放ってくるだろう。

「内側に、まだ、これだけの魔力を、残していたのか……感心、ね」
「ごほ、と咳が出る。そろそろ限界か——そう感じながら、視界にナビユールの姿を認める。北斗七星の放つ光を全身に受けた彼女の姿は、思わず見惚れてしまうような神々しさを持っていた。

さあ、これで終わりよ——ナビユールの言葉が、七つの光となつて世界を照らした。

「見なさい！ 七曜を経た先にある不動の極致を！ 竜紋と純白を受け継いだ聖なる輝きを！——極星『ポラリスの煌めき』！」
それは、相生相克の理を越え、個にして全を得た、純正にして究極の魔法——七つの属性を調和し融合させた、前人未到の世界だった。

「……………っ！」

パチュリーは最後の力を振り絞り、立ち上がった。

未知には未知を、七曜には七曜を——ただ一つだけ、彼女には襲い来る強大な力に対抗する方法を持っていた。

魔導書を開く。

唯一の解答は、この中に。

主人の意志を読み取っているかのように、ページが自然と捲られていく。ある場所でそれは止まり、淡い光を放つ——解答に、辿り着く。

宙に浮く魔導書に両手を翳し、パチュリーは静かに言う。

「『賢者の石』とは、賢者が更なる進化を遂げるための布石——その所有者として、私はここに、新たな領域へと足を踏み入れよう」
力の塊が生まれる。己の全てを掛けた、僅かな穢れを持った魔法だ。

だが、彼女は知っていた。穢れがあつてこそ、世界は成り立っているのだと。汚れているからこそ、その輝きは美しいのだと。

「創世せよ、——」
音を呑み込み、光を呑み込み、あらゆる全てを呑み込みながら。

それぞれの真理を叫び——二つの世界が、衝突した。

【少女執筆中……】

Stage・5-10 <パチュリー・ノーレッジ:7> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/229702/>

爆発は終わった。

無と化した空間を埋めるように、周囲の世界がじわりと滲み、元の静寂が染み渡っていく。

その激動から取り残されたように、一人の少女が立ち尽くしていた。

紫苑の魔女――パチュリー・ノーレッジは、倒れる大熊の少女に向けて、決して届くことのない言葉を紡いだ。

「……純真は確かに美しい。それに見合うだけの力を持っている。ただ、それは、必死になって守り続けなければすぐに失われてしまう。ほんの僅かな穢れによって、その世界は崩落してしまう。純真は美しいが、美しいが故に弱い。逆に言えば、脆く儚いからこそその美しさのだけね。私たちは、壊れることが怖いから、壊されることが怖いから、美しさを犠牲にしても、必死になって小さな穢れを抱えているの」

答えはない。気を失っているのだろう。死んではいない。ナビユールの中に感じられる魔力がそう伝えている。

仮にもし、もしもナビユールが己の内に残された自身の魔力を最後の一撃に注ぎ込んでいたなら、今ここに倒れているのはパチュリーの方だったろう。大熊の少女は純粹に、純粹な魔力の可能性を信じていた。自身が持っている穢れによってそれを失わせてはならないと、己を殺していたのだ。

「馬鹿が付くほど甘ったるい性格なのね、この子は。ふふ、咲夜の奇妙な紅茶でも飲ませてやりたいわ」

パチュリーはひとしきり笑うと、気が抜けたように大きな溜息を吐いた。

「はあ……結局、全ての属性の魔法を使ってしまった。こんなにたくさん魔法を使ったら、今日が何曜日だったか忘れちゃうじゃない」あれ、そういえば、今日は何曜日だったっけ——そう呟ききることもできず、どさりとパチュリーは床に倒れ込んだ。

薄く汚れてしまった分厚い魔道書だけは、その両腕で大事に抱えて。

——これは、一体どういうことなのだろうか。

暗闇の中、パチュリーは思索の海を泳ぐ。勝利に酔いしれる気分ではなかった。恐らく、敗北しても悔やむ気分にはならなかっただろう。もやもやとした不明瞭が目の前を揺蕩っていることに、彼女は気持ち悪さすら感じていた。

不明瞭の正体は分かっている。この異変における、八雲紫の行動の意図が読めないのだ。

ナビュールと名乗る大熊の少女は、確かに強い力を持っていた。全力を出したパチュリーと拮抗するほどの。ならば、その後ろに控えている者は、更に大きな力を持っているはずだ。実際ナビュールは、その者に力を与えられた、と読み取れる発言をしている。

それほどの敵が現れたというのに、紫は余裕の態度を見せていた。打ち倒す算段は立てているのだろう。だが、パチュリーの懸念はそこではなく、異変が終わった後のことだった。果たして紫は、実質的に幻想郷を統べている者として、この異変にどう決着をつけようと考えているのか。

可能性は二方向に分かれる。この岩塊とその住人たちを、幻想郷に残すか否かだ。

前者の場合、その存在を巡って、しばらく幻想郷は荒れるだろう。現在は何者かの手によって抑えられているようだが、初めこの岩塊から放たれていた『魅了』の力は脅威である。封ずる術はあるのだ

ろうが、それが解放されてしまった時のことを考えると、やはり安心とは言えない。

力の源を破壊する手段もあるが、それが成功するとは思えない。岩塊の住人たちが死守してくるはずだ。あるいは別の可能性——犯人たちは「力の源を破壊」しようとしている——もあるが、どちらにせよ難しいだろう。それは、あの者たちほどの力をもつてしても源を壊すことができずにいる、ということなのだから。

後者の場合、幻想郷が内部から荒れることはないだろう。問題となるのは、岩塊が外の世界から来たことだ。彼女たちを経由して、外の世界の住人たちに幻想郷の存在を知られば、最悪の事態も起こり得る。口止めたところで、そもそも彼女たちが信用に足るだけの者でなければ意味がない。

また、前者後者どちらにしても、やはり幻想郷で暮らす者たちへの影響は大きい。彼らにとって外の世界は、一つの浪漫である。ひよこつとこの地に現れる外来人から話を聞き、大きな興味を抱くのだ。それが例えば月の都ならば、（行けるには行けるが）労力を考えると多くの者が無理だと諦めるだろう。しかし、幻想郷は結界によって守られた地——逆説、結界さえ越えられれば、そこはもう外の世界なのである。

パチュリーたちのように、外の世界から幻想郷へ移り住んだ者がいるならば、幻想郷から外の世界へ移ろうとする者がいてもおかしくない。この世界へ迷い込んだ外来人は、結界を管理する博麗霊夢の力を借りて元いた世界へと帰っていく。結界を越えることは、博麗の巫女を説き伏せることができたならば、そして二度と帰らないという覚悟を持ったのなら、割と簡単に実行できる。実際、過去に何人かそうしているかもしれない。

岩塊がこの幻想郷に侵略してきたという事実がある以上、その影響から逃れることはできない。紫もそれは解っているはずだから、彼女が敵を招き入れたことには、必ず何かの意図がある。いや、あまり考えたくない可能性だが、彼女の見せていた余裕は仮初で、岩

塊が幻想郷に入ってきたのは避けられないことだったとしたら——
淀んだ温さが頬を撫でているのを感じながら、パチュリーはそつと目を開けた。

嵐のような戦いが過ぎ去ったフロア。床、壁、天井——至る所に罅が入り、欠け落ちた石片が部屋中に散らばっている。それでも、空間を包む魔法的な防護が想像以上に強力だったため、荒れているというほどでもない。

静まり返った世界の中、一人の少女の声が、細々と響き渡った。

「……疲、れた。どうしようかな。レミイと妹様も十分満足しているだろうし、帰ってもいいんだけど」

だが、その体力も気力も残っていなかった。敵であるナビユールが側で倒れているが、それでもここで寝てしまっても良いかと思っってしまうほどだ。実際、考えている内にうとうとし始めている。敷かれたカーペットが妙に心地良いのである。激戦の末、ボロボロになっではいるが。

しかし、少しばかり身体を休めることも、彼女には許されなかった。

「——お、中で誰か倒れてるわよ」

それは、パチュリーにとって聞き覚えのある声だった。だったからこそ、そちらに目を遣る気が全くしなかった。

「おい、大丈夫？　生きてる？　それとも成仏する？」
声の主。

それは、お騒がせ者の天人——比那名居天子だった。

Stage.5-11 <パチュリー・ノーレッジ:8> (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/234087/

「それにしても、まだ増援がいただなんて思いもしませんでした」

天子の連れ、永江衣玖は奇異を見る目でそう言った。実際続けて「この異変にわざわざ自分から向かっていこうとする変人など、総領娘様で最後だろうと……」

「私は変人じゃなくて天人よ、て・ん・じ・ん」

「天人も変人の一種だと思うのですが。人から離れた存在であるわけですし」

「う……そう言われるとまあ、間違っではないけれど。いないけれど」

その言い方には、嫌味なニュアンスが多分に含まれているように感じられるのだが。

このまま続けて自分にまつわる嫌味話を広げられても困る。天子は流れを変えるべく、床に横たわるパチュリーに話を振ることにした。

「貴方に色々訊きたいことがあるのだけど、いいかしら？」

「いいけど、手短かにしてちょうだい。疲れているの」

「普段桃も食べずに引き籠もっているからそうなるのよ」

「大きなお世話よ……それで、何？」

「そうね……あそこで倒れているのは、ここに住んでいる敵？」

天子の指さした先に倒れている少女を見て、パチュリーは頷いた。「そうよ、さつき私が倒したわ。疲れたけど」

「まあ、かなり消耗してはいるみたいね」

「帰る気力もない」

「でしょうね」

「見たところ、貴方たちも随分やられているようだけれど……」

「私と衣玖は、別の場所で他の住人にもてなされてね。まだ歓迎してくれる者がいるようだから、ここで帰るわけにはいかないのよ。大量の酒が用意されていて、呑んだら記憶がなくなるわけでもないし——」

はっと、何かに気づいたようにパチュリーの表情が緊張した。しかしすぐに元に戻る。どうしたのかと天子は問おうとしたが、「随分と飢えているのね、天人なのに」と皮肉られ、そのタイミングを逸した。

代わりに言葉を発したのは衣玖だ。

「……ですが、ここでずっと寝ているわけにもいかないでしょう。気を失っているようだとはいえ、いつあの敵が起き上がってくるかも分からないですし」

「じゃあ、竜宮の使い、貴方が連れていつてくれるのかしら」

突然の言葉に、え、と衣玖の動きが固まった。

「あるでしょう、言いだしっぺの法則つて。この本にも載っているわ」

「魔道書にそんな子供じみた法則が書かれているとは思えませんが

……」

冗談は軽く受け流し、衣玖は天子に困惑の目を向けた。

これはチャンスだ、という表情はおくびにも出さず、天子は答える。

「いいんじゃないかしら、連れていってあげれば。貴方の言う通り、ここに放っておくのも危険でしょ」

「いや、でも、それでは総領娘様が」

「今更どうなったところで何も変わらないわよ。己が欲を遂げんとて義を失うは、小人と申すべし——命ある者を見捨てることは、天人として誇れる行為ではありません」

惨めになるからそれ以上言わないで、という魔法使いの声が聞こえたが、ぐったりとした体勢でそう言われてもただ哀れとしか思えない。

衣玖はしばらく考えるようにして、やがて渋々と言った。

「……分かりました。それでは、ここからは別行動ということで。総領娘様、お気をつけください」

「ふ、誰に言っているのよ」

「総領娘様以外にあり得ません。他の方にはわざわざ言う必要もないことです」

「ふ、信頼されているのね」

「信用されていないのです」

「……………」

「ほらそこで黙らずに」

「……あー、で、次の質問なんだけど」

パチュリーの視線は何もない天井へ向けられていた。下らない会話を聞くよりも天井を眺めている方が面白いのだろう。

「ここには貴方一人で来たのかしら？」

「途中で守矢の巫女と遭遇したわ。私がここで戦っている間に、先に進んでいった」

「他には？」

「いない」

「墓には？」

「入らない」

面倒だから早く切り上げてくれ、という意味が見え透いた返答だ。天子もこの問答が面倒に感じてきて、処理は衣玖に丸投げすることを決意した。

「というわけで、衣玖。さっさと行きなさい」

「いや、何が『というわけで』なのかよく分かりませんが……」

大きな溜息を吐きながら、衣玖はパチュリーと二言三言交わし、勲功の魔法戦士を背に負った。飛ぶ力すら残っていないらしい。

ぼそり、と耳元でパチュリーが何かを囁くと、衣玖は驚きの表情を浮かべた。

「——え、湖の館に戻るのではないのですか？」

「紅魔館には戻らないわ。ちょっと事情があつてね」

「では、どちらに？」

「そうね、少し南に行ってもらふことになるけど、魔法の森までお願いできるかしら」

「魔法の森？」

「ええ、魔理沙の家に行くわ。ちょうど本人が留守にしているから、ちよつと泥棒された本を取り返しにね」

「館に戻るのならともかく、私用に都合良く私を使わないでください」

「冗談よ。冗談でもないけど、それはついでの話。本筋は、その泥棒された内の、ある本を手に入れることにある。私が果たすべき役割は、本来これだったのよ」

「……えーと、私の記憶が確かならば、貴方は今、自力で起き上がることが困難なほどのダメージを負っているはずなのですが」

「そうね、だから、貴方にも手伝ってもらうわ」

「……ええ、何となくその答えは予測できていましたよ」

苦笑する衣玖の両目に、涙の膜がうつすら張られているのが見えた。

二人の話を聞く限り、衣玖はパチュリーに付き添ったまま、当分の間こちらへ戻ってくることはなさそうだ。これでようやく、天子は衣玖の「監視」から開放される——衣玖が、天子から開放される。「お話はもう終わったかしら？ それじゃ、他に言うことがなければ——」

「——待つて」

背を向けたところを呼び止められ、天子は首だけ振り向いた。「どうしたのですか？」

すぐ目の前で黒帽を斜めに傾げた衣玖は見ず、パチュリーの視線は、天子へと向けられていた。天子は怪訝な表情をして、

「……何よ、行くんじゃないの？」

「貴方、この先に進むのでしょうか？ ならば気をつけなさい。魔法

使いかどうかは知らないけど、どうやら強敵が待ち受けているみたいよ。今、他の者——白黒と人形使い、それから守矢の巫女が戦っているわね……三人掛かりで」

「ふうん、三対一でねえ……」

「敵として私が感知できるのは、今戦っているその一人だけね。ここへ来る途中、距離が不自然に弄られていたでしょう？ それは恐らくそいつの仕業だ。だけど、恐らく、その先——この岩の要塞の中心にもう一人、何者かが待ち受けている。残りの紅白はその何者かと一緒にいるはずよ」

「その『もう一人』がこの異変を起こした犯人？」

「分らない。ただ、どちらも驚異的な能力を持っているのは確か」
「ん？ ああ、成程。何かやけに詳しいと思ったら、この敵から情報を聞き出してくれたのね……私のために」

「最後の七文字は全く耳に入らなかったわ」

「天人のありがたい言葉には、もっと素直に耳を傾けるべきよ。例えば七曜を究めた魔法使いといえども、無欲無我の境地を拓いたわけではないでしょう」

「ありがたいかどうかはともかくとして、まあ、それは認めざるを得ないね。魔法使いは元より探求の徒、無我にはなれても欲を排することはできないわ。できたとしても、それは限りなく零に近いだけ。零そのものではない。そう思うのよ。特に、あの子と戦った後ではね」

「へえ……何よ、やけに素直じゃない」

「ただ」

疲弊のためか仄暗く曇っていたパチュリーの瞳に、ふっと光が射した。

「貴方たち天人は、貴方はどうだか知らないけれど、確かに無欲なのだろう。世俗を捨て去り、輪廻を断ち切り——しかしそれでも、手放していないものがある」

「判っているよ……それは、例えば私が私であるために必要なもの」

「そう、そしてそれは、貴方の持つ緋想天に一点の曇りを与えている。もしもこの岩塊の中心にいる者が、敵として貴方を全力で排除しようとするなら、その一点の曇りでさえも存在を許されないだろう。ほんの僅かでも穢れを持っている者は、容赦のない慈悲をもって『浄化』されてしまう——あるいは、純真に魅せられてしまう」

「……………」

天子は衣玖に担がれる満身創痍となった魔法使いの意図を理解しようとして、ただ黙ってその言葉を何度も反芻^{はんすう}していた。

彼女がここへやって来たのには、何かしらの理由があるはずだ。だが、侵入を果たしてすぐ敵と交戦し、体力を使いきってしまった。目的も果たしていないだろうに、退場せざるを得なくなったという無念——必ず、天子に伝えたいメッセージがあるはずなのだ。それを直接言わないのは、馴れ合いをしているわけではないという矜持のためか、はたまた単にからかっているだけなのか。

「もう一度言うわ。くれぐれも、途中で燃え尽きてしまわないよう、気をつけなさい。既に傷を負っているようなら、尚更ね」

「まさか。だったら私も、もう一度言いましょう。客として招待されているのだから、主人の饗^{もてなし}しを全て受ける前に帰るわけにはいきませんわ。それが、招かれた者として持つべき最低限の礼節でしょう」

もつとも、主人のためのサプライズを用意するのも、客人の役目なのよね——そんな皮肉めいた言葉を残して、天子は階段の奥へと消えていった。

Stage・5-12 <比名那居天子：2>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/236349/

S t a g e ・ 6 - 1 <霧雨魔理沙：4>（前書き）

あまりの眩しさに、何人たりともその真の姿を捉えることはできない。

「——うんうん、早速やつてみたいだな」

階下から響く振動を感じながら、魔理沙は楽しそうに言った。

対するアリスはやや後方を気にしつつ、

「手強そうだったけど、大丈夫かしら、あの二人」

「この程度でやられるタマじゃあないでしょう。二対一なんだから、むしろ心配されるべきは相手の方だと思うけど」

ま、妖怪なんだし心配することもないけどね——霊夢はまるで興味がないのか、欠伸をしながらそう答えた。天人と龍宮の使いに任せてきた階下はまだ良いが、彼女たちが向かう先からは、強者特有の覇気が漏れている。その中でも余裕の態度を突き通しているのは、流石は異変解決のプロ、博麗の巫女と言うべきか。

三人の少女は今、岩塊のほぼ中央部と言えるフロアを歩いている。外が見えるわけではないので正確なことは分らないが、霊夢の勘がそう言っているのだから間違いないだろう——というのが魔理沙の見解であり、アリスもそれに従っているので、何の問題もなくここは「岩塊のほぼ中央部と言えるフロア」なのである。というのは冗談で、この階層から飛び抜けて強い力を感じるというのが、三人の意見が合致した理由だった。

このフロアは他の階とは異なり、道が大きな弧を描いているという特徴があった。もしかすると、ずっと歩いていけば一周できるのかもしれない。岩塊の大きさを考えると、十分にあり得る可能性だった。ならば、その円の中心には何があるのか——その疑問には誰も答えなかったし、答える必要もなかった。

不自然なまでに均一な明かり、床に延々と敷かれた赤い絨毯、不整形な岩の壁——三人の足音は、そんな囲われた世界の中で虚しく

響いては消えていく。忍び足で進もうという意思を全く感じられない、堂々とした歩みだ。侵入した事実は既に岩塊の住人全員が知っているのだから、こそこそ隠れる必要はないだろう。それに、「忍ぶ」という行為が、そもそも彼女たちの感性に合っていないというものもある。

「この中心と、少しずれた所から、強い力を感じる」

それが、このフロアに上った三人から真っ先に出てきた意見だ。後者には恐らく、今歩いている通路を進めば行き当たる。中心から感じる力は確かに強いが、酷く非生物的なものだった。入口にあったものと同じく、しかしずっと大掛かりな人工の装置ではないか——とアリスは推察していた。

「……で、アリスの言う変な力を発しているのが、中心にあるその装置ってわけだ」

「今はもうその力は感じないから、これは単なる憶測だけどね。その代わりに、別の、魔法らしい力がそこにある……これは、結界かしら？」

「その装置を守っているのか？」

「分からない。仮に結界が掛けられているとして、ならばどうして一時的にその結界を解除していたのか。それとも、この結界の方が一時的な処置に過ぎないのか。今の段階では判断のしようがないわね。ある程度なら、予想はついてるんだけど」

「ま、異変を起こした犯人を締め上げれば全部わかるだろう」

「そうね。そして恐らく、犯人——この岩塊を統べている者は、私たちが中心へ行くために通らなければならぬ通路を塞いでいる」

「なら簡単だ。そいつを倒してさっさと異変を解決しまおうぜ」

それとも、中心部まで入ってその装置ぶっ壊すか——霊夢はどうする？」

「どうするもこうするもないわよ。あんたはどうせ最後までぶっ壊すつもりなんだろう？ 仕方ないから付き合っただけよ」

「ま、壊すかどうかはまだ分からんがな。魔法の研究に使えるもの

かも知れんし、そうでなくとも香霖への手土産にはなりそうだしな」
それに金目の物もあるかも、と霊夢を横目に見ながら魔理沙は笑う。

「うつさいわね。あんたみたいに泥棒してるわけじゃないのよ」

「おいおい、人聞きの悪い言い方はするなよ。ま、私も本業で稼げてないのは認めるがな」

「本業って、あの何でも屋のこと？ そりゃ場所が悪けりや店主もあんたなんだから客なんて来ないでしょう。あ、何ならウチの神社に移ってみる？ 報酬の半分を賽銭にする条件で手を打ってあげなくもないわよ」

「うーん、お前のその残念な頭を手で打^ぶってやることならできるんだが、これまた残念なことに、叩いても直りそうにはないな」

「やれるもんならやってみなさいよ。まあ、軽く返り討ちにしてやるけど。その頭、叩けばポクポク愉快的な音出してくれるんじゃないかしら」

「いくら私でも、帽子の中に木魚を隠し持つような坊さんの趣味はないぜ。それとも霊夢、仏教に鞍替えしたのか？ それなら、いい寺が最近出来たから紹介してやるよ」

「それって、『いつでも魔界を観光案内してあげる』とかあんたに言ってるあのお寺じゃないでしょうね？ 関わりとまた面倒なことになりかねないから、私は遠慮させてもらうわ」

「おいおい、ヒトの誘いは無下にするもんじゃあないぜ？」

「勝負したいってお誘いなら、喜んで受けてあげるわよ？」

意地の悪い笑みを浮かべながら皮肉を言い合う二人を、「はい、そこまで」とアリスが止めた。途中から除け者にされてつまらない思いをしていたのかもしれない。

「ここで弾幕ごっこしたってしょうがないでしょう。全く、血の氣が多いわね」

「——冗談だ、何をムキになってんだ？」

「——冗談よ、何をムキになってんの？」

「あ、あんたら、ねえ……！」

二人の連携が余程効いたのか、アリスは珍しく怒りを露わにしていた。

もつとからかってやりたいくらいには面白かったが、遊んでいる場合でないのはアリスの言う通りなので、魔理沙と霊夢が追撃を加えることはなかった。あるいは、重い溜息を吐いたアリスを見て哀れに思ったのかもしれない。

「……あ、広い場所に出るみたいね」

霊夢の言葉に、三人の歩みが止まる。感覚的に、ちょうど円を半周したくらいの位置だろう。廊下部分が終わり、奥には階下と同じような広い空間が広がっている。

「ここだな……」

先程まで忌憚きたんなく喋っていた魔理沙も、ここでは小声になる。紛らわせていた緊張が、再び張り詰められる。

「……ちよつと魔理沙、大丈夫？」

背に手を添えるアリスの言葉に、魔理沙は全身が震えていることを自覚する。大きな力がすぐそこにまで迫っている——それと今から対峙しようとしていることに、彼女は恐怖を覚えていた。同時に、強者と戦うことへの興奮も、心の中には確かにあった。

「ああ、武者震いって奴だ。だからさっさと乗り込みまおうぜ」

「あ、ちよつと！」

ここまで来て、止まることなどできるはずもない。

制止を振り切って、魔理沙は「部屋」の中へと一歩踏み出した。

Stage・6-1 <霧雨魔理沙：4>（後書き）

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/244713/

その部屋は、彼女たちが予想していたよりもずっと広がった。向かい側の壁がほとんど見えない。先程接敵した下層の部屋が非常に狭く思えるほどだ。これだけの広大さを持つ空間が岩塊の中に存在している、ということ自体が不思議でなかった。

「おいおい、何なんだこの部屋は。全速力でも存分に飛び回れるくらいだっ広いぜ」

「外と同じ魔力を感じるわ……どうやら、距離を弄っていた者の仕業ね。吸血鬼や永遠の屋敷ではないけれど、空間が不自然に拡張されている」

呆然とする魔理沙から零れ出た言葉を、アリスは冷静に受け止めた。

続けて、少しの間口を閉じていた霊夢が言う。

「ま、変な仕掛けもないし、ただ広いだけだから迷うことなんてないわ」

それにほら、と霊夢はやや左方、「円」の中心へ向けて指差す。

その先には（部屋の大きさの割には）小さな扉があるだけだったが

——彼女が示していたのはそれではない。彼女たちと扉との間には、何も無いが、何かがあった。淀む空気に混じった、大きな魔力の歪み。

「——敵がすぐそこで待ってるんだから、倒してあげるのが礼儀よね！」

そう言つて、赤や青で式の描かれた札をばら撒く。紙束は列を成して歪みを取り囲む円となり、その内側にある見えない何かを拘束するように収縮した。

弾けるような音がして——そこに、歪みの正体が姿を現した。

「あっちゃあ、バレちゃってたか……隠れてるつもりもなかったけど」

現れたのは、宙に浮かんだ人間だった。それも、年端もいかぬ子供だ。しかし、ただの子供ではない。大きな深緑のマントを羽織り、頭には黄金の冠が強く輝き——まるで、「王様」を具現化したような格好だったのだ。ただ、マントの下衣装は下着よりいくらかマシな程度で、高貴と言うより高貴に見せようとする庶民と言った方が正しいようにも思える。

だが、その中身は決して乳臭い子供のそれではない。大きな力が周囲に滲み出ている。それだけの力を内に持っていて、しかし呑み込まれてはいない——子供と形容するのが滑稽に感じるほどの存在であることに間違いはなさそうだった。

「初めまして——そしてようこそ、“望蛾楼”へ」

冠を被った子供は、ゆっくりと床に降り立ち、そう言った。

「ボクは黄蝶^{きようてつ}あぼろ。この望蛾楼を管理してる魔法使い、といったところかな……あ、勘違いの無いように言っておくけど、ボクは歴とした女の子だからね」

「……………」

静まる三人から、疑りの視線が少年——否、少女に向けられる。だが、少女は慣れているのかただ気づいていないだけなのか、その視線を無視して続ける。

「ああ、そうそう。ここに侵入してきてから、キミたちのことはずっと観察させてもらってたよ。下で戦っているキミたちの仲間のこともね」

「……男装趣味ちゃんは覗きも趣味にしてるのか？ とんだ変態だな」

魔理沙の（やや引き気味の）挑発も、戴冠の少女はさらりと笑って受け流す。

「言ったじゃん、ボクは管理人だって。だから、不法侵入してきた不審者を監視するのは当然の責務さ」

「成程。だったら、下の様子を少し教えてくれないかしら」

事もなげにアリスは言ったが、敵である「侵入者」にわざわざ情報を提供するはずがないだろう——という魔理沙の思いとは裏腹に、あぼろは「いいよ」と朗らかに答えた。

「まずは……えーと、天人だっけ？ その人たちは檻姉と今も戦ってるよ。まだ決着はついていないけど、そろそろ終わるんじゃないかな。後、キミたちは気づいていないようだけど、他にもまだ二人の侵入者がいる。紫色の魔法使いと緑の巫女だね。魔法使いの相手をナビイがしていて、もう一人はこっちに向かってきてるよ」

「紫色の魔法使い……パチュリーのことか？」

「緑の巫女……っていうと、早苗のことかしら」

奇妙な組み合わせだ、と魔理沙と霊夢は顔を見合わせる。しかし、だからこそ、あぼろが嘘を吐いていないことは分かった。それに、まだ別の場所に潜んでいた敵をパチュリーが喰い止めているらしい。そのことが判明しただけでも十分価値のある情報だった。

とはいえ、これであぼろを信用できるわけではない。その価値ある情報を無償で提供したことには、それなりの真意が隠されているはずなのだ。

そして、怪しいと思っているのは霊夢も同じようだった。

「……早苗がこっちに來てるって言ったわね」

「うん。名前は知らなかったけど」

「早苗だけじゃない。下で戦っている奴らだって、あんたの仲間に勝つたらここに集まってくるでしょう。そうなったら困るんじゃないの？ それとも、絶対に仲間が勝つって信じているのかしら？」

「どっちの質問に対しても、答えは『そうでもないよ』だね。侵入者を追い払ってくれることに越したことはないけれど、かといって突破されても状況はあまり変わらない。既にキミたち三人が、こうしてここまで到着しちゃったからね」

「そう。で、私たちはここであんたをメッタメタにしてやればいいのね？」

「何が『で、』なのかよく分からないけど……とりあえず、そう言われて素直にやられるわけにはいかないね。ボクは今、ここでキミたちを止めるよう言われているからさ」

「言われている？ 誰にだ？」

揚げ足を取るような魔理沙の疑問に、あぼろは少し驚いたような顔をして、

「さあ、誰だろう。神様とかかな？」

「とぼけるか……まあいいぜ。ところで、あそこの扉——」

と言つて、魔理沙は向かい合うあぼろの更に後方を指し示す。

「——あの奥には何があるんだ？ お宝ならもらつていきたいんだが」

ニヤリと不敵に笑う侵入者の顔を見て、それまで淀みなかったあぼろの言葉が止まった。答えはあるが、どう言えば良いのか迷っている風だ。ということはつまり、魔理沙たちに触れさせたくない、あるいは見せたくない何かが扉の向こうにある。それだけは確かだろう。

あぼろは悩む仕草を続ける。それが姑息な時間稼ぎのように思えて、徐々に苛立ちが募っていく。苛立っているのは霊夢も同じよう
で、「何なら一発ぶつ放してみるか」と魔理沙は目配せを送ったが——結局、それが実現することはなかった。不意を突くように、アリスの言葉が飛んできたからだ。

「……こつちから下手に仕掛けるのはやめた方がいいわよ」

え、と声を漏らしたのは、あぼろではなくアリス側の二人だった。「聞いてなかったの？ さっき言っていたでしょう、下の戦いを見ていたと。相手は私たちの実力がある程度把握していると見ていいわ。しかもその上で、たった一人で敵を待ち構え、更には増援があらうと構わないと言う。それだけ己の力が絶大だと自負しているということよ」

それこそ神のようにね、とアリスは言いながら、どこからともなく二体の人形を宙に浮かせた。

「お、おい、アリス、何をしようってんだ？　こっちから仕掛けん
なつて言つたのはお前じゃないか」

「下手に仕掛けるな、と言つたのよ。……ところで霊夢」

「うん？　……ああ、はいはい。あんたの言いたいことは大体分かつたわ」

「そう、流石ね。じゃあ、行つてくれるかしら」

「任せなさい。異変解決は私の役目だからね」

そう言つて片手をひらひらさせながらあぼろの方へ向かう霊夢を、
「ちよつと待て」と呼び止める声が二つあつた。何故か分からない
内に霊夢に接近されているあぼろと、何故か分からない内に話を進
められていた魔理沙である。

先に不平を言つたのは魔理沙だつた。

「おいアリス、異変を解決するのは私の役目でもあるだろう。私も
霊夢について行くぞ。……いや、どこに行くのかは知らんが」

「あの扉の奥に決まつてるでしょう。それに、行くのは一人で十分
よ。あなたは私と一緒に、目の前の敵をやっつければいいの」

「はあ？　と尻上がりの疑問が口に出る。」

アリスの考えは、今の発言で大体把握できた。天人と龍宮の使い
のように、あぼろを引きつけて霊夢を先に行かせるということだろ
う。それが本来の作戦であつたのだから、それに従えば誰かがあの
扉を潜るということになる。

だが、分からないのは、先へ進むのが霊夢に限定されているとい
う点だ。確かに敵は強い。二人で当たつた方が良いと思うのも分か
る。だがアリスは、残つた一人を、アリス自身でも魔理沙でもなく、
霊夢であるべきだと言つた。

「——通さないよ。言つたよね、キミたちを止めないといけないつ
て」

側を通り過ぎようとする霊夢を、あぼろはマントから出した細い
腕によつて止めた。霊夢はつまらなそうな顔をしたが、無理矢理突
破を図ろうとはしなかった。

しかし、いつどちらから手が出るとも分からない、危険な状況だ。それを分かっているのかいないのか、アリスは不敵な薄ら笑いを浮かべて言う。

「どうやら知らないみたいだから、少し試してみましようか。霊夢は博麗の巫女、幻想郷と外の世界を隔てる博麗大結界の管理者よ——と、そう言ったら、貴方はどうするのかしらね」

「結界の——管理者、だって？」

「そうよ。その点では、霊夢は貴方の同業者と言えるわね」

こんなチビツ子と一緒にしないでよね、と霊夢は扉に正面を向けたまま言った。彼女の言う通り、あぼろの背は霊夢より低い。霊夢よりやや低い魔理沙の身長よりも低いくらいだ。

しかし、元より「チビ」なのは自認しているのか、そんな揶揄に付き合う余裕を失っているのか、あぼろは顔を伏せて何やら考え事を始めた。

霊夢の全身を塞ぐ手は下ろさない。待ちくたびれる霊夢の足先がぱたぱたと上下して、紅いカーペットに小さな皺を作る。床の赤と巫女の赤。同じようできて、それは決して交わることのない自尊の色だ。

「アリス……これ、どういうことなんだ？」

魔理沙は小声で訊いた。人形使いの興味は先程出した二体の人形へ向けられており、答えはそっけないものだった。

「魅了しているはずなのに、それを遠ざけている。魅了しているのがこの中心にあつて、遠ざけているのはその敵。二つの間に齟齬が生じているのなら、付け入る隙もあるでしょう」

「成程、よく分かん」

「分からなくていいのよ。実際、ほら、ああやって悩んでるでしょう？」

無言で項垂れるあぼろが、何となしに人形のように見えてくる。アリスにすら操られていない、孤独な人形だ。周囲を、世界が回っているだけ。置き去りにして、歴史が廻っているだけ。

魔理沙は思う。アリスの言う通り、細かいことはどうでも良いのだ。この危険な異変が早く終わりさえすれば、他のことはどうでも良いのだ。

「——分かったよ」

人形が声を上げた。いや、アリスの人形ではなく、あぽろだ。あぽろは霊夢の横顔をちらりと見て、出した手を下して諦めたように言う。

「扉を開けるよ。先に進んでいいよ。ただし、手荒な真似はよしてね」

戴冠の少女が何かを呟くと、奥の扉が開いた。霊夢は無言で、前進を再開する。

そして扉を潜る前、霊夢は忘れ物を思い出したかのように振り向いて、

「——ふん、誰に物を言っているのかしら。私は巫女よ。異変が起きてんのに、事を穏便に済ませるわけがないでしょう」

そう言って、奥へ続く暗闇の中へと消えていった。

Stage・6-2 <霧雨魔理沙：5>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/248900/

「それで……キミたち二人で、僕と戦うつもり？ あの霊夢って人を先に行かせたんだから、別に戦う必要はないと思うんだけど」

無意味な争いはごめんだよ、とあぼろは肩を竦める。対するアリスは、

「戦う必要はあるわ。貴方には、この岩塊——望蜃楼の管理者として、幻想郷から出ていってもらわないとならないもの。私たちが勝てば、大人しく外の世界に戻ってもらうわ」

「何だ、出ていかせるのか？ 面白い奴らなのに」

驚いたように声を上げたのは魔理沙だ。アリスは隣に立つ白黒装束の魔法使いを見て、呆れた、と溜息を吐く。

「魔理沙、貴方、この奥にあるものがどれだけ危険か、そんなことも分かってないの？」

「は？ いや、確かに危険かもしれんが、それなら旧地獄とかも一緒だろう。今はその、結界か何かで抑えているんだし——」

「——いつか抑えられなくなるくらいに大きくなるとしたら？」

魔理沙は絶句する。何も答えられなかった。いや、何も考えることができなかった。

ちよつと待ってね、とアリスはあぼろにそう告げた。

「どうしたの？ 作戦会議？」

「そんなところよ……この子が上手く現状把握できていないみたいだから、説明する時間をちょうだい」

まあ別にいいけど、という敵の答えが返ってきた瞬間、金色の前髪が魔理沙の顔をくすぐった。

「ちよつ、アリス、近い、近いぜ！」

すぐに離れようとしたが、二つの手ががちりと魔理沙の肩を掴

んで離さない。アリスの据わった瞳が、泳ぐ魔理沙の目を鎮める。

「外で見たあの蝶……じゃなくて蛾か、魔理沙は憶えてる？」

「あ、ああ……少なくともそこにいた妖怪よりは綺麗なもんだったな」

「その蟲妖怪が言っていたわよね。どうしてあの蛾だけは、あの奇妙な力に魅せられていなかったのか」

「言ってたっけか。ま、どちらにしてもよく分かんが」

「その理由は簡単よ。あの蛾は、既に魅せられた後、ということよ」

「……いや、ますます分からないんだが。魅せられたのに、何であんな所でふよふよしてたんだ？」

「魅せられた“心”が、もう残っていなかったのよ。だから、何の変哲もない場所で彷徨っているしかなかった」

「ああもう、回り諄い奴だな。私が何も分かってないのは認めるから、さつさと全部教えやがれ」

全身に力を込めて少し暴れさせると、今度は簡単に拘束を振り解けた。

アリスは一瞬あぼろを見遣ると、再び視線を魔理沙に向ける。

「面倒だからできるだけ説明を省きたいのよ。でもまあ、何も分かっていないのなら全て話してあげるわ——あの蛾は、幻想郷にあった魂を基に生まれている。恐らくは、喰い千切られた破片が、あの蛾になって舞っていたの」

「幻想郷にあった魂……？ 喰い千切られた……？ ってことは何だ、私たちが魅せられていたのって、あの奥にある訳の分からんモノに喰われるためだったのか？」

「そうよ。今こそ結界が何かでその力を封じているようだけれどね。貴方に言うとか余計に突っ込んでいきそうで危なかったから、言わなかったけど」

ぐ、と凶星を突かれて魔理沙は怯む。つまり、あの時「霊夢の後をつけよう」と言ったのも、できるだけ岩塊へ近づくのを遅らせるためだったということか。

不服ではあったが、先に一人で突っ込んで返り討ちにあっていたれば、余計に異変の解決が遅れていたかもしれない。何と言っても、あの霊夢が、岩塊入口で後続の到着を待っていたほどののだ。普段の異変と同じノリでいては、この度の異変は解決できない――

「『喰われた』魂はどこへ行くのか……当然、喰った者の養分になる。養分を取れば、それは成長する。大きくなる。より強い力をつける。そしてその内――」

「――結界でも抑えきれなくなっちまう、ってことか」
こくり、とアリスは頷いた。

「ただ、さっきも言ったように、あの力は幻想郷の者たちを寄せ集めようとしていたけど、それに相反する力もまた、この望郷楼から生まれている。できるだけ、私たちをここへ近づけさせないようにね」

それを、あいつがやっていたというわけ――アリスは言って、あぼろを指差した。話を聞いていたのか、あぼろは「大体正解だよ」と小さな拍手を送り返してきた。

「あの力を抑えられる手段を持っているのにわざわざそれを解放していたのは、誰かをおびき寄せるためでしょう？ 距離を長くしていたのは、その『誰か』以外の者がやってこないようにするため」

「……結局、キミたちがここまで来ちゃったんだけどね」

「否定はしないのね」

「しないさ。どうやら、その『誰か』のことまで分かっているみたいだし」

「だから霊夢を行かせただけどね」

誰かって誰だ、という魔理沙の疑問を無視して、アリスは続ける。「貴方たちが何をやりたいのかは分からないけれど、少なくともそれは私たちに利のあることではない。これ以上、幻想郷を貴方たちの好きにさせることはできない。さっさとここから出ていってもらうわ」

宣戦布告。

突き付けられた言葉に、しかしあぼろは、愉しそうに笑うだけだった。

「――成程。そこでキミたちが普段やってる『弾幕ごっこ』が登場するわけだ」

「スペルカードルール……外で見張りをしていた鹿の妖怪が知っていたくらいなんだから、当然貴方も知ってるんでしょ？」

「まあね……で、その提案にボクが乗るとでも？」

「乗らないのなら、こっちもそれなりの対応はするわ」

そう、とあぼろは頷くと、魔理沙たちを観察するように凝視した。

「な、何なんだ……？」

「何でもないよ。ただ、キミたちの実力を量っていただけ」

「それで、量った結果、どうなったのかしら」

笑うあぼろは、すぐには答えず、右手を頭上へ掲げた。

何の真似かと思ったが、瞬時に分かった。開いた右手の周りを渦巻くように流れる魔力。それは強い光を放ちながら棒状に延び、一本の銀剣となってその右手に握られた。

あぼろが剣を振るうと、空気を裂く鋭い音が鳴った。

「――その勝負、受けて立つよ」

二体の人形が慌ててあぼろから距離を取る。元からそれほど近づいてもいなかったが、繋いだ糸が切られることを懸念しているのだらう。

その人形たちの主人であるアリスは、関心なさそうな顔をしている。

「貴方たちにも早速分かってもらえているようね。弾幕勝負の楽しさが」

「確かに楽しいとは思っね。キミがさっき言ってた鹿の妖怪――デИА姉も、下でキミたちの仲間と戦っている檻姉とナビィも、だからそのスペルカードルールというものに則っているはずだ。本当はそうする必要もないのにね。でも、わざわざキミたちの土俵に上がった。何故かって？ それはもちろん、楽しいからさ。キミたちの

領分でキミたちに勝てば、最も効率的に戦意を削げるからね」

は、と魔理沙が笑った。持った筈の柄を突き出すように構える。

「そりゃあ残念だったな。鹿も霊夢に負けたし、他の奴らだってそう簡単には勝てないぜ？ いや、今頃はもうこっちに向かってきてるかもな」

「それでも構わない、と言ったはずだよ？ だって、ボクがキミたち全員に勝てばいいだけの話なんだから」

「変態かと思っていたが、どうやらとんだ自信家だったようだな。だったらその自信、塵も残さず焼き尽くしてやるぜ！」

「どうか。焼き尽くされるのはキミの方だよ。やろうと思えば、今すぐにでも灰にしてあげられるんだよ？」

「じゃあやってみるか？」

やらないよ、とあぼろは余裕の表情で即答した。

「本気を出してこの“家”を壊すわけにもいかないしね。何より、キミたちにここで死なれると困ったことになるかもしれない。面倒なことは嫌いなんだ」

「そうなのか。いや、私も面倒は嫌いなんだ。仲良くなれそうだな」

「ボクは面倒事を片づけてくれる人と友達になりたいけどね」

「それはますます気が合うな。実は私もそう思っていたんだ」

「それは良かった。だったら仲良くなれそうもないね」

「ああ、二人仲良くお断りだな——だから、この勝負は私一人がもらうていくぜ！」

恋符、と八卦炉を勢い良く突き出した魔理沙は、

「——あ、皆さんこんな所にいたんですね！」

後ろから届いた聞き覚えのある少女の一声によって、こてんと躓いた。

今度は何だよ、と起き上がりざまに部屋の入口方向を見る。そこにいたのは、山の神社の緑巫女——東風谷早苗だった。

「いや、もしかしたら皆倒されちゃったんじゃないかと思って心配しましたよ。途中で一緒になったパチュリーさんに言われて色々中を見て回ったんですが、大した物が何も無いどころか、誰かが戦っていたはずの場所にも誰もいなくて……まあ、それならそれで、私一人で攻略するだけの話なんですけど。あ、でも、幻想郷の人たちってそんな簡単にやられるような感じでもないし、大丈夫かなあとは思ってましたよ!」

登場早々喋りたいだけ喋った早苗は、神妙な面持ちで黙りこむ三人を順に眺め、何かが納得できないように首を傾げた。

やがて疑問は氷解したらしかったが、彼女の首は更に傾ぐばかりだった。

「……ってあれ、霊夢さんは?」

Stage・6-3 <霧雨魔理沙：6>（後書き）

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/254799/

「……遅くなつて申し訳ありません、幽々子さま。只今戻りました」
冥界——白玉楼付近を漂う幽霊は、いつにも増して多かつた。

顕界へ抜け出ていた者を呼び戻し、更にはまだ冥界へ来るべきでない、閻魔の判決を受けていない霊たちまでもがここに集まっているのだ。

宙を舞う無数の霊が、早咲きの桜の花びらのようにも見えた。
春を集めていたあの時のようだ、とその光景に心を奪われる。

「放心するのがここで良かったわね、妖夢」

枯山水の広がる中庭に面した縁側で、亡霊姫は冷たい桜花と戯れていた。

彼女は幽かな笑みを、帰還を果たした庭師に向ける。

「顕界で己を失ってしまったては、二度と冥界には戻ってこれなかつたでしょう……ともあれ、無事に戻ってきてくれて嬉しいわ」

ところで事の首尾を聞かせてもらえるかしら、と幽々子は言つた。
その手はばんばんと床を叩いている。隣に座れ、ということらしい。

「ほとんどの霊は集められたと思います」

妖夢は言いながら、失礼しますと断つて主人の隣に腰掛ける。

「ただ、既に手遅れとなつた者もいます。顕界には巨大な岩の塊が現れていて、どうやらそれに喰われてしまったようです」

「成程、やっぱり早めに動いておいて正解だつたようね。妖夢が発した後、閻魔様がここにいらつしやつたから」

「え、そうなんですか？」

閻魔様、というのは四季映姫・ヤマザナドゥのことだろう。普段から霊たちの裁判で忙しくしているはずだが、彼女までもが動いて

いるとなると、事態の危機度は予想を大きく上回っているようだ。

「何でも、此岸で順番待ちをしている幽霊が急に途絶えてしまったから暇が出来たんだそうよ。これは緊急事態だと、わざわざここまで足を運んだみたい」

「彼女は何と？」

「貴方に頼んだことと同じよ。『もう手は打つてあるから大丈夫』

と言ったら、自分も見回りをするとかで顕界に降りたわ。まあ、閻魔様の長話は遠慮したいところだったから、さっさと出て行ってくれたのは助かったけど。こう見えてかなり忙しかったのよ？ 判決前の霊とそうでない者を別々に管理する必要があったから」

「すみません、もっと早くに帰れたのなら、お手伝いできたのですが」

「もう落ち着いたから問題無いわ。妖夢に言われてここへ来た騒霊たちにも少し役立ってもらったから——ほら、聴こえるでしょう？」

確かに、屋敷の裏の方から陽気なメロディが聴こえてくる。大方、顕界ツアーを堪能していたのに無理矢理連れ戻されてしまった機嫌を悪くした霊を、演奏を聴かせることで宥^{なだ}めているのだろう。

「……付かぬことを伺いますが」

どうしたの、と幽々子は微笑む。

その笑みは優しいが、底の見えないものでもある。まるで全てを見透かしているような、そんな得体の知れなさを見る者に感じさせる。

「幽々子さまは、この度の異変についてどれだけ把握してらっしゃるのですか？」

「あら、そんなことを聞いて何になるのかしら」

「いえ、どこからどこまで報告すべきなのかと思ひまして」

「そうねえ、貴方が顕界で気づけたくらいのことは分かっていると
思っわ。だから、疑問に思ったことを言ってみなさい。時間はたっぷりあるから、ゆっくり整理しましょう」

「分かりました。では——」

頷きながら、どうしてそんなに気持ちに余裕を持っていられるのかと妖夢は思ったが、それを聞こうとはしなかった。賢者を友人と称する幽々子のことである、何か思うことがあるのだろうか。

「——先程お話した岩の塊の手前で、どうやら異変を起こした一派の者と思われる妖怪と接敵しました。しかしその妖怪には、私の幽霊集めを阻害する意志はありませんでした。幽々子さまもご存じでしょうが、幻想郷中の様々なものがあの岩塊に引き込まれています。それなのに、私の行動は見逃された……加えて、岩塊の周りには魔法のようなものが掛けられていて、まるで余所者を寄せつけないかように距離が弄られていました。誘き寄せているのに、近づけさせない——矛盾しているように思いますが、これはどういうことなのでしょう。異変を起こした者たちの目的は、一体何なのでしょうか」

うーん、と幽々子は眉を寄せて悩む仕草を見せる。どうやら初めて聞く情報も交じっていたらしい。

もう一度説明しようかと思ったが、その必要は無いようだった。

「畏……か」

「畏、ですか？」

その疑問には答えず、幽々子は独り言のように呟く。

「その者たちの目的は、私たちを魅せ、魂を吸い取ることではない。むしろそれを避けている。だけど、その力を封じているわけでもない。つまり、使いたくはないけれど、それを利用しなければならない理由があるということ……成程、見えてきたわ」

だから紫はその誘いに乗ったのね——彼女は続けてそう言った。

「紫さまが？ 確かに、これほどの異変です。当然紫さまも動いていらっしやるのでしょうか……」

妖夢は首を傾げる。あの大妖怪が、わざわざ「畏」に引っかけたりに行くとは思えなかった。幽々子以上に懐の読めない彼女のことである、必ず何かしらの思惑、勝算があるはずだ。以前、月に侵攻を仕掛けようとした時のように。

「そうね。だから妖夢、貴方が心配することはないわ。今私たちにできることは、異変が終わるまでこの冥界を守ること——その時までは、紫を、皆を信じて待ちましょう」

そうですか、と答えるに留まった。幽々子の表情にやや翳^{かげ}りが見えたものの、それを追求するべきではない。彼女がそう言うのなら、妖夢もそれに従うしかない。疑念を晴らすのは、最後にはいつも己でなければならぬ。

一つ目の疑問は解決しなかったが、妖夢にはもう一つ伝えておきたいことがあった。

「そういえば……その岩塊のことなのですが」
少し躊躇^{ちゅうちう}つて、しかし思い切つて切り出す。

それは、岩塊付近が馴染みのある——冥界と似たような気配に包まれていたことだ。初めは魅せられた幽霊が集まってきたいるのが原因だと考えていたが、どうやらそれだけではないように思えた。霊、魂、そして蝶——自分の知る冥界と符合するものがあまりにも多いのだ。およそ現実的ではないと思つたが、そう感じたことは事実だった。

不安を抱えつつもありのままを伝える。幽々子はその不安を和らげるように、その手から一片の羽——反魂蝶を生み出した。

顕界で見たものとは違い、それは明らかに生きた蝶ではない。死の先の世界にしか存在しない色、死の先の世界にしか存在しない輝き——それは穢^けれの無い儚^{はかな}き純真であり、忘我を誘う美しさを持っている。

幽々子の手を離れた反魂蝶は、しばらく辺りをひらひらと舞つてやがて消えた。

「その岩の塊——あれは、貴方の考えている通り、間違いなく冥界よ」

「……え？」

返ってきたのは、予想だにしない答えだった。

「あれは、あれが、冥界そのものだといひのですか？」

「ええ、冥府の力がそこには宿っているの。ただし、それはこことは理の異なる場所、異国の冥界よ」

「異国の、冥界……」

「私たちの知るものとは異なる文化が、外の世界には数多くある。その文化の生み出した冥界の一つが、この異変と共に現れた」

「ただ、と幽々子はぼんやりと空を見上げる。」

その先に、月は視えない。

「死の先にある世界——冥界という共通の存在を意識しているという点では、それぞれの価値観の間に大きな差異は無い。同じ人間が考え出した概念なのだから、似ているのは当然のことよね。ただ、だからこそ、あの冥界はことと同じように顕界に対する影響力を持っている」

「その影響力というのが、皆をあそこへ引き寄せている力なのですか？」

「それとこれとはまた別よ。でもね、妖夢——」

顕界は生の世界であり、冥界は死の世界である。その間には肉体と魂の乖離かいりという必然があつて、これが境界として二つを区分している。生がある内に死後を覗き見ることができないのは、顕界の側から冥界を視認できないということであり、それは死という不可逆の境界が壁となっているからだ。

しかし今、誰しもが認識し得る場所に、岩塊は姿を晒している。

幽々子の唇が、倒れた三日月の形に歪んだ。

「本来隔てられているべき二つの世界。しかし、その『本来』を破つて顕界上に丸裸の冥界がぽつんと現れたら……一体、その世界はどうなってしまうのかしらね？」

Stage・6-4 <魂魄妖夢：6>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/262082/

東風谷早苗の登場でアリスの表情に若干の安堵が生まれたのを、魔理沙は見た。

アリスは増援を待っていたのだ、と確信する。あぼろにまず階下の様子を聞いたのはそのためなのだ。

ただ、それは逆に、彼女は「二人だけではあぼろに敵わない」と考えていたということでもある。それに気づいた魔理沙は、自分が頼りにされていないと不満を抱くよりも、戦わずしてアリスにそう思わせるあぼろに改めて恐怖を覚えた。

だが、怖気づいている場合ではないのだ。特に、あぼろたちが密かに抱えているものの危険性を知った今は。

「ああ、霊夢なら奥に進んでいったわよ」

アリスはそう言つて、敵の背後にある扉を指し示した。

続けて彼女の指は、手前に立つ戴冠の少女へと向けられる。

「それで、私たちがあの敵の相手を任されたってわけ……ところで貴方、ちようどいいところに来てくれたわね」

ふふん、と自慢げに緑巫女は胸を張った。

「そうでしょう。何といつても、ヒーローは遅れてやってくるものですからね！……ところで、どうしたんですか？」

と聞いた直後には、早苗は既にぽんと手を鳴らしていた。

「あ、分かった、そこにいる敵をやっつければいいんですね？」

「そうよ。話が早くて助かるわ。それじゃあ、さっさと異変を解決して、こいつらを幻想郷から追い出して——家に帰りましょう」

そろそろ眠たくなってきたしね、と言ってアリスが小さく指を動かすと、彼女の周囲を舞う二体の人形の腕が、銀色の剣や槍に変形した。

「——残念だけど、その頃にはキミたちに帰る場所なんて無いよ」

呆れたように笑うあぼろに、アリスの表情が少し苛立ちに染まる。

「家が無くなる？ それはどういうことかしら」

「家どころじゃない——幻想郷全体が近い内に消滅する、という意味さ」

「……っ!？」

驚きに、三人は息を呑んだ。追い打ちを掛けるようにあぼろは続ける。

「いや、帰りたければ帰ってもいいんだけどね。ただ、そうなれば、キミたちは幻想郷と共に葬られてしまう……全ての終わりを見届け、贅^{にえ}となることも許されず、ただ茫然と朽ち果ててゆくだけの魂となる」

たった一人の敵を前に、魔理沙たちは押し黙ってしまった。

あぼろの言葉の意味が分からないわけではない。分かって怯えているわけでもない。ただ、その裏にある真意を量りかねているのだ。続く沈黙を破り、「は」と魔理沙は笑った。

難しく考えるのは、もう止めた。

「幻想郷を滅ぼす、なんて大層なこと嘯^{うそ}いてるが——何てことはない、お前をぶちのめせばそれで全て解決するんじゃないか」

あぼろを倒して、この望蜃楼を外の世界へ追い返す。先へ進んだ霊夢が、敵が保有しているらしい兵器か何かをどうにかする。それで異変は解決する。

簡単なことだった。

これは、規模が多少違うだけの、いつも通りの異変なのだ。ならば不安になることはない。

これまでに、霊夢と二人で解決できなかった異変は無い。

「私は幻想郷が好きだ。へんてこりんな奴らばかりだが、私はあいづらとわいわいがやがや宴会したり弾幕ごっこしたりして騒ぐのが好きだ。……だから、それを奪おうって言うのなら、私がお前をぶっ飛ばす。そして明日、月を肴に皆で酒を呑む」

「くだらない。人間はいつも身勝手だな。自分ばかり良ければそれで満足するのかい？」

「身勝手じゃない奴なんてつまらないだろう」

「それが争いの原因となり、自らの滅亡を早めているとしても？」

「なら世界中の全ての生き物が天人みたく欲の無い心を持てばいいのか？ それは違う。そんな奴らは『生きている』とは言わない。最初から滅亡しているのと同じだ」

アリスを見る。早苗を見る。二人が頷きを返す。

時に争い、時に笑い合い——その輪が広がって、今の幻想郷があるのだ。それを、ひょっこり現れた名も知らぬ者たちに奪われることを、一体誰が許せるというのだろうか。

「世界はそう遠くない内に滅びるんだ。この望蟻楼の中心にある“蛹”の力によってね。ボクたちはそれを少しでも遅らせるために、この幻想郷を消すことを決めた。例えばここでボクたちを退けたとしても、いつか幻想郷は世界の消失に呑みこまれてしまう……いずれにせよ、キミたちが迎える明日なんて無いんだよ」

「もうすぐ世界が滅びる？ だからどうした？ 世界なんていつ滅んでもおかしくないだろう。私は『誰かが今日も世界を守ってくれている』なんて無責任なことを考えている人間じゃないぜ」

「ボクから見れば、世界が終ろうとしているのを知って、それでも何もしようとしない者の方がよっぽど無責任だと思っけだね」

「何もしようとしていない——なんてことはないな」

「へえ、キミが何か世界に貢献できているとも？ 大した時間も生きていない人間の小娘風情が」

そうだ、と黒白の服を着た人間の小娘は力強く答えた。

「私たちは幻想郷という世界をお前たちから守るために、こうしてここまでやって来た。そのために“蛹”とやらを潰すことになるうが、それで外の世界が救われることになるうが、私たちには関係無い」

「……………っ！」

「言っただろう、私たちは身勝手だつてな。だから私たちは、最期の最期まで、私たちなんだ」

「戯言を……！」

「世界のためだからって、それが幻想郷を消していい理由にはならないぜ——いいや違うな。お前たちは、自分が満足したいから私たちを消すんだろう？ 世界の寿命を延ばすなんて、所詮はその欲望の副産物だ」

「ふん、ありふれたことを言ってくれるじゃあないか。でも、ボクは『聖人』なんだ。我先にと我欲を満たす、卑劣な人間とは——」

「——『自分のため』ってのが汚いだなんて思うなよ、『聖人』。周りに迷惑をかけることもあるかもしれないが、本来それは、とても純粋な気持ちであるはずなんだ。それを汚すために、他人を使うもんじゃあないぜ」

「……純粹、ね」

「お前だつて、私たちと同じなんだよ。やりたいことが相反するから争うんだろう。だから私たちは戦うんだろう。そしてもちろん、私たちに負けてやるつもりは無い——迎える明日が無いのは、お前の方だ！」

突き付けられる金色の八方体が、陽光を反射した月のように煌めく。

しばらくの沈黙の後、やれやれ、とあぼろは溜息をついた。

「……分かったよ。どうやらこれ以上何を言っても無駄なようだし、キミたちは力づくで黙らせるしかないみたいだね」

「何を残念がつてるんだ？ 目一杯楽しもうぜ、折角の弾幕勝負なんだからな。それに、ネガティブな奴の弾幕は絶対に美しくならないんだ」

「ふふ、『楽しむ』か。確かにそうだね。どうせなら楽しまないともったいないし……何より、キミたちに対して失礼だ」

「分かってきたじゃあないか。改めて、友達になってやってもいいぜ」

「分かってないね。だからボクは、キミとは友達になりたくないんだ」

「それじゃあ——」

「——始めようか」

鎖とぎされた空間に、ゆらりと浮かぶ笑みが二つ。

密室の外に広がる宵闇を我が物にせんと、少女たちは対峙する。

「こんなに静かな夜なんだ——」

「こんなに賑わう夜なんだ——」

それぞれの手から放り投げられた二枚の紙は。

音も無く、揺れて落ち、決戦の始まりを告げた。

「——大人しく、星でも見ながら眠ってな！」

「——躍り果て、神の陽を抱いて沈み逝け！」

少女たちは箱の中を躍る。

瞬く星を舞い降らせ。

人の形を弄び。

奇跡の風を巻き起こし。

冠に宿る陽光が、彼女たちの舞台を照らしていた。

Stage・6・5 <霧雨魔理沙：7>（後書き）

← 舞台裏はこちら ←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/263193/

「っ——秘術『グレイソーマタージ』！」

美しくも激しい弾幕合戦の中、初めに耐えきれなくなったのは意気揚々に登場したばかりの早苗だった。見た目では分からなかったが、どうやら既に幾度か戦闘を交えていたらしく、その隠れた疲労が今になって響いているのだ。

それは己の周囲の弾幕を申し訳程度に消し去るものだったが、その咄嗟の反応が「味方への配慮」なのか「精一杯」なのかは判断できなかった。例え後者であつたとしても、今の魔理沙に彼女を援護する余裕は無い。それだけ、あぼろの放つ攻撃が壮絶なものだったのだ。

「このままじゃあ埒が明かないぜ……」

それどころか、いつまで経っても相手に弾が届かない。こちらは複数だとはいえ、長期戦に持ち込めば不利なのはこちらだ。早苗の状態が状態だし、魔理沙も少しとはいえ蚩妖怪との戦いで力を消費してしまっている。

そう考えていたのはこれまで力を温存していたアリスも同じだったようで、一瞬示し合わせるように視線を交わすと、二人は同時に声を上げた。

「光符『ルミネスストライク』！」

「戦符『リトルレギオン』！」

魔理沙は載っていた筈の先端から、銃を撃つように高速の光の弾を放った。反動で後方へ飛ばされるが、敵との距離を取るという意味では無駄が無いとも言える。

光弾が何かと衝突して爆ぜた。が、あぼろ本人に当たったなどという甘い考えは起こさない。ただ、目晦ましにでもなれば十分だ。

光弾を防ぐ動作をとった隙を突き、アリスの人形たちがあぼろに次々と斬りかかった——が、そこにあぼろの姿は無い。

「達磨ミラージュ」……と、いちいち宣言しなきゃいけないんだっけ」

いやこれは問題無いんだっけと自問自答の余裕を見せつけながら、ややずれた位置に現れたあぼろは手に持った剣を大きく薙いだ。

次いで天井を貫くように高く翳すと、剣の銀色は妖しい光を放ちだした。

「そろそろこっちからも仕掛けようか——魔剣『フラガラツハ』！
剣の先端から光の欠片が無数に飛び散る。

当然、その僅かな隙間を縫うように回避しようとするが——

「っ、何だ!？」

——身体が思うように動かない。大気からの圧力が急激に高まったかのような心地だ。

そしてそれを察した時には、既に目前まで小さな光の刃が迫っていた。

「くっ……星符『メテオニックシャワー』!」

星型の弾幕が襲い掛かる脅威を振り払う。何とか間に合った。

魔力はなるべく攻めに集中して使いたところだったが、今は出し惜しみをしている状況ではない。相手の攻撃はまだ続いている。

「二人とも無事か!？」

謎の圧力から解放される気配は無い。それどころか敵の方へ引つ張られるような力も加わり、更に動きに制限がかかっている。

何とかね、という微かな声が左方から返ってきた。アリスの声だ。

「早苗は——」

「——ふふ、他を気遣う余裕なんてあるのかい？」

いつの間にかあぼろは、手を伸ばせば届きそうなほど近い距離にまで詰め寄っていた。

払われる長剣が反射的に構えた筈の柄と衝突し、一方的に魔理沙を弾き飛ばした。

「ぐ……うつ！」

空中でブレーキを掛ける。大きく飛ばされたが、予想以上に空間が広く、壁にぶつかることは無かった。

やや前方、床上からサポートに徹する早苗の姿が映った。ちらりと心配そうに魔理沙の方を見て、

「魔理沙さん、大丈夫ですか!？」

「ああ、何とかな」

簡単な応酬の中、二人は未だ放たれ続ける光刃の弾幕の中心を見遣る。

敵の追撃は無い。アリスが敵を引きつけているのが見えた。

ふと早苗に視線を戻すと、彼女の身体には被弾の跡がいくつか窺えた。

「それより……お前、もしかして当たったのか？」

「はい、恥ずかしながら……でも、まだまだ戦えますよ！」

神の力を舐めてもらっては困ります、と元気一杯に呪符の弾幕を放つ姿を見て、魔理沙は一つ安堵の溜息を吐いた。そして魔女の帽子を深く被り直す。

「そうか。じゃあお前は、ここで様子を見つつ敵の隙を窺っていてくれ」

「魔理沙さんは？」

「決まってるだろう。やられたものはやり返す、遙か昔から続く、たった一つの冴えたやり方だ。……ってなわけで、ちよつと一発ぶちかましてくるぜ！」

そう言つて、勢い良く敵に向かって宙を駆った。

あばろの剣はまだ収められていない。近づけば近づくほど、魔剣の力が全身に絡みつくのを魔理沙は感じた。その感覚を得た彼女の表情は、しかし、不敵な笑みに満ちていた。

動きづらいのなら動かなければ良い。

引っ張られるなら身を任せれば良い。

やるべきことはただ一つ――身を固め、全速力で突進を仕掛ける

のみ。

「そう簡単に私を捕らえられると思うな、彗星『ブレイジングスタ
ー』！」

何者にも束縛されぬ光となって、弾幕の中を派手に突き抜ける。

一瞬目が合ったあぼろの瞳には、確かな驚きが映っていた。

激突。

剣を挟んで直撃は免れたものの、あぼろの小柄な身体は衝撃に耐え切れず吹き飛ばされた。魔理沙のように体勢を立て直すこともできず、そのままあぼろは壁に打ちつけられる。

受け身を取り、怒りというより苛立ちの混じった目で睨まれるが、魔理沙は構わず畳みかけるように挑発を重ねた。

「ははっ、力比べはどうやら私の勝ちみたいだな！」

その誘いに乗っているのかいないのか敵の表情は翳っていくばかりで、ただ弾幕の壁を張って接近を拒むばかりだった。これを避けるのは容易で、代わりにこちらからも仕掛けられないが、次に備えるインターバルとしては十分だった。

「ふう……やるならもっと早くやりなさいよね、随分しんどかったわ」

肩越しにアリスの疲れた声が掛かる。ただ被弾した様子は無い。

「悪いな。でも、何やっても敵わない相手じゃないってことは分かっただろう？」

「そうね、この程度なら何とかなりそうよ。今の時点で消耗がかなり激しいのは問題だけれど。そしてもちろん、この程度で相手が白旗を上げるはずもない……ほら、構えなさい。そろそろ、次が来るわよ」

そう言った時、まるで計ったかのように弾幕が晴れた。

再び姿を見せたあぼろは、何かを掬うように手を合わせている。

「な、何だ……？」

「想いに形を、意味に容を与えよ——“創世エンバディ”」

幾つもの煌めきがあぼろの胸元に生まれた。その輝きは少女の手

の上で一つとなり、箱の形をした琥珀色の塊となった。

「何だか知らないが全身がら空きだぜ！ 魔空『アストロイドベルト』！」

「あ、待つて魔理沙——」

アリスの忠告も遅く、魔理沙の手からは既に星の弾幕が放たれていた。

自らに降りかかるうとするそれを見て、あぼろがにやりと笑う。

眩い光に阻まれ、魔理沙たちがその笑みに気付くことは無い。当然、琥珀の箱を挟むように持ち換えたことも、彼女たちは知らない。

あぼろは大きく両手を広げると、思い切りその箱を押し潰した。

「キミたちとボクとの距離を——『縮める』！」

その声が耳に入ると同時、目の前の景色ががらりと変わった。

己の生み出した星魔法の美しい輝きはどこにもない。代わりに、目と鼻の先に、肩に剣を乗せたあぼろの姿がある。

「——なあ！？」

驚きに数瞬、全身が硬直する。

その最中、耳元で囁くようにあぼろは言った。

「闇夜を掲げる底淵の世界。陽は陰へと沈みゆく。裂ける天から這い出づるは、数多を踏み潰す未曾有の暗澹——陰質『魔神君臨の理』」

「しまっ——」

球状に広がる漆黒の弾幕が、無防備にも喉元へ迷い込んできた獲物を呑み込まんと雪崩れかかる。だが、

「——蛙符『手管の蝦蟇』！」

「——魔符『アーティクルサクリフェイス』！」

思わず目を固く閉じてしまうほどの強い光が、覆う闇を振り払った。

「早苗、アリス！」

目を開けると、そこには見慣れた二人の少女が浮かんでいる。どうやら、魔理沙と共に距離を『縮める』術に巻き込まれたらしい。

「ああ、魔理沙さん。驚きましたが、何とか間に合いましたね」

「外の距離を操っていたのもやつぱりあいつだったよね。見たことも聞いたことも無い術式だけど……」

「そんなこと言ってる場合じゃない！ あいつを探せ！」

魔理沙の声に、二人もあぼろが見当たらないことに気づいたらしい。

すぐに辺りを見渡すが、「もう遅いよ」という幼い声が、頭上から悪夢のように響いた。

「白雲を超える大空の世界。陰は陽へと昇りゆく。連なる地から離れ浮かぶは、悉皆^{しっかい}を包み救う古よりの閃華——陽質『天神光臨の理』

「
躲すことも防ぐことも儘ならない。」

巨大な光の爆発は、三人の少女を容赦無く包み込んだ。

S t a g e . 6 - 6 < 霧雨魔理沙 : 8 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

<http://mypage.syosetu.com/mypageblog/view/userid/54352/blogkey/272061/>

「こんなものかい？」

徐々に薄れていく光の粒の中、中空に浮かぶあぼろは軽い調子で肩を竦める。

戴冠の少女が見下ろす先には、二人の魔法使いと一人の巫女が横たわっていた。

誰も動かない。だが、声は届いていると確信しているのかそれとも単に独白しただけなのか、彼女は問いかけを続ける。

「勝負を楽しむんだろう？　なのに、そんな簡単に終わられちゃあつまらないよ。ボクはまだ遊び足りない。もっともつと遊びたいんだ」

「――じゃあ、私が遊び相手になってあげましょう」

先程まで戦っていた三人のものではない声が届き、あぼろの身体がぴくりと反応して止まる。声の源を追うと、部屋の入口に、緋色の剣を携えた青髪の少女が立っていた。

戦いの痕跡が全身に見られる。ここに立っているということは、つまり勝利したということだが、相当の接戦だったことは容易に想像できる。

被っている桃の飾りのついた黒帽の位置を整えるようにして、少女は歩を進め始めた。

向かう先はあぼろ――ではなく、倒れた三人の方だった。

「あらあら。私と衣玖がああ敵を引きつけている間に貴方たちが異変を解決してくれるのではなかったのかしら。それとも私の勘違い？　……まあ、どちらでも構わないわ」

黒帽の少女は三人の側で歩みを止めると、敵であるあぼろに目をくれることも無く、呆れた顔で彼女たちに語りかける。

「ほら、さつさと起きなさい。眠たくなるのは分かるけれど、夜はまだまだこれからでしょう？ 客の方が先に潰れては、主人の顔を立てることも叶わない」

「いやいや、主人を潰しちゃったら立てる顔も無くなってしまうじゃないか」

無視されているようで気に喰わなかったのか、あぼろは苦笑しながら新たな侵入者に声を掛けた。

侵入者はようやっとあぼろを見上げ、清楚な頬笑みを浮かべる。

「仏の顔も、三度撫でれば憤怒に変貌してしまいます。だから、仏を仏としておくために、傍に在る私たちはその御顔を敬意を以て立てるのです。同じように、招かれた客は宴を楽しみかつ主人を楽しませなければならぬ。己だけ享楽を味わい自己満足で帰ってしまうのは、そうした敬意の欠落と言えましょう。貴方の望む『愉しみ』は、その顔を潰すくらいの気概をもって相対しなければ満たされない——なれば、客である私たちは、招待への対価としてその要求に応える必要があります」

「へえ、なかなか分かっていないか……だったらキミは、この三人以上にボクを楽しませてくれるのかい？」

「ええ、もちろん。互いに楽しさを分かち合い、素敵に宴にしましょう——要石『天地開闢プレス』！」

高く高く、天井近くまで飛び上がった黒帽の少女は、どこからか現れた巨大な岩の塊に乗り、あぼろの頭上から急激に落下した。

「その程度じゃあ、まだまだ足りないね！」

落下の起動を変えることは、百獣の王を孕む少女でもなければ不可能だ。あぼろは身軽に宙を舞って隕石との衝突を避けた。

そのまま落ちた岩は、大きな音を立てて地を割った。

岩の上に乗った黒帽の少女は首だけ振り向き、妖しい微笑みを見せる。

「でも、開演の告鈴としては十分でしょう？」

「そうかあ？」

答えたのは、あぼろではなく、倒れていたはずの黒服の魔法使いだった。見た目以上にインパクトのある攻撃を受けあぼろが意識を逸らしている間に、三人は起き上がっていたのだ。

魔法使いは箒を振り上げ、悪戯な笑みを満面に浮かべた。

「私としてはもう一発派手なのが欲しいところだからな、勝手にぶっ放させてもらうぜ——星符『グレイティビート』！」

煌めきが箒の先端に生まれる。弾幕による攻撃と思ったのか、あぼろはやや後退し様子見の体勢をとった——が、何も起こらなかった。

「何をした……？」

「答えなきゃいけないのか？」

「……………」

その様子じゃあ見失ってるみたいだな、と黒服は鼻で笑う。

「じゃあ教えてやろう。答えはさっき言ったぜ、『もう一発』——つてな！」

気づいたのか、あぼろははっと天井を見上げた。

同時、目に追えない速度で打ち上げられていたそれは、彩光の流星となって少女を押し潰した。

「——おいおい、もう終わりか？ 私らもまだ、全然楽しめてないぜ？」

焼けつくような匂いと白煙の中、からんと乾いた高い音が響く。

あぼろの被っていた金冠だ。

その冠が、か細い手に掴まれる。

徐々に晴れる煙。少女の容をした影が次第に実体を露わにする。

「そうだね……まだ饗宴は始まったばかり、これからが本番だ」

現れた少女は冠を被り直し、瞳を閉じ、祈りを捧げるように片膝を着いた。

開かれた口から、紡がれる理解不能の音の連なりが不気味に反響する。

そして呪文が途切れた時、少女の両眼はそっと開かれ、最後の理

解可能な言葉一つを以て、祈りは完結した。

「来たれ——『アポロン迎合』」

瞬間、夜は静謐せいひつな宵闇を失い。

壮絶たる神の力が、岩塊という檻を突き抜け幻想郷中に轟き渡った。

S t a g e . 6 - 7 < 霧雨魔理沙 : 9 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 2 8 1 6 6 2 /

往路は距離を伸長させる術によってかなり時間を喰ってしまったが、岩塊を出た時には目測通りの距離感を取り戻していた。必要無くなったから術を解除したのだらうと、傍らを飛ぶ魔法使い、パチユリー・ノーレッジは言った。

岩塊内で待ち受けていた敵と対峙しこれを打ち破った彼女は、しかし魔力の消耗を理由に先へ進むという選択肢を捨て、戦闘後に合流した衣玖と共に岩塊を後にした。

先程から「疲れた」と何度も零しているパチユリーだが、彼女の向かった先は住処である紅魔館ではない。

「——しかし、勝手に邪魔してもよろしいのでしょうか」
「いいのよ。魔理沙だって、いつも勝手に館に侵入してきてるんだから」

そんなものでしょうかと衣玖は首を傾げつつ、薄紅色の羽衣を揺らしながら地面に足をつけた。パチユリーも続けて着地し、やや湿り気のある土が少し沈む。

窓の無い密室のような暗闇に覆われたこの場所は、魔法の森——他の場所とは一味違う、神秘的な魔力に包まれた魔法使いたちの溜まり場だ。

パチユリーは何かの魔法を唱えると、周囲がふっと明るくなった。今、彼女たちの前には一軒の家がある。玄関前に倒れている簡素な看板には、『なんかします 霧雨魔法店』と書かれていた。他にも用途不明なガラクタがいくつも転がっているが、人気は全く無い。しかしこの家こそが、館に帰ることを拒否したパチユリーの目的地でもあるのだ。

魔理沙の家に何の用があるのか、衣玖は全く知らされていない。

戦闘で疲弊したパチュリーの補佐としてついて来ているだけなのだ。以前魔理沙に盗まれた（勝手に借りていかれた）本を取り戻すため、とだけ聞いているが、その発言に含まれる意図は分からなかった。

「鍵は……掛かっていないか。全く、無用心ね」

キィ、と扉が開かれる。内部の暗闇が、パチュリーの灯す明かりによつて引き裂かれた。

「これは……何と言えいいのか」

扉の隙間からちらりと中を覗き見た衣玖の身体が固まる。

名状しがたい臭いが鼻を突いた。腐敗臭のような気分が悪くなる類のものではないが、森全体から香る自然のそれを軽く打ち消すほどの強力な匂いだった。

隣から、また別の魔法が使われるのを感じる。

「やれやれ、また何か実験していたのね。換気くらいすればいいのに」

どうやらこの臭気の襲撃を予期していたらしいパチュリーは、怯むことなく邸内へずかずかと上がり込んでいた。どうやら先程の魔法は、この汚濁した空気から身を守るためのものらしい。

衣玖は一変した空気に早速順応し彼女の後を追う。

内部は家の外と同様に色々な物が散らかっていた。移動するには不便無い程度だが、それでも整理されているとはいえない。

「魔理沙はああ見えて、毎日のように新しい魔法を創る研究をしているの。私の図書館から本を盗っていくのは、研究に使える内容が書かれているかもしれないから。人間である魔理沙が持つ時間は少ない……だから私も、少しくらいなら見逃してあげているのだけど」

ここかしらね、とパチュリーはある部屋の扉を開けた。

その部屋は、廊下以上に物が散乱していた。様々な書籍や実験器具が、特に机周りに無造作に置かれている。その机の中央に置かれた口の飛び出たガラス製の透明な容器には、怪しい色の液体が入っている。どうやらこれがこの強い臭気の元らしい。

「貴方たちはこのような科学的な研究をしているのですか？ もっ

と、魔法使いらしく陣でも描いているのかと思っていたのですが」

「魔法も科学も似たようなものよ。既に開発された技術なら、そのものを入手するだけでそれを使うことができる。ただ、新しく何かを生み出そうとすれば、そのために使用する要素の性質について調べなければならぬ。だからこういった実験も、魔法使いには必要なのよ」

「貴方も、あの館でこのようなことを？」

「うんにゃ。私はほとんど本を読むばかりだからね。魔理沙とは別の方向からアプローチをしていると思ってくれればいいわ」

魔法使い同士ならばこの話題で大いに盛り上がるのだろうが、そうしたことには疎い衣玖に詳しい内容を聞く勇氣は無かった。

改めて謎の液体を観察する。見ただけでは「実験」に成功しているのか失敗しているのかは分からないが、どうしてか「失敗であつてほしい」と願ってしまう衣玖だった。

「……ところで、貴方の探している本とはどのようなものなのでしょう」

聞いてみたが、早速室内を物色し始めたパチュリーは何も答えなかった。聞こえていないのかもしれないし、応えても無駄と思っているのかもしれない。確かに、そこかしこに積まれた本は、古すぎて題名が消えていたりそもそも読めない言語で書かれていたりで、目的のものを探し当てるのに衣玖は役立てそうもなかった。

「違う……これでもない……多分上の方にあると思うんだけど……」

これだけの量の本を盗まれているのなら報復としてこの家を焼き払っても良いのではないか、と本を漁る日蔭の少女を見て衣玖は思った。被害者がこの様子ならあの人間も、きちんと用途を伝えてから借りると言えば争い無く事が済みそうなものだが。

暇になったので、悪いと思いながらも衣玖は適当に周囲を調べることにした。

まず目についたのは、机の隅に積み上げられた薄い冊子だ。書かれた内容の意味は分からないが、魔法の研究に関わるメモのような

ものらしい。これと同じものが後数十もある——そう思うだけで、家の主がこの場所で重ねてきた努力が垣間見えた。

不意に何かの気配を感じて、衣玖は机の下を覗きこんだ。するとそこには檻籠おりかごがあり、陰に隠れるようにして眠る小さな獣が入っていた。見かけない種類のものだが、起こして騒がれても困るのでそつとしておくことに決めた。

身体を起こして、机の前にある窓を見る。カーテンとの隙間からは淡い光すらも入ってこない。だが、衣玖の興味を引く物があつた。それは、一つの球を中心にいくつもの輪が重なって出来た模型だつた。初めて見る物だが、大体の用途は予測がつく。地球を中心とし、周りの天体の観測位置を調べるための道具だろう。

天体の放つ光やその位置にも、魔術的な力や意味が込められていると聞く。となれば、これも魔法の研究に欠かせないものなのだろう。黒白の魔法使いが星の形の弾幕を撃っていたことや、パチュリ―の被る帽子についた三日月型のアクセサリーを見ると、その重要さがよく分かる。

「——あつたわ。私が探していたのはこの本よ」

物珍しさからじつくりとその模型を観察していると、パチュリ―が一冊の本を持って立ち上がった。

S t a g e . 6 - 8 < 永江衣玖 : 8 > (後書き)

← 舞台裏はこちら ←

h t t p : / / m y p a g e . s y o s e t u . c o m / m y p a
g e b l o g / v i e w / u s e r i d / 5 4 3 5 2 / b l o g k
e y / 2 8 5 0 5 4 /

衣玖が机の上の物を退かせると、パチュリーはそこへ本を置いて椅子に座った。

「見た目、貴方が持ち歩いていた本と変わらないように思えますが……」

「残念だけど、これは魔導書の類じゃないわ。外の世界の、西洋——ギリシアに伝わる神話について書かれた本。魔術的な力は少しも込められていない」

そんな本が、今回の異変とどのように関係しているのだろうか。

何も見ずとも衣玖がそう疑問に思っていることをパチュリーは分かっているようで、彼女はページを捲りながらこう答えた。

「さっき私が戦っていた相手、あの子は私と同じ七曜の力を操っていた。ただしその由来は少し違って、私が五行と陰陽を礎にしているけれど、あの子は北斗七星——大熊を象る星座の一部を基にしている」

「その星座が、西洋神話に関わっていると」

「そう。現在外の世界でメジャーとなっている星座の多くは、この神話を基に定められている。異変を起こした連中も、これに関係した力を持っているんじゃないかと思ってね」

「はあ……ですが、今更それを知って何になるのですか？」

パチュリーにあの岩塊へ戻ろうという意志は無い。岩塊に残った者も、既に異変の中心人物たちと接触しているだろう。今にでも異変は解決するかもしれない。ならば、ここで敵の情報を調べること、わざわざ疲労を押してまでこの家を訪ねるほどの価値があるとは思えなかった。

しかし、パチュリーは首を横に振った。

「どこぞのスキマ妖怪に言われたのよ。この異変の犯人は、私たちに近い存在だと。それを私やレミイに言ったということは、そいつらは西洋出身ということじゃないのか——と、私はそう考えた。事実、その推測に当てはまる敵と戦ったわけだしね。黒幕の正体も見えてきたわ」

「ですが犯人が分かったところで、それが異変の解決に繋がるとは——」

「今回の異変の解決には繋がれないかもしれない。でも、これからどうかしら？　そう何度も戯れでない大規模な異変を起こされるわけにはいかないでしょう」

「よく、仰っている意味が分からないのですが」

「西洋で信仰されている神やそれに準ずる者たちは、日本で信仰されている神よりもずっと強い力を持っている——より広い世界をより少ない数で支えているのだから、これは明白な事実よ。日本の神は、八百万集まらないと世界を支えていられない。人間に対する神の数が多いということは、それぞれの神へ注がれる信仰の分散に繋がる。逆に西洋の神々はその存在をよく知られている。数が少ないから憶えやすいのよ。その容易さがまた、信仰心の強さに繋がっている」

「つまり、今回の異変のように、外の世界からそうした強い力を持った者たちが幻想郷へ攻め込んでくる可能性がある——ということですか」

「それも、この異変を契機として、流れるようにね」

成程、と衣玖は頷く。いつ襲ってくるか分からない脅威に対抗するために、それに関係しそうな情報を探しているらしい。八雲紫は新たな敵の襲来を予測し、西洋文化に精通していそうなパチュリーに頼んだということか。

「それでも、貴方が思う通り、確実にそういった力が襲ってくるとは限らないわ。今回の犯人は別として、十分な信仰を受ける者たちに幻想郷を攻撃する理由は無いだろうし。それに……」

「それに？」

「……いえ、何でもないわ」

何でもないことはないだろうと思ったが、見ればパチュリーも首を傾げている。何を言おうとしたのか忘れてしまったのかもしい。

やがてページを捲るのにも飽きたのか、彼女は背もたれに体重を預けて一息吐いた。回復はしているが、それでも随分疲れが溜まっているらしい。このまま眠った方が良いのではと進言しようとしたが、パチュリーが不意に差し伸べた手にその行動は遮られた。

「あら、これは……？」

「どうやら、太陽や月や星の位置を調べるための器具のようです。使い方は存じませんが」

天球儀ね、と言つてパチュリーは手に取ったそれをしげしげと見つめていた。金環の一つに指を掛け、それを動かすと他の輪も連動する。

最初は手遊びにくるくる回しているだけだと思つたが、ふと指を止めたかと思うと、急にもたれた身体を起こして天球儀を乱暴に机に置いた。続けて神話の書物を再び開いたかと思うと、あるページで手を止め、そこに書かれた見慣れぬ文字列を辿り始める。

「蒼い蝶、月、純潔——銀鏡。これは、まさか……！」

パチュリーは立ち上がり、身を乗り出して窓のカーテンを開け外を見た。とはいえ、その先に見えるのは暗闇に潜む鬱蒼とした木々くらいのもの。彼女も諦めたのか、カーテンを閉じて再び腰を下ろした。

「どうして、どうして今まで気づかなかつたんだろう……」

「な、何があつたのですか？」

問いかけに反応は無い。ただ呆然と、カーテン越しに窓の外を見つめているだけだ。心中で大きく動転しているのが分かる。

しばらくして落ち着いたと思われる場合に再び問いかけると、パチュリーは恐る恐るといった口調で答えた。

「……ところで貴方は、今夜、とてもおかしい現象が起こっていることに気づいている？」

「とてもおかしい現象、ですか……？」

「ええ。あの岩塊が現れたこと以外で、何か思い当たることは無い？」

「そうですねえ、と衣玖は記憶の糸を辿る。が、答えらしきものは見つからない。

「特に、思い当たりませんが……それほど大きな現象なのですか？」

「見て分からないのが本来不自然と言えるほどの“異変”よ。ヒントは『空』ね」

「そこまで言われて分からなければ妖精並みの頭の弱さだと蔑まれそうだったが、それでも答えは出てこない。降参だ、と衣玖は両手を挙げた。

「やつぱりね……いえ、気にすることはないわ。私だってさっきまで分からなかったし、貴方は龍宮の使いだからこそ気づけないのかもしれないしね」

「どういうことです？ 一体、この幻想郷に何が起こっているのですか？」

本来、幻想郷に危険を伝えるのは龍宮の使いの役目だ。それが今は、危険ついて尋ねる側に回っている。雲の合間を泳ぐ者が地震の発生を予知し空の異変に気づけないというのは、なかなか皮肉なものだった。

興奮気味なのを自分でも分かっているのか、パチュリーは呼吸を落ち着かせるようにして、やがて諭すように言った。

世界の秩序を狂わせる、驚愕の事実を。

「私たちは、この夜に起こっている恐ろしく大きな間違いに気づいていない。よくよく思い出してみなさい。この時期、空に浮かんでいるべきなのは三日月ではなく、それを鏡転させた二十六夜、あかつき暁月であるはずよ」

声が出ない。返す言葉が見つからない。

ただ一点の疑問が生まれただけで、それを覆っていた虚偽のベールは剥がされた。それは、パチュリーの言った通り、一度分かればどうして今まで騙されていたのだろうかと笑ってしまうくらい、薄っぺらい塗装でしかなかった。

「三日月だったならば、この時間にはそもそも沈んでいなければならぬ。そして何より――」

妖怪にとって月は、彼らを生み出した人間たちの想いに次ぐ影響力を持っている。月の満ち欠けによって力が変化するのだから、当然妖怪たちはその動きを毎日のように追っている。幻想郷には一部の妖怪が作った、月を基準とした独自の暦があるほどののだ。

それほど重要なものである月の異変に、幻想郷に住む者のほとんどが気づいていない。気づいていないから、異変にすらなっていない。

月が狂っているのか。

月を視る者が狂っているのか。

「――月を観測できる方角は、観測地点の緯度に依存する。元の幻想郷が日本にあったことを考えると、それは必ず天頂より南側になるはずだ。それなのに、今、月はあの岩の塊の裏側――北の方角にある」

西から東へ、昇り沈む軌道を誤った月。

南から北へ、映る世界を歪められた月。

今、この時までには正しかったはずの月。

今も、正しいと信じ続けられている月。

幻想郷は今、偽物の月に魅せられている。それを知る者は少ない。ならば、気づいた者が彼らを救いださなければならぬだろう。

面倒そう、しかし奥に楽しさを滲ませた表情を浮かべ、パチュリーは呆気にとられている衣玖に向けて言った。

「もうしばらくは、休ませてもらえないようね……。ということで、さあ、探しましょう――私たちの月を、犯人から奪い返すための方法を」

Stage・6・9 <永江衣玖：9>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/285054/

ひりひりと、焼けつくような感覚が全身を襲った。

今まで以上に強い魔力が、戴冠の少女から放たれている。

いや、それは最早、魔力とは全く別の力だった。

神を纏った少女は人が変わったかのように余裕ある態度を消し、まるで仮面を脱ぎ捨てたかのように（あるいは違う仮面を着けたかのように）、前とは全く別の冷徹な表情を浮かべていた。

戦いが次のステップへ移行したことを悟り、威圧に怯み、魔理沙たちはあぼろから弾かれるように距離を取る。

それを追い立てるように、低く重い声色が空間全体を満たした。

「――療毒『パンデミック』」

青緑色に妖しく光る、あぼろの身体よりも少し大きい程度の球体が彼女の周りに幾つか生まれた。

それは徐々に速度を増しながら広がっていき、同時に分裂を始めた。

一つが二つに。

二つが四つに。

四つが八つに。

次第に小さくなる一方著しい速さで数を増やしていくそれは、最後の分裂を終える頃には部屋中を覆っていた。

毒に侵された世界を、少女たちは必死に逃げ惑う。

「くっ、下がるんじゃないかな……！」

なるべく懐に入り込んだ方が安全だったが、弾幕の性質に気付くのが遅れたことにより密度の高い位置に入ってしまった。前方からしか弾は向かってこないが、その量によって大きな動きは封じられている。気合いだけで避けるのは、早くも限界だった。

と、そこへ。

「ここは私が！——奇跡『神の風』！」

少し離れた位置にいた早苗が、被棒を振り強風を起こした。弾幕が風に流れ、浄化されたように空白が生じる。

「悪い、助かったぜ！　だが……」

だが、まだ感染源は断たれていない。早苗の力がまだ万全とまでは回復しておらず、そこまで届かなかったのだ。

乱れた均一を保とうと、新たな弾幕が空白地帯に流れ込んでくる。いいえ、これで十分よ」

そう言っただけの前に躍り出たのは天子だった。

彼女が力強く振り被っていた剣は膨大な気質を集めて、全てを緋色に染める大剣と化していた。

「弾幕ごとまとめてぶった切ってやるわ——気性『勇気凛々の剣』！」

その刃の起動が描くは、世界の頂へ続く緋想の光。切り拓かれたその道から、卑しい色を上から塗り潰すように赤色の輝きが広がった。

「……難易度がそこまで上がったわけじゃあないよね。私たちの領分で戦うという言葉に嘘は無いみたい」

ふわりと宙を舞ってアリスが三人の元へ戻ってきた。「戻ってきた」ということは、さっきの内にどこかに行っていたらしい。何とも悠長なものである。

垂れてくる汗を顎先で拭って、早苗はしかし楽しそうに微笑んだ。

「そうですね、四人を相手するために調整はしているようですが」

「四対一ねえ……どこぞの厄介な悪魔の妹を思い出すぜ」

「その『厄介な』はどちらに掛かっているんですか？」

「どっちもだ。姉の方は凶々しくも女王を騙^{かた}っているが、あんなどのマスにでも動けそうな奴がそもそも盤の上で大人しくしているわけがないだろう。最初から盤外^{エクストラ}にいる妹同様、姉妹揃って番外な^{ジョーカー}のさ」

そのジョーカーも普通は多くて二枚なんだけどね、とアリスが言う。

「大抵の決闘は一对一でやるものだけけど……三枚も規則外れを持つている相手にここまでやるとは大したもんよ。むしろあっちが化物ね」

烏合の衆とはいえ、幾度か手を合わせた経験から互いの性格は知っており、実際にそこそ息が合ったような連携はできている。それでもどこか不利な感が拭えないということは、それだけあぼろの実力が高いということである。

弾幕戦ということを考えずとも、「神をその身に降ろす」という芸当をやったのけたという点だけで彼女が魔法使いとして稀に見る才能を持っていることが分かる。これまでに魔理沙がその現象を見たのは、霊夢が巫女としての能力を使った時と、それに近い力を持つ月人が地球人相手のスペルカード戦で呼び寄せた時だけだ。魔法使いが神降ろしをしたというのは聞いたことがない。

それに、確かに神聖さはあるが、それは霊夢たちが使役していた神からは感じられる力とはまた別次元のものだ。スペルカードの宣言で「アポロン」と言ったのは自分のことかと魔理沙は思っていたが、パチュリーから借りた本の中に同じ名前があつたことを考えると、現在あぼろは八百万の神ではなく西洋生まれの神の力を借りているらしい。

「もつとちゃんと読んどけば良かったな。もうほとんど憶えてないぜ」

「ん、何のこと？」

と聞いてくるアリスに、魔理沙は何でもないと首を横に振る。

きちんとその神の特質について読み込んでいれば、より楽に攻略できたかもしれない——とは思うが、もちろん後悔先に立たずだ。どんなカードも打破できるわけでもなく役手を変えられるわけでもない愚者は、道化師にはなれないのである。

だが、規格外は規格外でないと倒せない、という道理は存在しな

い。

弱きが強きを討つこともあり得るのだ。

「スペードの三を切るのはまだ早い、か……そうだろうか？ あぼろ」

「……………」

弾幕の晴れた空間に、神の力を呑み込んだ戴冠の少女が浮かぶ。鋭く刺すような威圧が、冷気のように敵対者の背筋を凍らせた。彼女は両手を天へと掲げる。

「ああ、まだまだ行くよ……聖樹『ダブネーの冠』」

あぼろの頭上、円状に収束した弾幕が、二重三重に拡散した。

今度は優しい薄緑が、しかし容赦無く敵対する者の頬を掠める。

「っ、速い——！？」

誰かがそう言う間に、次の危険は懐近くにまで忍び寄っていた。

「横だ、避ける！」

円形に並んだ光弾が二つ、その隊列を崩すことなく左右から飛んできた。

後退した魔理沙の目の前で交差したその円は、壁にぶつかることはなく、あぼろを中心として惑星のように廻っていた。同じように平らな緑色の惑星たちは、何層にも連なって太陽の周囲を動き、緩い結界として中心の核を護る球を描いている。

「——ああああっ！」

悲鳴が響いた。

隙を縫ってあぼろに近づこうとした早苗が被弾したのだ。

直後、再び高速の拡散弾が襲ってきて、早苗が当たった理由を皆が理解した。その「近づくのは得策ではない」という学習を活かせば、あぼろからなるべく距離を取るようになるが……

「そう簡単に下がらせてはくれないようね」

すぐ傍にいたアリスの言葉に、魔理沙は頷きを返す。

背後からは、広がっていったはずの弾幕が時間を遡さかのぼっているかように逆流していた。放たれた時よりも弾速が遅くなっているが、後ろに下がり過ぎ前に意識を奪われれば被弾してしまうだろう。

幸いにも“惑星”は敵を狙っているわけではなくランダムに軌道半径を伸縮させているらしく、時折大きい空隙が現れるので、その時に一息はつける。とはいえまた“破片”が弾け飛んでくるので油断はできない。

パターンは分かっているけど回避が難しいのだ。

何とか反撃してはいるが、四方八方に気を散らしていなければならぬため、それがあぼろにまで届いているかは分からない。スペルカードによる決闘のルールでは各カードアタックに「時間制限」が設けられているが、どうやらそれが尽きるのを待つことになりそうだった。

普段は好戦的な少女たちでも、だからこそ、我慢しなければならぬ時はじっと耐える。それも勝負の楽しみの一つだからだ。

段々と弾幕の密度が高まり、焦りに似た高揚を感じながら、魔理沙はふつと笑う。

「おい、あぼろ。見ての通り、私たちは避けるのが大得意なんだ。このままじゃあ勝負はつかないぜ？　そろそろ次の手を撃つたらどうだ」

声が届いたのか単に時間が過ぎただけなのか、光の弾が一斉に弾けて消えた。

強い光が通り過ぎていった瞬間、あぼろが薄く笑ったのを魔理沙は見る。それは、戴冠の少女が確かに今“それ”を持っている証だった。

「未来『不実の予言者』」

即座に次のスペルカードが宣言される。

あぼろの全身が光に包まれたかと思うと、その光は筋となって旭日旗のように辺りを照らした。魔理沙たちもそのスポットライトの一つに入ってしまったが、何も起こらない。

光の筋はあぼろを中心にグルグルと回る。目まぐるしく移り変わる点滅に、魔理沙は思わず目を閉じた。

「く、眩しくて目を開けていられないな」

「……ですがこの光、どうやら当たっても害は無いようですね」
手で目元に影を作りながら近づいてきた早苗が言った。

「お、無事だったか早苗」

「結構キツイですけどね……まだ、何とか」

「——じゃあ、そろそろお休みの準備をしておいた方がいいかもね」と、そんな不吉なことを言ったのは天子だ。

彼女の言葉にアリスも頷いて、

「懐中電灯を持って妖精に悪戯仕掛けた誰かさんみたいに、ただ光を当てるだけで終わるってことは無いでしょうね——来るわよ！」

光の回転速度が小さくなり、ぴたりと止まった。

魔理沙はさつと陰へと飛び退いた。アリスの言った通り、弾幕の発される気配を感じたのだ。

光の筋にそってレーザーが放たれる、あるいはそこから弾が生まれると思っただが——その推測が間違っていたことは、背中に受けた衝撃が教えてくれた。

「っ……なあ!？」

宙に放り出された身体が、思考の停止の中を抗って箒の柄を掴む。だが、それ以上の動きができない。

「魔理沙！」

叫んだアリスが人形を飛ばし、落下する魔理沙を受け止めた。

だが、弾幕から目を逸らすことは許されない。

「ヒトより自分の心配をしなさい！ 要石『カナメファンネル』！」
天子が周りに投げた数個の岩とそれの放つ赤い光弾が、アリスに迫っていた敵の弾を防いだ。

だが、あばろの弾幕を止めるまでには至らない。

「また来ます！ みなさん明かりの中に！」

再び回り止まった光のルーレット、その性質に気付いた早苗は三人に警告する。

幾本も伸びる光の筋の間を補完するように、弾幕の列が生まれた。その秩序立った直線はある時一斉に崩れ、光を求めるように動き始

める。

「——こっちに来るわよ、離れなさい！」

天子の言葉を聞くまでも無く、三人は既に行動していた。

左右上下から迫り寄ってくる弾幕をやり過ごしその行方を見守っている、光に沿って集まった弾が再び直線を生成していた。「秩序を崩した」のではなく、どうやらこれは、そういう動きをする弾幕らしい。

弾幕の作る列はそのままに、また光の筋が回転を始めた。

「成程……『予言』は信じられないということね」

「何言つてんだ？ アリス。それから、何やってんだ？」

おっと、と横から来た光弾を避ける魔理沙。直線の分裂から再構成までの間隔が徐々に短くなってきている。

アリスは奇妙な動きをさせていた両手を収め、「何でもないわよ、両方とも」と答えた。

「それより、避けるのが辛くなってきたわね……」

「そうだな。早苗と天人も消耗してるようだし——ぶっ放しちまうか？」

「ふん、わざわざ私に確認を取るようなキャラでもないでしょうに。ほらほら、ご自由にどーぞ」

もちろん断られても撃つつもりだったぜ、と笑いながら箒に乗った黒帽の魔法使いは緋金に輝く八卦炉を取り出した。

四方八方から襲い来る光弾を、彼女はもう躲そうとはしない。

「私の弾幕は星の数だけあるぜ——有限と無限の地平線に見惚れてな、黒魔『イベントホライズン』！」

煌めく星々が魔理沙の全面を覆う壁となり、あばろへと向けて発射された。一部が敵の弾幕と衝突し相殺するが、それでも核へと届かせるには十分な物量だ。

防げないと判断したのか、あばろはスペルカードを切り替える。掬うように重ねた両手の上に、薄い水色の球が生まれた。

「時よ、限り無く零へと広がれ——靈酒『ネクターの泉』！」

球は内側で何かがもがいているような不気味な変化を始めると、間も無く弾けた。しかしその爆発はあまりにも静かで、「球だったもの」は一つの自然な流れとして音も無く部屋全体に広がっていく。魔理沙の放った星たちは、それに触れると時間が止まったかのようになり、動きを止めた。

「防がれたか……って、こっちに來るぞ!？」

空気さえ染め上げる柔らかく無表情な光は、それだけでは飽き足らず、四人をも呑み込もうとしていた。

弾幕をばら撒いてはみるものの、水色の中に浸れば運動という現象が奪われ無力と化してしまう——結局、打つ手も無く、彼女たちは『泉』の水面と接触した。

「……………」

ひんやりとした感覚と僅かな重圧を認めた次の瞬間には、視界は隅々まで晴れ渡っていた。

水色も無い。自分たちの弾幕も、敵の弾幕も無い。

ただ遠くに床と壁と天井が見えるだけだ。

唐突に訪れた解放。

だがそれは、ほんの束の間の儚い幻想で。

「悲愛『ヒアキントス』!」

視界の外から届く声。直後、和やかな香りが微風に乗って戦場を包む。

だが、声の主を求めて振り向いた少女たちが見たものは。

——血のような紅を煌めかせながら降り注ぐ、無数の弾幕の雨だった。

Stage・6-10 <霧雨魔理沙：10>（後書き）

←舞台裏はこちら←

http://mypage.syosetu.com/mypa
geblog/view/userid/54352/blogk
ey/297490/

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9409p/>

東方望蛾楼 ~ Fascinated Pessimistic Fliers.

2011年11月16日03時25分発行